



甲南高等學校

山岳部報告



1 9 2 9



甲南高等學校山岳部報告

第 二 號

1929

目次

巻頭の辭.....部長 岡本重彦 (1)

五月の創生活.....西村 精也 (17)

研究二編.....伊 藤 郎

五月の山でショートスキー.....(5)

アルペン・タリマに就いての一断片.....(81)

雪崩に就いて(譯章).....伊 藤 郎 (34)

Von den Lawinen

ZSIGMONDY-PAULCKE " Die Gefahren der Alpen "

年報—昭和二年、三年、四年

山嶽寮—隨筆その他

寫眞

吹雪の晴間

五月二十五日朝小屋嶺中吹雪の晴間を見て撮つたもの。後方の山は藤沢郡

伊藤 郷

尾根と八峯の嶺である。

伊藤 郷

早月尾根より創岳

五月十八日早月尾根登攀の標榜影せるもの。

伊藤 郷

五月の八峯創岳

八峯第一峰より八峯及び創の頂上。

香月 慶太

春の槍

今年三月末槍の登攀の標大槍小屋よりとる。

喜多又太郎

八峯第五峯

今夏長太郎の隣ノ岩附近より撮影す。

香月 慶太

西穂、奥穂、潤澤、北穂、槍

今年三月前穂頂上より撮れるもの

湯川 孝夫

奥穂、前穂

三月末西穂より見た奥穂・前穂である。

井上 正憲

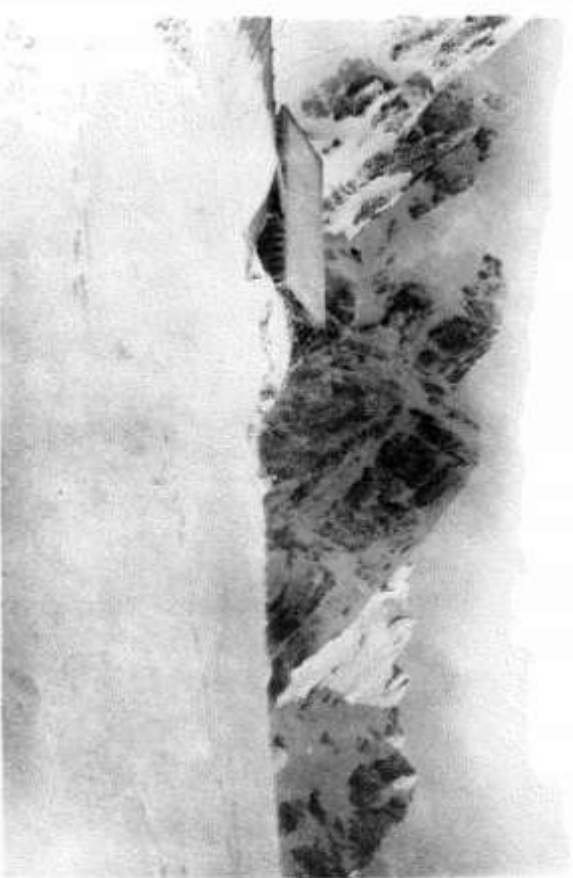
錫杖、烏帽子岩

今夏烏帽子岩登攀の際の南方より寫す。

喜多又太郎

源治郎より創岳

今夏源治郎尾根登攀中第一峯より手前のピークは第二峯遠方のは創本峯。



吹雪の晴間 (創三田平にて)

巻頭の辭

部長 岡 本 重 彦

山岳部報告第二號爰に刊行せらるゝに際し、部長就任の挨拶と、山岳禮讃の一片を序して、以て貴重なる巻頭の數頁を繰すことを寛恕されたい。創業の辛苦を具さに嘗めて甲南高等學校山岳部の今日に於ける隆盛を作興された前部長伏見教授の機を受けて、此の度び私は其の重任を負ふ事となつた。生産熱未熟であつて、當に其の任に非らず、右顧左眄して誠に愧然たらずを得ない。果して良く事成の功を全うし得るや否や頗る疑はしい次第である。然し、優秀なる先輩諸子の協力叱正と、熱誠なる部員諸君の健闘とに恃つて、幸ひ暇座ならむことを期待するものである。

山岳の壯麗と神秘とは、若き心を没るに惹き付けて止まない。思ふに苦悶と、緊張と危険との數時を冒して、天巔に吼ゆる山嶺を極め得た時の壯麗なる醍醐味は、すくなくともアルピニストにのみ許された快味でなければならぬ。又千古斧鉞を加へぬ密林を迷ふ時、しかも唯一人、寥々子として「死に懸ひ」に迷ふ時、若き心の極みを満たしてくれるものは、山嶺の神秘な懐しい私語でなければならぬ。されば、山は仙人を生み、道士を作つた。そうして山は隱者を匿し、浮浪民をさ迷はした。遂に山はアルピニスムに統制され、クライマーを陶酔せしめたのである。

鐵板の如き岩肌にガツシと噛み付いたネールドブーフ。器用に岩角に掴んだ指先に、兩手の力が縮るよと見る間に、スル

スル身は延びて、ビレーされたデイルを一尺縮めた。緊張の一時時である。千何の溪谷にエーネーの聲は氣味悪く木霊して僕は貝若人との古洞に静寂を守る。ロッタガーデンに於ける洗練された我が部員のクライミングに、私は素晴らしい大きな期待を持つことが出来た。

夏山は近頃いて、先発部員は夫々夜を別かつて岩と雪とに親しむことになった。一句俵れて私も初年級を連れて上高地に編入した。豫定のコースを好成績に了へた先登隊は、白樺密林のベースキャンプに懐しく迎へてくれた。其の夜、キャンプファイアーを囲んだ部員の顔は青春の歡喜に赤く燃えてゐた。槍に登る日、又上高地を引上げて歸途に就く日、上級部員は年若きクライマーの荷物を持ち合ふ等して、努力助けます其の親切と眞情に、私は思はず日頃の勤くなるを禁じ得なかつた。

休暇も終らんとする或日、狭い溪谷に月は白かつた。口誦さむ山岳部歌は谷間に木霊して雄辯なもののがあつた。體て歌ひ振れた彼等はキャンプの庭吉しさに、石を投げて青白き月影を仰いでゴロを食ふのであつた。小川のせ、らぎを子守歌とも聞き、安らけきうまの裏に夜は更けて行つた。若き男の子に永劫の幸あれかしと祈りつゝ、我が去りし日の思ひ出と感激とに寝かき一夜を獨り明かしたのであつた。

良きアルピニストとして、又洗練されたクライマーとして、我が部員の若々しき活躍と眞情と純真さに親しく接する時に我が心の奥に呼び掛ける懐しき青春の誘惑は、思ひを遣く、故郷の空に歸せしむるものである。私は少年時代を長崎に通した。長崎港を一望に眼下ろすこの出来る瀬戸内は高い山ではないが非常に精好の美しい山であつた。日曜毎に親しき友と一緒に、御宮を持つて登るのを一番の楽しみとしてゐた。然し私が十四の年、慈愛深き母は忽然として逝いて、其の山

麓に冷たき墓石を愛はつて仕舞つた。悲喜の極みである。戀々の情まみれ、墓石を抱いては森をさ迷ひ、墓に攀ちては一人淋しく母の魂を呼んだ。樂しかりし山頂には徒らに寂寥の松蔭のみ。悲しき叫びに答ふるものは唯山雲のこだまに過ぎなかつた。泣き疲れては山ふところ、抱かれて夢みる母の姿。かくして私は山を戀ふ悲しき憧憬の子となつたのである。其の後雲を食ふて懐しき長崎の山河に別れを告げて西國に遊ぶことになった。此處でも山雲に慰めを求めた私は、良く歩き、又良く登つた。然し誰か一人、當ても無く、森を、峯を、迷ふのが好きであつた。満たされぬ心を慰め、俗事の憂鬱を晴らしてくれるものは山であつた。そうして遂に山は私に宗教を教へ、學問へ導いた。宗教とは？母の魂である。即ち我が心である。學問とは？我が足下に踏み大地、森羅萬象を載せて宇宙を廻る地球の哲理、即ち地理學であつた。かくて東洋に新學を學ぶこと三年、奇しくも此處に山雲の一人として筆を執り、キールドグロフを穿つて愛すべき部員諸君とキャンプに岩場に寝食を共にすべく運命付けらるゝに至つた。誠に因縁淺からざるものと言はなければならぬ。山は私を養つてくれた。山は私を慰めてくれた。そうして山は私の人を爲してくれた。今でも山に這入ることを思ふ。母を戀ふ。然しも悲しまなくなつた。神秘と壯麗さは私に力を與へてくれる。未來への希望を授けてくれるからだ。

山は愛すべきもの、望むべきもの、敬すべきもの、親しむべきもの、而して抱きしめて味ふべきものである。山高くとも等からず低くとも決して輕んじてはならぬ。山の私語を注意して聞くが良い。山嶺の聲は懐しくも呼び掛けるであらう「お前の心臓は？お前の筋骨は？お前の能力は？」としてお前の品性は？オプテリと出来上つてゐるならば近寄つて来るが良い」さ。山は心臓を強くしてくれる。筋骨逞ましく、能力を作り、品性を淘汰してくれるのが山岳の聲である。

アルピニストの洗練された組織に於て、地球上の高山は次第にグアイジンビータを失つて行く。吾々は其の人間の成功を

成福しこそすれ、其の事に依つて山嶽の威厳が失墜する、であらうと言ふ危懼の念を微塵に抱かない。寧ろ其の記録は永劫に地を人との激しき闘争の歴史の記録であり、且つ之に依つて其の山嶽のより崇高なる価値を高め得るものであることを信じてゐる。得得たる我が人類の足跡亦多い故である。然し記録其のものが絶てのアルビニスムの目的では無いことを知つてゐる。よし夫が絶てであつても、吾々に課せられた試験への過程には秩序ある階級のあることに氣付かねばならぬ。各自の力に依つて踏み出された確實なるステップを重ねることに依つて初めて終局の目的は達せられ得る。

日本列島は地球上の要衝地土である。然し其處に標曲斷層する山勢の複雑にして錯綜せる中にも、日本アルプスの如きは良く歐亞大陸の山勢を移し得て、吾々山嶽の諸君温存造く絶はざらしむるものがある。爲めに登山熱年々旺盛に起きつ、あると同時に、其の研究方法に至つても漸く熱心さを加へつゝあるは頗る快事としなければならぬ。惟ふに甲南の地に於ける我が山岳部は高峻ならずとも山姿愛すべき大甲地帯を背後に有し、ロツクガーデンの如き良き練習地を近くに持つて、誠に好適の地利を得たものと言ふべきである。實地の研鑽と、机上の研究とに依つて、初めて我が部の光輝を發揚せしめ得るもの、その研究の努力は遂に結晶して愛に山岳部第二號の發刊を見るに至つた。讀まれたる十數篇に甲南高校山岳部の意氣と熱心を見る。歡喜惜く絶えず、我が部の發展を祈る眞情を披瀝して以て巻頭の辭と爲す次第である。

(一九二九・九三〇)

五月の山とショートスキー

伊 藤 原

春も聞けた五月ともなれば今まで白く睡つてゐた山々もその深く積つた雪を追々にうらめた、かい太陽や風に晒らせて、山肌には腕の子まだら黒黒が段々多く現はれて来る。こうして冬がその姿を山々からひそめてゆく時、山を憧れる心には雪山の魅力とその誘惑が一と入は強く再び追つて来るのを感ずる。

もう早春のアルプスを脅かす底雪崩れの危険もあらかた遠退いて、雪に埋め盡された谷すぢも今は安全なスキーの領分となつてゐる。尤も時には冬の荒神の衣の裾の一揺れは嵐を起こして三日毎、五日毎に新雪を吹雪き、或は時に二三日も荒れ續いて高い處には未だ冬の領域の屯する事を主張するが如くに、折々は巖氷のおそろかな姿を目のあたりに現はすにしても、最早や冬の最中の如き旬日に亘る山小舎の饒舌と云ふ様な苦痛はなくなつてゐる。山の自然は長い息苦の冬籠りから解放なれて、雪の中から岳神は芽をふき河神は赤い顔をふくらまして、活々とした生命の力強さを見せてゐる。

うらゝかな陽光の下に鮮べられた此の晩春の山を歩いた。一度は槍からて山に縦走した二週間を、また一度は朝澤生活の十日間を共にショートスキーを携へて入つた。

五月とは云へ未だ雪の量は多く、山小舎はその殆んどすべてが雪の中に埋まつてゐてそれを使用せんが爲めにはショートスキー

やビツタルをふらつて揺らなければならぬ。縦走の時に活用した小舎の内、三ツ又五ツ等モスゴイ峻絶の小舎はその屋根の一隅が僅かに雪上に出てゐたのであつた。小舎の内に幸うじて入れる位の穴を掘るのさへ謗ながらぬ時間が失はれてしまふので暮れやすい山の夕方、重いリュツクサツタを背負つて数里の雪道や尾根を歩いて漸く辿り着いた瘦れた軀にはそれは大きな負担である。然し漸く辿り終へて小舎の内へ入つて、一夜の宿りを得られた時に喉はふ安堵の心持ちはその辛いアルバイトの苦痛をつぐなつて餘りあるものである。

昨年の五月十七日の夜だつた。槍平の室堂を早朝出發して西嶽を辿り松澤、双六、三ツ又連華を経て蓮華の小舎に着いたのは七時を少し過ぎてゐた。小舎は僅かに屋根の棟が少し出てゐるだけだ。黄昏はもうしのび寄つてゐるのにこれから雪を聞かねばならない。六人が交る交るシヨベルやビツタルをふるつて幸うじて人の出入り出来る穴をあけ、壁板を二枚軽外すして漸く小舎の内へ入つたのは九時を過ぎてゐた頃だつた。その間に僅松が現はれてゐる尾根の方で準備してゐた飯や味噌汁も出来た。勿論雪を溶かして飲いたのである。こゝも少々湿つてゐる、飯には半煮の肉もあつてシシもある。然し一日のアルバイトを終へた我々の胃の腹には何物にも代へ難い美味であつた。

小舎の中には薪もたくさんあり、おまじに小舎の中で焚火もする事が出来る。然し煙い事は夥だしい。だが小舎の内では火にあたりた食事が出来たのは有難かつた。十一時頃穴から出て見ると雪露も漸く晴れて空には星が輝き出した。明日は天氣もしいのに安心して寝れ切つた軀を薪園に横たへ置たい夢を結んだ。

小舎に寝られると云ふ事はたゞそれがきんに荒れた小舎であらうとも、よしや小舎の中に吹き溜りの雪の山があらうとも——五月の山小舎には未だ大抵、雪が中に溜つてゐる。常念、槍平、蓮華、上ノ岳、スゴウ、五色、立山室堂と皆んな

積度の差こそあれ小舎の中に多量の雪が吹き込んでゐた。——それでも露堂に侵る事々である。この縦走の時にも第二日の夜は一ノ保谷の常念湖の上で行き落ちて、もう一ノ保の小舎へ三十分か一時間と云ふ地點に居り乍ら最早暗闇の夜となつて、前に横はる海流に阻められ然かも架橋工事をして峻峭な岩壁をヘツラねばならない難場なので邊に雪の上に露餐を決め、附近の巨岩の下にある間隙を利用して、ラチルネの淡い光の下に手入れて穴をこさへ木の薪を伐つて来てはその中に敷きテントを幸うじて張つて五人がその中に眠つた。轟々たる水音を聞きつゝも絶座で水が取れなかつたので、シヨベルで壁の雪を削つてはコツヘルで水を作り、生ぬるい温度でコーヒを煮ヘパンを嚙つて空腹をしんだ。テント内は多人数の爲めか寒外暖かく、防寒具全部を身に纏つて寝たさへ云へ満足な睡眠は取れる筈はなかつた。又今年の五月の創澤生活の時、は早月尾根から入つたので初めからビョータを憂鬱して行つた。雪上のビョータは内心少々閉口してゐたが、丁度手頃な場所、たゞそれは傾斜して下は絶座となつてゐる危つかしい處であつたにしろ二坪ばかりの草地があつたので雪の上に寝ることも益々目は味はなかつたが然し二千四百米の高度で、而かも風の吹き晒しの尾根の上では睡眠は浅く、幸うじてまきろめる程度であつた。勿論この時は或る等へから大した防寒具は携帯せず只僅か毛皮が付いたチヨツヤか或はスエーター一枚位より使用せなかつた事にもよるが、然し準備してゐるさしてもかゝるビョータに於てはあまり睡眠の獲れるものではない。この點はやはり毛皮のシュラフザツタ等を使用して完全なるビョータをするなら兎も角、然らざる限り未だ五月に於ては就中雪上等のそれは體力の關係上山小舎を使用するに越した事はない。山小舎も理想を云へば冬期使用の爲めに手入れがしてあつてはしい。去年の縦走の時はそれ程までには計画が出来なかつたので何等の設備の無い小舎に行き當りに泊り、小舎を掘つて雪に荒らされたまゝ、ものを使用した。今年の五月の三田平の小舎は三月にも合宿に使用したのでもあるし、又

前年の秋、旅友が自ら吹雪の日、其處に臨みて破目板の隙間には目張りをして置いたのでその所は雪が入つてゐなかつた。そのお蔭で二十二日の夜から荒れた嵐に吹雪の數日間何等の苦痛も味は、なかつた。

我國の登山界は最早や冬期登山に於ても相當の進歩をなしてゐるにも拘はらず山小屋等の方面には未だ何等の設備も爲されて居らない現状にある。我々が冬期に於てもアングネームなヒツチンレーベンのは何時の事であらう。歐洲アルプスでは二千八百米の處にすら冬期スキームの設備がある小舎があるを聞くのに。

五月はまだ雪が多い。最も雪の消えるのが早い尾根筋ですら雪に蔽はれた處が相當多く残つてゐる。勿論大部分は最早や雪が消えてガラ／＼石の地肌や樺皮が出てゐるにしても尾根の上部を限界とした風説の側には未だ相當な雪の斜面が残されてゐる。そしてその尾根が甚だしく瘦せたものでない限り、又その斜面があまりに急傾斜で無い限りスキーの使用は未だ可能である。

勿論尾根でない普通の斜面、例へば山腹の緩な處や、或は又降雪期に於て、積つた雪を風に依つて持ち去られない場所、積雪の深い平坦地等は充分にスキーに對して良きデレンヂを提供してくれる。

然し此處にスキーの使用を制限する場合のある事を忘却する事は出来ない。その一つはタルスタに依るそれである。雪の表面が硬いタルスタを形成してゐる場合には、時に敢て無理をすればスキーを使へないでもないが大體に於て斯る際にはアイゼン乃至はネーグルを打つた靴のまゝの方がより有効に然かも努力に於ても有利なる場合が多い。特に相當急な傾斜の登りの場所がかかる雪質にて蔽はれてゐる場合の如きは當然にスキーを使用しない方が有利である。降りた地形に於てすらも

斯る硬いタルスタの雪質の状態にあつてはたゞから身でスキーを操縦するのみにても幾々ならぬ苦心を要し却つてスキーを使用せずには歩行する以上の努力の浪費をする場合が少くないのである。況んや重い荷のある場合に於てをやである。

タルスタは多くの場合夜中の気温の低下に依つて形成されるものであるから、早朝の未だ太陽の光線が雪質にあまり影響を及ぼさない時刻に我々が経験するものであるが、稀には日中にも、風等の作用に依つて形成されたランドタルスタに遭遇する事もある。

然し我々が最もよく経験するものは早朝のそれである。就中縦走の際には毎朝必ずこの状態に遭遇せなければならぬ。それは縦走の直接の目的がスキーの使用に云ふよりも寧ろコースをカバーするに云ふ點にある場合には日數或は泊湯等の關係上さうしても相當早く出發せなければならぬからである。然るにかゝる早朝の時刻に於ては雪の表面は大抵の場合硬いタルスタを形成してゐる。

右の様な理由からして斯かる縦走の際には當然に早朝の成る時間だけはスキーが使へない。太陽の光線が、夜中の冷い気温で形成された硬いタルスタに作用して、漸くそれを柔らかにする頃を待つて初めて其處にスキーの使用が可能となつて来るのである。

そして又このスキーを制限する場合は單にこれだけとは限らない。雪の表面に雨や風が作用してスカブラを作つた場合、又は雪溪の表面等に見られるセラツクス等はそれらが少々の場合にはスキーを使用するにあまり大なる影響はならないが時にはそれらが甚だしい場合があつてスキーの使へない事も稀ではない。昨年の縦走には毎朝前記の硬いタルスタを経験した。時にはアイゼンのツアツタを以つてしても硬い程の状態の朝もあつた。又もう縦走を終へるいよいよ最後の日、二十三

日の立山聖堂の朝もやはり相當緩いタルステであつた。然し乍らその日はいよ／＼山から出る日であり、加ふるに立山聖堂からは一踏降りばかりであるところから敢て緩いカリ／＼のタルステの上を聖堂から直ぐにスキーを使用した。かゝる試みをしたのは、スキーをこの縦走に携へたる期待に対する内心の満たされざるもの、即ちこの縦走が案外期待した程スキーを享樂出来なかつたのをこの彌陀ヶ原の滑走でうめ合はせをして、せめて満足しよう云ふ氣持が多分に手傳つたからである。實際この縦走に於てはあまりスキーを享樂する事が出来なかつた。勿論使ふのは相當使ひもし、否少しでも使へような機会には出来るだけ、事ろ無理をしてまでも使つたんだが、初めの期待はそれよりもずっと膨張つたものだっただけにこの程度では未だ得心がゆかなかつたのだ。

そんなわけでカリ／＼の緩いタルステの上を無理な錯かも努力の浪費の甚だしい滑走を敢てしてゐたがその結果は面白くなかつたのは當然であつた。否それどころか、折柄丁度聖堂に荷物を掲げに來た岩崎の夫人のから身で下りるのさ聖堂から一踏に出たのにマンマを先を越されて了つた。彼等はよしやらから身であるとは云へ、スキーを穿いた自分達より足袋を穿いたまゝで走る彼等の方が早く下りて了つたのには甚だ悲願した。斯くして緩いタルステの上のスキーは失敗である云ふ事を實際上経験した。然し乍らそれから後もやはりスキーを相變らず使ひこりもなく使用してゐた。追分附近では又悪い雪質に遭遇した。それは雪の間に兩風の作用でか大きな雪がたくさん出来てゐたのだつた。そして又その雪の質は之も雨か風かに叩かれ作用されてか恰かもスカプラ状に似た荒らされ方をした多孔性のものとなつてゐた。未だ雪質は時間の早いさとして天候の關係で太閤が未だあまり常らないのであまり柔かくもなく又硬くもない程度であつたが右の狀態の爲めにスキーを拂つるのが之又一苦勞であつた。お蔭で雪は大分減れて、スキーを使はない人夫達より御苦勞な目をみたわけだつた。

此のタルステで思ひ着いた事であるがこれに似た現象で山の斜面等に主に風の作用で形成された特殊な雪質に *glacé*、*glacé*、*glacé* がある云ふ事が外國の文獻によく現はれてゐるが私は未だそれらに就いての實際的な又意識的な経験を有しないので何とも云ふ事が出来ないが一寸此處に序いでだから書いておく。

もう一つこのスキーの使用を制限する場合がある。それは甚だ稀な場合であるが雪の表面が硬いタルステをすつと通り越した端々別な分類に入れられるべきもの、即ち表面の水化した場合である。甚だしい場合には蒼氷に化ちなつてゐる場合がある。今年の五月の御嶽生滑で之を實際に経験し得た。五月の二十二日の夜から荒れ出した吹雪が殆んき止み間なしに表裏もなく宛も隨處のたうちまはる様に狂ひ舞つて二十五日の朝に至るも終息しない。初めからあまり豊富でもなかつた食料は十日もの日數に殆んき拵になつてもうそろ／＼引揚げねばならなくなつてゐる。又候がこんな様では當分大した處はさ／＼もやれそうにもない。吹雪き嵐は二十五日の朝になつて四日目で漸く勢も衰へかけて來た。時々晴雲の切れ間から陽も射す様になつたので風の小やみを覗つていよ／＼引き揚げる事にした。荷物を整理していよ／＼出發云ふ際になつてスキーを穿くかそれともアイゼンか云ふ點に迷つた。凄風が亂舞してゐたので一歩も小舎の外に出られなかつたので兎も角一度様子を見る云々わけで、晴れ間に外へ出た。緩い、硬くないのつてまるで水だ。これではアイゼンより仕方がない。(此の第二號に挿入せる寫眞の「吹雪の時間」はその時苦心して撮つたものだ)スキーはリュックサックに縛り付けてアイゼンを穿いて出發した。あたり一面蒼氷が張りつめてゐる。吹雪きだつたが中に雨も混ざつてゐたので表面は凸凹のひさひさした状態になつて硬い處はアイゼンのツアックも全部喰ひ込まない。ビツケルを蹴つてみるに切れるのは勿論だがカーンと音のする硬さだ。然しかゝる硬い質の厚さは一寸位のものである。時々この層が破れて足がもぐら。この氷質は下が空

席になつて下の雪の固有の面から持ち上つた雪塵となつてゐる。下の雪は柔いフイルンだ。それで氷の薄い處を踏み破る。膝の半ばも入つたりする。そして氷の上には薄い風の爲めに小鳥が驚死して歸々何十羽もなく落ちてゐる。相當大きな山鳩までも死んでゐる。拾ひ上げて見る。風の爲め氷上にたゞき付けられて傷を受けてゐる。中には氷に足を凍結されてしまつただけでまだ生きてゐた鳥も一羽あつた。

こんな着氷の状態が別山乗越まで続き、雷鳥澤も着氷まででは行かぬまでも表面は氷化して硬くなつてゐた。雷鳥澤の中途から友の二人はスキーを降りて見たがスキーのカンチさへ利かずビツケルでその表面を引つ掻いて制動してゐたがすり落ちしてからはスキーをやつぱり脱いでしまつた。雷鳥澤を下り切つてしまふとそれでも此處では普通の雪質となつてゐた。五月にもなつてこんな荒れ方をすることは訝いだらうが、又着氷が出来ると云ふ様な事も稀であらう。

又この雪の硬い爲にスキーが使へないのと反対に雪が柔らかすぎてスキーが使用出来ない場合がある。昨年の五月十二日常念を越した時にそれを経験した。常念山脈の尾根は尾根筋だけは雪が溶けてゐたが兩側の山腹にはまだベツキリ雪があつた。常念乗越附近は尾根筋が廣いので地肌や笹松が現はれてゐたが少し西側に下るともう小倉附近は、小倉の尾根が出てゐる位の雪量が残つてゐた。未だ大半雪の中に埋もれてゐる小倉内に入つて着氷をした。小倉内には雪が吹き込んでゐて不愉快だつたが外では火を焚へるのに手間がかゝるので小倉の壁を使つて薪を湯かしてゐた。もうこれからは下り一方で樂に一の俣小倉に着けると考へてゆつくりしてゐた。スキーを使用したかったので二の俣を滑つて下る予定であつた。一の俣は瀬があつて、もうそれが出てゐるであらうし、二の俣ならば中山峠を越すのさへ半端したら後は安心してスキーを使へるので峠を登る位の労は償はれると思つた。

スキーを穿いて少し行くなり膝迄ももぐつてしまつた。輪襪を穿いてゐる人夫はさうだらうと思つて振り返る。さうも歩ひさいもぐり方をしてゐる。荷物も少々重過ぎるせいもあるが雪がひきくゆるんでゐる。ザラメの過雪で靴の底になつてゐる。それにもう時間が時間だから無理もない。太陽のカン／＼照つてゐる日中の一番雪の柔かくゆるくなつてゐる三時近くだ。それにしても雪のゆるみ方があまりひきさい。長附に侵されてゐる時が或は又雪の未だ固くない頃の三月頃の過雪雪の調子だ。五月にもなればもう少し雪が固まつてゐるものだからにしろで泥沼の様になつてゐる。人夫は腰までもぐり込んで倒つてゐるしこんな調子なら中山峠を越すだけでもきの位時間が掛るかわからない。然しそれよりも内心恐れた事はこんな状態では自分達の感覚で雪崩を起しはしないかと云ふ事だつた。五月にそんな原因の雪崩なんて怪かしい様だけれど實際それ程に雪は弱つてゐた。それで二の俣は断念して常念岳を越して麓に寄つた方から一の俣谷に入つて少しでもなるべく瀬の處を避けて降らうとした。然しその日は他の悪いコンディションが又加はつて遂に一の俣小倉に行けず中途の瀬にさう／＼阻まれて雪の上にビツキとして終つたが雪がもう少し硬ければこんな思ひ掛けないビツキなしに二の俣を面白く下つて小倉に着いてゐた事だらうと思ふ。兎も角もその時間が雪の悪い最中であつた事にもよるがこの雪質は最も悪い状態だつた事は争へぬ。

右の如きは極端な場合ではあるが一般に日中は雪がゆるんでゐる。縦走の時にしろ、又御澤生活の時にしろ日中の最も日盛り時刻の前後一二時間位は五月の山ではショートスキーはあまり有効ではない。勿論輪襪等よりは有効であるが面白くない。こんな時はやはり長いスキーに限らう。上の角や太郎山等のノラベリした處ではショートスキーでは満足出来なかつた。滑走はし、輪カンジヤの者或は尾根を降るまで歩いてゐるのよりはスピードもあり愉快であつたが長いスキー

を使用してゐたらこんな處でも多くの愉快が味はわたであらうと思ふ。

長いスキーであればショートスキーが少々もぐる様な雪でも、又雪の表面に少々のかたまりや凸凹のある位はもう不安定して乗り切らねばならぬ。愉快な滑走が味はわたであらう。又前記の常念の場合でも何ぞかうまくこなせてゐたかも知れないと思ふ。

要するにショートスキーは五月の山に於てすらその最も有効で愉快な滑走の享樂出来るのは甚だ制限されたものであつた。僕が陽光の當りかけた、形成された硬いクラストのメルトしかけた朝の頃、漸く日陰になつて日中陽光にメルトした雪の表面が薄くクラストする夕方の頃が最も面白い。今年の御澤の滞在では初の頃こそ日中の雪でも滑つてゐたが段々贅澤になつて終ひにはその最も面白い頃にのみスキーを享樂した。

今年の御澤の五月の引き揚げる頃の風に侵された蒼水の時を除いては全く通常の雪質であつた。御澤近では二千五百米位に、御澤地形等の相違もあるから一概にその高度程に云ふわけではなかつたがノイシュネーゲンチエンが降つてゐて最近に降つた汚れてゐない純白な新雪を保つてゐた。最も美しく鮮やかに、そのラインが出てゐたのは眞砂澤のそれであつた。眞砂澤は地形の關係上、他から塵をあまり風の爲め持つて来られない故か眞白い新雪が汚れて鮮黒くなつた舊雪が一本の明瞭なラインを境界として保たれてゐた。

早月の尾根の雪質は夜中にはタルスタを形成し、日中には昼の半分位もぐる程度のもので取り立て、云ふ程の事は無かつた。唯早月尾根の山の主峰に合する處の相當傾斜のあるルンゼには積雪が二寸位あつてその下に硬い氷が喰ひ付いてゐた。其處を通つたのは最悪だつたがこのルンゼはあまり雨が射さないせいか氷でずつと積つてゐたものと考へられる。其處は

又高度も相當の處で二千九百米前後の處だつた。

八つ峯に登つた日は午前二時頃に出發したので雪はタルスタであつた。然し此の夜はあまり気温が下らなかつたので割合に暖かいタルスタだつた。気温があまり下らなかつたのは既にこの夜から前夜の吹雪風の低気壓の氣配があつた筈であらう。然しあまり暖かいと云つた處でスキーには硬過ぎたのは勿論であつた。然し降り止む迄の軟くなる日中になるし、それに少々無理でも滑つて降りた方が背負つてよりも楽だらうと云ふ考へから使用して降つた。然し殆んど横に付いてビツタルを雪面に引掻いて前進し乍ら夜の間の中を雪明りも暗いな残月を頼りにラテルネもなしに三人が長次郎を降つた。タルスタに加へて處々雪崩のデブリがあるので寧ろスキーなしで歩いた方が楽な位だつた。今年は大きな雪崩が平蔵や、長次郎から出てゐる御澤の出合の處に二米以上の高さをもつた大きな堤防を作つてゐた。

八つ峯はまだ多く雪に被はれてゐるそのリッヂやピークには大きなコルニススへ残つてゐた。リッヂに登り付くには長次郎側の壁を登つたが相當の高度の處の爲めか流石に雪は硬く、就中板状雪崩が懸つた處は氷になつてゐた。ノイゼンとビケタルを有効に慎重に使はねばならなかつた。上は完全なスノーリッヂで細い鋭いものであつた。アンザイレンして、時には足場を作つたりせなければならなかつた。もう隅が當つてゐる爲め細いスノーリッヂの東北面は大部分雪がのるんでゐるのに西面は未だ硬いので鋭いリッヂに跨つて、文字通り腰を付けて跨つて通過する場處では兩側になつてゐる所足のそれぞれ足場の硬さの調子が異なるので相當悩んだ。

第五峰を登る時にはもう八時半になつてゐる朝日が當つてから四時間近くにもなるのでラッセルは膝までもぐりビツタルゾンディレンをすれば折は半ば以上も深く入るので六峰以下は斷念した。第五峰の降りてビツタルビレーの硬さを試験し

たが雪が甚だ悪い状態になつてゐてピツクル全部の長さを突き擧してゐるのに一人が完全な墜落をすればザイルの緊張に依つてピツクルが五寸位も移動するので此の状態では安心出来るものと思へなかつた。この日はあちらこちらで小さい雪崩があつた。岩壁に懸つてゐた雪が落ちた程度の大したものではなかつたがこの日は低気圧の襲来で雪が悪い状態にあつた爲だらう。

五月のショートスキーにワツタスやシールを使用する事に就いては能率を高める點から云へばやはり使つた方がよいらしい。シールは昨年も今年も使用した。長いスキーのものをそのまゝ一寸手入れて使つたが相當有効であつた。唯困るのはザラメの過剰客の爲めシール自身がペトペトに濡れて甚だ重くなる事である。

ワツタスはやはり使用した方が有効だし、スキーそのもの、享樂がより愉快さを増す。然し五月のザラメ雪は較が大きく多量性だから普通のワツタスやパラピンは直き取れてしまふ。エルトビーのクリスナルなら比較的長保ちがするが他のものはさうかと思ふ。

五月の山に就いては未だ之の外に色々な事があるが経験も浅くその方面の専門的な智識も乏しく、客質なんかの専門的な研究に至つては未だ手が届かない。



早月尾根より眺望

五月の劔生活

——早月尾根、八ツ峯——

西村 格 也

山そして早月尾根

一九二九年五月十四日の夜、巖かに寝へ立つ山々に招かれて、己が居宅へ急ぐかの如く欣然として我々は京を發つた。晩春の山、まだ雪と氷との支配下にある山、その魅力に引き附けられた我々ではあつた。海然として静へるが如く大自然の懷に抱かるれば足りる我々ではあつた。然しそこにもやはり目的——この行の重心は依然として存せざるを得なかつた。早月尾根即ち之である。

此の尾根の登攀は以前冠次郎氏一行の企てられてより、以來小生等閑にして之あるを知らぬ。大正六年の夏七月であつた。物凄く藪と叢との參成に躓きながら、そして又未踏地の登攀に伴ふ幾多の危惧に常に脅かされながらも、四日間之苦闘の後に終には劔の頂に立たれて、心の奥底から湧き出る感激に咽はれてより已に十有二年の歲月は立つてしまつた。

「十年一言」と言ふ。その間に科學は、文明は甚だしく進歩した。そして社會百般が、従つて變遷すべき程度にまで發達し

た。山岳方面に於てのみ獨り如何してこの時外に在り得たらう、山岳觀にあつても登山形式に於ても當に一覽せざるを得なかつた。そして登山の價值が漸く廣く認識されることもその大衆化は一層高唱するに至つた。斯くて山に向ふ者は年々増加し、山と言ふ山はあらゆるルートを取つて登られ、悠久の自然の裡に永劫の沈黙を守つて居た山岳は今や殆どその全てが小さな人間に依り登り賣されたのであつた。幾千百の人間が山の頂に立ち心からなる快談を叫んだことだらう。然し山下に走る長大な尾根を眺めながらも遙に之を登らうと企てる者は一人も無かつた。そしてこの昭和四年、春も正に暮れんとする五月我等の登攀はなつたのである。

此の行の提案計畫は高橋健治、伊藤惣雨氏によつてなされ、小生之に加はるの機を與へられた。或は此の尾根もブナタラ附近に露出して雲雨未明に出發すれば恐らく一日でやり得やうが、未だ等のコンディションに依り完全に行程を支配される時期にある以上之は些か疑問に属する。今もし尾根で登なければならぬとすれば天幕の必要は絕對的に要求される。我々は重量機がバンドを出すズダススキーデント二個を携行した。如何しても雪上に登なければならぬ時は、——幸にして之は配差に過ぎなかつたが——雪中に穴を掘り一を敷き機を張つて睡眠する覺悟であつたのだ。吹き晒しの尾根で眠ることは言へ、もう五月であるからさて荷物を最輕量にせよと欲する要求から防寒具は出来るだけ少くした。それに特別な毛皮類など持ち合さぬ我々のことにて脚底の不足は免れ得なかつた。

小又川發電所まで

五月十五日 朝北陸鐵道川原に着く。都は已に春も終らんとして居るのに、此處北陸の一隅はまだ絶てに冷たい冬の名称が

ある。吹く風、行く人、やはり未だ全く冬から脱し切つて居ない。

立山山の連峰が麓ろに見へる。何れも未だ白く、化粧されて居る。そして波石に春だ、ほんやりとして夢の國のその様だ。その姿、淡い霞に蔽んだ山の姿、それは何と云ふ平和な姿なのだらう。一瞬の雪片だけに留まるを許さざる岩稜、息つくの暇だに與へざる風雪と勇々しくも戦へる岩壁、さては風に狂ひ岩を飛ばし砂を上げる山、それ等もさより我等の心を揺ますには足りない。前者は靜かな姿であり、後者は動的な姿なのだ。是もさよりいゝには足りないが、彼の平和なる姿は一層いいい。

立山鐵道はコト／＼と進む。この音、高い車、そして田舎びた乗客、我々は確かに山へ向つて居るのだ。山——岩と雪今當さにそれ等の聲に飛び込まんとして居るのだ。何と我等の心の躍る事よ。

上市町に着く三人夫が来て居る。声の者だ。佐伯由蔵と言ふのだそをだ。宗作と言ふことにして居たのに都合悪く來られぬとは些か残念だが、用立て別になく始め人夫は使ふまいかと考へた程なのだ。と言ふのは、是が今度の山行を大變容易にしてくれたのであるが、この三月、都の御澤生活の時上げた食量の殘餘が一週間ほどに我等を支へてくれることを別件出来荷物なにも至つて輕くてすみ、ただ前取りや、炊事などの煩を省かせるくらい物だつたのだから。まあ誰でもいい、と言へばいい、わけだ。スキーを持つて來て居る。我々も各自四尺餘のを持つて來た。勿論尾根で邪魔になると思はぬでもなかつたが幾日かの御澤の生活を思ふとやはり是非ともほしかつた。だがこの長いのは餘りに荷になりすぎる。氣の毒だけれども送り返す。

駅前から自動車に乗る。乗合と言つても客は我々四人だけ、貸切も同じだ、一曲り二曲りして上市の町はすぐ出はすれぬ

い田園道を暴走する。ひさい境が立つ、道行く人は茫然として見送つてゐる。道が悪いからと言つて何の橋まで行かないで二三町手前でおろされた。だが釋尊寺まで我々をはこんでくれた事を感謝する。リュックを背負ふ。曇天だけにそんなに照り輝びはしないが馬鹿に暑い、汗がだく／＼出る。巾の廣い平坦な道で單調な道を進む。間もなく低い峠になる。之を越す。折戸に着いた、土地の茅葺風の家で煮食を取る。家の人が田舎人らしい親しまふ誠實さを以て我々を接待してくれる。道は相變らず平且つ坦だ。馬車でも車でも通る立派さだ。すつと早月川の左岸を通じて居る。川は堰中によく見る如く幅が廣くて河原が多い、流もゆつたりとして居て春らしくのんびりして居る。早月尾根が真正面に立ちだかつて我々を威嚇して居る。

伊折の一町程手前で暫らく休んで後ろに伊折の部落を觀察した。昔小黒部嶺山の盛なりし頃、此の地は物資供給の要地として、それが上市と嶺山との中間に在る言ふ地理的優勢の故を以て實に隆盛を極めた物であつた。だのに時代は廻り嶺山の廢止されてより久しき今日在るは、ただ十余の茅屋のみである。何處に當時の隆盛を思はうぞ。後ろ、ばかりの活氣も今はない。三昧の香、脂粉の香、己に飽へて全く無い。靜寂その物の中に颯れる山間の僻村に返つたのだ。大古以来の姿、安らげき其の上の姿に返つたのだ。それにしても此處の女性には實によく働く。野邊に耕すのも山に薪を取るのも多くは曾根女達だ。嘗つて嶺山への物資の運搬にあたつたのも多くは彼女達であつた。よく働く女、元氣な女は他方に於ては貞淑な女房なのだ。彼女等の亭主たる者も少し煩悩らねばなるまい。

伊折から道に幾分石が出て來た。だがさても悪いな言ふ程の物じやない。巾は廣いし傾斜は無いし目をつぶつて居ても行けそうだ、それでも別に急ぐ必要もないことだからフツリフツリと歩く、でも五時前に靜電所に着いた。こここの合宿所に

リュックを下して體をのばす。實にいゝ氣持だ。數日來毎日夕刻には雨が來る言ふ。さうも感心しない。明日はさうだか。尾根の二日だけは晴れて居てほしい。

雨の日

翌十六日 三時頃に目を覺ます。聞こへるは確かに雨の音。雨だ、斷然存在せざるを得ぬ。八時過ぎより雨は上り颯の寒さに見へ出した。然し今更出發も出來ず、その上雪行は頗る險惡なので靜かにコースの研究を繰返す。午過ぎ又雨となつた。然も夕近くなるに及んで益々烈しい。此處に於て皆今日の滞在が頗る良かつた事を喜ぶ。

此處の發電所も現代の多くの山のそれが然るやうに、山に來る者にまつて甚だ喜ばしい存在である。假令合宿の障子は破れ幾ば風黒く汚れて居ても、それ自體何等我々に嫌惡の情を起さしめるには足りない。まして其處に住む人達は時に訪れる都會の者を喜んで迎へて心からの持て成しをしてくれる。そして我々の尋ねるがまゝに田舎人獨特の親切さを以て一々詳しく返答してくれる。もし油槽に浸つて一日の疲勞を癒し意氣として體をのばして洵然たる時靜かに谷川のせゝらぐを聞けば身は遠く仙境に遊ぶを覺ゆるであらう。それに食膳にのほろ香高い「ウド」「フキ」「ワサビ」等何れも一度味はつた者には永久に忘れられない物のみなのだ。山の水電、我々の懐かしい山の水電、お前達は永遠に健全であつてくれ。

早月尾根二〇〇附近まで

十七日 天氣は回復した。何となく氣鬱りな晴れ具合ではあるが、明日のみか今日の午後も或ひはと思はせる程なのだが

思に角今、基の嶺は快晴だ。さぞ天候の事明瞭に断定出来ぬ。行け！昨日一日の餘蘊ない滞在に弊のコンデションは全くよく新しい元気が湧き立つてゐる。冷々とする空気が。そして迫り来る山の雲、何と云ふ心持よい事だらう。

此處から道が細くなる。忽ち「山へ」さう感じが出て来る。空が美しい。大空から小惑星三座への橋、その雲層に輝く岩、こゝから見た意は精確だ。目的の半月尾根は真正面に、鉤の絶頂から真直ぐに走つて登へ立ちぬくまで我々を威嚇してやまない。パルパジャに來る、爽やかな朝の大気の中を進むのは何時もながら既視に懐かしい。里親も近いが足のはこびは軽かつた。こゝで一息入れて居る。松が来た。ブナタラの奥小屋には人が入つて居る。同所を行くらしい。同じ道なので一緒に歩く。道は白根川の左岸にそつて居る。之を一町程行く。左に大きくカーブする。此處から松尾平に行くのに二つの登路がある。一つは立山川に出て短かい二、三町の處なのだが二度程徒渉して、出合から最初の深く入り込んだ谷——尤もこの谷は此處からは見へないが——を登るのであり、他はキツキツラの谷を登つて松尾平の上に出るのである。我々は何れを取らうかと協議した。が結局キツキツラを登る事に決定した。さうしたのは立山川の徒渉が恐らくは不愉快な物であり、又馬鹿に時間を食うであらう事さ、も一つは松尾平より上雪の尾根までの道は又サト種物だ。見受けられたからだ。そこで白根川について又進む。

奥小屋はブナタラ谷との出合の少し下にありキツキツラの谷は此の小屋の東南に深く入り込んで尾根まで續いて居る。夏は中程に滝が懸つて居てその附近の上昇には大分時間を食うさうだ。然し今は谷一面が雪でうすまつて居て、その心配は全然無い。上の方の傾斜は二分あるが雪に角尾根に出るには此處が一番いいらしい。出合の半町程上に餘り大きくはないが標の水がある、その附近が割に浅い、此處を徒渉する、水は勿論冷い。靴を脱ぐのが面倒なのでその儘ザザザと渉る。勿論



水は入つてしまつた。此處からは殘雪が豊富だ。私はスキー職なのですぐアイゼンを附けた。カツタラ谷は下の方は廣く
て立派だ。之をダシ／＼登る。餘り晴れては居ないが流石に五月、やはり暑い。雪も大分柔らかくなつて居る。間もなく瀧の
所へ来た。輪り時間も食つて居ない。一二五〇Mあたりから右に尾根から来て居る小さな谷に取付く、傾斜は相當急だ。が
恐らく之以上本谷を登る事はより以上の困難を齎すだけだらう。雪がさてもゆるんで居るのでさすればすりそうだ。備
重にジグザグタを取つて進む。尾根に出た。傾斜はグッと緩くなつた。勿論未だすつかり雪だが、笹や雜木が露れて居て
歩きにくい。それに榎松や雜木の葉を踏まねばならぬので相當疲れる。一應に立山川側は傾斜も急だし、悪い。一九〇〇米
附近で本谷にゆつくりと休んで遊食を取る。朝から氣づかつて居た空は大分あやしくなつて来た。霧の去来が氣に懸る。進
むに疲つて傾斜が漸次増加して来る。が一方眺望も次第によくなつて来る。完全に雪に覆はれた大日山塊が右手に美しく光
つて居る。未だコルニスきへ持つて居る。左手には陡になつた落又が見へる。

二二〇〇米あたりで森林帯はいよ／＼葉きた。時刻は未だ早いがこの邊でキャンプしないさ病を得るのに不便だ。右手に
雪の消えたテラスを見つけ、こゝに露営する事にする。尾根の南側なのでよく乾いて居る。勿論傾斜はあるし木の根は出て居
るがそんな贅澤は言つて居られぬ。よくならして、それに下はすぐ立山川の断崖なので丸太を横に渡して轆轤をふせぎラン
トを張つた。薪は少し下つた森林から求め木は勿論ないので雪を解した。食事までに時間があるので雪がクラストする咽を
見計らつてスキーをやる。池ノ谷側に稍緩い斜面があつて少々滑れる。打ち揃つて夕食を攝つて居るうちに闇は漸く落ちて、
もう星がまばらに輝き始めた。手早く後仕舞して狭いテントに四人が寄り込む。

寝やうとするが寝られない。寒氣がひしひしと迫つて来る。ウツウツさしてもすぐ目が覺める。寢て居ないのだ。寒氣の

爲なのだ。五月までは言へ二千四百米のこの高所にして風には何等の防禦なき尾根である。如何に風いだ夜だと言つても寒氣は愈々強くなる。さうしても眠れない。更け行くにつれ下る氣遣は甚だしい。寝られない苦痛、そしてそれに打勝たんとてして打勝ち得ざる努力、何ぞ苦しい戦ではあらう。朝へかねてチントを運び出した。夜露の爲チントも芝草もベトリで濡れて居る。消わかけてゐる火を盛にして暖をさる。涼い程靜かな夜だ。總てが靜寂その物の中に眠つて居る。星の瞬く音すら聞こわさうだ、間も無く茶はあつく沸いた。ブランドーをおさしパンを喰ふ。そして語つた。山の話、スキーの話、こゝやつて焚火をかこんで話してゐるのも又我々にのみ與へられた樂園なのだ。火に當らない半面は益々冷へ切つて来るがそんな事は一向無頓着だ。或は横臥し或は踵座して話は依然盡きるを知らない。然し未だ夜明けまでには大分間もある事さてやがて又天幕に潜り込んだ。

鍾から三田平へ

十八日 随分睡たかつたし又眠らうと努力したのだが冷へるので殆ど一睡も寝れなかつた。寝られぬまゝに早くから用意し出したのだが暖い焚火の側が暖かかねて仲々持たない。それにキヤムプの後仕末は流石に時間も食ふ。出發はやはり六時半になつてしまつた。意外に遅れたものだ。未だ朝早いので雪が硬くアイゼンが氣持よくさゝる。正面の雪の隆起を受ける。部分的に相當急な斜面がある。出来るだけリッジ通りに緩急の縁にそつて二三度之を繞りながら進んだ。例外なく尾根通しは傾斜はゆるく少しそれる二箇所はグツと急だ、出發が豫期程早くなかつたので早くも鰐が直射し始め雪が融く程早くゆるんで来た。猛烈にもぐり出す。だが一時間程で鉛直下の獨立した大きなピーク、その下は大きくカーブして居る處に來た。

昔日あれ程冠氏一行を悩ました所の藪や丈餘にも及んで殆どその進行を遮つた假松も今は殆ど積雪の下にうすもれて到底その暴風を振へるべくもない。この先劍峰下の岩壁の下にこそ氏等が最後の野營をされたのであらう。氏は物見にやつた人夫の成功に早くも明日の勝利を確信され心は爲に躍つてまごころかななる夢も幾度か破られた事であらう。小隊の頭から南に走つた山稜には、その南面には一片の雪だに附けて居らず物凄い地肌をその儘表して居る。石が池の谷へさき落す。劍の頂が鼻の先につつ立つて居る。距離にしたつていくらもない。だがこれからが愈々なのだ。二、三ヶ所グツと傾斜の強い岩場がある。これの登りには少々悩まされた。ピークを二つ越越すて次は鰐ヶ峰前へ走る尾根の直直の登りだ。愈々最後の奮闘だ。急なルンゼを登る。氷の上に雪をのせて居るので足場が悪い。ステップを切る。

來た。遂に來た。メインリッジのコル、劍の頂から少し下鰐ヶ峰前の方へよつた、平蔵の頭より大分上に着いた。三田平の小屋が黒い點となつて其の存在を示して居る。すぐ眼前の鰐の平蔵側からは盛に小さな雪崩が出て居る。ごく小さい物だが局所に頻繁だ。由蔵は雲の都合もあるので一足先に小屋へやり三人は頂上に行く、十分餘の行程だ。頂は全部完全に雪で覆はれて居て三角標の上に立つて居る棒の上部が出てゐるばかりだ。曇つては居るが眺望は相當きく。眼前の立山本峰そしてその後方遙かに槍ヶ岳高その右には長大な笠ヶ嶺大山系が相連つて居る。源治郎も八ツ峰も未だ完全に白い。八ツ峰の小さく並んだ所はまるでおもちゃだ。引き返して平蔵澤を下る。源治郎側のすこい雪崩は殆ど出てしまつて居る。鰐ヶ峰からは上から見へた様に小さいのが引きりなしにおちてゐる。源治郎寄りに下る。おちるにつれて下は谷一面猛烈なデブリだ。そのデブリ上にスキーを操るのだから無理な話、勿論面白い事はあるがやしない。遂に途中から脱いでしまつた。

鰐澤さの出合に着く。上から一時間半もかゝつて居る。全く話にならない。此處にもデブリの大きな堤防が出来て居る。

人の丈よりすつと高い。此處まで来る小屋に着いたやうな気がするが不足な睡眠、それに猛烈なアルバイト、それ等に疲勞し切つた體にはこの登りは考へただけでいやになる。フワフワフワと登る。二時間近くも費してやつと三田平に着いた。大分偏松の島が出来て居る。小屋には先によつた由緒が一人居るきりだ。つい二三日前までは幾つかのパーティーが居た。見へて附近一面に未だ新しいアイゼンの跡やスキーのシユブールが残つて居る。風つ先に、上げてあつた食糧を調べて見る。完全にある。之を無断使用した人があるさか、言ふので一時相當心配した。恐らく大丈夫ださなつて出発したものの幾分か氣配りだつたのだが之で一安心だ。小屋は中村高橋氏が目張しておいたお蔭で雪は少しも入つてゐないし暖かだ。それにストリップを使用するのでそれ程むくもいない。今日から我々のみで此處に生活するのだ。我々の楽しい山小屋の生活が始まるのだ。それを考へるさ馬鹿に嬉しい。

晴れた日の滞在

十九日 天氣は別に悪くはないがあれだけの激勞の後には今日は一日ゆつくりと休んで見たい。スキーの卒業記録の整理そんな事で一日全く過してしまつた。勿論之は或は無爲にノドたのだと言はれるかも知れない、がノビル事必ずしも悪くはない。僕はそう考へて居る。我々が山へ行く。その時活動的要素の主張せらるゝのに僕もさより異議はない。然しその事は靜的意味の否定の理由とはなり得ない。岩でもない雪でもない常闇の對象は何であらうと、我々が山に轉じて抱く異議は緊張さ富に死よりも鋭い風刺さそれは遂にないものにちがひない。そしてその要求され露される山行こそ實に意義深い物であらう。が然し、だからと言つて僕は香氣のび／＼したゆつくりした氣持で山に行く、山の氣分に浸る、その意義

と價值さを認めぬわけに行かないのだ。人間の欲するのには窮極に於て平和なのだ。如何なる叫び抗争も闘争も是の類には何等の光榮をも見出す事は出来ない。こゝに於て平和な山行き、平和な山の氣分を味はふ事、是、高唱するに値あるものと思ふ。この意味からして山小屋の生活は戰のノビル事すらも含めて僕は之を推奨する。従つて相當の理由あつての事ではあるがノビル事も時に必要とするなされる。こんな時にでもゆつくりと山を考へ山を眺る之は遂に意義深いものである。且愉快な事でもあらう。連日の吹雪の爲にさじ込められてゐるのは餘儀なくせしめらるゝ滞在である。さうではなくて、陽は明々で輝いて居り、風は靜かで従つて山も穏な時、その時にする滞在、小屋附近の散策に山の氣分に浸り山の靜け時のたつとも忘れて打ち興ずるのは味はわば味はふ程深い物がある様に思はれる。

池ノ平へ

二十日 朝六時半に小屋を出る。陽があたり出してから未だ間もないので、雪は氣持よくクラストしてゐてスキーは愉快に滑る。所用で時々停止すべく餘儀なくされたが長治郎までは面白く滑降出来た。が間もなく雪がゆるんで来た。それに相剋もなくなつて来たので風砂子溜あたりから滑りはすつと悪くなつた。デブリも少い。例の平蔵の所にあつた物以外には殆ど出て居ない。いつもはもつとある筈なのに、梯子溜出合の下で雪が割れかゝつて居るが立派なスノーブリッジが断つてゐて渡るのは難だ。この邊は例年われる様だ。二ノ俣に着く。岩小屋の上部と近藤岩の頭とがボツンと出て居る。岩小屋の尾根岩の上に覆掛ける。陽は暖だし風はないし全くのんびりとしてゐる。

序だから池ノ平へ行く。小屋との出合の先の左に大きくカーブする處にデブリが出て谷一ぱいを埋めてゐる。こゝにはい

つも出るらしい。然し左に少し高くまいて別にスキーを脱ぐ必要も無かつた。雪は大分ゆるんで居るがスキーだからモグル
臺はなく後滑りを感じてくれるだけに進行は反つて早い。傾斜もひどくないし夏の様に暑くないからとてもいい。平になる
所に雪座の名残がある。今も三尺程突出して居るのだからきだつたら減いだらう。左に掘んで壁の上に居る。池までは行か
ずにコースを左に尾根にさつて池ノ平山の前に登つて見る。大きくジツタツタを切つてゲンゲン登る。が急登つたと思
つても仲々固に着かぬ。案外ある。いやになつてしまつた。一休みする。後立山の山々が白鳥から針木まで連続して續い
て居るのが一時の中に入る。實に雄大な眺めだ。ハツ峰の三ノ窓側もまだベツトリ雪をついてゐて雄偉だ。喜氣を取るのが
主眼だつたので途中からだが居る事とする。下りのスキーは馬鹿にいい。朝の下りより傾斜がグツツあるので雪はすいぶん
しめつぽくなつて居るが面白く滑れる。尾根を左に、池の平の東端に着く。小屋は北の方約三分の一程露はれて居る。中は
勿論全部雪に閉ざされて居るが、開れば五月には充分使用出来やう。小屋部も未だ雪が随分ある。大分雪崩に荒らされては
居るがスキーは使へそうだ。

下りは断然早く二十分程で岩小屋まで、ほんの一滑りだ。岩の上で茶をわかつてノビる。日はボカボカと照つて實に暖か
だ。それに四方が聳立する山の爲に丁度屏風で囲まれた様な園子だから風は全く無く静かに實にいい気分だ。五月の強い光線は
雪に反射されて一層強くて容気に暖ころんで居る。顔がだるくなる程だ。實に気分がいい。近藤岩の下あたりで雪が切れて
水がドンドン流れて居る。三月は十字峠附近までスキーで下れるのに五月ではとても駄目だ。

食事を終へて歸途に就く。荷物は軽くなると静かに登つて行くので至つて楽だ。先日ここを——然も平蔵か
ら上なのだが——登つた時は全く別な所を行くやうだ。出合の上で腰を下して源治郎の一のフェースを観望する。全くス

ッキリしてゐる。互にやれやれと言ひ合つたが果して誰が最初にやるかしら。

小屋に歸つてしばらくして誰かが来た。麻生武治氏だ。夫一人をつれて、氏とは笹ヶ峰以来だ。長いスキーを持つて居
られる。彼等の類かいのさ較べて今更ながら長いのが驚く。小屋の中は遊客を迎へて一段と賑かになつた。スイスの
話、笹ヶ峰の話、表は更け行くが話は盡きない。氏の特徴ある口早な話調も反つて優しく感ぜられた。

室堂 登 越

二十一日 麻生氏等は朝へまで早朝から出かけられる。私達は今日の予定は室堂乗越行。馬鹿にのつくりしてゐる。八時
過ぎ出発する。御澤を登るのだ。未だ雪一面真白い。時刻は至つて遅いのに、雪がよく緊つて居るので靴の儘さん／＼登れ
る。随分のつくり歩いたし又途中幾度もなく振り返つては源治郎ハツ峰の眺望をやつたのだが別山乗越まで四十分餘だ。室
外時間がかつて居ないのは全く雪の硬いおかげだ。乗越からスキーを着ける。雪が一層堅いので滑りはとてもいい。雪鳥
澤の上を右にトラヴァースして間々御前から大日への尾根の南側を下る。痛快に下つて十五分足らずで乗越に着いた。

室堂の上に着いたら先で聲高く唄ふ。先日苦闘した早月尾根が微細なる點までよく見える。寒さにふるわて一夜を明かした
キヤムプ地なことも明瞭に描き出される。麻生氏等の頂上君の頭を見計らつて「ヤッホー」をさなる、が返事がない。ちと遠い
ので聞こぬのかと思つたが小屋に歸つて聞くと姿はもとより見えなかつたが聲はよく聞こえたその事だ。空はよく晴れて
居り山々の壯麗な姿は美しく輝いて居る。東の方、北から南に眞砂子から雄山への連山、そして鬼澤土の峯々が走つており
遙かその南方には積層、笠から槍までが見通せる。そして西方眼前には奥大日の山塊がぬつと聳へ立つて居り、その南には

彌陀ヶ原が廣く遠く西方にのびて居る。足下の地獄谷は噴煙々々として活動して居り朝風と共に臭い硫黄氣を薫らす。

充分楽しんでから引返す。雪がこてももぐるので懐松にそつてツツ通りに登り、盡きて雪を右にトラヴァスする。隅は暑い程掘りつけ足のもぐるのは愈々ひどい。剣ではない。朝の愉快さが思ひ出される。別山乗越から風直ぐ飛ばす。雪が柔かて全くスピードが出なかつたが流石に面白かつた。麻生氏等は弘法へ歸られる。小屋を出て見送る。明日ハツタをやらうと言ひ出し衆議一決。早飯を食つてすぐ寝た。

ハ ツ 峯

二十二日 午前零時起床する。今日こそ雪のハツタをやるのだ！言ひ知れぬ歡喜を感ずる。一時五十分小屋を出る。大して必要もないのでツツルキは持たぬ事にする。間の中でスキーを附けて静かに下る。温度の下り方が少し足りない様で、雪が軟かだいや軟か過ぎる。殆どトラストしてゐないのだ。當然堅がるべき時刻なのに何うした事だらう。危険は無いにしても先がつかないのは判りきつて居る。それにこゝでは今日の天氣が氣に懸る。引き返さうか、がそれでは餘りに心無い。斷然行く事とする。尤も駄目なればいつでもその時引き返せばいい。

長治郎澤出合に着いた。未だ風つづんだ。時計を見るのにすら困難を感ずる。此處にスキーをデボーしてアイゼンに換へ長次郎を登る。殆ど休まず然し歩調は断然のつくりだ。谷の底より見たハツタは遠い景観を沈黙の裡に眺まらせて居る。その峯々に登つた雪は仄かな鈍い光を放ち暗い岩の點を白物に映し陰影を落してゐる。第三峯直下の「軍艦」から第二、第三のツツルキにかけて登る事にする。傾斜が氣になる。板状雪崩の無い山は非常に硬い氷になつて居てアイゼンですら不安を感

ずる。ツツルキ下五十米程の所のシュルンドで休息する。ようやく隅が上つて峯々は朝日に輝き始めた。雪が不慮かでズル長がある。それにこの附近からスラブに乗つた雪なので傾度だ。慎重に行く。シュルンドが雪にかくれてゐて一、二度足をこられた。

第二峯と第三峯とのツツルキに着く。四時四十七分だ。小憩してアンザイレンする。此處から第一第二より引き返して第三峯まで行く事にする。オーダー・N・T。第二峯の第三峰に向つて居る側は雪がすつかり落ちてゐる。之を長治郎側に撥んで短いチュムエーを利用する。やがて懐松の處へ出、露出したスラブを登つて第二峰の頂に立つ。これから第一峰まですつとスノーリッジが無つて居る。しかも傾い文字通りのナイフエッジだ。それに東側は日に當つて已に雪が大部のゐる。頂上ツツに馬乗りになつて過るより他に方法はない。第一峰の登りは岩が多少露れてゐる。夏道通り懐松のある様に行く。頂に來た。未だ風強く雪に覆はれてゐて岩は僅く僅か露出してゐるだけだ。ちようど六時十五分。ツツルキから一時間餘だ。

愈々折返した。登路通りに下つて第一峰と第二峰の鞍部に來る。こゝからツツルキを付かず腹をまいた方が有利なので長治郎側の雪のフェームをトラヴァースして懐松の中に入り第二第三のツツルキに戻つた。第三峰の頂までは相当傾斜のあるスノーリッジだ。長治郎側はスラブでその中央部の雪は剥落してゐるのでリッジ傳ひに一步一步慎重に進む。第三峰と第四峰との間のピークは撥んで通つた。第四峰の下りは三喜側を通らねばならぬ。傾斜も急な上に手懸が少なくてビレーに困難だ。雪にかくれてシュルンドが二つ三つあり幸よくてよかつたが腹をはめこんだりした。第五峰の登りも三の喜側を然しなるべくリッジにそつて行く。東斜面なので隅が早くから當つて居り今は既に露つて居る上までももぐる。第五峰に着いて小憩する。六峰側のリッジはさても下りにくそうなので長治郎側の雪の斜面を下る。傾斜が強くて足が落ち附かぬ前に尻が着

く。それに雪がゆるんで居て一歩こまにするので慎重に、二人が確保してゐて一人死動いて下る。この爲うな時間を取られてしまつた。こゝの下りだけに一時間半もかかつて居る。

細の頂は既に露に覆はれてゐる。雪さびひ、天候さ言ひ全てのコンディションが良くないので残餘のピークは割愛して下らざるを得ぬ。長治郎は平蔵程デブリがないがそれだけ又よくもぐる。途中源治郎尾根から小さい雪崩があつた。十時四十分出合に着く。岩上に休んで茶をわかつ。アイゼンに疲れた足を勢つて漸時裏足になる。硯ヶ池尾根からも二三度小さい雪崩が落ちた。二時間程も休んで出發する。天候は益々悪くなつて、大きく左にカーブする邊から急に雨が来たビツチを上げる。小屋に着く頃から急々烈しくなつた。引續きやつて雪たひひさい目に遭つたのだ。心残りしたがやはり引き上げて来てよかつた。

五月末の雪

二十三日 朝起きるさ雪が降つて居る。昨夜から降り積つて居たさ見へて今朝は大部積つて居る。六月近くなつてこんなに降るさは珍しい。遠近くなるさ大部水つぽくなつた。寒に近い。

由蔵が有り合せの板片でスキーを作る。無聊を慰める爲だが一方には歸途我々のスキーに對抗しやうさ言ふのだ。二時間程して出来上つた。上等だ。充分使用に耐へやう。

夜に入り風も加り吹雪さなる。五月末さは思へぬ烈しさだ。寒い。

二十四日 雪は又積つた。小屋の前の吹き溜りには三尺餘も積つて居る。割けかけた前の屋根も又純白に粧はれた風は相

變らず強い。トタン屋根は猛烈な音を立てる。今にも吹きさばされるかと思はれる程だ。霧がひさい。スキーにすら出られない。駄べつたり。駄つたり。そして疲れば厭る。

二十五日 風は未だ収まらない。食糧がダンダン減つて来て今日も駄目ださ小屋の米を使用せねばならぬ。然し余な事に七時頃から風も大部鎮まつた。この調子ださやがては天氣も良くなるだらう。手早く後仕末をして出發する。小屋は白く化粧され氷柱に美しく飾られて居る。八ヶ峰も源治郎も多少岩が露はれて居たのに、又真白く包まれてしまつた。八時半出發する。霧がひさい。それに風も未だ強い事強いこと。この吹雪にやられて乗越附近には無數の小鳥が死んで居る。石ころか何かの様に散らばつて居るのが皆死んだ小鳥なのだ。こんなにも多く一時にやられたのは未だ見た事がない。雷鳥澤を真すぐ下る。中途からスキーを附けた。氣持よく滑る。室堂への登りは短いがいつ来てもつらい。室堂から下は雪がさても悪くなつて居る。少しも滑らない。それに自分の少し上から雨が来た。弘法には會社員風の人が二人。こゝまでスキーに来る様になつたのだから時勢の力は恐しい。雪はブナから下は全くない。連日の雪もこの邊から下は全く雨だつたらしい。雪解けのグチャ／＼な道を下るので些か難る。僕はスキー靴なので難更らだ。鹿橋からの平な、長々とした道はいやだつた。がそれだけ狼狽に着いた時は嬉しかつた。そして全く家に歸り着いた様な落着いた氣持になれた。

雪崩に就いて——譯章——

伊 藤 愿

Von den Lawnen

ZSIGMONDY-PAULCKE „Die Gefahren der Alpen“

雪の山、氷の山——冬期 mountain!

“萬年雪”の御城、冬には山間の平地迄も雪で埋め盡されたアルペン。

これは山のいろ／＼な現象である。

様子は異なれども皆、夫々の美しきを具へてゐる。

高い山岳の雪や氷の屯する領域は既に長き以前よりして夏に於ては登山者の行かんざした處であつた。夕べには暖かい薄曇が反映し、夜には月光の下に蒼白く閃めき、日中には陽光に華やかに輝く、美はしいファルンは登山者を上へへ誘惑する。その爲めに恐ろしい氷の山も人をして危険の念を去らしめ、又人達は其の恐ろしきに打ち克つ事を學び、その美しさを愛で、危険を制する様になる。

冬期に於ける山岳の様子は變つてしまふ。アルペンの牛飼や羊飼が平地に下つて終ふ頃になる。アルペンの村々では人々家事は冬こもりをする。アルプ小舎や牧場には風が暴れ狂ひ、山の頂や尾根には雨風が吹き荒さぶ。するところは都の人達——登山者だけが取り残されて終ふ。

約二世紀以前には只旅人のみが雪道を穿いて舞れ舞い冬の旅をしただけであつた。それは恰かも多人数の案内者の隊で、山を攻關する云ふやうな恰好をしたものだつた。斯うして漸の雪の中に道があげられるのだ。だから高地の旅行は非常なる冒険で等しいものであつた。

今では冬山に雪はスキーロイプアーに取つての運動場となつた。我々は雪に對する恐怖を失つて了つた。アルペンの冬はその秘密を、従つてその危険性の一部を失つた。我々の力は絶えず冬を征服しようとした。然し未だ何と云つてもその危険は残つてゐる。その内最も大なる最も厳重なるものは雪崩(Die Lawine, Lawine, Laue)である。

雪崩の根本的な優れた研究として J. Coen の “スイスアルペンに於ける雪崩”(ベルン。一八八一年版)と “スイスアルペンに於ける雪崩の統計とその預防”(ベルン。一八八〇年版)がある。然し Coen の研究には創論、材料の處理方法や、冬期の雪山に於て人間の——況んや登山者の——態度に關しての多くの細目に就いては述べてない。

“底雪崩”(Grundlawnen)に就いては Streicher & S. A. C. 年報一八九九年及び一九〇一年に詳しい研究をのせてゐる。

雪崩の危険云ふものは以前には殆んど輕視されてゐた。之れは雪崩の危険云ふ事をあまり聞かされなかつたからであらう。私も約二十五年程以前には殆んど聞いた事がなかつた。登山家とスキー家とはその特殊な事情からして雪崩の危

險を最つ先に知つた。二三の觀察より一般的の事項に立脚してかなり詳しく議論されて、雪中や冬の氷河の上の旅行者に取つては必須事項となつたが、まだアルペンの記録に於ては此の事にあまり注意が拂はれてゐなかつた。アルペンの文獻に於ては雪崩の危険は極く間略に、殆んど正確さ云つてよい位に取り扱はれ、D. u. O. a. R. (獨逸山岳會)一九〇八年の記事に於てすら F. Frech は雪崩を「アルペンの危險」(Gefahren der Alpen)の第四版の記事に依つて、文獻に依つて得た甚だ曖昧なる智識を以つて、宛も事實の如く取り扱つてゐる。

雪崩の生成は種々の事情と關係を有してゐる。就中、雪の積る土地の地勢、傾斜、積雪の高さ、(壓力)や雪の状態、以上に重大な關係を持つてゐる。

雪は自身の重量と壓力とが地面の摩擦抵抗に打ち勝つた時滑走し流動する。更に外部から齎らされた擾亂がその支持物と關係を破る場合(特に斜面に横の、深いシュプール等)や又、些細な一寸した原因が雪の表面の壓力を突然に破る場合に甚だしい。此の理由からして Cremona が、地面の状態が重要な要素だとして主張してゐたのは當を得てゐる。注意すべき程の多量の雪量がたまらない程の峭しい状態の岩山は雪崩の生成に適さない。岩塊とか灌木、樹木、特に森林等は雪崩の生成を助ける。之等は雪量の壓力に對して多くの抵抗をなすからである。

層を成した岩石の處では斜面の傾斜が全體的に僅かな場合には地層の表面の、層を成した側(auf den Seiten des Schicht-senkales)はその層の頭側(auf dem Seiten der Schichtköpfe)よりも一層雪崩を起し易い。

風化し易い雪母片岩や Flyschon 片岩の様な岩石は雪崩の生成(特に獨逸雪崩(Nasse Firnschneelawinen))には堅い岩石よりも好都合である。

最も危險なるは、以前氷河に蔽はれてゐた爲めに、その岩が固く滑めらかに磨かれてゐる、谷に隔んだ岩地の傾斜面である。斯う云ふ處では少しの重量の積雪があつても真直に滑り出して人間を獲ふ程の雪崩となつて谷へ落ちるのである。多くのアルペンの谷は昔には高く迄その谷の斜面を氷河で蔽はれてゐたのでその岩の多い側面はその爲めに多く、丸く滑らかにされてゐる場合が多い。それで高い山の谷に於てその上部に森林の少ない地域等は雪崩に就いて、大なる注意を拂はねばならぬ。特に谷歩きの場合には谷間の平地の殆んど無い處や又は、その狭い處は大なる危險が起り得るのである。(第二圖)峭しい草地の斜面——特に牧場とかアルペン地域——は降り積んだ雪の加はつた雪には大變滑らかな滑走面である。であるからこんな處は第一の雪崩區域である。

尚又、草が刈られないで長い草の情が恰かも葎屋根の様に谷の方へ靡いてゐる處なきは特にそうである。

雪が必ず雪崩となつて落ちる斜面の正確な傾斜角度を決める事は不可能である之れには素より、種々なる地形の複雑な状態とか、積雪の雪の壓力とか、斜面に於ける雪塊の表面の壓力とか其他多くの事が影響を及ぼしてゐる。私は以前、二十四度以上の傾斜を有する斜面は雪崩の危險があり得ることを述べた。

此の限界は略ぼ一般の標準となり得る。勿論滑らかな岩とか草とか雪の上とか云ふ様な状態では是れよりも少し傾斜でも雪の滑落が充分起るのである。

極限を示す云ふ事は一寸困難な事であるが二十四度の傾斜ではもう雪崩の生成が觀察され、或る處では二十二度であるから峻険な場所では常に注意が必要である。

山腹の段々平や又は斜面に作つた通路等は斜面に於ける平等な雪の壓力を破壊し、その初期成は支持點となり、従つて雪

崩の生成を妨げる作用をするものである。例へば、雪の表面にそれ露わられる限りには、通風の外面は斜面に於ける比較的安安全な道を示してゐるわけであるが、又道路が斜面に刻してゐる場合は之は何等の防壁となつてくれずに、却つて上部の雪がこはれる云ふ危険である。

一般に云へば、雪崩の危険はそんなに範囲の廣く、きこにでもある云ふものではなく、高々、部分的にあるものであつて、峭しい懸谷 (Crevasse) 等とその危険があるのであつて、土地の小さい凸凹、大きな岩塊、低い灌木等が外観に出て見わたる限りは大丈夫である。すべてその上層や凸凹や、小さい崩潰が全く此の積つた雪量に依つて平均されて終つてゐる時には廣い範囲に亘つて雪崩がある事がある。

雪崩を論ずるに際して只雪の表面の状態のみを考へてはならない。常に横断面に就いて考へる事が必要である。(第一、第二圖) 何となれば堅固な底地面の傾斜状態や種々な雪質の積り具合等が決定的な重要性を有してゐるからである。

雪の作用する巨大な壓力に就いては大抵の人は正しい觀念を有してゐない。多くの實例に就いて、又屋根の上の積雪に就いての研究を *Dr. Peter* 技師や、最近には *W. H. D. Jones* 技師がなしてゐる。新しく降つた雪の重量は一立方メートルに就いて六十噸乃至八十噸、即ち比重は〇・〇六乃至〇・〇八である。

その雪が落ちついた時には一立方メートルが二百噸乃至三百噸である。(氷は一立方メートルが九百噸である) 圓塊をした雪は五百乃至六百噸。水分を飽和した雪は三百噸である。故に六十乃至八十噸程積つた雪量からは一平方メートルに就いて三百六十乃至四百八十噸の積雪の重量をその底地面の水平投影上に與へてゐる事となる。

此の重量を記憶して置れば二十乃至四十噸の深さの雪が峭しい傾斜にあつて滑走した場合如何に大なる破壊力となるかを

知りそれの人に及ぼす偉大な威力に驚くであらう。之の故に又低い積雪にあつても廣い滑らかな急な傾斜の斜面に於ては充分な注意を必要とする。

以上述べた重要な數字の一定せないで相違のあるのは先に述べられた如く、雪の状態が雪崩の生成にあつて重大な役割をなしてゐる云ふ事に重大な關係を有してゐる。

場合に依つては天候報告から直接に雪の比重を讀み出しするのである。例へば測候所の報告に「スイスの Grindelwald 山の五十二種の新雪、降水量 (Neuschneehöhe) 八十噸の水柱。さうする雪の比重は八種：五十二種：〇・一五四即ち氷(乾)ではない」で測つた水柱の高さを測つた。雪の高さに依つて測つた出された氷が直ちに雪の比重を示すのである。(Rutten)

天候報告が新雪に就き比重〇・〇六乃至〇・一五を示す時には大抵の状態に於て、多少とも強い雪崩の危険を豫定しなければならぬ。

文献に現れた雪崩の名稱は雪崩の特色で、雪か又は一般に起る状態とかで名を付けられてゐた。最も著名なのは底雪崩 (Grundlawine) 底雪崩 (Grundlawine) 又兩者の中間に位する一種で所謂 *Speicher* が底雪崩 (Grundlawine) と名付ける名稱等がある。故に、私は雪の性質に依つて一般に使用せられる雪崩の分類をしよう。此の分類法は疑ひもなく最も自然的なものである。そして此の分類法に依れば第一に雪崩の生成に於て問題となる雪の重要な性質が記述される。他の名稱は然し、その名前に於て幾分その重要な特性を説くはするが、然し又その成部分は破壊に依つて名付けられるのであつて、主として一般にはその現象に依るものではない。

斯く名稱の色々ある云ふ事は一般の事に於けると同様に、素より又雪崩の現象の種々な形式の中に於てもあるものである。

私はそれに従つて分類する。

一、新雪雪崩

a、乾燥新雪雪崩——塵雪崩、一部分雪は 0° の所謂上層雪崩

b、潤潤新雪雪崩——*Spreading* の所謂塵底雪崩、一部分は 0° の所謂上層雪崩

二、舊雪雪崩

濡れたフイルン雪崩——*Coars* の所謂底雪崩

三、新雪雪崩

a、乾燥新雪雪崩 (*avalanche froide* — *dry* — *havin da froid* — *dry* — *avalanche de pousière*, *avalanche venue par la base* 「北風」) 我々は主に従来の著者の云ふ處の塵雪崩を指すのである。

雪質——乾燥した、粉狀の、塵狀の、細砂狀の、空気を多く含んだもの、疎なるもの、比重が 0.6 乃至 0.7 のもの、雪塊中にあつて甚だ内部摩擦少きもの、個々の雪片が甚だ動揺し易きもの、雪塊が出来ないもの、その塊が覆るやかに積んでゐるもの。

乾燥せる雪にあつては比重に於て 0.6 、 0.7 を越ゆると内部の摩擦が増大し従つて各部分の動揺は減少する。

準備條件——寒冷に於ける降雪乃至は大雪又は降雪後急激な寒冷の到来及、び寒冷の持續。

雪崩の通過する道が短く、底地面の傾斜の鋭い時には雪崩は殆んど塵の如く立ち昇らない。状態に依つては初めの時期に於て既にただ雪の崩壊として終つて了ふ。塵雪が長ければ長い程、雪は立ち昇る。急傾斜の塵雪崩に於ては殆んど全部の雪が空中に塵の如く立ち昇るそれは塵雪の如く谷に落下し、深い谷は状態に依つては落下する雪の爲めに底地面を擾亂される事がある。底に到達する塊は立ち昇る雪の塊は崩壊する雪量や又塵雪個所の峭しさと長さに關係する。

非常に峭しい斜面では全雪量が空中に飛散する事もある。然し乍ら、就中斯かる個所での塵雪に依つて惹起される雪崩は迅速で、屢々強い空氣の壓力を先行させるものであつて之は破壊力を有してゐる。家を吹き上げたり、向ひ側の森を全部倒したりする。

乾燥新雪雪崩は「塵雪崩」としては雪崩の中で最も破壊力の甚だしいものである。之れは冬期の雪崩の中で最も著名なものであり、又感かも高い地方に於ては如何なる季節にでも——素より寒い氣象に於て起き得べきものである。

永續せる寒冷時に猶大にあつて、多量の新雪の降つた後には乾燥新雪崩の危険が、比較的長く存在する。雪が落ち付いた時 (比重 0.6 、 0.7 乃至 0.8) 漸くその危険が減少する。

乾燥新雪崩の中には又雪層 (*Schneeschicht*) の雪板 (*Schneebrette*) が含まれてゐる。

Schneeschicht は山の地表面に積つてゐる雪の表面の變化と同様に風に依つて非常に重要な作用が行はれ影響を蒙る。

風的作用は雪崩の生成に就いて就中乾燥、新雪雪崩の生成に就いては特殊な甚だしい影響を與へるものである。

又雪層は一般に大抵風に支配される云ふ事は注意すべき事である。

高山に於ては、風の靜かな天候に於て雪の降る事は稀である。風が雪片を吹き上げ、又は降雪後、積雪を峰や尾根に吹き

溜まらせるのである。

風流には軽い雪が多量に吹き溜る。

氷河の *メロ* の窪みは上記の雪の大なる供給所である。風上は常に風が吹いてるのでピツクルやシュタイグアイゼンを使用して通過する事が出来るが、一方、反対の風流の側には多量の雪塊が積つてゐる、だから此處は甚だ大なる雪崩の危険が存在し又、雪崩が起り得るのである。勿論長い間新雪が降らなかつたら此の限りではない。此の事は大小を問はず大山脈でも一寸した尾根でも同様である。

既に、谷の多少とも高低ある *サッセル* や谷の狭割 *ワグネル* (又は溪流の傾斜等) の交錯斜面の種々な地形は必ず尾根や

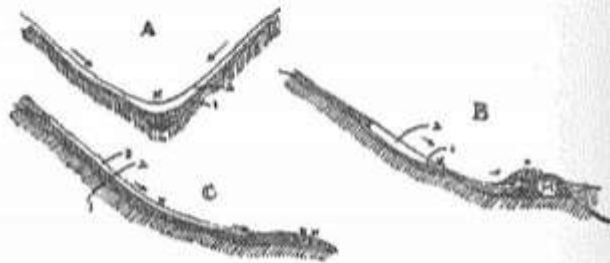
谷の風流に於ける個所に、人間を危険に曝す處の雪崩の崩壊を感起する可能性のある積雪の塊を積もらせてゐる。

谷があまり大きくて風がその内部から發生したり、又屢々主方向から外れる種な處では斯かる危険地帯の判定は大體困難である。

こに角、斯かる積雪の塊は風の具合に従つて斜面に於ける部分的な區割や裂目を作り、又大なる頂上線の全體の風流線の割然たる限界を示してゐる。

全斜面が斯くの如き積雪で蔽はれてゐたら此れは略ぼ、雪崩の危険が存在する云つて良い。又斜面の小さい *マール* や、尾根の下小さい間割、又は尾根の間隙等にこの種な積雪が部分的に割然と積つてゐたら *Gallen, Garmachner* (風による吹雪) や、又は雪層 *Schneeschicht* に就いての問題を考へなくてはならぬ。

我々は現在行はれてゐる如上の名稱から最後の名稱を採用するそして此れを此の特別な形成に於てのみその名稱を使用せ



第一圖 雪層 Schneeschicht の堆積個所最も危險な積雪個處

んと思ふ。

素よりその雪層 *Schneeschicht* はその後、風や天候に左右せられる事は斜面の部分と同様である。その部分的に限られた状態に依つては之は危険性を帯びる。特に軽い一面に新雪が全體を埋め盡してゐたり、又又つた天候で斜面の形成をよく判明する事の出来ない時等には最も危險である。こんな時にはさう安全な雪の處から突然危險な領域に踏み込むものである。特に風流に於ては峭しい場處はすべて氣を付けるべきである。斯かる場處では部分的に、山脊や尾根の下に深い、非常に大なる雪の堆積が存在する事がある。又一般に斜面にあつては常に斯かる場處——(上圖を見よ)——一般的に、或は部分的に峭しい傾斜を有してゐる處、特に上下が非常な傾斜のおち込みをしてゐる場處——に注意しなければならぬ——破壊性の *Sturzhang* を有してゐる場處に就いての記載参照。

長い、風流の形をしてゐる積雪は屢々、上天氣であるにもかゝらず尾根や山頂に吹き付けられる。割かる日に山の風流を通過したり、又は山へ行つたりするのは周到な注意を以つて、たゞへ上天氣であつても氣を付けなければならぬ。又斯かる現象の無くなつた後でも、風流に於ては危險が過ぎ去るには

長い期間を要する。

特別な地の生成を私は数年前雪原 *Glacis* と名付けた。この名稱は一部は私の用ひた意味に於て、又一部は異なつた意味に於て、一八九九年以後の季刊の文獻に於て重大な役割をなしてゐる。

第二圖



Schneebrett は上述の *Schneehild* とは多く性質の種類に依り、又特に雪質に依つて區別される。

Schneebrett はその厚い、微細粒の層で、明瞭な生灰白色の鈍い外觀をしてゐて、その附近の雪層と階界が出来てゐる。

その表層は大概滑らかで平坦で、時には多しく波立ち、又は平坦な傷痕のある事もあり、その硬度は、殆んそ足が中へ

浸しない程の硬さのものである。

平坦に底地面の上に置いてゐる層の強さは大變異なつたものがある。概して、古いファイル化した、強い白色のかほりに青くに光り出る基礎の上に直接に *Schneebrett* が置き、時には又表面のタルスタのうがその縁になつてゐる雪の上に風に

依つて堅く押し付けられてゐる。之は勿論岩や芝地等の上にも重り合つて置いてゐる事がある。板 *Platte* なる名稱は、表面のプレート板状をなした硬い状態を、基礎地面上のプレート状の被覆を指して云ふべきである。

私の考に依れば此の雪の生成は風に依つて作られる。——*Schneebrett* はだから決して *Schneehild* の様に完全な風落に出来るものではなく、屢々山脊や山麓の下近くの斜面で風が吹雪をそこに部分的にはけしく吹き付ける場所に出来る。

私は、風の *Schneebrett* の出来る確定的な原因として、暖たかきや、太陽光線等を考へる事は出来ない。何となれば此の種の影響は雪のファイル化に効果があるので、即ち氷質の粒状のタルスタを形成する。*Schneebrett* は降雪に依はれた斜面の一部が、後に風能に依つて表面がプレート状に硬くなつた時には、それは（部分的には降雪のその中間層をなして）其基礎面に於いて堅き連結をせずに終つてしまふ。だから此れは一種特殊な *Schneebrett* となる。即ち踏んだ時には破壊し、その間隙が反状の崩壊した表面の下を丁度秒時計の砂の様に流動する。一方硬い表面をなしてゐる氷塊は同時に滑り出す。

Schneebrett の現象に於ては、雪が固くではない傷の硬さを示して人を陥着する危険がある。*Schneebrett* の上に人がその重力を加へるか、又は鋭いスキーの角で表面を切られる *Platte* は突然一種の陥着（地の鳴に似たる言）を發し、又は鈍い爆音を立て、沈下するものである。内部にその支持する物を有してゐない、又よく穹窿状の空處になつてゐる *Platte* では張力が無くなるに飛散して角のある氷塊に破壊し、その氷塊は滑走し積み重なり合つて全雪量が谷へ落下する。又斜面の状態に依つてはその氷塊が支へられて止る事もある——又は互に砕き潰され又は粉微塵になり、乾燥雪（薄雪）となつて谷に崩壊する。此の種の雪原の生成に對しては充分な注意を向ける事は困難である。ピッケルで探りを入れる事、増

の部分で小さい鋭い飛躍をなす事に依つて、破壊した氷塊が飛ぶ事は、明白な警戒せなければならぬ兆である。

雪の堆積が著しく鈍い。鳩の鳴き聲の様な騒音が聞かれる時には出来るだけ早く *break* の領域から逃れる様に試みなければならぬ。屢々この音を聞いた時にはそれはもう遅いのであるが！

特に、*Schneebrett* に似たものは如何なるものであつても、それを下方から踏むのを避けよ。そして斯かる場合には縁端から揺りをせよ、ビツクルで古雪の基礎面迄も深く突き刺す事、そして確保は時には救助の後立に立つものである。

b、過潤新雪層の *break* の底層雪層を私は斯く稱す。(一部分に於ては雪層が崩の基底より崩壊しない時には *Crust* の稱する底雪層。又一部分的には *Crust* の上層雪層と等しい。)

雪質：過つて、重く、濡れたものも含まれる。(過潤新雪層雪)雪は容易に球状となり、比較的迅速に落着する。

降着条件：高湿度に於ける新降雪(乾燥雪)又は新雪の降つた後に、雨や暖かい気温、又は強い太陽光線等が到来する事。

上述の性質の雪の堆積が崩れる時には、大變烈しい崩壊にあつても高々表面の堆積が飛散しそして底雪層として谷に墜落するのみである。尚ほ、深くの堆積は直ちに塊状として丁度底雪層の様に谷に落ちて行く。底層に於ける流動は(摩擦が増加する範囲内に於ては)雪層の表面と中央部に於ける流動よりも緩慢である。故により高い部分はより低い部分よりも流動が烈しい。常に過潤新雪は乾燥雪よりも大變容易にかたまるものである。

過潤新雪層雪は新雪の降つた後の暖かい天候 *break* (フエーン)に依つて起る雪崩で、太陽光線の強く射す事に依つて新雪が積つた斜面に起る雪崩である。之は亦冬に於ても起るが然し比較的稀である。——殊に之は春に起るものである。

そして又夏期に於ける降雪後に於ける著しい現象である。(註、之の書は歐洲アルプス特に *Hoch-Alpen* に就いて論ぜられてゐるので夏期の降雪に就いての項も加へてあるのである。日本に於ては勿論斯る夏の降雪が起る事は殆んどない云つてよからう。)あまり急傾斜でない雪層の稜路道や距離の短い道では殆んど雪は飛散しない。若し飛散してもほんの僅かである。此の種の雪層が崩れると過潤雪は強固に凝集し壓力を加へて来る。そして部分的凍結の現象が生ずる(復氷現象)此の雪層に依つて此の中へ閉ぢ込められた鋼は丁度石で堅く固こまれた様になり、鋼力でこれから逃れ出す事は不可能である。

素より此の雪層と乾燥雪層との間には多くの中間性のある事はある事である。

二、新雪層雪：濡れたフィルム雪層は従来の著者の云ふ所の底雪層である。(avalanche calda, valanga da chiod, avalanche de fond, avalanche venue par le vent「南風」)又方言では *Schlingawine* 又は *Schlawawine* (共に打撃の意)と云はれるものである。

雪質：濡れた、より重い、密集して降つて来た、粒状にフィルム化した新雪。

崩壊の降着条件：新雪なる事。暖かい天候、フエーン *break*、雨、又は強い太陽光線の射す事。

雪に於て殊に著しい此の雪層に於ては、雪融けの時、フィルム粒が流動を起し、融水が滑溜となる。又、もうこれ以上微細にならない位に迄なつてフィルム粒の間に含まれてゐた水分は土地に滴り落ちて、地熱で溶融して雪塊を下へ曳きづる作用をする。最下層にある粒状のフィルム層は、鹽分を含んだ柔らかい底が滑らかなものとなる。

雪が積る毎にその下積では水分が滲み出て空腐さなり遂に保ち切れなくなる。全堆積が雪降は崩壊し、自身の重量に依つ

て騒音を發し最初は全體が流動運動を起す。の堆積は塊となり丁度雪の積び玉となる。此れは全體の内部の一部のみが轉動するので、一方全堆積の方は流動の狀態となりて谷へ落ちるのである。この落ちたフィールン雪崩は深い斜面に於ても出る事があり、又雪崩が雪崩を伴ひ乍ら落下する事も稀ではない。特に此の種の雪崩は丁度、枝狀に分枝してゐる漏斗狀の集合區域を有してゐる溪谷の割目 (Gullies) と關係がある。(參照第二圖) この雪崩は大變正確に春、定期に出るものである。此の種の雪崩に對しては、大體の見當で集合區域を閉塞する事や又はトシネル工事等をして防ぐ事が出来る。

此の雪崩は大抵、その出る場處に適合したトール (Toll) や溪流の割目の名前をつけられてゐる。此の雪崩は、融いた砂と石と樹、枝等に依つて堅く作り上げられた、又汚れた、且つ堰き止められたりしてよく重ねられた團塊となりて落ち谷に至つて初めて止まるものである。又此の雪崩は屢々、河や流を堰き止める。そしてその残骸は屢々猶ほ下流に於て迄も日漸の處であれば狭い谷に残つてゐる事がある。雪崩の (avalanche) として殘留する事も稀ではない。河流はその下に通道を穿つて流れてゐる。登山者にとつて此の種の雪崩は最も危険率の少ないものである。例へば此れの出るのは天候の狀態場處等に依つて最も容易に判斷する事が出来る。之の防禦法としては——雪崩の集合區域や、或は懸谷 (Knick) に踏み入らない事、又入つても各人が一人宛迅速に横切る事である。

流れに枝せる日數の経つた古い雪崩で出来た橋 (Firn-bridge) は非常なる注意を以つて、ピッケルで充分な押りをして踏むべきである。斯かる橋の破壊は大變危険である。斯かる事故に遭つて奔流に落ちて溺死した云ふ例もある。

登山者にとつて最も危険なのは新雪雪崩である。そしてそれには次の事が大變重要性を有してゐる。——天候の狀態 (溫度等) が降雪前、降雪中又は後、雪崩の生成に對して非常に重大性を有してゐる。(だから旅行當日の天候のみを考へても不十分なのである)

狭いフィールン雪の上や雪の凍つた面の上に雨の後には雪が降り(大なる雪片)又は暖たかい天候にあつて過潤雪の降るのが續き、そして此の上に漸次に寒冷が襲來すると、雪の狀態は遂に堅く凍結してその基礎地面と堅固な結合をなすに至る。こうなれば急に滑り出す危険は減ぜられ、又少量の積雪では危険はさう大ではない。

斯かる大なる雪片の降雪後、溫度が高いとか、又は新雪の降つた後、暖たかい天候が襲來するとかすると雪は重くなり、(參照第三圖) 地面は遂に滑らかになる。傾斜の増加と雪の重量の膨脹と共に過潤雪雪崩の危険が起つて来る。(特に春と夏とは午前十時から午後四時迄の晝の時間の太陽の照りつけが急激に雪崩を惹起する。そして二三日後にもなれば大なる危険は去る。上記に依つて墜落しない殘留してゐる雪は落ち着いて基礎と共に凍結してしまふ。

寒冷なる天候に於て微細なる雪片、又は小さい結晶をなした乾燥雪 (ガラス狀等の) が凍つた地面とか、乾いた岩とか、氷又は硬雪の基礎面等に降る時には摩擦抵抗は非常に小さい——遂に積み重なつた雪は容易に自身でそして又全體が滑走に陥る——寒冷が氷積する天候に於ては新雪の降つた後尙ほ數日の間粉雪が存在し、そしてそれ故に乾燥雪の雪崩の危險が存在する。(參照四、風に依る移動。) 一般に雪は二日乃至三日後に落ち着くものである。

雪自身は冬期の間を通じて起り来る種々なる場合に遭遇しそれに依つて表層組織を變化させられ、又滑走面もその生成を非常に助長せられる。深さは時日と共に増々深くなり、斜面の勾配の凹凸は平坦にされる。例へば道路の切り取り等は全く

なくなる。(3、参照)そして平均な雪の傾斜した斜面が出来上る。切り取り斜面を作る云ふ事は云はゞ多くの雪が積る平均な平地と同一結果である。高處から、脊や尾根から低い處に風が雪を運ぶ。峭しく傾斜した斜面からは堆積が下へ流動し、滑り、より少く傾斜した斜面に積みかさなる。

峭しい Ridge でも階段状をしてゐる凹凸のあるものに於ては——*gullies* が詳細してゐる處に依る——最初の小さい雪崩は雪に滑り落ちるこゝ、その雪崩は大概その懸谷 *gullies* の下端までは達しない。上部の方の階段の凹みの所には雪崩の雪が山の方へ矢つた堅く壓縮された雪崩の圓錐形として堆積する。之の作用に依つて陸路道は短縮されその道の凹凸は平坦にされる。それだから後に此の道を滑る雪崩は平坦にされた滑らかな陸路道を深く行進し落ち行くのである。

此の理由からして晩冬に於ては層々多く何回もあつた降雪後、斜面や山腹の裂目等は特に雪崩の危険があり、初冬に於けると同様危険は存在してゐる。(参照第二圖)

迅速な連續的の降雪が明瞭にあつて異なつた張力を有してゐる積雪の層が上へ上へ積み重なつて、然かもそれ等の層ご層ごの硬き凍結が起らない時には雪が滑り出す危険がある。

暖かい気温又は一寸の雨の時に積雪を非常に硬いフィルム状の雪にしてしまつた場合、又は太陽の光線が堅い硬雪フィルムを生じさせた場合(山に於て、輝いた反射する面が出来た場合)、又は風が表面を硬化させて、其處に新雪が降つた場合、等には滑り出す危険が甚だしい。

雪崩の危険は斜度廣く範圍に、特に風説の側に於て、又は唯だ一部分だけ阻まれて太陽の當る面、又或つて新雪の降る以前に風壓に依つて押へ付けられた斜面の領域等に存在するものである。

亦、表層の硬くなつたフィルム状の下でより疎な、砂狀の雪がしまつて風が減りフィルムはその下が空處となり、重量が加はるゝ、破壊してそれは延いて全層の崩壊を惹起する。

各層のフィルム化の程度如何及び硬雪フィルム層の厚さ如何は別來する天候の影響に左右されるものであつて、天候の永続期間の長短、その強弱の程度に依るのである。兎も角も冬の間の間、種々な條件の下に、非常に變化のある雪の堆積が互に層を形成する。その層は層々、堅い結合の無い強んだ重なりをなしてゐる事がある。此れは表層が破壊される時に異なつた層を雪崩として崩壊させる事が稀でない。又狀態に依つては、壓縮に依つて又は漏出する雪融水に依つて新なる種々な異なつた層を互に沈下させて凍結させる事もある。疎なる雪の堆積を氷の膜に滑らかな平面にする變化が起りければ烈しい程度種は積層面に於いてより容易に消滅する事となる。ピクナルや杖で掘りをやつて或程度迄知る事が出来る。そして又雪の結合狀態を出来るだけ正確に調べる云ふ事は登山者及びスキーロープアークの義務である。唯表層のみの觀察ではいけない、必ず横断面に於て堆積狀態の様子を観察し、そして降雪中の如何なる天候の狀態、及び中間の天候の狀態が如何に作用するか云ふ事を知らなければならぬ。

之の根據からして、正視の場合に就いて云へば雪崩の危険は、冬の初めの従つて非常に積る降雪の以前よりも、晩冬と初春の即ち降雪の最も多い時期に一般に大である云ふ事が出来る。

雪崩云ふものは總じて、大なる雪の堆積となつて、大なる雪を伴つて、鋭い、廣い、多くは彎曲して破壊表面を以つて破壊するものである。

流動運動は、初めはまだ結合してゐる堆積の滑走が基礎の上で起るのであつて、そしてその次に雪や陸路道の狀態に依つ

て獲々な方法——飛散したり、轉がつたりして——で戻つて行はれる。

雪の滑り出す原因は非常に多種多様である。

- 1、新雪の降り積る事が多い事、又は吹雪にあつては雪自身の重量で、
- 2、外部から来る爆風、例へば風、嵐等に依つて、

特に風の突然の激変は危険である。そしてその時層々雪面を崩壊させる。その崩壊した雪面は雪の上に墜落し、雪を斜面に積み通りにさしたり、又は傾力を破壊してその堆積を墜落さす。

濃霧等の降つた後に寒冷の襲来は（もうこの一つの條件だけで）乾燥雪雪面を惹起する可能性がある。此の場合には柔らかな立體的なふはふはした新雪が、微細な、水分の凍結して終ふ事に依つて、迅速に乾燥した、脆い雪に、變化するのである。雪の層がその中に含んである微細な水の毛細管組織は寒冷の増加に伴つて増し、且つ此れは脆く、碎け易く、そして崩するので、結晶した雪は直ちに流動運動に陥つてしまふ。

雪自身又は風の作用に依る外部的の積み過ぎ、（参照、吹きさらはれて墜落し、従つて自己の重量に依つて破壊した雪面又は雪面を越す雪の上に於ける、雪面の崩壊に對して時に破壊的作用をする *avalanche* の破壊）は牽引作用の強い状態の雪に對して、破壊や流動等の種々な原因となる事がある。

堆積し積み重ねてある雪の堆積に於て各々の部分が互にその緊張力で保ち合つてある場合にこの平衡關係が山腹に對して水平、又は斜に走つてゐる線に於て、亂された場合には、最も危険である。最大の傾力は主として、表面的に硬化した層（*Schneebrett, Kutschschnee*）に存在し、可なり平均的に全堆積を包括してゐる。

我々に取つて、新雪の降る雪の堆積を越え出す事云ふ事は常に大變に危険な事である。例えなれば此の場合、多量の危険を賣す雪がその上部にあり、それが落下して来るからである。谷間の平地に於ける河（第一圖）又は橋、歩行者、スキーロイファアの跡等は此の種の危険なる切斷を惹起し得るものである。實に、ほんの一寸の衝動にても巨大な雪量を滑り出させるに充分な場合が多いのである。

此の場合、雪の堆積の内部で緊張力が進むと共に、裂ける音、又は鈍い音響を作つて破壊するのである。雪が高く積つてゐる時には最初鈍い音響を作つて先ず沈下し、それから次に直ちに全體が滑り出す事も稀ではない。

雪及び積落道の状態に依つて墜落の状態が、滑走、塊の崩壊、塊の移動、碎ける事、墜になる事（集塊をなす事）、飛散、等が起る。

然し常に上述した様な状態が、雪崩等の切斷破壊等に迅速に、殆んど電光石火的に起るのである。それであるから、——危険なる雪崩に關しても常に、スキーに乘つて雪崩よりも早く谷へ下る事が出来るだの、又はこの雪崩に抵抗する事（孔を穿つたり、突進つたりして）に依つて防ぐ事が出来るだの云ふ誤つた考の流布に對してうかつに信じて用ひしなればならぬ。

スキーロイファアなら成は側斜の少いグレンデでは、今起りかけてゐる最中の雪崩だつたら迅速な滑走に依つて墜落道から滑へ逃れられる事が萬が一にもあるかも知れないが、之は非常に稀な條件であつて普通の雪崩にあつては此れをいつも期待する事は出来ないのである。

谷間の平地のない狭い谷を横切る際、雪崩斜面を下で横切らば非常に危険である。此の際には通行者は兩方の谷側の雪

の緊張力を破壊する。雪は又一方の側に於ける雪崩はその墜落に依つて他方の側の雪崩迄も惹起する事がある。(参照第一圖)。斜面に於ける平坦な階段や、肩の様になつてゐる處はその時の事情に依つては、通路の線が認められる限りに於ては融して比較的最も安全な通路を供給する。勿論、上からも下からも両方から雪崩は起り得るが、然し登山者に取つては後の場合(下からの場合)には融して状態は最も好都合なのである。何となれば上方に深くビツクルを打ち込んで確保し、そして融んだ堆積を下へ容易に滑走さして終へるからである。その反対に人間は増加して来る雪量で墜落の強められた壓力に依つて打ち倒される。特にそれが障害や堆石や、對岸の斜面に依つて堰かれてゐた場合にはよけいに危険は甚だしい。(参照第一圖B)。比較 (Robert M. Mendenhall の場合)。だから結論としては我々が一般に、止むに止まれず斯かる雪面を踏まなければならぬ時には決してその雪面の低い端の方を横切つてはならぬ云ふ事である。急角度ではチツクツアツク痕又はボーゲン痕を示すスキーロイファーは最も甚だしい雪崩の惹起者である。——彼は谷縁をしつかりした踏み腹を以つて上へ登つて行き、又降した、そして登山者の守るべき規範に従つて行動した。——彼は谷縁をしつかりした踏み腹を以つて上へ登つて行き、又降した、(ビツクルを深く打ち込んで)彼は又出来るだけ山腹の裂目を避けた、又同様に粉雪で蔽はれた側面も避けて通つた——登降路として山脊及び山稜を取らなされた。(参照第二圖の場合)又その際大きい迂迴路を必要にしてもそれを取つたとしても依然として最も大なる雪崩の惹起者である。

雪面を横切らなければならぬ時には高く上方を横切るのが最も良い。——高い處の岩稜の下なきは最も適當だ。雪崩斜面の上端を、深く堅く踏み付けて一歩一歩山側にしつかり打ち込んだビツクルを持つて進んで行く事。弛るく積つた雪の斜面や、又は變化のある状態になつた積み重なるの雪層等を通せんと思ふときには、特に、雪をその安全と思はれるしつ

かりした層、或は基礎迄も確實に踏みしめなければならない。少しでもビツクルをその確實な基礎迄打ち込まなければならぬ。斯く堅く踏み付けられた深い底に依つて雪は特に斜面に對して押し付けられそして死もその底は基礎迄打ち込まれた根の如きものとなり確保の役目をする。スキー及び雪橇で横断をする事は今迄保ち合つてゐた雪の堆積を擾亂する。横断しないのなら底に依つて押し付けられる事に依つて保ち合ひがなされる。そしてこの二つの補助具(スキーと雪橇)とは雪の中にもぐる事を減するがその表面を擾亂する事に依つて崩壊の危険を高めるものである。又スキー行に際しては峭しい斜面を決して上へ登らない様に、又降るのもめつたにせず、唯やむを得ない時には落下險を傳ふのが良い。

雪崩の危険のある峭しい斜面をボーゲンでスキー滑降する云ふ事は——シユウング、又は甚だしきはクエアシユブルンダ(ジャンプター)等は——恐らく最高度の危険なる事である。何となれば此れに依つて全斜面が非常に大なる擾亂作用を受けるからである。又間隔の狭い行進に依つてスキーロイファー達が斜面に強い重量を加へる事も同様の危険の結果を齎らすものである。チツクツアツクでスキー滑降する事は又同様に危険な事である。是非之を必要とする場合には斜面を斜上方に通過して安全な場處、例へば斜面の縁端の岩角等へ行くべきである。安全な地點に到達したら其處で待つて、斜面が依然として安靜に止まつてゐるかを確かを見て然る後にその斜面を斜に横切つて、前同様の方法で他の側へ進むべきである。概して、雪崩の危険にあつては墜落線 (fall line) に沿ふて深く眞直ぐな腹をつけて上へ踏んで行く事は比較的安全である。雪崩の危険のある斜面に於てスキーロイファーの墜落は大變危険である。

スキーロイファーに取つては雪崩は歩行者よりも危険である。何となればそれに遭遇せんか滑落せる雪は直ちにスキーの上に載り、その爲に人間は重さを加へられて雪の深みへ引き込まれる事になるからである。だからしてスキーロイファーは

雪崩に埋められた時の次の主な規則を守り難いわけになる。——兩足や頭を高く舉げて同時に雪の表面に泳ぎ出て居らうと努力する事——(一圖に於けるC)

スキーロイファーがダレンデに於いて墜落しつゝある雪崩に陥ち込んだ時には出来るだけ激速な行動を取らねばならぬ。袖具を切断しスキーを脱げ！手足を高く舉げよ！雪崩の表面に止つてゐる儘に試みよ！

腰を著けた下降をなす事に依つて雪を只表面のみを侵襲したのでも、是れに依つてこの際廣い斜面を雪岳に甚だしい危険に瀕せしむる事がある。又初めはさうあふなくない、人が滑り落ちる位の雪の流動であつても時には大なる危険を齎すものなる事がある。常に下降する斜面や懸谷 *gullies* の状態を観察して、如何に小さい擾亂であつてもそれに依つて隣接せる雪の堆積をされ位影響するか云ふ事を考へて見なければならぬ。(參照二圖)

斜面に於ては、外見は如何に微々たるものであつても下方で起つた擾亂はその上部に擴がつて全領域に影響を與へる事がある云ふ事を特に注意しなければならぬ。

Run に於ては、主たる一番大きな懸谷に起つた擾亂が、それに連絡をしてゐる全體の小さい副懸谷に作用を及ぼす事がある。——故に前方も後方も確實そうに思へる時に突然側面から雪崩が出現する事もある。(參照三圖の場合) 雪崩云ふものは一つが墜落するとその後隣接せる區域、基礎には全周囲と同様に新しい緊張關係が作られてそれが暫時の後一つ又は多くのそれに伴つて惹起された墜落に於てその關係の分裂が行はれるのであると考へられる。雪崩が一度落ちた時ですらもダレンデは雪崩があつたその墜落面であつても決して安全ではない。

雪崩がその發生場所から分岐又は集合區域を有してゐる壁道を通じて堆積區域に至るのには雪の状態に依つて種々な

方法に依つて流れる。

應雪崩となつてゐる乾燥雪雪崩の應は低所で落着く、又は對岸の斜面に至つて消滅してしまひあらゆるものに粉をふりかけた様になり地面に落ちて了ふ。最も微細な雪の應は呼吸器管に侵入する事に依つて窒息の危険が生ずる。さもするど強力な空氣壓力は、此の場合に破壊的な騒動を起し作用をする。此の雪崩の通路にある物は皆破壊されそして掃はれて終ふ。濕潤雪崩雪及び濡れたアイス雪崩にあつては流動し滑つてゐる大量が停止するや否や墜落の強い力は土地の摩擦抵抗に依つて消されてしまふ。その動搖は斜面や平坦な谷間の平地等に於ては滑るが然し、對岸の斜面の狭い谷地では止まらう。

雪崩は亂む音を伴つて落ち着く。騒音を立て乍ら雪の堆積は堅く凝縮し——之を雪崩が叫ぶ云ふ——そして緩の帯の如き力を以つてその中に存在するものを縛らうとしまふ。(參照雪の重量、又乾燥雪でも人がその束縛から逃れ得ない程に固く凝縮する。初期には雪崩の遺跡は幾く程多かつた。何とせれば優秀なスキーロイファーすらその犠牲となつた。その原因は斯かる點にある。即ち多くの優秀なスキーロイファーの内ほんの少數者のみがスキーと同時に又經驗ある登山家であり彼等多數のものはそのスキー技術の力極の自信のあまり雪崩の山の危險を輕視する處にその原因があるのである。非常に有名なものはアルペンフロントの *Walden* に於ける雪崩に依つて人命を失つた事である。此處では非常に雪崩の危険があるにもかゝらず軍事上の理由からして通らねばならなかつた。この道は今迄登山者もスキーロイファーも通つた事はなかつた。それに雪崩が戰術手段として使用されねばならなかつた。その際亦多くの損失が生じた。此の損失に就いての信ずべき數字の報告は今迄私の未だ聞いたことのない程のものだつた。

著名な事に就いて掲げて見れば次の如くである。二月十八日に Mr. Peet と學生の Toiser がザイト (Mochapitz 二四〇二米のもの) を持つて西側の Imachruca を登った。降りて彼等は壁の下に到着した。短い橋道を通つてそれから下に置いてある彼等のスキーの處へ到着しようとして彼等は "Hochentinner" と云ふ峻しい狭い頂上の壁の下から出た。彼等が Rime を出やる處かもそれは谷迄通じてゐる峭い芝生のある處を切斷してゐる Rime を通つて一寸下に降つた。彼等が Rime を出やると思つた場所の上方約四十米位の處へ兩人が到着した時、彼等は突然雪の表面が陥ち込む例の爆音を聞いた。直ちに大變な平坦であつた Rime の全雪面が流動するのを發見した。Peet の同伴者はその現象が大變怪かしく思はれたから直ちにその流動してゐる堆積から飛び出した。Peet 自身はずつと先を張んでゐた。彼は明らかに此の小さい雪崩の中に於て何等危險な思ふものを認め得なかつたが然し、その時不幸にも Rime は其の場所で大變強い傾斜を持つてゐた。その強い傾斜は非常に猛烈な滑走を起した。Peet は雪の運動が速やかになつたものだから痛快そうに大聲で叫んだ。や！面白い！。常には Rime の正つてゐる地點の約三十米の處で、奔騰して渦巻いてゐる雪煙の中に姿を没した。その雪煙は数秒後 Peet は Toiser の正つてゐる地點の約三十米の處で、奔騰して渦巻いてゐる雪煙の中に姿を没した。その雪煙は数秒後 Liaum の谷底に落着いてしまつた。

Rime は此の運動の時には、恰かも氷の如くなつてゐた基礎の上に太陽に依つて柔らかくされた新雪が積つてゐた。Peet は同伴者が雪崩から飛び出した場所から約三十米の處で、此處は上が大變傾斜した Rime であるのに、その峭い處を通つた。此處で恐らく上部から大變強大な滑走力を以つて此の部分に落ちて來た雪で、つかまるべき手摺りがなかつた爲め、百米も谷底へ投げ飛ばされたのであらう。Peet は今は此の致命傷的な場所に陥り込んで、烈しい速度で谷底に流がされ

た。此の部分には側からも一つの Rime が注いで居つた——そしてそれを通過の際に壁の支持を奪つてしまつたので、又恐らくは空氣壓力の狀態が變化した爲めに側方からも雪崩が出て初めの下降してゐる雪崩に加はつた。そして Peet は奔騰しないで落ちて着いたまゝ、の壁落に依つて崩壊した雪崩の雪を多数に注がれて深處に埋もれて終つた。即刻大なる力で以つて埋もれてゐるのを掘り探さうとしたが、氷の壁に硬く凝縮した雪になつてゐる壁を見出すに至らなかつた。三ヶ月の後漸く胸野の露かれた(肋骨生所)、手足の折れた、後頭を貫通した遭難者の死體が発見された。(C. a. i. 1897)

Peet の場合には、太陽で温められた新雪と過剰雪が氷になつた基礎の上に積つてゐた。主たる Rime に於ての最初の雪崩の發生は俄然しない落ち付いたまゝの壁落であつて之に多くの破壊した第二の側雪崩の増加流が伴つたものである。

一八九九年一月一日、Guttenpass のベルナー側で新雪雪崩の犠牲になつた Robert Monnich の場合には次の様な狀態であつた。

二人の友がまだ暗い内に、驟然たる Gussweiser (猛烈なる吹雪)であるにもかゝらず Schneithaus を出發した。彼等が雪崩を——明らかに下から惹起した處の斜面は切斷面の傾斜角度が約三十二度だつた。そして雪崩がその發生場所から堆積所に至る迄に通過する處の全通路は二百五十米乃至三百米位あつた。すべての様子は二人のスキーロイファーに取つて不利であつた。彼等は驚かずして死んだ。彼等は乾燥した雪でそして彼等が危險區域に入つてゐることは知らずに、ただ初めは徐々に、それから段々迅速に谷へ運ばれてゐる云ふ事を意識した。そして成る小さい谷の處迄運ばれて來た。その谷の下の Guttenpass の Kohren は Steingrader の右側の Seitenmoräne から出產上つてゐた。其處では雪崩が支

へられて、(堆石)雪煙となつた。そして止んだ。(参照第一回B)兩人は堆石壁の東方の斜面に推しつけられ、後から後から流れて来る雪を生きかへられて、強く遮断された雪量の激しい壓力に依つてしつかり埋められ逃げ出す事が出来なかつた。

一寸變つた場合が一九〇六年三月四日に起つた。

美しい天氣の良い日が大部分續いた。此の間、雪の表面は、日中に融けては夜分になるまで固いタルヌを作つた。——此の上に新雪が降つて約七十程斜面に積つた。

三人の Dances のスキーロイファーが *Stammling* を訪ずれた時には斯んな状態であつた。Schubert 氏は小舎の中で火を作り、一方その連れは小舎の傍らの岩塊の近くへ水を汲みに行つた。突然彼等は音響を聞いた。それで急いで岩塊の後に飛び込んで身をひそめた。そして雪崩が小舎に向つて疾走して来るのを見てゐた。ほんの僅かの瞬間に小舎は覆され壁は内側へ押し進められ、二階は破壊せられた。仲間の一人は救援を求めに行き、一人は小舎の残骸に埋められてゐる *Stammling* を救ひ出す爲に働いて四時間の作業の後救ひ出されて運び出される事が出来た。折り返つた藥が彼を照し付けたので内部の傷害が露外重く、翌日この遭難者は死亡して終つた。斜面の傾斜角度は小舎の上方で二十九度(二十三度——二十八度)になつてゐた。發生地から小舎迄の雪崩の通路は大凡二百米であつた。(Zürcher, Das M. C. S. V. Korrespondenzblatt S. 236)

Perschke の破壊——又アルペンに於ける多くの他の建築の破壊——が次の事を示してゐる。即ち——すべての建築施設には、建築師や技師達は共に、基礎の地理的狀態を正しく判断する事が出来るのみならず又、雪崩の原因及びその作用に就いても知つて置かねばならない。(参照 Coaz Statistik und Verbau der Lawen und Schutzbauteilen für Stützungen,

Haller, Strassen, Nebel によつて起つた最も恐ろしい雪崩の遭難は、一九一六年二月十九日 *Ischgl* 近くの *Mandwald* の南麓の *Mittenberg* の *Bergwirthshaus* に於て、*"Schwabenhaus"* の破壊である。そこには丁度スキー講習があつて兵隊が宿泊してゐた。*Kalderhof* の突出部の斜面から起つた、二つの強大な乾燥雪雪崩に依つて二百四十五人が埋められた迅速なる大變うまく行はれた救助作業に依つて百八十八人が掘り出されて助すかつた。五十七人は雪崩死した。止まつて積もつた雪崩の量は現場に於て八米にも及んだ。(D. O. A. = V. 1919. 年報)

D. O. A. = V. 千九百四年の報告の五十九頁以下は大變及び價值のある雪崩の遭難記事を載せてゐる。Haller に於て雪崩に遭遇して幸運にも助すかつた當事者の一人の次の如き記述を引用する。——冬の初めに降つた雪は美しい澄やかな日が打ち續く爲に硬く凍つてゐた。そこへ我々の旅行の一週間以上前に可なり多量の降雪があつた。その雪は今や同様にタルヌで覆はれてゐた。然し之の雪は硬かつたので私は全く雪崩に就いての心配はもつこしなかつた。で私の第二番目の同伴者が急にやつて来た時私はじつと止まつてゐられなかつた。そして一緒に出掛けた。初めは横滑りがひきかつたが強い角付けをして進んで、我々は中央邊で滑がつてゐる *Arten* に深く沈み込んだ。一番は既に中央を越して速くに滑り、中央に丁度二番が居た。その四十米後に私が居た。突然二番が明らかに滑り初めた。私は最初、彼が硬い處の上を踏んで滑つたのだと思つたが、次に私は驚いてしまつた。彼が雪崩を惹起し雪崩と共に谷底へ落ちて行くのを見た。彼は倒された。然しやはり絶えず表面に出てゐるやうに努力した。猶ほ墮落の間助けを呼び求めてゐた。そして私の下方三百米の處で雪崩は静止した。胸の處迄雪で埋められて壓せられてゐた。そこで彼はなほも呼び續けて居つたので我々は彼を救はうとしたが、然し私は動く事が漸くであつて、丁度その時私は上方で例の鈍い音を聞いた——斜面が二、三十米破壊して私も諸共に下へ落ち初めた。ス

キーの道具を脱してしまふ事は私は良く思ひ込んでゐたが、私を流してゐる初めの速度すら既に強大なるもので、私は道具を脱す暇がなかつた。私の前方には吹き拂はれた滑らかな平面が横はつてゐたので逃げ出す事が出来なかつた。その平面の上の一番目の者が下へ流されて落ちてゐた。猶ほも上から落ちて来た雪量が私を直ちに倒して、私は何回もトンボガヘリをして直ちに雪の深くへ挟まれてしまつた。その時再び太陽の輝を見たが又同時に消えてしまつた。一度雪が私の口へ入るや殆んど呼吸を止めてしまつた。その時私は激しく岩肉の上に投げられたと感じたが、又次の瞬間私は再び上へ投げ出された。——そして丁度その時静ました雪崩の表面に横はつてゐた。私が這ひだした時私の上方に、やつぱり私も同様に第二の雪崩で自由になつた私の友達を見付けた。

此の事は、如何に陸の *Reise*。と雖も——確かに風下の場所——長い良い天候が続いた後でも部分的な雪崩の危険が永續し得るものであり、猶ほ是れは表面的なスキーの底に依る標高が危険を惹起し得ることを示すものである。

その卓越せる論文「雪崩の危険に就いて」の中に於て *Malden* 博士は (*D.A. = 2.3 Jahre*) 珍しい雪崩の経験を述べてゐる。

一九〇二年二月十一日、私は *Müller = Immerstadt* 博士と共に、盛つた、普通の西風の一寸の雪降りの日に——*Oberdorf* で気温プラス四度であつたが、*Immerstadt* を登らうとして出発した。冬も今迄は大変悲惨であつた。そして曇つた天候で高い湿度を齎らした。我々の旅行の前日、強風で、強い雪降りがあつた。それが今迄続いた。もう一度變する板（スキー）に乗つて滑降したいと云ふ我々の希望はさう／＼すべての思惑に打ち勝つた。三時間の滑走の後、我々が *Immerstadt* の東側の上部へ立ち戻つた時に、我々の以前の旅行に於ていつも見てゐた、五十度位迄にも傾く傾斜したグレンデの斜行

の容易な廣い、冬に於てすら認める事が出来る道が見えなかつた。すべては只一樣な、全體を深い深い雪に蔽はれた側面だけになつてゐた。此の風況には西風に依つて吹き溜められた雪の多量が集まつてゐた。我々は之の雪量の中に一寸入つたが然し直ぐ思慮ある態度に立ちかへつた。然し我々は目的を放棄せず、西側面に於て進路を見付けこんでゐた。我々は四側面もなほもゆつくりと、端にグレンデが傾く傾斜となる迄登つた。そして我々が尾根に登らうとして後退する *Reise* の左端にある四十五度の傾斜の斜面の端に達し嫌さ思へばスキーを置いておかねばならない。その尾根には我々は半時間の烈しい困難な努力の後到着した。そこで據氏八度であつた。今横切つた斜面上には約三十度の深い深き、新雪の層が硬くなつた基礎の上に積つてゐた。然しその基礎をなしてゐる面までもそう硬いものではなく屢々もぐつて脱出はより込んだりした。尾根の上は霧や雪の嵐で何も見えず、そしてじつ／＼してゐる事が大變づらかつたので我々は頂上を踏まずして引きかへした。歸途は我々の古い道を傳はず、私はその傍の平坦な約十五度の幅で四十五度程傾斜してゐる *Reise* を降つた。Müller は私の後方約十米位だつた。私が未だ全く *Reise* の中へ入り込まない時、私の周囲で *Reise* の上部の新雪の端が烈しく動いて流れて来た。私は直ぐ此の雪流の中に捲き込まれて流された。足を前にして、ただ頭だけを白い雪地から出して *Reise* を下へ流されて行つた。この時私は、他の人がよく述べてゐる、「流れの中で泳ぐ」と云ふ感じがした。私は私の左手の雪崩の大堆積が如何なる状態にあるか観察した。一方私の右手の流動してゐる堆積の端迄は約一米半位であつた。私はもう決して墜落しない處迄も雪崩に依つて流されて落さされ、その地勢の平坦になつてゐる處に雪崩の大量の中に埋められたくないので、私は迅速にその擁りつゝある轉落運動から右に出て、そして雪崩が流れ去るであらうと思つてゐた。それにもかゝわらず又捲き込まれ二、三米深く引き込まれたが然しそれを第二の衝動で全く自由になる事が出来た。私の下方約百米で雪崩

は停止した。全雪崩線は約二百五十米でつた。

そこでは二、三日以来ずっと旅行の當日すらも新雪が降つた。そしてこの新雪は全く硬化した滑らかな基礎の上に横はつた。峭しい場所を歩いたと云ふのも過失だったが、然しそれよりもこの旅行を中止せなかつた云ふ事は何れにせよ大なる過失にちがひなかつた。下降の時に Ranne を歩いたと云ふ事は偏重でなかつた云ふ事の證據と云はれてもしかたがなかつた。何となれば此の Ranne のその風のあまり吹かない場所には樹の處よりも以上の雪が溜つてゐたからである。

Radio-Rading (D. u. O. A. = V. 1903 の報告) が書いてゐる次の経験は教へられる處が多い。

氷の様に冷い夜が明けて社團な朝になつた。場所は Hochtorgruppe の Gahner に於ける Eismeer Alpen に於て、あつた。我々は Stalshund を連れて Zischel (2150m) に達せんが爲めに滑つて行つた。丁度正月頃であつて、約二、三週間前に Föhnwind が全 Oberpan を動した。そして氷の様な寒冷が来て斜面は硝子状になつてしまつた。大分日が経つた後に猛烈な雪降りがやつて来た。そして今や寒い天候が永く續いてゐる。之れを我々がこの旅行に利用した。Zischel の Zischel (東南) 側から風が殆んき全部の雪を吹き掃つて向ふ側へ堆積させた。だから我々の斜面には輝いた硝子状をなした斜面が横はつてゐるその斜面を越えて我々はスキーを穿かずに二十五分位で容易に Stalshund に登る事が出来た。然し我々は "Bread" で鞍部の高さ迄行きたかつたから左の方の峭しい斜面の上に移つた。その斜面には吹き付けられた雪が、一つには風壓に依つて、恐らくは又太陽の暖たかさや雪に依つて雪の表面はや、硬くなつてゐた。若しも雪が粉雪状であつたが既に消れてゐたであらうが、然し薄い表面層が雪を凝はしつかり保つてゐた。私の同伴者は先頭で、私は約五米の距

離で續いた。氷の様に冷い風が激しく吹いて、雪が渦捲いて顔を打つので我々は吹雪帽を耳の上におろしてかけた。それでお互に話を交はす事は出来なかつた。我々は殆んき雪の中にもぐらない位であつたから確實を期する爲めにはスキーを一す角付けしなければならなかつた。だが我々は之れに依つて一寸硬くなつた表面膜を破壊してその爲めに雪の斜面から固着力を奪つたのであらう、又恐らく二人の重量はほんの一寸滑らかな氷となつてゐる基礎の上に留つてゐる斜面の雪を滑り出させるに充分である。要するに突然遠くからの雷鳴に似た音響が私の耳を打つた。雪の表面が大なる範圍に亘つて破裂し、その支持となつてゐた周囲は持ち込まれた。——次の瞬間に我々が立つてゐる全斜面が滑つてゐるのを感じた。我々二人は事態の容易ならぬのを観取して逃れ難かつた。先頭は此處を乗り越して逃げ難かつたが私はそれを駄目だと思つて電光石火的にスキーの棒具を脱した。一つの雪崩からは私は直ぐ逃れたが然しも一つの雪崩の時、私は不幸にも棒具を二重の紐を孔に通してゐたので此の時最早うまく知ろす事が出来なかつた。何となれば私は既に推し重なつて来る壓迫的の雪量に倒されてゐて、堆積に押し付けられて直ぐ埋められてしまつたので。滑動してゐる堆積が直ちに止まつてそれに依つて、長さ約百米、幅約三十米の流動してゐる雪量が我々の上に滑つて乗つて来なかつた云ふ事は我々に取つて限りない幸福であつた。私はスキーを穿いたまゝ、重なつた堆積の雪の中深く埋められた。それで私を恐ろしい巨大な壓迫の中から救ひ出すに超人的の力が要つた事は勿論である。

私は長く搜索した後漸く、私の下方に私よりも数倍低い處に私の同伴者を發見した。彼は一寸高くなつた雪に蔽はれてゐる頭を動かしてゐるので私に見付かつたのだ。後に彼が私に話した處に依るに落下の直ぐにその重り合ふ雪量の中にスキーを挟み込んで終つたので倒されたのだらうと語つた。彼が不思議にもそのスキーを雪量の渦捲きの中で失つた云ふ事は彼

の幸運と云はねばならない。何と云へば若しそうでなかつたら彼はスキーの埋まつてゐる處に一緒に埋死しなければならなかつたであらうから。

若い學生 *Czize* がその犠牲になつた雪板 *Schockbreite* の分離した事に就いて彼の同伴者の *Bach* が D. u. O. a. V. 1 九〇五年の報告に書いてゐる。

天候は素晴らしい良く客観的の雪崩の危険は無かつたが主観的のそれはあつた。 *Wardard* の上へ登る時我々は分れた。*Czize* は普通の夏道を、私は道標から下つた、幸うじてわかる岩尾根の上をすつと左手を登つた。轡事が起つた時 *Czize* は私の斜右手上約五十米の處にゐた。雪は彼と共に崩壊して来た。私は偶然にも岩塊に依つて留はれて、雪量が私の左右や上を流動して谷底に落ちて行くのを見てゐた。場所は道標のや・風下であつた。雪板 *Schockbreite* 又は風に依る板状 *Wind Brette* は非常に大きい範圍であつた。破壊線は五百乃至六百米の長さで、一米の長さであつた。私の同伴者に就いては私は何物も見出し得なかつた。叫んで見たが答は無かつた。仕方がないから山を下つてその夕方 *Rosshaus* に歸つた。

夏に於て新雪の降る事はアルペンに於ては夏時日だけだが完全な冬の状態を作り、そして最も大なる雪崩の危険を齎すものである。非常に雪の豊富だつた一九一〇年の夏、雪崩の最も恐ろしい惨事が起つた。此の事は登山史に良く知られてゐる事柄である。

七月の初め *A. Kohn* と *H. Barthold* の二人の旅行者が *Alexander Burgener* とその息子 *Adolf* と *Alexander W* を伴

つて *Grindelwald* に連天候の爲め五日間余儀なくじつと滞在してゐた。去る十四日の間多量の雪降りがあつたにもかゝらず、彼等は遂に七月八日の晴れた日出發しようとした。そして *Eisener* 驛迄は *Jungfrau* 電線を利用してそこから *Bergthütte* に行かうとした。

此れに依つて彼等は *Das untere Eisener* とやつて *Grindelwälder Vuchertüre* を通つて行く長い道中、その道はおそらくは尙ほ舊日は、多量なる緩な新雪の堆積の爲めに、行く事は出来なかつたであらう道中を省く事が出来た。彼等は然し *Eisener* 驛から小倉迄には峭い強い裂けたフィレンツの上を越えて可なり長い斜行をしなければならなかつた。

Grindelwald からは尙ほ *Führer* の *Fritz Brunn* が加はり、そして *Eisener* 驛で一行には此の外に *Führer* の *Peter* と *Rudolf Tschudi* が加はつた。二人の旅行者と六人の *Bühner* より成る一隊の編成が出来上つた。此れは深い新雪に依るシムプールの破壊のあつた場合の非常な労働作業を難め變悟してゐたからである。

荷持隊は *Führer* の *Christian*, *Fritz Bohren Bruler*, *Kaufmann* から成り立ち、服を修つて *Bergthütte* に糧食を持つて行く機会を利用したわけだ。

獨りになつて *Bohren Vater* は尙の險を出合つた。そこで今や九人になつた一行の上に古い緩い氷の狀になつた基礎の上に滑つてゐた人の高さ位もの量の雪が破壊して落ちてきて皆を深い處に投げ飛ばした。

Bergthütte に於て雪崩が二つの部分に分れ、その西の分の雪崩は九人を約二百米もの下の岩の上に投げ飛ばした。又東の方の雪崩の小さいのは荷持隊を隔つてフィレンツの上を下へ通り過ぎて終つた。之は夕方六時であつた。四人の荷持人夫は約四十五分の努力の後逃れ出す事が出来て *Eisener* に引きかへした。村人は丁度 *News* 望遠鏡でこの人々を見守つてゐ

たので、惨事が起るに直ぐ救援隊が派遣された。

Bergli の小舎の *Aufmann* は雪崩の雷鳴を聞いて直ちに急いで避難者達の處に下りて来た。其處で *Alexander Baur* *gener* の息子 *Mole* 二人の旅行者 *Kuhn* *von Barthold* 並びに *Fuhrer* の *Bohren Vater* *von Peter Tuhait* が即死した。*Rudolf Tuhait* は *Hinner* 驛に運ぶ途中で死んだ。*Fritz Brawand* *von Alexander Burgerer* は重傷を負ふた。負傷者の救助には *Junfrau* 鐵道の職員が四人加はつて我の間に *マセレン* の光で努力を以て行はれた。そして最夜中迄はこれ以上の不幸なしに終つた。翌日死體の處置に就いては *Grindavald* の *Fuhrer* がなつた。

この現在未だ生存してゐる最もすぐれた *Fuhrer* が犠牲となつた傷ましい遭難の印象新たなるにもかゝらず、批評はなされてゐない。然し雪崩の危険にあつて事態の根本規則に對して記された重大な過失を指摘するのは此處に於ける吾人の義務を信ずる。

第一にすべての *Fuhrer* が良く辨へてゐる根本法則が輕視された事である。長い(十四日間)多量の新雪が降つたにもかゝらずその最後の最初の晴れた日にはまだ雪が基礎と共に凍らず、又は峭しい場所にあつては自ら滑り落ちた雪量が多量に著いてゐないので、斯かる事の行はれる以前に、雪崩の危険のある領域を通過してはならない。經驗のある登山者は、たゞ *Fuhrer* にしても旅行者にしても斯かる際の旅行の出發に對しては斷然たる禁止を提議すべきである。

第二の重大なる過失は峭しい非常に雪崩の危険のある、人の高さ程の新雪の蔽ふた斜面の横斷にあつて八人の大なる重量が一緒にたまつて行進した事である。

二人の最も身輕い *Fuhrer* を斯かる状態であるから道路みに出發さす云ふ考へは正しいが然し實行されなかつた。そし

て六人の主隊は短い斷層に於て先の隊の *アンザイレン* した人達をひきく非難してゐた位だつた。危険な場所にあつて九人が深い横斷層を穿つた。その横斷層が積つてゐる峻な雪地の平衝關係を亂してこの雪量の崩壊を惹起した。此の雪量が滑り落ちないとする事等不思議な位で崩壊するのが當然であつた。

總てが *アンザイレン* してゐた云ふ事は非常に *シュルンド* の開いた領域を横切らねばならぬから當然であらうが、然し彼等の *アンザイレン* してゐた云ふ事は行進順序の方法では特に不慮だつた。二人が二重にされた *ザイル* で少くとも二百乃至三百米の距離を他と他の間にあけて此の距離がちやんち守られた時には他の場合には確實の標準だつた。不幸が一般に避けるられるものではなさうだとするに難かに人生から惨事が起らないだらう。

何故に、危険のある天候にあつて冒險が企てられたか云ふ事は人情として、容易に理解出来る事だ。一行は長く待つてたうくしびれを切らした。彼等は何か一度金でやうに欲した。 *Junfrau* 鐵道に依る安樂な旅は小舎迄の道を短縮したので短距離で目的が達せられる様に人々は強く望んだのだ。通常の狀態では大勢の人数が何等危険なく行かれる筈で、その道の通行に就いては土地の *Fuhrer* は殆んど日常茶飯事と心得てゐたので普通なら安全云ふ感情がこんな場合に於ても批評的な觀察を怠らせたのである筈でも百回も安全にその道を通つたらやつぱり百一回目もその道を通つてやうと思ひ、そして何等別段の思慮をしないものだ。遭難の事は云ひ傳へられてゐる。

古い文獻から種々な有用な教訓的な實例を擧げて見やう。先づ一八六四年の二月二十八日の *Bennen* の場合に就いて云く *Whymper Berg- und Gletscherfahrten, Abhang S. 503 der deutschen Ausgabe* *Goest* *von Buisson* 並びに *Fuhrer* の *Nance, Rebot, Bervand* *von Bennen* *von Haut de Cry (Rhone)* に發せられてゐる。

Cosset は避難した。此の事は既に何回も述べられてゐるが又 Whymper も繰り返してゐる。私は只二三の重要な事項だけを挙げよう。

彼等は峭しい雪原を歩いた。下へは約百五十呎、上へは約五百呎の廣さであつた。登山に際して各人は一步毎に約一呎の深い雪の中にもぐつた。Morton は土地の "Scher" だけあつて既に此處に雪崩があつたかどうかを知つてゐた。皆が雪崩はなかつた云つたが、頂上から約百五十呎下の處で人々は雪原の他の側に曲がつた。此の傾斜角度は三十五度に及んだ其處で先頭の二人 Brandt と Nance は突然脚底はまつた。Brandt はザイルを引張つた。雪があまり深く陥つた者が自分で上へ登れなかつた。彼等はそれで雪を掘り分けて二三歩進んだ。Nance は雪崩を恐れた、土地の "Nance" は反対した。彼等はその道を進んだそして雪は再び緩くなつた。Brandt はこれを見た時安心して、自分の道を進んだ。然し彼は他の Cosset が破壊した道を越えて自分の道を取つた。後に従つてゐた Fritze は Brandt の痕で丁度胸迄落ち込んだ。間もなく皆が深い物の切れる様な音を聞いた。雪原は一行の十四五呎上で二つに裂けた。初めは裂目は狭く、一時よりも廣くはなかつた。Cosset は彼の持つてゐるフルペンスツクを出来るだけしつかり雪の中に打ち込んだが支持にならなかつた。人々が立つてゐる雪は動きかけた。雪崩の速度は迅速に増加して Cosset は直ちに雪で蔽はれた。彼が再び雪の表面に出て来た時には窒息してゐた。彼は雪崩の大波の上に居る事を知つてそして彼が下方へ運ばれてゐる間、用心してゐた。雪崩の面に大きな雪煙が先行した。一方残りの部分は明かに止まつた。Cosset はその胸で丁度人が水の中へ入る時の様な恰好をした。雪崩が静まる時、丁度荷車が溜つた雪の上を通る時、出す様な軋る音を人々は聞いた。次にやつて来た雪で、今度は Cosset は埋められてしまつたが、然し容易に逃れる事が出来た Fritze に依つて又掘り出された。たゞ Botschart と Benen

こは此の世に歸つて来なかつた。そして雪量の堆積の中にその死んでゐるのが發見された。

此の遭難の責任は Fritze の無智にある。特に先に進んだ Brandt の無智である。彼は彼等が雪崩の危険のある Route でそんなに柔い雪に遭遇してゐる云ふ事を意識してゐなかつた。最初の人のもぐつた云ふ事で直ちに尙ほ進む云ふ事を人々はやめるべきであつた。人が氷河の裂目でない處で雪の中に深く半上腰よりも深くもぐる云ふ事は非常に稀な事である。同症ももぐる云ふ事は人々は直ちに最も高度の雪崩の危険に瀕してゐる云ふ事に想到すべきであつた。尙ほ彼等は充分に他の道を取る事が出来たのだ。そしたら不幸が起らなかつたかも知れないのだ。

Viktor Taitan が Peter Bohren と Tuckett 氏と共に Alteschhorn の北側登陸を一八五九年六月十八日に試みた時凍つたタルステで蔽はれた雪層の十呎から一呎の大きさのものが彼の足下に落下して来た。それは幅一キロメートルの雪崩から出て来たのである。それは宛もナイヤガラの瀧の様に五百乃至六百メートル落ちて来た。旅行者は古い硬雪に杖を打ち込む事に依つてそれを支へ隔つた。そして直ちに此の側に於ける下降を断念した。(Tuckett Hochalpenstudien II)

C. F. Habertin は一八七〇年九月の強い北風のそして酷寒の一日に試みられた Truberg 登陸の企てに就いて語つた。Gairbuch des S. a. - C. I. Jahrg.)——我々は今峭しいファイルンの底面を見た。非常な注意をしてその上を登つた。我々は Schneefurm の下の最後の丘陵に到達した。吹き付けられた雪は抛粉の様に疎であつた。此處で我々は遭難した。塵雪崩を抛出したのである。それは容易に我々を危険に瀕せしめたであらう。その恐ろしい瞬間の記述をなしても何にもなるまいが一方の間に Johannes V. Weissenfluh が私は流動してゐる雪量から、滑らかな全く手廻りのない斜面に投げ付けられ

た。如何なる支持物もなき、氷丘に苦められ我々は眞の Fisher 達の運命を等しくしなければならぬかと危ぶんだ。Andreas V. Weissenbach は非常な力を以て投げ飛ばされた時短ばひになつた、そしてピツクルを獲んだ。機の手でグイムをほさいて、遂に私を足場の處へ降らせて、共働の活動に依つて私の手を上へ引き揚げた。

旅行者を危険に瀕せしむる新雪雪崩に就いて Tuckett の Hochalpenstudien 中に興味ある例がある。

悪い天候が長く續いて、晴れた暖たかい日に伴ふ夜の寒冷が雪を硬く凍らせる云ふ Tuckett の前提は起つてゐる様に思へなかつた。我々は Kuba Hut の下に居た。それは Gross Hut へ、Kuba Hut を結んでゐる尾根のおひかぶきつてゐる氷の大量の下であつた。我々の各人は斯かる雪崩を可なり近くで見られる事は人間のあまり遠慮しない稀な事だと思へてゐた。多量の雪が落下して來て Gasse (切れ込み) を上端迄一杆に満して終つた。然しそれが二百乃至二百五十米位進んで來た時、その雪斜面を分つてゐた凍結してゐる大きい岩尾根で雪煙となつて崩壊し魔法の様に二重、三重に撞がる様に思へた。一行は今や出來るだけ先へ急いだ、そして雪崩が彼等の居つた處に到つて來た時は彼等は深い雪の中を押して約三十米程進んでゐた。彼等は既に遠退いてゐたので誰もその雪崩の空気を感ぜなかつた。只 Ulrich Landerer だけは彼が少し後の方にあるので尚ほそれでも氷の破片に依つて打たれたと主張したが。雪崩が停止した時、長さ百米、幅四百五十米、高さ約二米の巨大なるものであつた。一行が、この事件の五分早くか、遅くかだつたら彼等は勿論雪崩の犠牲になつてゐたであらう。新雪雪崩を惹起する氷の塔 (Eisberg) の崩壊に起因する處の劇的な關係のある原因が此れにはある様である。

雪崩斜面、又は落ちてゐる雪崩の中に居る事を知つた旅行者の取るべき態度に就いては既に以前から種々云はれてゐる。

その主なる規則は次の如し。

新雪が降つた後は如何なる旅行も企てない事、風族が山に立つてゐる限り、又は長く風が成る方向から積雪を峰(山脊)の上に吹き付けた時は、頂上や尾根の風下斜面を避け、むしろ一般にかゝる状態にあつてはやめよ、硬い基礎の上に積つてゐる粉雪斜面並びに、上層が疎で砂粒状又は粉狀の雪で覆はれたクルスタした雪等は踏んではならない。

主要なる項は常に次の如し。

適當な時に(少し早い目に)危険を察知し、そして雪崩の危険ある斜面は一般に踏まない事。然し止むを得ない事情に依つてさうしても斯かる斜面を通過しなければならぬ時には第一に歩行者、雪上荷持人はスキーロイファーと同様に斜面に於て積雪を横切るスプールは避ける事。スキー等は鍔金を脱ぎ捨て、落下線に垂直に堅實な痕を踏んで歩く事。山脊や尾根は上に記述された様に通過線として得られる。斜面を横に切斷してゐる所謂「夏道」は非常に危険なものである。

然し乍ら横斷行進がせむ共なされなければならぬ時には、一歩毎にピツクルを確實に、出來るだけ古い基礎を踏む位に、山側に突く事。如何なる場合でも多数の人が同時に、一緒にかたまつて斯かる斜面を踏んではならない。大なる斯かる斜面の領域に於ては常に一人隔、少くとも大變廣い間隔(百乃至三百米)を保つて歩まなければならない。遠い迂路であつても、之に依つて雪崩の危険のある處を迂迴する事が出来る場合には之を躊躇がつかはならない。

一行中の者が雪崩の危険のある處を踏まなければならない時以外の場合にはアンダイレンは、私の考に依れば寧ろ弊害のみを賣すものである。之は不幸を大にする、何となれば他の場合には一人が危険に陥つた場合には他の者が救助をなす事が出来るのに此の場合だに一人が全體を危険に瀕せしめる事があるからである。シュルンドの出來たフィレンの領域に於ては

製目に陥る危険があるからアンザイレンは必要欠くべからざる事であらう。此の場合三人以上の一行を二隊に分ける事は最も正しい事であり又必要な事である。此の二つの隊は時には二重にしたザイルで連絡してその間に大なる間隔を保つ事もあ
る。

Oerter は斯く提案してゐる。

雪崩の危険ある領域を踏まなければならぬスキーロープラーは、強い約五乃至七位の太さの赤い紐「雪崩紐」を結び付けて、約二十五米位の長さを後に曳いたら良い。之れに依つて埋没者を時には迅速に見付け出し、そして雪崩から自由にさ
す事が出来る。

登山者にはこれに類似した方法がすすめられてゐる (C. F. O. a. V. 1896 1917 年の報告) この紐は必要に応じて種々の
用途に使用される。

隊にあつてはザイルは氷河の領域に於ては、常に他の場合に於ても同様である様に、それを最後の者が持つて行く事もある。又それ故にアンザイレンは雪崩の危険の時には弊害である。何となればアンザイレンした一行に於ては雪崩から逃れ出さうとしても、他の者がそれを妨害する結果となり、引つ張られたりして、之れに依つて運動の自由を減ぜられ唯だ危険な状態を高めるだけで何にもならない事になる。私の考に依れば雪崩の危険にあつては只全く特殊な状態の時だけアンザイレンが有効であるを考へてゐる。例へば危険領域が短くて、ザイルに依る結合に依つて只その中の一人のみが危険のある領域に於て動き、そしてその人又は他の者が確實な足場から確實に作用し働く事が出来る時に於てにのみである (例へば細い狭い Rinne の横断の際等)。

雪崩避難の格事が起るに直ぐ最も綿密な捜索を行ふべきである。何等の印 (スキー杖、指節し手袋、ピッケル、帽子、雪崩紐、等) も又、遭難者のシュブールも見付からず、ピッケルを以つてする穿探も何等てがかりの無い時には、直ちに計画的に準備してある救援隊が迅速に現場に派遣せられなければならない。此の救援に就いてゐるが、最も條件の良い場合に於ては尚ほ数日後に於てすら救助される事すらあるのである。

細心の注意を以つての細い鐵棒でさぐりをする事。(終ひには違約で以つて衣服の断片をさがす) 場合深刻を引く事。又犬を同伴して埋没者を発見さす事もある。

雪崩の遭難に就いて、この遭難に際して同伴者である二、三のスキーロープラーが遭難直後の埋没者捜索が怠られたり云ふ事に就いて Wang (1911 年) は、一九一一年三月二十六日の悪い天候 (Föhn 風低下) と其他にあり乍ら Bruderkogel の登攀を目的として懷んだ七人の一行が、書いてゐる。

先頭 N. Kerschbaler が方向轉換する際に足場を作る爲鋭く踏み付けた時、約二十米以上もの雪板 Schneebrett が崩壊して先頭を倒し、同様に二人續いてゐた A. Konny 及 F. Blaichke 博士が下へ落ちて終つた。残りの四人のアンザイレンしてゐたスキーロープラーは幾分はやつぱり引つ張られたが然し支へる事が出来て助すかつた。この遭難は午後十二時から一時の間に起つた。この残つた者はあまり廣くない約百米位の長さの雪崩を、嵐模様の天気であつた爲に覆しつくす事が出来なかつた！それで約十五—三十分程、若しや救ひを求める聲が聞こへはしないか、或は雪崩の上に何か動きはしないか「凝視し傾聴して」持つてゐた。Kronstele 氏は——後の報告に依る——要を消した僚友が若しかする谷に落ちたのかも知れないと豫想したと云ふ。それで Liebl, Handbanger 兩氏は Wien に向つて出發した。何となれば彼等の後

の説明に依れば彼等は全く心身共にぐったりしてゐて遭難直後の積極的の救助の試みをなすべくあまりにその注意力及び勢力が彼等に取りつて不可能だつた——同日特設長の *Witherby* 氏及び *Kohn*, *McDonald* 諸氏が遭難現場に到達しやうと試みたが悪天候の事情の爲め果されず引き返して来た。

人々が遭難者の埋没してゐる地點を去るに當つてスキー杖或はそれに類似したものでその地點を指示し記號付けて置く事は怠つてはならない事であるのに此の場合明らかになされてゐなかつた。

二十七日朝早く十二時半に *H. Sted* 博士が *Admont* から来て、*St. John* の消防頭 *Koch* 氏と共に早朝六時に到着した二十人から成る救護隊の組織をした。二時間半の行進の後、西の *Stedek* に於て雪の上に何か黒い、丁度スキーの端に見わるものが現はれてゐるのを見た。

此の場所に大きな塊の間に穴洞を考へる事が出来た。その中に *Stedek* 博士が横はつてゐた。腹の上で右手で顔を支へて左胸を顔のわきに置いて。スキーはしつかり雪の中に保たれてゐた。穴洞は脚の方は狭く、上體と頭の間は、大變廣かつた。頭の上には約五十種の廣いゆつくりした空處があつてその中は銀子の毛が散つてゐた。

死體はまだ強直してゐなかつた。醫者の診断する手の方が *Stedek* 氏の腕よりも冷めたかつた位だ。頭と胸部は傷いてゐなかつた。人工呼吸を施して見て明かに知られた處に依ると胸はさほど強く壓迫されてゐなかつた。 *Stedek* 博士は次の如く報告した。即ち彼の意見に依れば *Stedek* 博士は大壁上層に埋まつてゐたのであつたが、遇れ様とする努力に依り頭と胸附近に漸く空處を作つたのだが、長い無効な努力となり遂に疲労して倒れたのである。——全空處の中の雪は露骨に押された衣服に依つて汚れ色が着いてゐた。——新降雪で遭難後二十時間もの苦痛にかかはらずなほ二十種もの大なる

片端を上へ見せてゐたのであるから、此んな小さな雪崩なら捜索しつゝしたら人達に見付かつたであらうから同行者の正しい態度處置を採つたならば *Blackie* 博士は救済されたであらうに。

他の二人の遭難者 *Kenneth* 及び *Korany* の發見の狀態は彼等を見付け出されそうにもない様な考を抱かせる。——三人共スキー（リリエンプエルダー・ビンドウング）を足につけてゐた。唯 *Kenneth* のみは雪塊が踵を破壊させそれに依つてスキーを足から剥ぎ取つてゐた。

遭難の原因は斯く記されてゐる。一行がスキーで、うまく通れる山脊を通らずに *Stedek* (谷) の通過を取つた事。そして *Robbister* であるにもかかわらず急な斜面を大變狭い間隔（約二呎——十呎）で以つて横切つた事。

此の悲しき遭難の結核及び教訓は實際に體驗した登山者自身が良く説明してゐる。

前世紀（十八世紀）の八十年代終りの成る遭難に於て *Tenn* で若い男が四日半雪崩に埋められた後救助された事がある。彼が之に依つて受けた唯一の損傷は踵を四本失つただけだつた。埋没者の不思議にも救助された事に就いて記載するは此處は適當でないから止すが然し之等の事は次の事を我々に示してゐるのである。

即ち常にたとへ遭難後長い時間が経過しても全勢力で以つてあらゆる手段を採り用せる處置で以つて救助作業を行ふべきである云ふ事を示してゐる。

種々な方面から色々な問題が提出される。即ち冬期旅行者の爲めに雪崩地圖が出版されねばならない。此れは雪崩通過を記した地形地圖の事である。が然しこの氣持な希望は冬期の事情に全く無智なる事を示してゐると思ふ。何となれば上述の詳説を讀まれた人々は此の事を直ちに了解されるであらう。地圖を讀む事が出来、山地に於て鋭く、正しく觀察する事が

出来る人は自分で雪崩の出る危険ある處を地圖上で豫測して置かねばならぬ。雪崩のあるかも知れない場所をアルペンの上記に記入しやうと思へば殆ど以上の大なる(二十四度以上の傾斜)斜面の領域には全部警戒記號をつけなければならぬ。そうすると雪崩の記號で地形基礎を見る事が出来ない位に重なりつづす事にならう。

又、唯吾人が既に雪崩の観察された處のみを記すれば、斯かる地圖は利益よりもむしろ害を與へるものになり過ぎない結果となる。何となれば「人間の愚考」以來一つの雪崩を起さなかつた處こそ雪崩に就いての危険を考へなければならぬ。長時間に亘る天候の狀態、變化を觀察し、雪質及び成層、並びに傾斜狀態を正しく判斷せよ！目を擧げよ！觀察を蒐集してそれを實際上に利用せよ、經驗を得よ！此の事は登山者及びスキーヤーに取つて雪崩地圖に信頼するよりも優る事である。

結論に要する古い雪崩現象を歩み越す際の注意すべき事に對する警戒的の説明として次の場合が役立つだらう。

秀れた登山家 Henry Cordier 氏(一八七七年六月七日) Fuhner の Jakob Andreess 及び Andreas Maurer 共に Placet の初登攀をやつた。船造 Claude Placet の船に到着した後、ザイルを解き一寸食事する爲に停止した。食事が終つた時 Cordier 氏は荷物を配當してゐた Fuhner 達を待たずに立ち上つた。水河の出口は(Torrent de la Cluse)は深く横はつて断崖をなした岩の間に河床を穿つてゐた。それは當時まだ雪で被はれてゐたが、その下で水がその流れをなしてゐた。Cordier 氏はその雪の處を通らうとした。彼は不幸にも雪の底ひかぶりの滑り處にやつて来た。其處は滑んだ。そして彼は十二呎も深く落ちて、水河流の中へはまつてしまつた。Fuhner はその場に居合せて彼を救助しやうと試みた。Jakob は洞窟の中へ下ろされたが、Cordier の姿は見えられなかつた。何となれば河床の傾斜と急流の力とは Jakob

をすべり河床の中で四十呎も下流へ滑らされて彼自身半ば餓死となつて引き揚げられた程である。漸く翌日から人達が救援にやつて来て、雪の中に溝を掘り死體を見えんとした。即死だつたであらう。山の路沿の水脈は大變大きく人間は直ちに翻覆させられるのである。多分その時彼は鋭く角のこれてしまつた石の上で立つてゐる事が出来ず倒されるのだ。岩塊に頭を打ち付けて直ちに死ぬだらう。又は滑れて無意識になり次に死んで終るのだ。

第一圖、説明。急峻な段階を有つてゐる懸谷(Rinne)。斯かる Rinne は屢々起つた雪崩の墜落(ノーチ)に依つて平坦にされる。晩冬に於て、例へば千の雪崩の墜落があつた後には全懸谷の底(Rinneboden)は全くの平坦なる面になつてゐる。又、たゞへ低い下方に於て起つた擾亂と雖も斯かる場合に於ては、上方の廣範な傾城及び副懸谷(Nebentanne)をも強力な影響を及ぼし得るのである。

第二圖、説明。斜面の形成の種類及び人間に危険を及ぼす點に關しての雪崩の生成。

A、谷間の平地を有せざる狭い谷。溪流は雪の中に溝を穿ち、爲めに兩側の雪崩を惹起する事がある。谷底を通過する人間(X)は同時に兩側からの雪崩を起す事がある。逃れ出す事は殆んど不可能なるが故に最も危険が大である。

B、(X)の傾城に於て起つた擾亂に依り雪崩が上方から起つて来る。その雪崩は谷に墜落して来て堆石(M)に依つて停止せられる。此れから滑つて出る事は出来ぬ。通行者は伴つて後に墜落して来る雪に依つて完全に蔽はれ埋められてしまふ。(X、Ehler - Monch の場合參照)

C、(X)の傾城に依つて擾亂されて惹起された雪崩は段々の傾斜の緩やかになつてゐる斜面、廣い谷底の平地に滑り落ちて来る。此の場合には上層に出てゐる事をつゞめ、助かる可能性はA及びBの場合に比して甚だ大である。

後記 近來特に雪崩に就いて論ぜられ、注意を向けられる様になつて来た。又外國文獻の翻譯も少しせぬ。が此處に譯した一文は表題に用いて置いた通り：Die Gefahren der Alpenの Von Schnee 中の一章 Von den Lawinenであつて、敢て拙譯を御目にかける所以は、此の Zaimondy-Paulde の書が實例に富み、又最近迄のこの種の文獻中相當な地位を占めて居る爲めに何等かの参考に供さるれば幸甚と考へた次第である。

譯文中不備の點の多き事を感ふ。御氣付の點は御教示を乞ふ。

—(一九二九・一・二三)—



アルペンクリマに就いての一斷片

伊 藤 愿

山岳の危險性はその天候狀態に非常なる密接な關係を有してゐる。登山の成否は常に天候の如何に依ると云つても敢て過言ではあるまい。特に冬期登山に於てはその目的遂行に就いての最も重大なる決定權を握つてゐるものは天候である。故に天候こそは登山者の生命及びその活動に於ける決定的な役割を演じてゐる。然し乍ら最も良く晴れたまふ事は必ずしもその晴れた日の登山を成功せしめるものとは限らない。特に冬期或は春期に於て積雪上にルートを求むる場合は雪崩に就いての複雑なる條件を等閑に付す事は許されない。若し晴れた日に爲された登山が成功を齎したとせばそれは晴れたまふその事よりも寧ろ當日の雪

質が良好なる狀態にあつたまふ事に依據するのである。又雪崩の條件中最も重要な雪質は當時の氣濕と密接な牽連關係を有する故に數日來乃至は數十日來の天候の狀態の關調だつた事も重大な影響を有してゐる。何となれば氣濕の低下せる狀態に於て多量の降雪のあつた直後には晴天と雖も雪崩の危險がある。否か、る晴天こそ此の多量の降雪に雪質の急激な變化を齎し、雪崩形成の條件となる事を忘却する事は出来ない。

斯くして冬期登山は最も複雑なる條件のコンビネーションの中に在るのである。そして之を解釋する唯一の鍵はアルペンクリマ乃至はメテオロギーである。假令それは未

が現在の我々にはそれを充分通達には利用出来ないにしても、その解明に就いては幾々たる光より興へられないにしろこれだけより方法は無いのである。然し乍ら遺憾な事には我國に於ては我々登山者に直ぐ役立つべき山岳地方の——特に信濃越後地方の高山に於ける積極的に行はれた専門的な氣象観測の無い事である。従つて又此の地方に於ける高山氣象観測所の無い事である。立山雪室に一つ所あるが我々に肝腎な冬期には所員は下山してつて観測はしてゐない状態である。瑞西、獨逸等には完全なる高山氣象観測所が方々にあり冬期もその観測を繼續してゐる。フーベル博士(Dr. Huber)の如き既に一九〇一年より一九一〇年に到るまで二千六百六十二米の Zugspitze に於て観測研究をなし、その十年間に亘る研究の結果を纏めたる著書 „Das Klima der Zugspitze“ を發表してゐる。

第一表 平均温度

場所	G	Z
月		
1	75.2	75
2	62	81
3	79	90
4	115	121
5	119	134
6	173	165
7	175	184
8	180	192
9	125	121
10	75	87
11	69	74
12	77	87

註、G、及びZに就いては註1参照。

Zは雪の降る事がGより多い爲に降水量が多くなつてゐる。数字は加減ミリメートルを示す。

第三表 天候

場所	G	Z
天候		
晴	66.6	50.7
曇	110.8	150.6
霧	22.5	244.7
日光直射	27.4	25.9

註、この表は三百六十五日を必ずしも、この四つに分類した

場所	G	H	Z
月			
1	-2.5	-2.5	-11.5
2	-2.5	-2.7	-11.5
3	2.0	1.0	-10.6
4	6.2	4.6	-7.8
5	10.8	9.5	-3.4
6	14.0	13.0	0.1
7	15.5	14.5	1.4
8	15.5	14.4	1.8
9	11.7	10.6	-0.4
10	8.0	7.2	-3.2
11	1.6	1.1	-7.5
12	-0.7	-1.6	-9.7
年平均	6.57	5.85	-5.20

お聞き。此表に附ける表は小生が現在手許に原本を持つてゐないのでそれをグラフにしたものから数字に移しました。就に少数第一位は原本と多少相違したかも知れません。それが低め各項と年平均とが少々相違しますが、その相違は誤りして置きます。此處に附ける三表はフーベル氏の書中にあるものです。

註。I。此の表はGは Garmisch-Partenkirchen と云ふ七百七十七米の地點で、Hは谷の中にある場所。Hは九百九十四米の地點にある Hohen-Peisenberg と云ふ、その地形は平坦にある獨立した丘陵の麓の場所である。又Zは二千六百六十二米の高度を有する Zugspitze と云ふ峻嶒たる山である。此の三ヶ所に於ける一九〇一年から一〇年迄の十年間の平均温度である。

第二表 平均降水量

月	高度
1	300
2	700
3	1200
4	1800
5	2000
6	2100
7	2000
8	2700
9	2100
10	2500
11	1800
12	1100

ものには非ず。凡G地とZ地との天候の割合を示したものであつて四つの合計は一年の日数と符合せず。G、Zは註1参照。其他雪天の各月に於ける統計等幾々あり。此の表はそれ等統計の一部分にすぎず。

又ミュンヘンにある獨逸山岳會の山岳博物館 (Alpen Museum des D. u. O. A. V.) には種々なる山岳氣象に就いての研究、文獻等を集めてゐる由である。

第四表 零度等温線の高さ

註、此の表はその月に於ける零度を示す高度の表である。即ち此の表に就れば一月に於ては海拔三〇〇米の地點は既に零度を示す數にそれ以上の高度を有する地點は僅く未だ零下にある事を示してゐる。そしてこの零度等温線は一月の三百メートルを最長として八月には三千七百メートルに昇る。其に二千六百六十二米の高度を有する Zugspitze を例に就れば六月より九月迄に概

が零下に下る事はないが九月より六月までは零下に下る事を示してゐる。此の表はビリアス山の場合に最も重要な防雪具の設置を知る事が出来、又雪崩形成期間等を知らに就いても甚だ参考となるものである。

そしてこの表に使はば三千七百米以上の地帯、山頂部は常に雪度以下にある事を示してゐる。故に三千七百米以上の高度を有する Windpiss, Ischleppass, Mauterhorn, Mt. Rosa 等の高峰は八月の積雪と雖も雪度以下の気温を示す事を知る。

又之の表を工夫する事に依つて減積期の一年に於ける積雪の無い月及びその日数等も知る事が出来る。

第五表、降雪日及積雪日

月	降雪日	積雪日
1	15	31
2	16.6	28.2
3	13.5	31
4	20	30
5	19.5	31
6	17	28.6
7	11.9	17.4
8	11.1	13.1
9	12.2	18.4
10	12.5	22.3
11	13.2	27.1
12	13.9	31

註V、此の表は同乙の山岳に就いてその毎月の降雪日数及び雪の積つてゐる日数に就いての統計である。此れは何と云ふ山か詳

らかにしないが然し積雪にも降雪のある所であるから三千五百米以上の高峰の観測であらう。又二月の積雪量が二十八日と成つてゐるのは同年のあるが爲めか、平均日数が現はれたのである。此の表に使つてその山に登る時局其他の決定を爲す事が出来るわけである。

然るに我國に於ては日本アルプスに於ける氣象観測所を有せざるが故に正確なる氣象を知り得ない。只僅かに二、三の水力電氣會社が小規模の冬季所を有して水量の測定の際に天候観測を爲してゐるに過ぎない。それも極く最近の事に屬し然かも専門家の手に依つて爲されるのでないから不完全は免れない。

然し乍らこれは現在我々が知り得る範圍の冬季のアルプス地方の唯一の貴重な参考資料である。

第六表 上高地に於ける氣象観測表

月	日	天候	風向	気温
12	1	晴	南	-6
	2	曇	北	-9
	3	曇快	北	+1
	4	晴	北	-4
	5	快晴	北	-5
	6	快晴	北	-7
	7	曇	北	-7
	8		北	-8.5
	9	曇快	北東	-12
	10	晴	南西	-8
	11	曇	北	-6
	12	曇	北	-2
	13	晴	北	-10
	14	曇	北	-5
	15	曇快	南西	0
	16	快晴	北	-2
	17	快晴	北東	-0.5
	18	晴	北	-8.5
	19	快晴	北東	-10.2
	20	曇	南西	-13.3
	21	晴	南西	-10
	22	晴	北	-18.5
	23	曇		-9.9
	24	曇、小雨		-15
	25	晴		-13.3
	26	晴	北	-18
	27	曇	北西	-16
	28	曇	北	-7
	29	快晴	北東	-5.2
	30	曇	北西	-7.4
	31	曇	北西	-13

月	日	天候	風向	気温
1	1	快晴	北西	-9.5
	2	快晴	北	-14
	3	曇	西南	-16
	4	晴		-22
	5	晴	東	-21
	6	快晴	北	-15.5
	7	快晴		-10.5
	8	曇	東	-20.5
	9	晴	南西	-21
	10	晴		-16.4
	11	快晴	東南	-9.4
	12	曇快	南	-7.4
	13	晴	南	-18.7
	14	曇快	東	-17.2
	15	雨小雪	東	+0.4
	16	曇快		-10.8
	17	曇快	北	-17.2
	18	晴	北	-21
	19	曇	北	-20.1
	20	快晴	北	-9
	21	晴	北	-12
	22	曇快	北東	-11.6
	23	快晴	北東	-12.9
	24	曇快	北東	-13.5
	25	晴		-17.2
	26	曇快	北東	-21.3
	27	曇	北東	-5
	28	曇	北東	-15.1
	29	曇	北東	-14
	30	曇	北	-18.3

月 日	天候	風向	風速	
			max.	min.
1 31	小雪	北	-12	-18
2 1	曇	北	-2	-10
2 2	晴	北	-4.5	-13
2 3	曇	南	-5	-10.5
2 4	晴	北	-2	-18
2 5	曇	北	-3.7	-12.5
2 6	曇	北西	+1.5	-6
2 7	曇	北西	-2.5	-12
2 8	快雪	北	-3	-8.5
2 9	快雪	北東	-3	-7.5
2 10	快雪	北	-8.5	-12.1
2 11	晴	ナシ	-9	-14
2 12	快雪	北東	-4	-11.5
2 13	快雪	南	-2	-12
2 14	曇	北	-2.5	-14.5
2 15	曇	北	-6.5	-11.5
2 16	小雪	北	-2.5	-10.5
2 17	曇	北	-5	-8
2 18	曇	北	+1.5	-5
2 19	快雪	北	+2	-11
2 20	曇	北東	-2.5	-11
2 21	晴	ナシ	-2	-17.5
2 22	晴	北	+4	-14
2 23	曇	北	-2	-5.5
2 24	晴	北	+1.5	-11
2 25	曇	北	-8	-12.5
2 26	晴	北	-8	-12.5
2 27	晴	ナシ	-5.5	-16
2 28	曇	南	+3	-2

月 日	天候	風向	風速	
			max.	min.
3 1	雨	南	+3	+0.5
3 2	小雪	南	+7.5	-3.5
3 3	快雪		+1.5	-14.5
3 4	晴	北	-8.5	-13
3 5	曇	南東	-0.5	-9.5
3 6	晴	北	+3.5	-9.5
3 7	晴	南	-4	-17.5
3 8	曇	北	+0.5	-10
3 9	曇	北	+1	-10
3 10	曇	西	+3	-6
3 11	曇	西	+2	-7
3 12	晴		-2	-12
3 13	快雪		-3	-8.5
3 14	曇		-7	-13
3 15	曇		-2	-12
3 16	小雪		-1	-11.5
3 17	曇		-0.5	-15
3 18	曇		+7	-11.5
3 19	快雪		+2	-2
3 20	曇		+4.5	-6.5
3 21	晴		+1	-8.5
3 22	晴		+3	-10
3 23	曇		+6	-3
3 24	晴		+7.5	-5
3 25	曇		+6	-3
3 26	晴		+7	-4.5
3 27	晴		+9	+1.5
3 28	曇		+13	-2
3 29	晴		+6	+1
3 30	晴		+18	-6.5
3 31	曇		+12	-4

註Ⅱ 此の表は一九二八年十二月より一九二九年三月末に遡る上高
地の大正地所の狩川水力発電取入口に於て、観測されたもので
ある。温度計は風向きあまり無き處で然かも地下に埋められて
あるだけであるがこれだけは設備に於て誤る所あるは加減で
ある。そしてこの観測方法は午後十時から翌朝の午前十時迄の
を観測の午前十時に観測したものだけである。

外國に於てはたゞそれが高山上の必要から
さへ云へる所の山岳地方の氣象の正確な完全なる研究が爲
されてゐるので、その結果を直ちに登山の科學的研究の爲
めに利用する事が出来るが、我國の現状としては獨立或は
其他の完全なる観測所が設けられざる限りは他に何等の補
るべき何物をも有しないから不完全ながら當分の等を參考
にするより方法が無い。然して之は大概の場合直ちに以つ
て利用する事は出来ない状態にある。何となればその観測
地點が山岳の持つ特異性の影響をあまり鋭敏には受けない
處にある事、即ち水電の冬季の直接に目的とする處はその
水量の測定にあるのであるから無理もないが大抵は低所で

観測してゐるのである。尤も唐松岳の尾根にある日電の冬
舎所は理想的な高所であるが、こんなのは稀である。
そして一つ理由はこれが登山者の根據地となるべき
地點と異つてゐるが爲にその観測を爲されてゐる地點と
の表を使用せざるを登山者の根據地との間の或る等差を
見出さねばならぬ事である。

註Ⅲ 例を挙げれば狩川水力発電の取入口の観測と清水屋に
在してゐた一週間、或は一の後の一週間等に於て自分で観測した
結果とは相當換算の面倒な差を有してゐる。

又、山岳の或る特定の地域は夫々その地域特有の地形其
他の關係に依つて高度の上昇に依る變化以外の氣温の變化
の特異性がある。それ故にその地域の氣温の狀態を知る爲
めにはその地域の特異性を知り、又その實際の氣温の變化
狀態を知る必要がある。

第七表

註 VIII 此の表は今年の二月上高地に於て山の気温の特異性を知る一つの資料を求めんとして上高地に於ける観測と西嶺登攀中の観測とを行つた時のものである。右欄の数字はアネロイドのバーミヤーに読まれた気温を示す。求むべき高度に換算してゐないが表中五六〇ミリは西嶺頂上。上高地にては通常六四四—七ミリ

時 刻	上 高 地	西 嶺 登 攀 中
A.M. 12.20	- 6(日 陰)	
4.00	- 6(日 陰)	
4.55		- 0.5(日 陰) (627m.m.)
5.40		
6.00	- 6(日 陰)	- 1 (日 陰) (609m.m.)
6.40		
7.00	- 3(日 陰)	- 0.5(日 内) (580m.m.)
7.25		
8.00	+ 10(日 内)	- 1 (日 内) (562m.m.)
8.15		- 4 (日 陰) (562m.m.)
8.15		- 6 (日 内) (560m.m.)
8.55		
9.45	+ 12(日 内)	+ 5 (日 内) (579m.m.)
10.00	+ 13(日 内)	
10.30	+ 14(日 内)	+ 1 (日 内) (598m.m.)
10.52		+ 6 (日 内) (622m.m.)
11.00	+ 14(日 内)	+ 2 (小雲) (632m.m.)
11.25		
12.00	+ 17(日 内)	
P.M. 12.45	+ 7(雨)	
1.00	+ 5(雨)	

を示して居つた。然し左欄のこの日は天候が激変したのと温度計を日光直射の處に置いた爲に誤謬あるデイクムとなつてゐない。(この日光直射の點に就いては西手井氏の注意を受けた。)

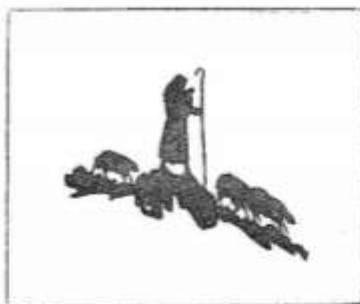
只參考までに此處に尚ほ述べたい。
観測の結果を實際に應用する際に於てその換算に用ひる観測所と根據地との等差値及び特定の地域に於ける気温の變化の特異性は精密に何回も反覆して確實なるもの、却くともあまり變動せざる程度のものたるを必要とするは勿論である。併し乍らこの點の研究は最も困難なるもの、一つである。

然し尙も尙も気温の研究と相俟つてその雪質に及ぼす影響を研究すれば冬季の最も重要な研究對象たる雪崩の研究に重要な科學的基礎の一つを見出す事が出来る。勿論雪崩の成因には地形が大きな役割を占めてゐるに於ても。

斯くしてアルペンタリヤの研究は登山者の最も緊要なる問題である。何となれば初めに記載したるが如く、雪崩に

せよ、ピツタにせよ登山者の Leven und Tun を左右すべき山岳現象の多くがアルペンタリヤに懸つてゐるからである。

併し乍らこの問題はあまりにその對象が大きく、種々なる方面から研究を進めなければならぬのでその結果が現はれるには甚だ前途遼遠である。之は杜撰なる断片研究の第一回の發表であるが右の如き方針の下にこの研究を續けて行き度い。たゞへ完全な結果は得られなくとも却くとも我等が山に於て實用に供し得られる底の證據が現はれたら満足である。そして又専門的の素養の無い私自身に未だ此の研究は何等の満足な一の結果も現はれないが此のデイクムを専門家に見て頂いて何等かの批評をして頂けば満足なのである。





年
報

昭和二年度記録主要目次

○第一回御温泉スキー合宿練習.....	(1)
○第二回御温泉スキー合宿練習.....	(2)
○三月の植ヶ岳.....伊藤 郷.....	(2)



雪の嶺

伊藤 郷

昭和二年度

◎關風スキー合宿練習

参加者 伊藤、西村、春月、砥岡、野村、湯川、伊藤太、石屋

村上、山本、水野、安井、喜多

以上十三名

十二月二十六日 快晴、雪、

午前九時一軒高屋敷、正午關風宿、途中休息を経て歩行がはかどらなかつた。それでもスロープを見つけて練習し乍ら進む。午後には降雪、然し雪の意気揚然、入浴後日暮まで猛練習。

練習時間午後二時より四時三十分迄。

十二月二十七日 晴、微小雪、

午前中数人で丸山に行く。昨夜の降雪のためラッセルひとし。他の人々は近くで練習。午後は皆で墓の澤で直滑降の練習、殆ど終日小雪であつた。

十二月二十八日 快晴、小雪、雨

朝からだん／＼天候が曇りなつて、午前中丸山に行つただけで後はノド。

十二月二十九日 晴、雪、

昨夜の中に二尺も積つた。午前中はラッセルをして直滑降の練習。

習。午後一時中食に歸り湯川、石屋を除いた全員乗るの尾根にのぼる。雪固く途中で引きかへす。暗くなつてから宿についた。七時半、初心者には少々無理だつた。

十二月三十日 晴、小雪、

快晴が又二尺降り増した。第一次の合宿は今日で終るので早朝から出掛ける。中食後ボーデンを練習して零時半安井、二時伊藤、伊藤、石屋、野村、山本下る。皆丸山の側まで見送る。四時西村東京に歸る。汽車が不調の由練習者心配する。

十二月三十一日 晴、快晴、

起床八時、朝食八時三十分、十時三十分迄スキーの平入れ、それがすむと直ちに全員(春月、砥岡、湯川、村上、喜多、水野の六名)裏のグレンダでクリスタルスキーの練習。内山先生に御會ひして丸山で一時間走り御話する。零時半三十分降、二時三十分再び裏のスキーで練習。三時三十分より墓の澤に下る。五時三十分止めて六時に歸る。起床十一時。

練習時間 前十時三十分より後零時半迄。

後二時半より五時半まで。

飛び出さうとするのを氣にしつゝ淺間山に餘好で下迄降りた。重太郎も来る時置いてゐたスキーを捜し出して来て登く。針葉樹の間を縫つて滑走。直ぐ針葉樹の小屋に着く。

何れにせよ一の俣へ行く時にはこの邊を越るのだから必要の品以外はここに置いて置く。急に雪が細くなつて静々とスキーを走らせる。一日中国の光を見せなかつた灰色の空から白いものが降り出した。雨も混じる。小坂平に来た頃には金身びし濡れになつて了つた。河童橋を渡つて常盤を歩ける。一寸でも上がれと笑つてくれるが里から雪が落ちる位になつてゐるので氣の毒だから立つたまゝで茶をよばれて、一匹捕れてゐた兎をわけてもらつて清水屋に送る。五千尺の方は建て方が悪いので火を焚けば煙が充満して耐へ難い。

こんな天候の具合では兎れかも知れないので静在となるどころしても類な方と云ふ事になる。清水屋には主人が一人巻をしてゐた。恒盤にあたり乍ら硝子窓を叩いて霞障を降める。虎雪がひどくなつてくるにつれて、視野が段々と狭縮されて、遂に硝子窓に打ち當る雪のみがわかる様になつた。時によるとこの頃でも二尺も三尺もたまりに積る事があるさうだ。

熱い感る火の傍で夕食を済ます。明日は晴れる見込みがないとの事だから静在のつもりで國に就く。虎雪は静々やまきうにもなく

凍く狂つてゐる。

二十二日 晴。

清水屋(九、〇〇)——白樺小屋(二、〇〇)——ノノ小屋(三、二〇)

目を醒すと朝日が射してゐる。外へ出て雲霞計を見ると安全な場所に置いてゐたのに雲霞計が壊れてゐる。赤や緑増を分けてもらつて出掛ける。カンカンの上天気だから日が強い。途中で雨神道の方へスキーを走らす。白樺の官舎によつて昨日置いた荷物を出して来る。雪分重くなつたがどうせ一の俣迄だ。スキーにはうんとワザヲスを使ひつけて一の俣へ向ふ。坪川も上高地附近は多量の氷が流れてゐるがこの邊からは完全に雪に覆はれてゐる。三段滑走が良く利く。然し荷物が重いかから腰がひどく疲れる。雪の薄い所は太陽の熱の作用を受け易いからマルモア・アルストになつてゐる所がある。大體の雪質は微粒状質を形成してゐる。積尾谷との割合を越えた頃から又氷が流れてゐる。シュルツを聞けてゐる。こんな場所が三四箇所ある。世帯はスキーを履ぐのだからラングリーマンは事だ。膝には面倒になつて浅い所はスキーを穿いたまゝ水中に足場を求めたりした。流れる所には岩盤が多量で滑つてゐる。麓降りたり滑をへつたりして一俣に達し、屋根の雪を降ろしたと云ふものゝ末が三尺以上も屋根の上に積つて

ある小屋の内へは窓から入り込む。雪の穴を出入するのだ。何れともあれ陽のある内に前にする爲の杖を樹々から振りちぎつて来る。葉ツバを踏つて土間に幾つも踏痕をつくる。

食事を済まして歸る仕度をする。この小屋には毛布や布圍が十枚宛あるとの事だつたのに毛布は四五枚だし布圍は縞のハミ出たのが若干あるのみだ。重太郎はこんな布圍は嫌へようにも嫌へられないツツやいてゐる。まあこれで四五日泊るんだ。

防寒具を持つて来てゐたのでこれで事足す。

二十三日 晴。

小倉(五、三〇)——捨澤小倉(七、一五)——スキーダボー(一〇、二〇)——金巻——(一、一〇)——捨澤(一、四五)——(一、一〇)——捨澤上(四、二〇)——(一、一〇)——捨澤(四、一五)——スキーダボー(四、三〇)——(四、五)——ノノ小屋(六、二〇)

三時目が醒める。窓を開けて雪穴の中から煙を眺める。雪降しい足だ。良く晴れてゐる。ラナルを提げて穴を叩き出す。底い。底は計は雪下十二度を示してゐる。大丈夫だ。バロメーターもノノを示してゐる。今日は晴だ。重太郎は焚火を作つて鍋の用意をした。昨日は煙がひどくつて目が痛んでしかたがなかつたが今日は慣れたせいかさうでもない。

四時。五時。天候は佳然として好晴を暗示してゐる。準備は出

家上つた。小さいリュック二つにはザイル、シュタイゲン、ビツナル、黒パン等の必要の品々と防寒具、スキーには都めからシューズをつけて出掛ける。昨日の晴天による太陽の熱と昨夜の静寂とで雪はカリカリのハルツ・アルストとなつてゐる。カンカンと金属性の音をさせながらスキーをカンカンして進む。

二の俣もやはり雪が融しいから大きいシュルツが出張してゐる

スキーを脱がねばならぬ。流れが早いから徒歩に一苦勞させられる。

雪の中に氷を入れる事は直ちに凍傷の恐れがあるから慎重に

避けなければならぬ。然かも雪は四尺以上あり、後は早く且つ

奔流である。水中の新はネーグの無いスキー靴をともすれば凍

らかし危く流の中に足を浸さんとしかける。案外つまらない所

にひま取つて了つた。

少し宛倒斜が急になつて来る。赤澤から大きい雪圍を出して雪

駄の跡が道を塞いでゐる。見上げると大きな白樺が倒されてゐる。

樹々の枝が雪で重たれてゐる。雪の重さで破壊されたとの噂のあつ

た捨澤のスキー小屋へ来た。

二階の大半を吹き飛ばれて無残な形になつてゐる。勿論すべては雪に埋没されてゐてその残はされた残りの屋根の一部のみが露あられるのだ。雨かも粉雪が一掃充満してゐる。思ふに之は雪崩でやられたものであらう。雨かもそれは捨澤の方から来た雪崩に

よつてでござさうだ。それは解紙の破片を小屋の奥方の上手隅から二十歩位を越隔にある大きな落葉松の根元の所に見付け出したからどうしてその解紙の尾端の足端から来たか疑問でせられたものであらうと疑はれる。而かもその尾紙には未だ「ヨム」を一部分認める事が出来た。新雪野雲霧の爲に誤解されたものであらう。附近の樹木の枝葉や枯れた枝々の有様はこの考を一層固く裏書きするものである。あたしを見導つたあたりもこの考の實相道からは音状現象を導出してゐる。音の底を讀つて直ぐ發つて行く。最も大きいカーブを廻り切ると漸く新しい音線へ渡り、讀んで又の音線が鮮やかな音の響きに聞かれてゐる。左には大塊が横高に建ち、その自體の尾端を斜目に輝かしてゐる。音の底には東縁の音が靜やかに雪の上に沈寂されてゐる。その壯大な音面の中を人の子が雪の山嶺が暴子と突力に跳せられて登るのを觀え、又たや半ら雪の上を這つてゐる。

大徳の産の露の下に念無針は露貫が大徳貫であつた。マ
ミーア・タルムユの上下に又孝孔性のウイグドグレッサが附屬して
二層となつてゐる。スキーは利かぬといふ。 運太郎は恐ろし
いと云つてスキーを脱いだ。自分はストッケのユビツタムを
着き立て突き立てて大貴小貴（近付い）と。一部分の露出がある
筒形で金網管に纏めてゐる。その露出部には太い水花が垂れ

「愛嬌を許さない。毒孔性の蟹がすつかり好かくしてゐる。ビツクルの趣向は増んど無い。ビツクルを使用してビレーするとしても、新しその計略である。蟹が剥落するが、又は自己の蟹群が誘因となつて蟹群を起した場合は危険を避くる事は不可知である。それで引き返すかきせめて頂上高に付ねぬにしても途中底征は行き度い。小船への乗組船はどうかやら行けさうだ。それからその乗組船のある岩礁——西南嶽とでも云はうか小船との間を千丈崖へ向つてゐる岩礁——を詔れば何とか良い方法もあるかも知れない。とも角こゝ能は望つた。こゝからはこの西南嶽を、南面よりむしろ千丈崖よりの帆き上げる。蟹風の情に岩面に雪の少ない北面を拾ふだ。岩の側目には氷が張つてゐる。手懸りが少ない。道太郎はダイヤモンドの細歩から注意してやらせなければならぬ。一體に我々の大夫は力量を頼みとしてやるのだからこんな點にかつては非常に困難を感じる。ビツクルを使用したり過激なものがあれば海面に巻き付たりして覆蓋なビレーを行ひつゝ一歩一歩頂上へ近付いて行く。非常な時間がかかる。一ビツクル登る毎に立ち留つては次のビレーを繰し求めつゝ吹き付ける蟹風に晒されつゝビツクルを振るつての烈烈なるアルバイトがなされてゐる。あまりの困難さに就はしきりに引き返したがる。然し無謀に返らない以上斷じて頂上を極むべきを主張して一ビツクル危難な戦を繰けて

「この本は、読者の心を揺るがす力がある。そして、読者の心を揺るがす力がある。」

鏡やイヤミの反射の中をゆるやかな然したゆななきテンポで鏡の五時間の変遷を映した。鏡像の小屋がその屋根の一端を隠してゐる。地主附近の瓦葺の民家はユカデギツトと定めて風によつて揺れる。粉雪を舞けやも露パンを鳴る。三月の雪に反射する強い太陽の光の中でさへこの様に寒い。若し、寒雪に舞はれたとしたらどうであらう。来月三月は冬の時節と同じ状態を呈する事が確ではないから之等の點は良く研究する必要がある。

スキーやアイゼンに代へられてザイルを肩にし、ツナメルを胸につゝ一歩も一歩も進まずを試つてアイゼンは破いた器にまゝつて行く。槍の穂端に到達する。西嶺から吹き上げる風を耐けて、對小屋の方へ歩き進む。大流石の小川の壁は全然露出してゐる。壁をやつてふも右壁にはひつれがべつたものと云ひつてゐる。層層の雪壁は驚かぬ。ツナメルで倒れる位である。若し壁内へ来があまり強くなければ飲食方法の如何によつてはこの對小屋は使用出来ぬかも知れない。若しその晩には冬期登山の狗は一役の進歩が指實される事に懸望し得る。

アンデイレインしていき／＼、緑の緑に染まつく。朱と雪とでべつたりと藍はれて静は暗んど出てゐない。ビラケルでストウパエを肩みつゝ一歩一歩と登つて行く。夏前の雪の駄馬はとても善者の

行く。この後には更で、無効では無い對空のオートである。然かも最後には甚だしくなつてから一枚射と一回目が潰れてゐるがチーミがあるので一時手こずる所である。此の場合だけは着し不安に附かれてデイルをその上方の雲に投げかけてスリッパした時萬一の用意に備へた。斯くして二時三十分迄に彼の頭上へビザケルを立てる事が出来た。あたりの昏闇。機高は遙かに是下に向つてゐる。立山五合峠ノ木の方途すべて塔に蔽はれた三月の山々が下の様はつてゐる。今自分はアルプスの王座の頂上に立つてゐるのが、岩は雲を抜けてゐる。新しい洞の半分は雲に隠れてゐる。旅風は動も、到底長く此處に留まるは許されない。十分の後再び、登つたオートを下へ滑る。ゼレーゴンを支點として南方にペンデュラムになる下降路を行ひつゝ二人が轉倒へつけば方を解いて引つぱつてザイルをはばさす。想はずべて包まれてゐたので唇の裏面にザイルが横まれた形に免れた。降りき此のツルベ式を續けた爲に比較的容易であつた。降る途中で東太郎はビザケルを落して了つたが取りに行くのに二時間にかゝると思はれるので諦念した。而つ十五分再び無事鞍部に跨る事が出来た。アンザイレを解いて早や日役宜くの空まで緩くなった雪の上を駆けつてスキーデボットに着いた。最早や雪の積りは薄づいてスキークの使用をゆるさない。エイモンはいたままで歩きまはつても構はない願ひだ。やむ

なくスキーを置いて宿屋を下る。大體小屋の下の方に到つて漸く今少しく寒だスキーを振替する迄には通らない雪の秋意が透きれてゐた。アイゼンをスキーに代へる。アイゼンが素手にビヤビヤや喉ひ付く寒冷の涙は著しく烈しい。針筒針し乍ら顔面をかけるがスキーが滑り。雪質が急激に變化した所では猛然に投げ出されて了ふ。宿屋小屋のあたりで自分のわきをスキーが丹方アツト見る間に走つて降つた。重太郎がスキーを踏がしてアツたんだ。直ぐ、凍りついた雪の上を踏げたスキーを踏みふた。然し大分下方で止まつてゐた。最早宿屋のスキーには薄暗い夜の霧がしのび寄つてゐる。トボリ／＼と重太郎の力なく雪に足を取られ乍ら降りてくるみじめな様子。二の俣の往渉は二度目だったから大分器用良くなった。小屋だ。一の俣小屋だ。六時二十分。疲れ果てた體を凍べりの上に横たへてうんと焚火を煽にする。朝日は一日中くもりと曇る。コロアにウイスキーを割つて快い陶酔に入る。二十四日 晴 晴夜

歩つくりと宿屋をした。目を醒ますと霧が小屋の中を蔽はしてゐる。今日はあまりに良い天気だ。休養には惜しい日だ。ザイルを結枝に投げて薪を集めた後は薪ツバを雪の上に敷いて凍べりをその上に持ち出して毛皮を滑込んで日向ぼつと。一の俣の奥に資金が靜かに銀色に光つてゐる。アリズムを持ち出して心行く迄ノビ

ニズムを享樂する。
二十五日

小倉五、一五——横尾屋小倉(六、四〇)——瀬谷と本谷田合(七四〇)——熊の平スキーデボット(八、四〇)——九三〇——北尾の南のスキー(二、〇〇)——スキーデボット(二、四五)——一、〇五——大島高吉氏の遺囑を知り尾崎俊康の遺腹——「の俣小倉(六、三〇)——この日の天候は晴晴、十時半頃より霧、午後五時半頃より雨なり。

三日目が限る。昨夜の最高温度は零下三度。雪は少しく降り気味だが一杯足が出てゐる。今日は小屋の内に於けるベケツの氷も完全に未つてはゐない。一昨夜もその朝夜も凍つてゐたのに五時十五分過ぎの時に同じ準備で出陣。横尾谷に入るのに入口よりヤザ尾根の狭いのを越して横尾の界小屋の直ぐ上に出たが今から考へると決して何れが時間を経済的かわからない。界小屋に寄つたら人夫の杉本と云ふのが一人留守をしてゐたりして、熊屋は熊屋へ午前二時から出發したとの事だ。重太郎は一昨日宿で窓口を降としたのでその代りを杉本から借る。各に完全に揃まつてゐる本谷との出合から直ぐ直ぐに洞谷に入る。風がひどい。熊屋の北尾根が朝日に映えてゐる。熊屋の人は二人スキーを二臺履着にして熊谷をかけ乍ら下つてくる。大島氏等の一行四人が北尾根を登つて

みられるとの事だ。熊の平で熊本に熊屋を登つてこゝをスキーデボットとする。アイゼンを穿いてゐる時ムツカールの腰がすく。熊屋の北尾根の第五峯に何か高いものが動くのでアリズムを出して眺めると四人の姿が見える。熊屋の一行だ。第四と第五の鞍部に通ひ道は見つけたがそれから僕は自分達は北尾根に向つたので知らない。自分はアイゼン、重太郎は棒をはいて北尾へかゝる。熊谷が急だ。直ぐそこに見えてゐて仲々登りだしたへがする。十時半頃より段々霧がかゝつて来て熊に熊屋となつた。然し直ぐ上が北尾だからと思つて直ぐ直ぐに上へ上へとゆるやかなペースで登つて行く。あたりの見物が少しもつかない。岩も見えない。只灰色があたりを支配してゐるのみだ。

熊屋所へ取りついた。何處かのコルだが場所がわからない。向ふ側は恐ろしく暗い。重太郎はそれは熊屋側である事を主張する。この山の事は自分にはわからない。二人でこのあたりを三十分ばかりも歩き廻つて見る。萬一の用意に登つて来た足跡だけは見えない様にして。

只の一分でも、否一瞬でもあたりの熊屋を許しては男れないだらうか、すれば場所も明かになるだらう。熊屋の中で無定見に彷徨する。それは我々に取つては最も軽率な事、なすべからざる事である。遂にこの地點で十二時迄待つ、若しその時に暗され

ば北尾を極めて若し明れなかつたならば熊谷降るか何れかと決めた。熊屋の中で熊谷降からの風の中に閉つて天候の恢復を待つ一瞬。今日は朝から非常に暗い。これが暗いのだ。温かいのが熊谷だ。霧が熊谷に閉着して凍らずに降となると云ふなんて事を見て天候の良くなる程の望も消え失せた。十二時。熊谷は切つて立ち上つた。到着した地點のあたりの岩の隙子を足登えて今年の夏このあたりを待てるより外仕方がない。此の事は重太郎は非常に残念がる。一寸軽い氣持で皮肉つてやつたのが大體僕の心に深く響いたらしい。滑まない／＼と云ひつゝ、せめて場所の見當でもつけて置きたいと云つて降りつゝ右の方へ左の方へ走つて行く。こんな熊屋の中で二人が離れ／＼になつて了つては取りかへしのつかない結果を招くかも知れないので取止するけれども僕は聞き入れない。呼び合ひ下らともウイスキーデボットを踏踏る。こゝで休憩してゐる時熊屋の人数三人が北尾根の下の雪原を降つて来るのと出會ひ大島高吉氏の遺囑を知る。當日の熊屋は然し駄目であつた。

五時頃よりとう／＼霧は雨に變つて了つた。六時半頃熊屋と成つて一の俣小屋へ降る。

二十六日 雨 午後曇

一の俣小倉(九、二〇)——横尾田合(一〇、五)——四〇——五千

尺(一、二〇)

昨夜はとうとう夜中眠らなかつた。朝起きて見ると土間は既に氷水してゐる。そして雪が降りてゐる。「ずん」はして降れない。手早く用意して雨の中を上高地に引き揚げる。朝尾の自合ひより登道のS氏と一緒に五千人へ登る。昨日からの道程に加へてこの雨だから雪は泥状になつてゐてスキーが不快だ。重くて仕方がない。途中で雪原の雪原の大音響を聞きそれと同時に下又自谷の雪原の音と共に大きい足音をきいた。雪原の音は出て来た。幸ひ途中で雨も晴れた。河原の雪の音は驚く程だ。雪の音が悲しく美しい。まるで花の音だ。雪さんの小屋で、長く遊んだので五千人へ歸つたのは夜の晩くであつた。

二十七日 晴

五千人(八、〇五)——御本岡上(二〇、四〇—二、一〇)——

——御本止——鳥——松本

重太郎は鹿鹿の手傳ひに行く。御本の雪は昨夜の急な寒気でカク(に)硬く、アイゼンを踏いて登れたので大變楽だつた。S氏と御本止まで同行。

二ノ井の手前でもうスキーが使へなかつた。

温度 (續て前氏)

雪印は最高最低温度の内最低を示す

22.0	F.M.	5.8	6°
23	F.M.	6.5	2°
22	F.M.	6.6	-6°
	A.M.	6.6	6°
23	F.M.	6.6	-12°
	A.M.	6.6	-12°
	A.M.	6.6	-12°
	A.M.	6.6	0°
24	F.M.	6.6	10°
	F.M.	6.6	18°
	F.M.	6.6	-3°
25	F.M.	6.6	-3°
	F.M.	6.6	-3°
	A.M.	6.6	2°
26	F.M.	6.6	5°
	A.M.	6.6	-7°
27	F.M.	6.6	-7°
	A.M.	6.6	-7°

風 速

二十二日 午後六時 六二〇(一) 風

二十七日 午前五時 六三二(一) 上高地



八峰第五峰

雪多又大坂

昭和三年度記録主要目次

○五月の北アルプス歴史……………伊 豊……………(12)	○第三回補綴温泉スキー合宿練習……………(29)
○夏季登山紀行……………(13)	○補ヶ峰行……………(30)
南アルプス白峰行……………植田俊夫……………(13)	○野澤温泉スキー合宿練習……………(30)
立 山 行……………多田 徹也……………(16)	○三月の上高地、西穂高……………伊 豊……………(34)
高島嶺より針の木越え立山へ……………曾 川 幸 次……………(17)	○第四回補綴温泉スキー合宿練習……………(37)
黒部 鋸 生 活……………津 洋……………(21)	妙高アルパ行……………田 口 二 郎……………(38)
北アルプス穂高行……………安 井 博 樹……………(23)	妙高前山行……………田 口 一 郎……………(39)
鳥帽子槍縦走……………川 本 建 郎……………(24)	○三月の上高地生活……………香 月 廣 太……………(40)
○第五回大甲テント生活……………(27)	○三月の山上拾……………佐 岡 忠 夫……………(53)

昭和三年度

五月の北アルプス縦走

賞念、境、双六、三ツ又蘆原、黒崎、黒部五郎、上ノ岳、黒部、五色ヶ原、立山御来(一九二八、五、一一—二三) マンパ、伊藤屋、辻谷徳義氏(R.C.C.) 御来、中山御一、近藤一雄、太田八郎、今田重太郎(愉快より愉快)

五月十一日 曇、微小雨

壁前口頂砂流水力発電所(九、一五)——洞窟大助小舎(一〇、二〇—五〇)——陣——七曲り頭(一一、三五—五〇)——五曲り小舎(三、〇五)

十二日 小晴、微曇

岩小屋(六、〇〇)——常念澤田合(七、〇七)——三ツ又蘆原合(七、三五)——常念澤田合(一一、一五)——賞念小舎(一二、一七—二、五〇)——常念澤田上(四、三五—五、〇〇)——尖部池(七、〇七)——賞念池の上(八、〇〇)——雪割上にビヤード

十三日 雨、微曇、晴

常念澤田合(七、四五)——一ノ岳小屋(八、一五)

十四日 晴

一ノ岳小屋(七、二五)——二ノ岳合(七、三五)——黒流矢、渡渉——(八、二〇)——常念澤田合(九、五〇—一〇、〇〇)——大橋小屋(一一、四五—一、五五)——槍ヶ岳頂上(四、〇七)——常念澤田合(四、三五)——常念澤田合(五、一五)

十五日 晴

常念澤田合の入口まで戦りに出かける。

十六日 晴

常念

十七日 晴、午後曇

常念澤田合(七、一〇)——西麓(一〇、一〇)——食事——黒流矢、渡渉(一一、二五)——常念澤田合(三、一〇)——賞念小舎(三、四〇)——食事——双六合(五、二五)——三ツ又蘆原(六、四〇)——常念澤田合(七、〇五)

十八日 晴、微曇

二十三日 晴

(此の朝方峠の火災に會ふ。一行の時計の約四十分遅れて居たを知る)

常念(七、四五)——ススキー使用——弘法基屋(九、四五)——黒玉清水(一〇、一〇)——常念(一一、三五)——賞念——常念

⑥大甲縦走

五月廿日

一行 川本、大貫、今村、野田、藤袋、川畑、森、伊藤、柏木、風川、笠林寺、奥田——無休峠——石寶殿——東六甲——西六甲——飯倉六甲

夏季登山記録

南アルプス行

一行 香月隆夫、植田俊夫、
七月十三日 常念——駒ヶ岳五合小屋
十四日 駒ヶ岳——北嶺小屋
十五日 仙丈岳——常念澤田合
十六日 常念
十七日 常念
十八日 常念

常念小屋(九、四五)——常念澤田合(一〇、三八—一一、〇〇)——水島合(一一、二二—一、一〇)——常念小舎(三、〇〇—三、一〇)——三ツ又蘆原(四、三五)——黒部五郎(五、三〇)——黒部五郎の小屋(七、三〇)——黒部五郎合(九、五〇—一〇、二五)——二六二二(一一、二〇)——ススキー使用——上ノ岳(一一、二二)——上ノ岳小舎(一二、二五)
二十日 晴
上ノ岳小屋(七、三五)——太郎山三角點(八、一〇)——黒部頂上(一一、一五)——二六二二(一一、二〇)——二八三五M(一一、五〇)——ススキー——二八八五、二八八五——二、二五——ススキーの小屋(三、〇〇)
二十一日 晴、微曇
小屋(一一、一〇)——黒部中澤田合(一一、二五)——黒部中澤田合(一一、二五)——ススキー使用——常山(五、〇〇)——五色の小屋(五、四五)
二十二日 晴
小舎(九、一〇)——ザラ峠(九、二七)——澤土(一一、一〇)——一ノ岳(一一、四五)——地山往復——一ノ嶺(三、一一)——立山聖堂(三、四五)

十九日 霧夜
二十日 北岳—関ノ岳—石室
二十一日 鹿島岳—西山温泉
二十二日 出頂ノ巻屋—銀神

南アルプス紀行

第一日 霧ヶ原の菅原村登山 案内協力組合事務所に着いたのはもう十時すぎであつた。胸ヶ岳雨宮で神主さんと話しながら夜食を食べて、いよいよ鹿島山にとりかゝつた。と突然大雪は俄に降はれやがて雨が降り出した。奥に登つても朝々として聞く黒戸山の峰、そしてその麓寄たる森林、強烈なる雨につかれはたてたが時刻が時刻なのでがんばつてどんどん歩いた。やつと七時すぎ五合の小屋についた。濡れた荷物を乾かし、薄暗い火の邊で夕食を食べて後置れた寝床の上に投げた。

第二日 朝方は非常な好天気だったのでいきり立つて出発。頼ま手に磐石と樹木にかかつかきながら急峻なる懸崖を上りつめると七合目に来た。やれ一休みと一服してある間に又霧がかゝり初めた。嬌小な峰の本とじめくした落葉を踏んで狭い傾斜を上るといよいよ高山の特色である笹藪の一面に生えた。藪々としたスロープに出た。それからやつと峰にとりつくと其所に鳥居があつたの

で間もなく頂上だといきつて上り出したがごろ／＼ころがつた石と花崗岩の白さの外には何もなく、山は一面に霧で掩はれてゐた。やつと胸岳頂上にたどりついたが依然として霧は晴れず霧さに堪へながら夜食をし、霧の中で夜水時まで下つた。それから野呂川に沿ひて三時頃北澤小屋に着いた。

第三日 天気好く七時頃出発。長棒や白樺の森林帯を登りつめると遙か下に北澤小屋が見え、前には胸ヶ岳の白い雄然たる姿、頂上にて朝霧、北岳、地蔵風、富士山等が展開する仙丈の大カールに出た。實にそのカールは偉大だつた。然も其間には一面に高山植物が咲いてゐるのである。笹藪の緑と岩の茶褐色そして花、蘆葦、薔薇は只自然の美と偉大さを感ぜずにはゐられなかつた。その大カールを眺めながら小さい霧雲を模倣つたり、背島に戯れたりしながら仙丈の頂上を横めた。今日も亦霧霧く頂上に達した頃には既に霧がかゝつてゐた。それから静かにパン等を喰ひ、人一人上つてゐない植木を踏むたひに寛食、横川と下つた。材木に足を濡らしたり、又けつまづいたり、今迄の疲れが溜じて喰んだ半粒で走つた。前道に迷ひ道二無二歩へ、ころがる様に岩の岩林を分けて走つた時は全く夢中だつた。然も人夫はもうすぐだ等云ふのだから一心だつた。豫想外道かつたのでぐんぐんやりしたが終に目的地北澤小屋についた。小屋に着くと間もなく飽きつてばつ

り雨が降り出した。小屋には松本病院、慶大の方が居られて久しぶりに人に逢つて嬉しくなつた。

第四日 朝から雨だ、何とも仕方がない。休養券や一日休もうと一日中鹿大の方等とトランプをして、幾たり飲んだり喫つたりして陰氣に一日を過す。

第五日 今日こそ晴天だらうと思つて、シムラフザツタから遊び出すと、依然として雨は降つてゐる。皆諦観してもう一日滞在する事にした。

第六日 まるで春風の様にじめ／＼と雨は降り依然として晴れず今日も亦鬱陶しい人夫の顔と、寝むような背の顔を眺めながら薄暗い小屋の中で一日中寝なければならなかつた。それでも今日は夕方になると一寸西の空が赤く染まり雨は一時止んだので、この分なら明日は断然晴天と小躍りしながら一寸散歩した。

第七日 素晴らしいかな、昨日の喜びは夢の中に消え、皆は踊り夕なにもなる心細い食料を購めてため息をつく許りだ。もう之れ以上滞在は出来な。明日は断然立たねばならぬ。

第八日 雨は降つてはゐなかつた。然し依然として曇つてゐた。各パーティーとも各々用意を遂へ四日間の苦勞を留してくれた賓客

の小屋に別れを告げて増水した野呂川を喰んど獲られんばかりにして横切つて霧の中をゆく。然も雨のためずるずるになつた土を滑りながら夢中に上ると峰の一寸高くなつた所に来た。人夫はやれやれと休む、これが北岳の頂上である。何だ案外近かつた、とほつとして一寸飯を喰ひ周囲の風景がだめだからすぐ其所を出發した。間もなく雨が降り出し風が出て来た。霧は下から吹き上げられる風のため、ひゆうひゆうと日雨を走る、雨はよく見えない。霧は自然の恐怖の前に戦慄した。やつと岩壁に避難する事が出来た。滑つたため手足に少々怪我をしたのがいたくなつた。そして急にリユツタサツタの重さが感じられた。間もなく風が止んだので又関ノ岳へと登り初めた。風は半分静つたが霧と雨のため関ノ岳の頂上を只眺めたと言ふに過ぎなかつた。そしてやつと麓國をパスして鹿島小屋についた。

第九日 快晴。朝来光を霞へ勇み立つて出発。鹿島の頂上を眺めた時にはもう所々に霧が湧き始めてゐた。これで山は最後だと思ふと何となく名残りが惜しくなる。周囲の景色を寫眞に収め長い雪道を下りて大門峠の小屋についた。時刻は丁度寅だ。夜食を喰へ、さあ今日こそ西山温泉につけると、最後の奮闘心を起して出発。實に非常なスピードだつた。オームスピードと云ふべきか。奈良田で人に逢つた時は全く驚きかつた。やつと西山温泉につい

た時は七時頃だったろう。やれ安心だ。再生の思ひで歸につかり
永の山麓の寂れを休めた。

第十日 朝湯に入ると寂れが出てのびたくなつたがもう今晩汽車
に帰れると思つて出立する。横々下界に近づくにつれて日差の暑
さが感じられ大分人間に近くなつたと見えて所々には田畑の様な
物が作つてあり犬が居た。前ノ茶屋、出立ノ茶屋を過つて誤前に
飯沼が見え、喜んでゐると案内組合から救助隊が来た。兩方とも
喜慶を見て色々話しながら飯沼についた。(飯沼題)

立山班

一行 岡本、多田、香山、(黒川)

案内 佐伯平蔵

七月十六日 快晴

千坂——村木坂——ブナ茶屋

ブナ茶屋についた時には既に六時を過ぎて居たので道分まで行
くのを止める。

七月十七日 曇、微ガス

出立(七、〇〇)——仏法茶屋(一〇、〇〇)——道分茶屋

仏法茶屋を出てしばらく行つて岡本が膀胱のあじを忘れたので

又茶屋まで取りに歸る。道分についた時に雨が降つて来たので仕
方なく、こゝに宿る事にする。

七月十八日 朝ガス多し、午後曇

道分(一二、四〇)——室堂(五、三〇)

午前中はガスがあるので待ち。午後室堂に向ふ。室堂は百名登
くの人が居た。

七月十九日 晴、微曇、雨

室堂——立山——室堂

今日は雄山に行く。午後から雨が降つて来たので又室堂にすつ
こむ。故に五色ヶ原には行けなかつた。女學生が飯沼に登つたの
で雄山の神が怒つたからだ相だ。

七月廿日 雨

滞在

腹を計算してかゝるどうやら足りないらしいので最初の計算
を誤り針本越へで大町に出やうと決する。夕刻黒川が雨の中を登
つて来たので食料品が着へてうれしかつた。

七月廿一日 雨、一寸晴

室堂——御土山——室堂

午後から少し晴れたので御土山へ行く。寶島に着ふ。歸ると留
守の間に横や西村が来て食料を取つて行つた相だ。

七月廿二日 雨

一日滞在

立山温泉へ下る事に決断する。

七月廿三日 雨

室堂——立山温泉

道分まではつるすべつていかな道だった。松尾峠をこして
立山温泉に行く。

七月廿四日 雨

温泉——デラ峠——平小屋

七月廿五日 晴

黒部川の水の爲五色ヶ原に遊びに行く。

七月廿六日 曇

平小屋——針木峠——大澤小屋

七月廿七日 雨

大澤小屋——大町——松本

案内人平蔵を歸す。

七月廿八日 晴

脱命を待った。

七月廿九日 晴

松本——島々——中湯

鹿島槍より針の木越へ立山へ

リーダー 湯川孝夫

一行 橋本義明、喜多又太郎

人夫 丸山重吉

七月十六日 晴、微風、

大町(七、五〇)——島島(二、五〇)——二、五〇——冷
澤(合算)島島(三、五〇)

五時過ぎに起きたんだが色々準備してゐる中に別荘出發は七時
過ぎになつてしまつた。

昨夜人夫を二人にしようか、一人にしようか、色々相談し結局
一人にしたが、大分荷は重い。田のあぜ道を行く。一向に山は
近づきさうにもない。だんだん荷が肩にこたへだして来た。島島
の村で蕎麦を食つて、一時間許り歩ける。島島川に沿つて行つて道
中で分れて冷澤に入る。二時過ぎに到着する。水はなか／＼冷い
林の中を上つたり下つたりしながら行く。四時過ぎ島島地に着く。
岩場が低くなつて来たので、早速テントを張る。五時半夕食
を取る。味噌を持つて来たので、味噌汁を作る。六
分六甲山のヤンナップとは気分が違ふ。熊鷹の音を聞き、色々と驚
える火を眺めながら、無を走らすのも何とも云へない朝がある。
七月十七日 曇、微風、

冷澤(合算)七、〇〇——冷澤(二、五〇)

四時過ぎに起きた時には雨が降つてゐたので、どうかと思つて
ゐたが五時過ぎにはやんだので出陣する事にした。道具とアイゼン

うだ。

皆既れたのかレムトラフザツタにもぐりこむとすくもてしまつ
た。

七月十八日 雨、

厚衣

昨日から降り続いた雨は、今朝になつてもやまないで、八時
過ぎまで続いた。

雨は十時過ぎから小やみとなり、十二時頃には少し弱くなつた
ので、天気が良くなるかと喜んでゐると、又強くなり出した。と
ても今日は島島へ行けさうにもない。五時頃雨がやんだので水
を切つて一時間ばかり苦心してやつと火をつけ、飯をたき、ぬれ
物を乾かした。天候は一層良くなつて雲もはれて、紅が薔ヶ岳の
頭から島島川の谷にかけて美事な中園を露した。明日の晴天を祈
りながら七時半レムトラフザツタにもぐりこむ。

七月十九日 雨、曇、微風、

冷澤(九、四〇)——島島(二、〇五)——二、一〇——
冷澤(二、一〇)

今日は島島へ登つて、薔ヶ岳を越えて出来れば新道まで行つて、
昨日の予定を完成するつもりだったが、今朝もやはり雨なので八時
まで続いた。ぐず／＼してゐる中に降れて来たので、飯を食つてゐ

を直ぐ出せる様にして置く。大冷に雨をかけて、霞つて西南に向
ひ一番右の雪原から出た小川に降り、三十町ばかり行くに雪原に
出た。それから少し行くと急なつたので、アイゼンをつける。
雨が降り出して来たので、用意の雨具を着る。チョコレットを食
つて元氣を出して登り始める。霧のため視界全然みえず。雪原は
所々切れてガレになつてゐる。十時過ぎ飯を半分だけ食ふ。十時
半頃雪原を一つ間違つたらしいので、ガレを一つ越して右側の雪
原に出る。

此所で漸く尾根が霧の間に見え始めた。島島は依然見え
ず。最後の雪原にかゝる。長さは約五丁位だが傾斜は五十度と緩い
位。

此の雪原を登りきると草付に出た。傾斜は雪原より急な位で滑
りやすい。特に雨の日は、僕の人先は先の人の滑す石に、餘程氣を
つけないと危険だ。繩に倒れもう少しの事でやられる所だつた。
やつと尾根に出た。時に一時三十分。麓中側からの風強く歩行困難。
十町ばかり歩くと冷澤に着いた。小まな憩ひ。麓にはボウフ
ラがある。雨はますます烈しくなる一方なので、大急ぎでテント
を張る。テントの中へ入つた時には、どうやら雨の思ひがした。
相當氣配が降下したらしく、寒さを感じたので葡萄酒を飲む。
七時過ぎ蕎麦の残りも食ふ。此の雨子では明日もどうやら降りま

なかつた模様は大急ぎでテントをつめ込んで腹をこしらへ、小さい
ムツク一つだけ持つて島島へ向ふ。見えてゐて仲々遠い。雨
が少し降り出して来た。その脚道が雪原を八割ばかり見ると、他は
を断ずる陡な急降は一つもない。十一時過ぎ頂上に着いた。雨は
丁度其の時やんでゐた。東の方は霧が降つたが、曇つてゐる割
には眺望はよかつた。御、立山の豊富な積雪には驚いた。北は白馬
から南は針の本、連綿と見えた。遠く麓登中島あたりにみえ
ながら見えた。然し天候は長く頂上にいる事を許るまなかつた。
霧原を登ると直ぐに降り始めた。霧の中薔ヶ岳のレムトラフ
だけがはるか彼方に見えた。動るなり雨が猛烈に降り始めた。
全く健達ほうまく行つて来たものだ。

七月二十日

冷澤(七、一五)——薔ヶ岳小屋(二、〇〇)

四時に雨が止めた。やつぱり今日も雨が感に降つてゐる。で
も今日は断然大雨小屋まで頑強な決心だつたので、早速パンを食
つて準備にかゝる。出発しやうとすると相憎く雨が降つて来た。

雨にぬれながら薔ヶ岳の方へと歩き出す。数日間の疲労不足の爲
か骨が折れるやうな感じがする。足元がふら／＼する隙だ。薔ヶ岳の頂上
から麓の方を見ると、小屋の屋根らしい物が見える。急いで行
くとやつぱり小屋だつた。早速飯をたき、雨もひどいし、時刻も

「時勢だから此の小屋に泊る事にする。明日は是非大澤まで下りたいので早く戻る。」

七月二十一日 晴

蕭々揚小風(九、一〇)——新越(一一、五〇——一二、三〇)

大津小屋(四、四〇)

餘り寒いので腹が覺めた。時計を見ると何時だ。早速火をたく、起きてゐるととても寒いので又もぐり込む。知らぬ間に眠つてしまつて腹が覺めたら六時半だつた。六時か七時に出發したかつたんだが、結局九時過ぎになつてしまふ。新越で賣飯を食ふ。俄然天候回復の見込みなし。ガレや松林の中を通りながら針の水へ向ふ。スベリで鰯が餘り深いので少し建つたが三時十分雪道にかゝる。早速下り始める。途中小さな湖があつたりして相當あぶつく。とうやう雪道一つ間違つたらしい。その内に針の水の大雪道に出た。雨の中を半分走りながら大御小屋に入る。又し銀りで往の中へ出て来た様な氣がする。

七月二十二日 雨時令盛

大澤(八、〇〇)——針の末節——築國場(二一、三〇)——

二、(〇〇)——前譯——平小成(四、三〇)

昨日の焼れを留する暇もなく、今日は平の小屋に向ふ。針の木の雪は二時間半ばかりかゝつた。菜市場で漬物を食ふ、連日の

みた。温泉は相當こんでゐたが、どうやら宿はあつた。早速九日振りで風呂に預込む。

七月二十四日 曇、午後大雷雨あり。

立山温泉(七、〇〇)——立山宿雲(二二、三〇)——雄山——

康世

雄山からの歸り烈しい雷雨に會ふ。心配家のKはビツテルを脱
つて逃げた。とにかく物すごい奴だつた。

「娼堂は不愉快な所だ。ノミの多い所、会をしぼりとる所、二度と酒にたくな。山でまで蝨の害利を頼りまはす奴はかなはぬ。夕食後明日は下るので強退す。高麗の三鮮君が来てゐる。荷物を整理して戻る。」

七月二十五日 晴

室(主、三〇)——藤橋(二、四〇)——千頃(五、三〇)——富山
間にたふれ續けた十日間の山旅も、無事に今日で終りを告げ
た。

黑部鯉生活班

一行 リィグー 續編

西村格也、野田眞三郎

人夫 松本宇三次郎、香川六佐右衛門

雨で川の水は恐しく増えて居た。南澤に溜り、まで七八回浸した。此處までは波は少し大して危険なものではなかつた。南澤以後は水は流れて、波は又より上位の時もあり、頗る危険だつた。此のコースは日本アルプスの中で最もよく人の通るコースの一つだが、飯沼の後は建置しなければならぬ。樺太の所では豪雨のためか吊橋が落ちてゐたので、僕達は橋の壊れたものに乗つて渡つた。あまり好い気持のするものぢやない。平の小屋に達くと黒川雪の一行が立山から着いた所だつた。思ひがけない所で、仲間に出會ふのは嬉しいものだ。

七月二十三日 雨

平小屋(八、〇〇)——刈安峠(九、四五)——ザラ峠(三二、四

五)——五色ヶ原——ザラ峠(二、一五)——立山温泉(四、三〇)

で飯を食ふ。　　ヅラ峠で皆へばつてゐるので、立山温泉へ下る事に
決めた。温泉へ下るに少し時間があるので腹中で五色ヶ原
へ遊びに行く。小屋は崖外に立派だ。然し機織のため機屋全然不可
能。茶を飲んだり寫眞を取つたりして遊び。ヅラ峠へもどる頃か
ら焼肉はだん／＼良くなつて来た。到頃十日振りで太陽が拜め
た。しかしそれもつかの間、常盤寺川の岸に来た時には又降つて

七月十三日 快晴

字彙月(一、〇〇)——猶文(二、〇〇)——鍾鈞(三、一五)——

—讀飛手前の譯にてキヤムズ(五、〇〇)

吉澤氏の御世談で人夫をやとひ入れる。天下の黒部峡谷は我々山男の氣持ををうばうに充分なり。總領温泉はすいてゐて氣持がよかつた。

七月十四日

出發(六五〇)——猿飛(七一五)——小黒郡第一饗津湯(一〇二〇)——高廻り(二時間を費せり)——二一九九米のピークよりの雪降(雨)り登る——上畑石小屋(露天)にて一泊(七、八〇)。

この甘美人の寛解すごくがんばり人夫より先に引き数回往復をくりかへし、高麗りにて二時間餘り顔をして大いにおくれ前記の腰(多分)ザ(モン谷ならん)へまちがつて入つた。雨に會ふ。

七月十五日 快晴

田發(八、五〇)——小黒柳田合(二・〇〇——二・〇〇)——
鹿の平(六、〇〇)

米が少く一日三人で四合だ。一行ボートとした。パンとチヨコレートで元氣付け進む。船の平小屋についてから夏スキーをやる。八時のスケツチをやる。三竈にはよいコースがありさうだ。

山の平の小屋は二十五人位は泊れる。感じも良いし、此所は夏エ
キーによい。猿より新道が御人の尾根についたが行く人は少い
らしい。

七月十六日 曇、小雨、風強し。

山の平——經砂澤出合——岡キヤムブ

人夫松本宇三次郎をかへす。大いに歩いて後山に下る。經砂
澤には西高が七名泊つてゐる。又御小屋前山の峰に人夫が泊りて
居る。夏エキーをしたが懸賞願し。根は西高を訪問する。御澤の
御小屋は五人泊れる。雨も少ない。

七月十七日

キヤムブごもり。

人夫谷川をかへしたが御山麓の風で引きかへして来る。夕
方の暗闇に長次郎澤の野まで八名を見に行く。又降りだし雨天
幕よりもつて大いに困る。風は高くして寒さを感じる。實御澤
宿をするには大きな天幕が必要だ。

七月十八日 雨、曇。

キヤムブごもり。

人夫は今日も歸る。何する事もなく西高を訪問する。天幕の
せまさを感ずる。

七月十九日 晴、曇、微雨。

も歌ふ。早大オケヤを語る。西高の人夫衆又おどる。

七月二十二日 雨

又雨だ引き上げて決する。一〇、〇〇〇小屋、二、〇〇〇宿舎に
つく。中食をとり、一氣に御山麓へ行く。三、〇〇〇宿。雨の中
の道は川の横だ。實に不便だ。三月はとにかく、夏のこの
高層はいやな所だ。臥法まで寒いと仲々暑い。相手がなくて氣
持が悪い。

七月二十三日 晴

臥法(八、〇〇〇)——ブナ嶺小屋(一〇、〇〇〇)——小畑(三、〇
〇〇)——富山(五、〇〇〇)

ブナ嶺小屋の少し前で高層の三好と會ふ。甲南の一行が後から
來つて来る。三好は二十日間山に入る。小畑の一行に會
ふ。菓子を買ふ。意外に氣の配だ。彼等は立山嶺に登るべく先を
急いだ。つきせぬ名産を惜みつつ進路をすず。道道あるくのそ
ろく歩くのが面白くなつて高層の少し前で馬車をやとふ。道
程々々と云つて愉快に馬車にかかる。富山では山に入り、高層な夕飯
をゴヤン(食)べて解散する。

北アルプス總高行

リーダー 伊藤龍

キヤムブ——三田平小屋。

人夫をかへす。我々は天幕とエキーを置き、宿舎に黒川を歸へ
に出發(一〇、三〇〇)發一、三〇〇三田平宿。宿舎に黒川を中止
し小屋にとまる。早大の二名が泊つてゐた。食糧や其れをもら
ひ大いに興味して語らむ。この日御山麓に十名、御澤三名、人夫八
名、外敷名をつれて来る。生徒は意外に氣配だつたが御澤が泊つてゐ
た。夜宿村キヤムブにザイルとハマーをとりにかへる。十時頃
かへつて来る。

七月二十日 雨

三田平——宿舎——三田平

午前十一時より宿舎へ向ふ。霧のため道を苦心して降す。御山
麓で道をとる。宿舎には甲南の黒川多田二名が来て居たが急
へずに歸る。四、五〇三田平にかへる。天候やよくなりかけ八
時登攀の準備をする。

この日「ヤリヤリ」食べんになる諸進行す。

七月二十一日 雨、夜風強。

三田平——經砂澤出合——三田平

朝起きて見れば雨だ。昨夜の人夫の意氣も衰へてしまふ。雨
の中を經砂澤まで天幕とエキーをとりて歸る。今晩は御山の夜な
ので早大の人が大御殿定をして呉れる。校歌を唱ひ合ふ。松尾生

一行 安井博樹 徳田忠夫

七月十五日 曇時々晴

宿本——豊科——河原渡——七曲頂上——大御殿小屋——キ
ヤムブ地(食の餘り)

宿舎電報に連絡へ豊科で降り、御澤を過ぎ、山の麓に一直線一里餘
歩く。腹やかなりだ。水力電氣の急傾斜を登り又だら／＼登りが
三里許、大御殿小屋の側にて馬車をかじめる。七曲の急な登りに大
變腹れた。登りて三里許、宿舎の御澤でキヤムブ。常念の御澤の小
屋の奥、山田利一氏は僕等を招待してくれ「カルピス」飲料御馳走
になる。熱湯。

七月十六日 曇、微雨。

キヤムブ地(九、二〇〇)——一俣小屋(一二、〇〇八——一二、〇〇)

——御澤小屋(六、五〇〇)
目を離して見ると槍ヶ岳が見える。標高の方は高い雲で被はれ
てゐる。テントをたんで出發する。一俣小屋に泊る。宿舎に谷に
そうて下る。急な坂だ。霧の迷った所を先太を持つて来て宿を
探して行く。一俣小屋にて食事。アルプスの本道りを通り標
高に行く。道に入れば御山麓が望みくそびえて居る。標尾の御小屋
を過ぎ、宿舎を「アイゼン」を以て御澤の御小屋に寄く。六人前
から居る。夜宿アトト提水。

七月十七日 雨、風烈し、時々霰

國粵對小艇摩打

而て外へ出られず。風も加はり雨が好かたへ吹き込んで寒いの
で天幕で入口を狭よ。早大の人三人や雨た降道雨の中を上高地へ
下つた。寒いのでリュックザックへ降り込んで一日を過ごした。

七月十八日 晴

體等則小兒難治

目をさましてみると熊だ。午後三時頃、伊藤一人で熊小屋へ登って行つた。

七月十九日

原(二,一,00)——大槍小屋(二,二0)

腹尾の若小鯊にて餌食をするつもりでセウ中若小鯊四頭。横尾毛は腹が落ちてゐたので後退す。腹尾の若小鯊にて餌食を取る。一

僕小娘で休想しデントを割けた。翻譯を發り大娘小娘へ渡した。大分救われたので此所でお断る事にした。

七月二十日 晴

大輪小屋障子

一日のびてゐます。大阪鐵道局の津田氏と知り合ひになつた。

七月二十三日

大町——真田屋——西小屋——烏帽子小屋——野口天竺菰——

萬紗品——漆品——鋼物品——電鍍品——磁帶品——其六倍——

龍潭洞——積善羅漢道——檢子橋——上高壩——見——

考

七月十三日

人夫の太田八郎がむかへに來て呉れた。劉山

館にて調査をすし「キヤベツ」に「玉ねぎ」を買入れて十二時就寝してトロッコにて出陣。工場用に使ひ盡したトロッコが町を出ると相當遅い。軌道にてトロッコを下りルツラツタがわかつて何れにもつた路を滑り。萬端に友に見るあたりより小間が降りだし来た。トロッコ路であるが、枕木が埋つてゐるで根本峠の路の樣には歩みにくくない。「山の神」も知らぬ間に過ぎて、意外處に六時半頃國小屋敷。火釜で夕食の支度をしデントを張る。

七月十四日

五時起津浦、手がぬれるかと思はれるを横た河女で顔を洗ふ。明日
から飯は洗えないからと、洗つて置く。朝食をすまして少し休み
八時頃芝居場に出發。しばしば河に附つて、愛慕志に酔れていま
うと語り聞かす。鼻がつかないかと思はれるを鼻剣を少し行つて
は休み少し行つては休みして發る。近年三角點の所で養食をとる。
水をくむのに大分下まで下りた。小間の發田廻。又しても西武町

大楡小屋(九、〇〇)——楡屋以上(二〇、一五)——(同小屋——

Q. 三五)——腹垂小兒(一一、〇〇)——大膽小兒(一一、三

○)——小屋出賣(二二、二五)——西島小屋(三、三〇)——

大天拜賀三、〇〇——西小照(六、一五)

お嬢！せめて大陰でもと替つて津田氏と一緒に出發し

頂上に登ったが腰で固定は駄目だ。同小屋で汁粉を食った。

院を下り下つた。大検小屋で朝食をした。南へ肉つて川原

大穴井の登きはつらい。成中安井が下町をしてへたほつた。

○頃小屋へ到着。○朝日大天井と奥庭の間で産死者があつた。

三十三日。

小原四郎(九、三〇)——中野出雲(一二、

(○○)——新羅羅(三、○五)——有羅(四、四四)——有本(五、五五)

(88)

小原から中野区はひどい下りだ。足たマ、お相成て悪い。中

海に入り調査を取つた後出帆した。中津から有明までは長い

た調だ。有明組織から自動車に乗って有明へ行った。

烏帽子槍取走

一行 川本、園地

行つては休み／＼してゐる中に天候不良となり、大きな雨が降り／＼と降り出した。これはたまらぬと大急ぎに急ぐ。足が膝の間に／＼と今にもへばり附だ。雪面にて雪を踏まばつて元氣を出して烏帽子小腰につく。雨の降りしける中にでテントを張る用意をきかへて待つとする。雨はますます烈しく、明日が荒にちれる。

十五 日

今日推薦

わ。野は五郎崎の頂上にて藤原朝服をまゝに穿め、近頃の雪覆の類で中食にする。何處となく登つたり下つたりして表傍に登る時分に足踏どへばり堀であつた。菊池は先へ美へと行つてゐる。表傍野骨場につきヨコエ等を飲み先氣を出して、制物傍へ内よへ制物傍へ、贅制傍の頂上を通り、三ツ又三ツの登降へ着いた時にはもは夕陽があたりだに照つて居た。雪覆を緩小如くにして運轉小屋に置く。テントをはり藁を買つて張る。幾り燈を食ひ置きたり其か腹具合が悪いので食事をやずに寐につく。

十六日

「ゴッー」とうなる風の聲に目を覺ます。窓いのを透輝して外へ出て見ると大へんな霧だ。すぐ近くの小屋さへはつきりとは見えない。今にも雨が降る程だがどうしても今日中に晴までがん

ばらねばならぬ。耳鏡の人々が今日は出陣するかと聞きにくる。一緒に出陣する事にしてテントをたいた。野付地を出て直ぐに可成大きな野原にかゝる。三河の可成な野原を渡つて又野原にましかる。野原の真中にて澤山の人が止まつてゐる。近づいて見ると早大の人々であつた。どうしたと聞けば道を間違へたと云ふ。上へ登らう。下らう。引きかへさう。霧が晴れる迄待たう。と云ふ等々意見様々である。その内にN向の人々も来て全部で三十人程になる。結局上へ出て道をさがす事にして三十人が列をついて進む。頂上へ出て少しも調整が利かない。手分けをして路をさがす。やうやく一つの路を見つけて幾回にわたる。前方の見へざる路をゆつくりとすすむ。霧が少しうすらいで双六小屋がぼんやりと見え、それとばかりに野原を下り双六小屋に着く。小屋には誰も居らず非常に寂れて居る。少し休んで登りかける。非常に静しい風に吹き飛ばされ相だ。風あたまの少しおだやかな所で朝食をとる。雨さへ加はり風はますますはげしい。この邊に非常に景色がよい相だが野の人々へぼんやりと見へぬ有様だから景色所ではない。がら／＼の野が霞々と多くなつた。もうすぐには雨だらう。レインコートを着てゐる爲非常に歩きにくい。しかも洋服はびしょ／＼である。雨の下まで流れてこの上だと思つたが登る元氣がない。大分長く休んで漸く嵐模様にして登り

「双六小屋五十分間」の立札を見て急に元氣づき小屋にかけ込む。熱いロートを二杯飲み大層小屋までがんばる。大層小屋へつき、それ／＼と思つたが職員で留まらぬとの事に止むを得ず橋津小屋に急ぐ。暗くなる頃小屋につき人々が出来た「フィスカレー」を食つて人里へ歸つた。寂れた氣になる。渡津津の小屋に三十八人と同宿す。夜中に大雨がふり屋敷のトランプが飛んでしまひ雨がどあざあもり出した。十七日 雨の中を上高地へ急ぐ。銀本峠の下にて人交を離し。雨部と二人にて清水屋に向ふ。荷物が増した爲足が重くなぬ。近午清水屋へ着く。銀部の人々が来て居るかと「テント」を全部開きまはつたが誰も居なかつた。十八日 雨の第一日清水屋に滞在して銀本等の一行を待つ。一日中大雨が降つてゐる。十九日 急に銀本等を持つ事をあきらめて、雨の中を銀本越へにてかへる。飯田屋にて久し振りにて生の魚を食つた時には、釣員に歸つた氣になつた。十二時銀本渡頭。雨。去年の事である。長時間等ののはつきりしない路は御許し下さい。

六甲テント生活

八月三日 曇、夜雨、

人員係 香月、足立、笹岡、井上、

寶藏田(五、五〇)——生田——南ヶ辻茶屋(七、〇〇)

今日はテント生活の第一日である。南ヶ辻茶屋の下でキャンプする。ひどい雨だ。

八月四日 曇、雨、

滞在 南ヶ辻——高野池

午前五時起床。午前中は下村茶屋でトランプ等して遊ぶ。食後少し晴れたので大テントを高野池畔に張る。晩は雨だ。蒸氣が蒸だし。

八月五日 曇、時々雨、

滞在 野田足、井手、今村、富士原、小泉、野田原、奥山、

香袋、平井、松山、高橋、以上十二名来る。

午前六時起床。南ヶ辻で薪木を買つた。雨で薪が乾かない。アルコールで焚く。午前十一時頃飯袋で薪を買つた。午後にはゴルフ場へ遊びに行く。午後十二時起床。

八月六日 曇、

飯を食ふ。

八月十一日 晴、

朝早く起床。吉川、湯川、植田、水野がやつて来る。夕方散歩に出てすむ。

八月十二日 曇、晴、

高橋、母、歸る。ゴルフ場遊びに行く。夕食は飯急で大變御馳走であつた。

八月十三日 曇、

今日はテント生活の最後の日だ。午前八時テントを壊してしまふ。朝飯は飯急で食つた。テントの財物として植、野田、香月、小南が自動車に乗る。午前十時頃より降りし人々は下山す。六甲停留所に着いたのは午後〇時三十分だつた。これで六甲のテントも無事にすんだ。(足立)

◎甲陽間ビクニツタ(キヤムブ)

九月十五日、十六日。甲陽間ビクニツタ(キヤムブ)

人員 植、西村、湯川、香月、武岡、吉川、湯川、今村、足立

富士澤、川原、高橋、小島、中村、岡田、森、野田、伊藤、

◎仁川トレイユング(キヤムブ)

九月十五日、十六日。

人員 リーダー 安井

多田、井上、喜多、佐岡

十六日には仁川の狩場を佐岡、井上、多田が登る。

◎道場不動岩

九月二十三日

リーダー 香月、井上、伊藤、野田、佐岡

道場アラツトホームより東麓北に不動岩が見へる。中央部に取付く五八〇米のザイルで登る。ビレイングピンは多い。途中ハシトラベースがある。それをのり下ると岩とブッシュである。下りは難い。西麓へ登り下ればよい。

◎仁川より奥池へ

十月二十八日

リーダー 湯川、佐岡、多田、佐島、足立、井上、植木、伊藤、

仁川、甲山、寛井寺、奥池、シノヤ山、コラタダ

◎道場不動岩

十一月三日

リーダー 香月、

一行 西村、植、小南、湯川、水野、足立、安井、今村、多田、佐岡、井上、野口、高橋、伊藤、富士澤、

各氏別れて思ひ／＼に歸る。

十一月四日

午前九時頃野田、湯川、植木来る。各パーティ違つたコースを思ひ／＼に登る。

◎六甲大縦走

十一月十五日

リーダー 西村、

香月、渡、多田、井上、佐岡、喜多、中村、今村、

足立、植木、大賀、川本、湯川、佐島、

須崎伊藤氏邸に泊りて頂く。

十六日

伊藤邸 離宮 湯山山荘 西六甲 東六甲 寶塚

朝五、二〇時。ランタンの光で寶塚についた時はもう暗やみも深かつた。

◎關道泉スキー合宿

リーダー 香月、

一行 川本、安井、水野、喜多、井上、

十二月二十三日 晴、

湯山山荘 關道泉

湯を九時頃出たが一軒茶屋で停つたので、温泉へ着いたのは、雪過ぎだつた。朝食後直ちに練習に出た。

十二月二十四日 晴、

裏山を登つて、直達路、ボーゲンの練習、午後はタリヌチヤエの練習。

十二月二十五日

裏山を登つて後、マキノ澤で練習。

十二月二十六日 晴、

午後一時頃香月園子、佐ヶ原へ行かんが爲、下山す。月光を浴びるまで猛練習。

十二月二十七日 晴、快雪、

關道泉(八、〇〇)——湯山山荘(九、三〇)——關道泉、

湯山山荘に泊つたので、終々と行つて遊んで来た。

十二月二十八日 晴、

九時頃川本一人下山。午後裏山で佐川義雄氏にボーゲンを少しこして貰つた。

十二月二十九日 快雪、

關道泉(八、〇〇)——赤倉山(一一、〇〇)——關道泉

安井下山の難所で岩屋に降り、三人佐川氏等に連れられ、赤倉へ行く。安井は難定難更して、もう一晩泊る由。

十二月三十日

安井倉々下山、三人で坪高へ行つた。

十二月三十一日 晴

夕方、香月、伊藤等来る。夜まで練習。

一月一日 快晴

雪質悪く、感じがよくない。終日練習す。

一月二日 雪

野澤温泉——黒山峠

水野崎より帰る。外の雪全部下山して、合宿目出度く解散。

⑥ 陸ヶ峰 行

十二月二十五日 快晴

晴、西村

野澤温泉——妙高温泉

十二月二十六日

妙高(10,000)——杉の峰(11,000)——

後ヶ峯(京大ヒュッテ(西, 00))

京大生の案内にて出発す。旅館より直ちにレールをつける。西

村、後ヶ峯の峰にて先に朝食。妙高山麓の峰にかゝる時京大生迎へ

に迎る。ヒュッテは快晴だ。

十二月二十七日 晴

後ヶ峯に入つていさゝか疲れたので一日附近で林間散歩をする。

雪が帯いて歸り困る。午後五時過ぎ、藤本氏等一行九名京大生

に案内されて来る。落成式あり。手紙をいたす。

十二月二十八日 晴

大打岳へ

ヒュッテ——黒山峠——大打岳——ヒュッテ

小屋よりレールをつける。一里位は林間平野。黒澤を登り出す。

十二時頃西村アツセルをやり大に頭垂る。黒澤に落ちると火打、妙

高崎がすぐ見える。二時半頃上敷、三時頃下る。直滑降、ボー

ゲンで下る。四時頃ヒュッテ到着。

十二月二十九日 快晴

後ヶ峯——杉野澤——妙高——野澤

八時半出発。既雪の中を下る。ラッセル西村大につらし。妙高

温泉にて背と擦る。田口より汽車で上機へ。上機に八時過ぎに着

く。大勢歸る途中に會ふ。見送る。ヒュッテを歸に連れて汽車に

乗った春風屋も来た。香月と三人で野澤へ。十時過ぎ屋につく。

⑦ 野澤温泉スキー合宿

リーダー——西村格也 指導

参加者——香川、伊藤兄、天野、植田、大貫、村上、熊野、黒

田、今川、山本兄、富士澤、山本弟、鹿野、野口、

十二月二十三日 晴、快晴、
上植田(10,000)——坪山——野澤温泉(11,100)

歸前に朝食を取り平坦なる道を野澤温泉に向ふ。天気晴朗に

して一回大元氣。朝食後練習場にて待つ。五時半頃に歸る。

十二月二十四日 晴、快晴

七時半第一練習場に集合右側の屋根に出る。相當高いので尾根

を直滑降でぶつ飛ばす。雪質良好、痛快はん方なし。午後二時

に分ち練習す。一度は左の山に登りボーゲンを練習。他の道は練

習場にて滑る。

此の日牧野、志保井、前田来る。

十二月二十五日 曇、時々雪

今日は奥の練習場で滑る。雪量多くスロープ長く静かな良い所

だ。

伏見部長、上林先生、長野、高田、野上の一に来る。西村、後

ヶ峯へ向ふため出る。

十二月二十六日 晴

野澤に運ばれた奥の練習場にて直滑降、タリヌチアアの猛練習

をなす。午後雪面の大スロープにてボーゲンをやる。

十二月二十七日 雪、快晴

十時半奥の練習場を出発左手の尾根に向ふ。十二時半到着。直

ちに朝食を取る。晴快雪。上林先生、牧野、前田、志保井の一

行歸る。

十二月二十八日 晴

八時半出発。奥の練習場を経て一本杉に向ふ。十二時半一電柱

の所にて朝食。食後一本杉に登る。植田のみレール無しにて頭張

る。下り第一の電柱までは相當スピードが出た。肩に掛つたのは

四時半だった。香月、後ヶ峯へ行き遊び歸よりこゝへ来る。

十二月二十九日 曇、時々快晴

今川、鹿野、山本兄、山本弟七時半に歸る。九時半伏見部長、

高橋、長井の一行歸る。練習場は途中の小屋まで出る。三時過ぎ

香月、高田、長尾、野上、大貫、伊藤兄、天野歸る。大分静しく

なる。午後十時過ぎ、西村それに一旦歸つた香月引返して来る。

後ヶ峯の道等を通く。

十二月三十日 晴、時々曇

第一練習場——第二練習場——第一練習場 左方の山の裏側——

同山の裏——第二練習場——歸宿

午前中由に行つて第二練習場にて停てゐた連中が持つて来て

呉れた餅等を食ふ。

鹿野、近藤、伊藤弟八時の汽車にて歸る。

十二月三十一日 晴、後曇。

第一練習場——第二練習場——正面の尾根——左の尾根——
第二練習場——第一練習場——尾合

今日は大分練習滑走をする。西村午後四時家に歸る。香月は龍
温泉に向つた。

到頭合宿も機、湯川、富士澤、野口の四人になつてしまふ。晩
飯後は便所に向。かくして昭和三年最後の日も愉快に暮れて行
く。

一月一日 吹雪、

猛烈な吹雪を降して奥の練習場に行つてくる。新雪は随分深か
つた。寒い日だ。

一月二日 晴風、

十一日にわたつた合宿も本日解散。野口は床へ。機、湯川、富
士澤の三人は東京へ。

◎大江山スキー行

先登 西村、湯川、金倉、

一行 伊藤、香月、湯川、伊藤(太)、天野、楠木、松本、
村上、水野、富士澤、近藤、長井、伊藤(新)小島、井上、

二月九日 雪、

昨日一行に別れた二人は大江山頂より約二百米の所より尾根頂
ひに赤石岳へ。赤石は見かけ程難くはなし。雲のため展望がず
驚原への尾根を下る。途中から深く入り込んだ谷を飛びし小學校
東に出る。雲原より下天津まで一二キロ平坦な道ではあるが雪の
ため多少苦しむ。

◎奥池行

リーダー 安井、

一行 村上、井上、水野、佐野、淺野、西村、
二月二十三日

若屋川——奥池、

二月二十四日

午後多田、楠木シノキ山よりの歸途立寄る。佐野、水野、下山
す。西村四時三時過ぎ来る。

二月二十五日、

奥池滞在

五時半過ぎ奥池の湖の結氷せるを見スケートを試みんとせし
が失敗に終る。十一時水野再び来る。安井、村上、奥池西北の谷
を渡る。午後西村再び訪ふ。

二月二十六日

河盛——内宮——佛性寺——鬼茶屋

鬼ヶ茶屋にて一服後千丈ヶ原に向ふ。所謂練習場チヨロキ事蓋
し。後継隊は午後五時過ぎ河盛宿。内宮より鬼茶屋に向ふ。途中
日暮れて困る。約一時間半を要す。

二月十日 吹雪、

鬼茶屋——千丈ヶ原——スキー場——千丈ヶ原——鬼ヶ茶屋
一回宿して所謂千丈ヶ原スキー場に向ふ。吹雪猛烈に突く。ス
キーにて小峠を翻りその中で火をたき進食を取る。

二月十一日 雪、後曇、

A 班 伊藤(恩)、西村、

B 班 村上、伊藤(太)、天野

C 班 前記二班以外の香金部

A、鬼ヶ茶屋——千丈ヶ原——練習場より尾根へ——大江山

頂上——鬼ヶ茶屋、

B、大江山頂上までA班に同じ——北尾根第一の谷——千丈ヶ

原——鬼ヶ茶屋——下山、

C、鬼ヶ茶屋——佛性寺——内宮——解散、

二月十二日 晴吹雪、

西村、伊藤のみ残る。

鬼ヶ茶屋——赤石岳——雲原——長尾——下天津、

奥池——雲原の東北の峰——真川解散、

◎神鍋山スキー行

リーダー 香月、

一行 井田、入江、鶴田、竹中、上村、

二月二十三日

三宮——神鍋山——神鍋、

久保が家庭の都合で参加し得なかつたのは残念だつた。飯沼に
て機機へ和田山を経て神鍋に着く。直ちに月本旅館に入る。晩
飯後奥山のグレンダで夜間練習。ザラメ雪で傾り面白くなかつた。
燈なく黒暗の中での練習は始めてだつた。(午後十一時——前〇
時三〇分)

歸途上村スキーを各に流す。明後泊上事にしして歸る。三時まで
花合せをする。

二月二十四日

神鍋——江原——太田——小松屋旅館——グレンダ

一風目浴びてから上村のスキーを履しに行く。見つかる。こた
くして十一時過ぎの汽車で江原着。乗合で太田へ。太田で太田
の旅館小松屋へ短介を頼む。雪は七尺程もある。グレンダで河口
伊藤等に會ふ。五時過ぎ御乳山に行く。僕一人頂上に登り、下り

は直降降。成功！皆あきれて見てゐる。快！山口、伊藤等と一緒に泊る。

二月二十五日

小松屋——グレンダ——樹本——江原——城崎、

香月の十時出發を説きしと全郡グレンダに繰ふ。今日は新雪も三寸許り積つたので神船山の頂上から直降降が出来た。成功！快！四時グレンダを渡し樹本に降り樹本、江原を越えて城崎に降り八時なり。入浴後暫く遊んで寝る。

二月二十六日

城崎——グレンダ——城崎——三宮解散、

グレンダで偶然多に雪ふ。一掃にすべる。雪はよくない。十二時過ぎグレンダを引上げ竹中と香月は一足先に歸宿する。香月は数軒屋へ行く。二時過ぎの列車にて和田山經由歸郷。プラに行つて解散する。(香月記)

◎西 六 甲 行

一行 秋馬、笠岡、野上

二月廿四日

六甲停留所——下村茶屋——ゴルフ茶屋——石尾川

ゴルフ茶屋へ途中池を見たが皆スケートに耽日だ。ゴルフ茶

屋本に午に溜いたので鳥々の湧水屋でどて／＼してゐると午後四時中になつて了つた。どうやらしらやら京川流りきの自動車が見つかつて大助かり。それでも津波までテ／＼歩いたら夜の八時になつてしまつた。道には未だ雪が積つてゐるが雪が落ちてしまつた。よせばよいのに大に凍る時の分まで持つて来たので雪の多いのにこたへた。

三月六日

津波——中ノ藤——大正池水屋——上高地湧水屋

雪原に突如とされた道は歩きにくい。スキーが底分な所だ。前編穿ける道ではないので靴をつけて奥きづつた。トネルの内に氷の山が出来てゐてはう／＼のていだつた。電燈が消えてゐるので歩きにくい事おぼたしい。急降下に来てからやつとスキーを着けた。大正池の水屋ではストープにあたりから三時間ばかりも遊んでしまつた。大正池は未だ厚い氷が積つてゐてその上を歩ける。

三月七日 晴

天気は良い五千尺に遊びに出掛けて、岳川を眺めて平日通りした。今年は雪が少いので雪原があまり出てゐない。

三月八日 晴

湧水屋(四、一五)——普六澤——西穂(六、二八——五〇)湧

屋で、スキーにリフトスを張りゴルフ場の表のスコープにて試みる。雪原し。裏に行つて滑る、可成り良好だ。裏方に茶屋に降り。金の無くなるまで飲み食い。午後ゴルフ場で滑り二時半下る。

◎石 楠 山 行

一行 村上、安井

三月三日

部ルム——住吉川——ゴルフ場——割ヶ辻——廿度渡——

若草山——河瀬——若草山——割ヶ辻——再渡山——神戸

ゴルフ場にてスキー練習のつもりだつたが後雪降らなきため不備。廿度渡の裏目から若草山に入る道(石楠山の細柱あり)は始め二三町は雪が先は積路だ。河瀬はキヤムアップデイトには良ささうだ。後雪降らな若草山に上る道は尾根降りで一寸感じのよい道。

・ 三月の上高地、西穂高

伊藤(軍同行)

三月五日 晴

松本——鳥ヶ——奈川渡——津波、

水屋(一、四〇)

昨日の五千尺からの制図の結果西穂に登り度くなつた。鳥原の屋敷も天気は大丈夫だと云ふので十二時頃から始めて飯を炊いてくれる。雪の積層も良いし、この分なら安心だ。

普六澤を直ぐに登つてメインリフトに出て西穂に登る。雪は硬いがアイゼンだけではチルチルが流れるのでアイゼンの上に輪を穿いて登る。お蔭で輪を穿かずに上つてしまつた。西穂のリフト通しはアイゼンだけになる。雪の積層の悪いので滑しにならぬ。側り傾が凍てムシリガ公ふのだから。氷壁計を出して見たら二十度までのが役に立たぬ。多分零下二十二度の寒さだつたらう。鼻がリリツタので手拭でスキー帽の上から拭く。リフトにはり込んで来た防凍になりそうなのを惜しむを身に纏ひ着けたのできど人に見られたら嫌な恰好だつただらう。その恰好が見えたら部組の連中が時に危険にやつて見ようか？ 断然拍手カッサイものだ。(註メイン・リフトに迄はゆかなかつた) 寒いのには閉口したが景色は素晴らしいものだつた。

湧水屋に降りると水屋から御膳所があるつてお蔭があつて滑り抜けで行く。電風風呂に入つて、ストープの側で御膳所になる。御膳所の内容は何しろ日では云へない程うまいものだし、そのデザートたるや又違ったバインアップル。どうだい。羨ましいだ

もう。そして終るにはふわ／＼とした新しい開閉でしかも電氣軌道までいれてもらった。今日は何と幸運な日だらうと思つて顔をつれた。更に睡につけたとはまさか。

三月六日 曇。

午後六時頃より雪。

三月十日 曇、雪。

雪から雪さんと水電の川氏とで職員を持つて鴨打ちに明神池まで出掛ける。雪は降たが返れなかつた。その代り奥二四の御物があつた。池にはそれを雪にしてイカルを捕しんだ。

三月十一日 曇、夜寒。

水電から遊びに来いとの事で出掛ける。尾にかゝつた奥の料理屋の内膳で、園林者なんかの暮食給仕にはいさゝか氣味が悪かつた。夜更になつて清水屋に歸れないので泊まる。

三月十二日

御氣次第で出掛ける。雪さんと水電の川氏と奥に呼びに行く。雪さんの奥では昨日捕れた鴨の御氣遣になる。

水電に歸つていよ／＼歸つき。上高地の一月には寒気がひどくて歸つてもどこではないので八月がはんとのお正月だと云ふわけ。おどろには出陣し、雪はあるし奥の先達まで乗べられて、尾端には白馬と自分が歸つて来たブランドー（これは氣付けずに

と思つて歸さへて来たものだ。機を御機や雪を乗船に歸る爲め念には念をいれて歸つておく。雪はあまりイカル口ではないんだからな、いゝとね。イカル口は盛んにメートルが昇つて雪下何度の積高を計り、合切所のメートルの制では歸りがはずし、小原節やら、安永節に雪さんまでがはしや出す。お面で積高（雪の上を清水屋まで歩少積高の雪さんを連れて歸るのが一段だつた。

三月十三日 曇、夜寒。

清水屋——御本峠——帰る。

水電の川氏と同行で御本を歸つて御本へ出る。御本あたりから次第になつた。お面で積高の積までスキーが使へた。

こんだの上高地は随分愉快なものだつた。こんな思ひ掛けない事は又となからう。

◎ 湖 澤 行

三月十九日 曇、

伊藤屋、大島宮（一、二、三）

上州田中——新屋（九、三〇）——湖澤温泉（二、〇〇）

湖澤温泉からスキーを穿く。

夜になつてから降雪がある。雪、夜だ。

三月二十日 三方峠（二〇四〇M）に遊びに行く。雪がよい。未

だ粉雪の處すら静くない。

三月二十一日

湖の光山に遊びに行く。午後御機で降る。有名な日本のスキーの達人とも云ふべきウイングラー氏と面談す。

三月二十二日

湖の光山の方を湖はつて新張に出る。上高地へ行く途中と落ち合ふ爲に御本へ出る。

湖澤はスキーには良い處だ。湖澤には手ごるな山が並んでゐて平日に一山づつ登つて來られるし。第一、雪質が良い。三月に粉雪が降られるんだから文句なく良い處だ。湖澤は随つて大分良い。

◎ 湖 澤 温泉 スキー 合宿

リーダー——伊藤太

一行——湖澤、天野、伊藤、井手、黒田、喜多、光村、水野

野口、御本、湖澤、

三月廿日 曇、夜寒。

湖澤——湖澤温泉

湖澤の中を一時湖に侵入した。雪食後直ちに湖澤。

三月廿一日 快晴。

湖澤、〇〇——赤坂（一、〇〇）——（一、〇五）——湖（五、

〇五）

湖澤（下の下りの直降走は愉快だ。雪がクヌストになつてゐた。めずり近でスタートしたものが二三あつた。ザイルを使つて引上げも。大變よい経験だつた。

三月廿二日 晴。

午前中グレンダで練習。午後アルプスに行く。積雪を越つて一軒茶屋まで。

三月廿三日 快晴。

湖澤（九、〇〇）——神楽山（一、五〇）——湖。

昨夜一尺も積雪が降つたので、クヌストは可成り滑りやすかつたが、水野とくも。以上祝の湖澤の湖からスキーをぬいで登る。パターンスノーのために滑降愉快なり。夕方グレンダにて月の出る練習。

三月廿四日 晴、夜寒。

湖澤グレンダにて練習す。

三月廿五日 曇、風強し。

天候ははしからずのため、妙高行を中止す。湖澤、光山にて練習。午後湖澤、御本へ出る。

三月廿六日 曇、時々晴。

雪質悪いため練習不快なり。午後湖澤の中庭で登る。

たぐ中に何の盆地の上に出る。此所で丸山のボーゲンを享樂に
来た人と會ふ。今迄の比に比べて、随分雪が重いのを感じる。何時
来ても面白い丸山のボーゲンも面白くなかった。圓見峠からは一
本の長い直線降だ。丸山の宮スロープまでは相當滑つたが、それ
からは妙に滑らなくなり、温泉まで滑んどころ通してあつた。

温泉出發(十時)——丸山(十時五十分)——前山頂上(一時五分)
頂上出發(一時五十五分)——丸山(二時三十分)——温泉(二
時四十五分)

三月の上高地生活

伊藤屋、後援、西村格也、香月慶夫、湯川孝夫、大島寛一、
人夫二名

三月廿三日 晴

松本より幸川渡まで自動車、幸川渡(六、四五)——中野湯で
一時間半遊ぶ——新水屋(五、一〇)

廿四日 曇、雨

新水屋(一、三〇)——一ノ俣小屋(三、〇〇)

廿五日 好晴

残した荷物を小倉に運ぶ。

朝食を終へて、いそぐと出發準備に取かゝる。今日の行程はの
んびりしたものだ、別にいそぐには及ばないとは思ひながらもこれ
から先の計畫を頭に浮ぶれば自づと仕度も早くなるものだ。

午前十一時半いそぐスキーもつけられて、一行六人は新水屋の
前に下り立つた。御大事だろといふ隊員の信心こもつた見返りの
言葉を後にとけかゝつた道の雪を滑つて阿重郎に向ふ。戻ると人
夫はおくれて荷物を持つて来る事になった。我々五人十のスキー
は輕妙な雪を立てゝ進んでゆく。照りかへす光線は目にしみる程
ひどい。

吉原屋を通りすぎて、間もなく河原に下りた。所ど一面の雪
だ。その中を滑る流れが曲りくねつて真鍮コースをさへぎつてあ
る。所々草道に入つてこの雪原物を避けた。牧場も三月はまだ深い
積りに閉つて其のその積にすがくしはなかつたが、それでも
遠見の目には夢の國を思はす様な美しさを持つてゐる。五人の
跡には厚二本のレニプールが描びてゐるだけで何だか大自然の偉
大な力の中に居を引いて餘々に進む人間のいとなみを見てゐる程
に感ぜられて胸の底で深く心に描するものがあつた。横尾谷の出
合より少し手前であつた飯をつめこむ。横尾谷の例によつて前
進の二倍もの分量をペロリと平げてしまふ。腹がふくれると歩調
も早くなる。杖突く前にも力が働いて来る。

廿六日 好晴

廿七日 晴、曇、雨、雪

廿八日 晴、曇、雨、雪

廿九日 小雪、晴

一ノ俣(九、〇〇)——明神嶺(一一、四五)——一二、三五)吉
屋(一、四五)——五十二(二、四五)——三、一五)——新水
屋(三、四〇)

廿日 前線行 一部後退行

廿一日 西線行 一部後退

四月一日 晴、曇 上高地にて解散

●一ノ俣小屋に入る日

雪は晴れた。三月の末といへ、未だ春の女神の懷にもい
かれず、雪に覆はれた上高地にも今日は暖かいごやかな朝日
がさし込んでゐる。そよ風は白樺木立の梢をゆるがせてぬくもつ
てゐた時から今し方圓た許りで上風してゐる風を心持よくた
ゆく。さすがに幹川の水だけは雪解の冷さをもちつて清らかに流
れてゐる。北の雄高、南の六百山、東の明神、西の奥岳は所々に
表はしつゝ山雲の衣をぬがけて後援を見下してゐる。

横尾谷の附近に着いた頃には強い風がふき出した。空模様は段
々と悪くなる。道には水溜が溜り始めた。皆の進度は益々早くな
る。横尾谷の道で一息入れるといつて腰を下ろして休むので
はない。雪原物をほり出すだけで疲れも知らず疲れた登山の
練習等に餘念がない。僅か三、四本のスロープを具つて、やれ、
タリヌヤヤだのやれ、スラムダインだのとはしやうあつてゐ
る。何のことはない、道の側でダンスでもしてる様だ。小半時
も雪にたわむれてゐたらうか、思がフー／＼息をならして思ひ付い
て来た。大いさ／＼に雪をたふまして首を屈ばし乍ら喘いで
ゐる。こゝで六人揃つて再び一列縦隊が作られる。小倉は間近だ
急げ。

どこからともなく雪の香がする。いつもはこんなものは鼻にも
かゝらないのだがこの時は不思議に強く思はれた。思はアツ
／＼とどなる。木立の間から灰色の屋根が見えた。雪が降るとな
つて強引にゐる。

三時、雪も停はれてスキーは行機よく小屋の板壁に立てかけら
れた。小屋は前から勝手早大の人達と無等で、急に挨拶や命令等
でガヤ／＼と賑はしくなる。早速あつたオートミールが出来上つて
御馳走になる。こんな時の御馳走は原のホタルの定食よりも幾
分有難いものだから知れない。

人夫がれてゐるので遊びに行つたが、日暮れ迄待つても来なかつた。道一人をのこして、曾は一先ず引き上げた。夕陽がすつきり小星を包む頃、へかおてか雨雲には大粒の雨が落ちて出した。一雨がふりどけて、煙をかくて、霧に花が、風き始めた時分、びしとねれ、なつて風がかへつて来た。やがて人夫も無いて岸には荷物が山とつづれ土國には幾つもの籠が列べられた。

● 楢へのほろ目

伊藤、横、西村、香月、大島、人矢雄司、百瀬

一ノ俣(二、〇〇)——六俣小屋七、〇〇七、三〇——大屋
(八、一五九、〇五)——肩小屋六、四〇——一、三五)——
頂上(二、三二——二、三八)——肩小屋(一、四五——
二、三五)——ノ俣小屋(四、〇五)

「おい、もう時分中だぞ。いゝ加減に帰らないかい？」不祥な嵐の聲に、健吉動んでゐた。浅い歩はかり消されてしまつた。僕生大事にかおつてゐた蒲團は、ガバツとはがれて、真夜中の冷い煙氣が充ちあふひやうと流れ込む。うゝ寒い。ねむい眼をこすりながら傷を見る。煙火が爆々とも同じ様に、義理のうづつな顔で、キョトンとしてゐる。蒲團の縁が、灯の様に暖んでゐる。小屋の中は暖からず、

煙で一杯だ。それが入って煙いのか憎目とチカ／＼してゐる。昨日は四時半から床に入つたのでねむい勢はないが、夜更中といふだけにまだく／＼寝不足の體な氣持がする。お菊といつても仕方がない。身代價を喰へる。

鐵道につた者はまるで射撃の線にだまきこくつて大を見送つてゐる。買本はチロ／＼と覗きやち見してゐる。一人が新しい袴を二、三本投げ込む。バツと息を返した線に鳩が立つ。他物をつた頭が旁く躍く。やつとねむ風がきめて一瞬に裏返の面持が現はれる。『オー快晴だ』誰かど處から大をきく。幾つかの商賈が周をずして月口の方に向けられる。そして一齊にやわらかい笑が顔に存ぶ。

「さあどつき御あがなすつて」といふ人夫のすゝめも腹の方できゝ入れた時分になると甘はそとと胃腸の準備に取かゝる。食後の一息、及び度いな。煙草の煙を手元で引きよせると思の湯が同腹の壁に染る。歸つてからにしろ。へいぐだ。

スカーにハールが付けられる。彼夜して作つて呉れた指環と、
ナルモスのこゝろでアブサツクの中に閉まると、克蘭タンに火を放
けてくれた。――出獄の気分がみなぎる。ビツカが時々明り
を受けて、ビツカと光る。闇もなく、障明もない日の方へ――
と飛び込まれて行く。

「おやめ、お嬢様の姿を田舎に知らせる。」

極に氣持のいい香を立てる。二の胸まどでスキューは穿かれない。仰け
 ば空に是一點の雲もない。月はもう満高の西にさくゝのだからもう
 唯星が盡きさふかにへちちちととまゝいいてゐる。今にもふか
 かふりまうだ。風温が低下してゐるのですつかりしめてゐる。

「今朝はひどいぞ、マイナスの五度だ、よいつた題の言葉がうら
まひ廻り来て今日の成功を願ひさせてくれる。雪あかりでランタ
ンはなくても充分時計の二時を指してゐるのを見る事が出来る。
渾が先行して赤坂の西に来る。右岸の道が左の長崎に移る。
無惨にも水を倒し岩をかいで落ちた。地すりのダブりが殆ど一面
に覆はれてゐる。その都度、先日嵐の雪崩の實の様な音が耳の奥
でひびく。突然蘭川の歩行が鈍り出した。如何した。しつかり
しめる。はげまされて見たが一向に元気がない。頭が痛いから今日は
止さう。建倉だが蘭川に歸ることになった。横倉こまで目的地
に送付いてゐてバータイの一人を連れてゆくのは何だか無暗に
おしい氣がしてならない。」「イヤ又の時があらう。その時は一様
に元氣でやなんだ。お互ひになごめ合ひ、勘まち合つてゐる。
」「アホの聲に蘭川のランタンが今来た方に向うらしいで行く。」

足取りが軽くなる様だ。シーちゃんが確實にきて雪の上にはほい二本のシーブリーが尾を引く。星の光ももごかへうすれて消えてしまった。唯一つ、西の方に名残りの光を取つてゐるのがあ
る許りだ。

「餘が思ふに、これこそ我儘にとつては持ちにまされた疑
びだ。やうやく東照公に褒められた白粉の白粉はすか切つた顔目さう
けてうすも色に輝いてゐた。何といふ花盛な顔だ。胸がはらけさう
な許りに花盛にたぎる。自ずと足は歩かぬされて、腰れ毎いふ背筋
はこよにはいり得ない。たゞ痛快、紙すき花盛さがある許りだ。」

大體今度の下でいふ／＼／＼もきかなくなつたので、アイゼンと聲き代へる。雪の斜面に腰を懸へアイゼン、膝／＼手／＼し、しゑめて日本アルプスを見よ。雄姿を誇して働いたどんな男にでもこの美しさ、厳しさ、ヤが／＼しと自分の一すちあらわしたものがあらうか？これこそ自然のみの持つ大きな力である。もし耳を覆つて自然に呼びかけるならば、割理を隠る小さな雪片のヤが／＼といふ、いとほしくもさむやかな天然のメロディーを聞かずに聞く事が出来るだらう。そして構造は腹の底から快楽を味ふのである。

アイゼンはプレイカブル、クラフトにサフテークと嘆息込む。

り出す機になった。一歩くと登壇は開けられて行く。

つたのが六時だつた。北を見る。大嶺の端は霧雨と天を割てゐる。はしなくも宮殿の奥に横一つ取り隠された鏡。天竺の鏡それが今までもく顔光に朝のすみ隔つた大氣を思ふ存分に呼吸してゐる。まばらに雲と光を付けたその肌は世間の前に下す。離しど迫つてゐる。輪りの海潮に恍惚として皆はりのハツタを下す。のむすれてゐる。と突然西、南の方の上から肩にかけてフーと霧が飛んだ。オヤ、やつと寒や寒やあつたかな。今迄欣喜に躍つてゐた胸がゾゾと一つ大きな波を打つ。早く霧雨を離つておこころ。一費にカメヲが袖に肉けられる。一致とあるものすつかり性は自いもやの中心を滑してしまふ。急いで行かうぞ。風の思ひ間に。再び窓との露が始められる。いよいよ霧は星を隠して来る。今日の威風が足ふれ出して大自然に對する驚異感。崇高の念は急務。焦燥の心と躍つてしまつた。大岩の端をスキューターと化した。ふりかへれば、今来たツイタツアツがうすく雪に隠されてゐる。こゝで中食をする。ソーヤイデや漬物が雪にバラ撒かれてつめたい銀が各自に取出される。足踏みし乍ら簡單な中食がすまれる。

彼の肩を耳は一面に張りつめた。『オプヤー』の、小庵の役で

もれた。石田、引きしまつた顔向はどゞ、離れるかの體に歸
りて、伊藤、棧、大島、香月、のオラヂーが雲の中に消え、小屋
にのこる六高の連中との間にヨラヂーが交る。佐の娘はまだ
見えない。

石田此のバーチイは夏服を脱ぎにのぼ出した。露筋はそ
北側朝も夏服の衣に少しからむでのぼるのだ。原が紙でチヤ行
かう。君がだかぬ。ピツチルが振られる。ザイルが手ぐられて
二番が逆む。搜の腕が露の奥に壁を渡す。顔いて三番の大鳥が
取り付く。可憐にもいたけな少女が露身の暑氣と力を注いで
露の影壁を攀る有様を想像して見よう。輪にも穿い堀々しい
先食ではないか。吹き上げる露を横面面にうけて。悍然と立つ時
まつ毛に光りついて目の自由を制す鼻の中は一面水鏡して呼吸は
困難になる。熱も解めて足開き勢めて大きく膝を跳つて背に直面
すればあふる暑熱の血は僅に足に留へても止まらぬ露身の力を御
へて呉れる。三番の露がスタツプを登り切つて背間にかくれる。
チーシヤといふ露がかすかに耳に入る。露々変るんだ。スタツプ
に取付く。チーシヤが小さいので手袋の指先には何だか指環が登
けない気がするが一本の指にも片足の爪先にも出張るだけの注意
をあつめて露實に一吸二吸と顔ひ上る。足下は何十丈あるか知ら

突然鐵籠が水平の方に呼びかけた。皆靜の聲へよつてゆく。すなわち下に向ひ雲の中を舞ひ舞つたかゝらへ變つて来る。さうだ六萬の道中だらうか、幾分の便には小屋を建てた部も取除けられ、月も隠れて人氣のなかつた寂の籠になどやかなしい気分が漂ふ。但し鐵籠は一寸なほきさうともない。暫くも小屋の中で待つんだ。小さい戸口、小屋の中には二階の窓だがそこから一人づゝんかに卷まれてゆく。小屋の中には壁は殆ど入つてない。目に付く所どころかしこもすつきり細い隙片をして置かれてゐる。正に水の殿堂だ。丁度橋でもする様な結構をして皆の口が柱といはず梁といはずあちこちに張り付けられる。やがて中野小娘の合唱が始まる。

ざつと小一時間渡待つたがまだ皆の顔は見えない。五里霧中だ。やつと互國境先きがわかる程度でどうも残念だが、今日はこれで歸らねばならないかも知れぬ。表面は根でごま化してはゐるものゝ心と目はいつち戸口の外に注がれてゐる。

どうもうるすも持ち切れなくなつた。一羽には新木産卵と無難な色で儼ゆくなる。窓口の新に行つては大い味を息をつく。やがて風だけは少し風いらしいが、猶ほ供熱立こめてある。然し暖まるには少しこの小屋の中に供熱を止めて、賢く事が出来るなかつた。少しひどいとは思ひ乍ら、遂に襦に廻り付かるとの意見が一一致した。一方から差し込むうす暗りの中でゼイルがさばかれ、ビツタ

の喉端でその上に腰を突き出して、肩に抱き付く時こそ彼の肩の皮肉が試みられるのをやないだらうか。何の邪念も起らない。神といふ言葉の如きの嵐に弄んで来る許さだ。日頃の體障によつて得た力も殆ど、新義義に手を動かさしを運ばせてくれる。張儀の内にもし髪は濡れられて午後零時廿二分、約一時間を経て肉人は大部分零で埋つてある藤の頂上へ躺つた。眞夏は全くきかない。然し自分が、三斗半の高所に立つてゐる事だけは充分意識出来る。一寸の隙にも小粒位は見えないかと見つめたが到やその境界は置かれなかつた。早速テオコロイトが分配される。引きしまつた心の中にどこかやつとしたといふ様な気分が出てしつかり一つになつた。四つと鐘が向かた。結び合はされるのが感じられる。ひどい喉が何にも割へられぬこの欲は、幾分間とは保たして呉れない。零時卅八分の頂上を降りて下降にかかる。先に石田氏のパーティーが下り納める。星のどなる鐘、「僅め、止め」まるで空面紅雲が来たかと思へる程で、銀り輝つてある気分と一汗の後體障が加はる。最初には来た時のムキを下る。フツ下を見たと顔いもの何人も驚いてゐる。崖付は六斗の高の崖中だ。山脚が先頭で山刀を握るつてスナダを切つてゐる。狭い岩間に身を寄せてゐる。流し頂上から約三十米位の所から夏風の方へムキを振へる。どこからでも下れさうでその懸崖に送ふ。鉄の大鳥のムキムキと

示して向をしろと仰る下るんだから忙しう事大儀ぢやない。し登りに比して今度は、大部小と懸だつたので一時四十分ほどなく掛のヨルに下りた。關いて大島、段、船と續く。とうとう長年の希望がかなへられたのだ。いつかフツと船倉に赤の槍行きの櫓が出て皆で船を走らせたものだ。その時は何事か實現するとかも一見當がつかなくなつた體だつたのだ。今その懐れの船へ望を踏んで登つたのだ。山の神託、快進は心今更強くそれを胸に付けて四人間の握手を交すのであつた。

再び別小屋に入る。待つてゐた庭園と官廳は早速熱いコップを出してくれる。歸く間にナルキスが霞になる。やつと眞夜は切つた心が和らいで今昼つて来た儘に就いての四方八方の闇が出て花が咲く。温のボー、ストラダが咲き出されて此處はのどやかに舞臺が華る。窓にうもれた雨の淺になつた小屋の中には夢が溜みたくと思はれる程静寂である。外の壁より等は頭からムツムツと噴き出す夢の中である。やがて六頁の國中も頭一杯に雲をたゝえて歸つて来る。笑ひのどよめきは越々々となる。多岐に更けてゐた情も皆つて耳にしまかつたであらうこの嵐しに、その深い夢がわきまされてきき替ひた事だらう。先とは異つて心から放びの合唱がながみ出される。歩つてくきくゆきき樹草の洞、その中に床ふみながらして語る野人、この小屋に響く夢を忘れた體

あついでモンダイーが出現する。

まつばしした気分になつて、鎖を斷んだ時はもう散漫にも戸は
も夜のうす暗がひし／＼とせまつてゐた。 風やかな無類の晩餐に
は了度婦人が一日の獲物の満ち溢るの事を脱少と同じく、今日得た
豊い健康や美しい思ひ当路に花が咲き山の事を脱少の了つた。

● 滯在の午後

ア、麒麟殿。自然の神様、何とあして天候を理想通りにしてさうい、と皆が心の中で願つてゐる。午後には日が照ると麒麟の内はど
うも思はしくない。煙の火も、もの落びに目ししく燃えてゐる。朝
の薪木の山も且毎々や減つてゆく。焚き時は所まで燃えても残されてゐたのも僅三、四本を飾して殆ど灰と化さぬ。カ、調取りをし
やうが、煙がよい。する事もなくて何れ仕事はないかと無難に苦し
んでゐた頃なので、早舞舞や山刀が持ち出されて後の林の中に星
めだゆく、あちちからも、こちちからも、もて飾す許りの枯木が
隠ばれる。ゴ、とひとく倒の音。やがて数分の僕には再び薪
の山が積まれる。もう又する事がなくなつてしまふ。人夫はそれ
でもこの御氣を持はうと。皆州ひくも中野がなけりや。と歌ひ
出す。續いて大蛇時のどつ唐が聞せられる。こゝにびやんの様な

沈从文

然し何時までも鎮まらない心の安眠に時をすごす事は出来な
二時二十五分、なつかしい懐かしい歌を独りの言葉が交されて僕は
は南に、六宮の人造は北に飛ぶ様にして捨をする。一足其が一間
借りにもなる親は能く使して走り出す。三分間とたふの間はスキ
ゾーバーに置く。アイゼンがぬすてたものでスキゾーバーと銅板
付けられる。先程から降つてゐる新雪に無時たふスキゾーバーを
ガヤツキ、と足は長く後に残し乍ら、タラツトの上に置つた新
雪、何の障害物もない滑い道を覗く今日の成功をよるこびつと大
なゆるいゾーゲンで滑降する。あちこちに雪島がタツ／＼と地を
乍らさまよつてゐる。紅葉の緑な足跡が石や芝に散ばつてゐて目
に入るもの片断から幾／＼と頭の中で行く。

他種の小屋から下はなだかなヌーゾブだ。雪は永雨に墮つて、
ジヤボとよみかゝる。ダツテを露し折指と統つて幾枚かのレ
ヌブルが思ひの型を残して置いてゐる。大きくて直にうねれ
ばもう二俵だ。かすかに小屋が見えてゐる。とうとう歸つたの

十數時間のアルバイトは終つた。小屋の戸口には澤川等がいた。わる様に向へて來れる。ビンディングをはずすのもどかし、小屋の中に飛び込む。壁邊には心づくしの掛がにえくきかへつてゐる。

中野小娘の背嚙が始められる。まだ就はりたてのウキウキなので、それも宜し。六節すむとドラ屋はついてゆけなくなつて、人夫連の混んだ屋だけが小屋の中を流れる。

リパイアを作らう。ふと一昨年南アフリカの北岸小屋でとぢめられた時の事を思ひ出す。あの日も平穏無沙汰に居りぬいて朝先の提議に一人づつパイアを作った事があつた。附近の華人林から数本の枝を借つて来て作り出した。僅も一箱に知はつた。ナイフで削られ蓋で削られ小一時間もたつて開く形が出来上つた。針金で刺かれると、威嚇になつたのがダダと押し出した。ほんの少しづつ火が通くなる。思ふ不慮工を手つと、到々一本のパイアを作りあげた。然しこれは小銃を短く切つて中に穴を通したといふだけで、まづばり通ぬけのしない奴だ。それでも御常人得意でアカ／＼やつて御座る。僕のは一枚の布で作つた跡のいかつたもので、夕飯の終つた頃に開く出来上つた。長い時間を費してあげた穴からスウツと煙の氣も時のうれしき。思はず二、三本立て、續けに幾つちまつた。それでも多方には又手持銃沙汰となつて只煙路で火をつめてゐるだけだ。

一人が眼を見上げる。そこには食料品が踊んでゐる。隅の方に横まれたソーズとブウヤイが目に止まる。ハウシ、もうあいつをやつて置かないか。皆の目が一齊にそれ等に注がれる。又一

人が略ぶあの望遠鏡も使いつちまへよ。 船が驚いた調をして
云ふがやめとけよ。 まだこれから何時来るかわかんから。 *

折角のめき獲つた奴分も之れでベシヤンロになる。 帆早に腰を浮
かしてた誰中も殺す所さ。 又此奴が煩く。

突然一口血を嘔る。その間の瞬間の如く、龍尾の住所で濡らしてたのをききんが足付けたんだつて。昔はかりといつた洞で腹を突き出す。とくへ来る時に龍尾の組合の邊で腹を觸つてみた。荷物は持たず只一人地下足袋をはいて一半の杖にすがつてフラフラ歩いてゐた。話かけても全く要領を得ない。何でとも龍尾までを越へて信州の町に往くと云つてたさうだ。早稲田の人達は早ノ足の通りから一踏だつたとの事で、奥徳の間では遅いの男とされてゐた。それが奥徳の會つた日から三日目に到つて流々男でしまつたのだ。死體のあつた所の廻りにはダルクと足跡が付いてゐてまるで鼠で居つた人が歩いた跡の體ださうだ。ユアヨリ笑を浮べて勇向きにゐてゐたといふ。腹中には五兩錢や十錢やそれに十圓札一々きれいに紙に包んでゐたつて事で。上落地の五千尺で四日程間龍尾を足貫つて出發したらしい。何れにしる鼠が腹になつて行き倒れたのだらうが可笑うな事だ。山に死人がある時はいつも兎あつて事だが、龍が兎ふ。道標で一昨夜から天狗が思はずくない。龍死が来るそのまゝにして手をつけてはな

るないから現物を下に落とす事が出来ない。

「何れにしてもすぐ庭園で死なれるんか、儂りいゝ風情はしないね」と云ひ合ふ。

そんな事で話が終わいてそれからしばらくは、おれが難題のわらい話題が盛に
出る。怪談めいた事等が出る時は皆の目が異様に光る。その目が
赤い顔に輝いて怪談は一層怪談らしくなるのだつた。

眞に其の事始めるとすつかりいゝ氣持になつて、夜更けるも知らぬに、貴女には無きが知られて紅葉が盡天面へ、雨の聞ふにナム、と紅葉をすする音が入る。到ち平撫しきれなくて祖かど膝ふ、あのサビとアウケイデをやつつけやう。言葉は先と同じだが氣分が圓子付いてるので、今度は早稲一人が立上つて櫻の所に行く。オ、イ、開門、レ、オ、オ、オ、十二に切つて。

やがて、ロンドンタイが出現する。チーゴとゾウセイゾが二個れつと渡される。曲調が聞き取りにされて昔の調が一時ににこやかになる。話にはずむ。話が聞き出せば仕事に熱へない満中許だ。前はアタリ／＼長かる。すつかりいゝ氣持になつてしまつた。

前より上したので外に出て見る。いつの間にか懐はずつかりな
くたつて塵一面星が散り舞かれて今にも目の中に飛び込んで来
る感じがする。今日切られた小倉の面の白輝の様に、顔を下ろし
た瞬間に大塊の銀の山が眼前に浮き出てゐる。あの死んだ

●前巻に登る日

夢見、香具、人夫羅門

三月二十日

第五——抑し開しのチラス（七、一五——八
 第五）——一枚岩の下（一〇、一五）——製師最雲部（二、〇
 〇——一、三五）——前穂頂上（二三〇、——三、四〇）——
 一枚岩の下（四、四五）——チラス（五、三〇——五、四〇）——
 前水屋（六、二〇）

一處で上高地に足跡を印した人は、必ず神川から見た穂高岳
 岳川を隔て穂高の山々の雄姿に雲海の日を見開いた事があるであらう。
 あの花崗岩で築建られた山頂に、雪解けた氷がゆるやかにそ
 ら／＼と流してゐる林間、いつも薄雲を纏ひかけて何かしと天に
 向つて睨いてゐる雄岳、そして其北から群望してゐる古代ローマ
 のアンツキシアの山頂に似た穂高の峰、これがトリオとなつて上高地に
 バラダイムのメロディーを奏でてゐる。

約一週間の一ノ宮御成金詰からも戻れてこゝ上高地に歸つたのは三月二十九日の夕方に近い頃であつた。山に死體のある間に驚れるといふ通信も實際に死人の體が歸へて下ゐられるまで鳴れな

— 49 —

かつた船師から押して、船下で一突し去ることは出来なかつた。やつとこゝに下りた目から、にこやかな太陽が顔を出したのである。西本屋には一ノ鳥から一日先に美大早大の人数がまだ増えた。又一艘に事なつた。

船の船が東海になびいて美しい霞がバツと翳り隠れた事は明日の快晴を豫期するに充分だつた。一ノ鳥から船尾舟に入り得なかつた保護は荷川から護衛に行く事にしたのだ。朝しい夕食後明日の計画が立てられる。最初僕はこの行に加はる氣は少しもなかつた。このまゝこゝで中つくり延びてゐたかつた。船と船とに對する羨望も愉快だのんびり四方の山々をながめてねそべつてゐるのも又似たつた面白味がある。時の流れに例て風をきけた船師に聲をおとしてトキをきめこむとよ、朝夢の目ざしを體一面にうけてまどろむ時こそ山ゆく雲子のこゝろにない朝しい時だらう。

「オイ、船は行かないのか、船はしきりに同行者を求めてゐる。が僕も西村も荷川も皆少しも行き度いと云はない。船の側には船と船の船が浮ぶ。最後に僕に尋ねて来た。『僕が行くぞ』と勝手に熱心な態度について元氣よく進出してしまつた。實はしまつたと思つたが船の側が何らいで来たので今のは誤解だぜとは今更云ひ出しにくかつた。西村行く事に決まざるを得なくなつた。二人では都合がわるいので二人の船員をつれてゆく事にする。

た。つと船が立ち走る。この船は見た事があるぞ、と首をかしげる。船員、これは西村にゆく船ぢやないか、成程もう船室裏で居る僕に荷川の船に出ない。西へと船をとつて發つて来たんだ。もうとくに船が小さくならなければならぬ。船員も船ですれといふ。こゝも二人乗船か運ばない。是も今度には船員を運つて風に乗り事になつた。本の船元は船長か足を取らる。その度には莫大の勢力が消費される。

やつと古時山荷川を見下す所に来た。何時間かを無知な船所にちろつてた船だ。西村、島嶼、船、明神、何れも船を運いて船の横に船を運んで停立し船目をうけて赤く照り照しく輝いてゐる。荷も雲の隙穴に苦心し乍ら裏に下る。最後に大きなデブリをかけおけて船川に立つ。荷々にガレが運ばれてゐる。船はデブリになつて一歩々々足を確實に運ばせてくれる。八時船川の丁度真中に船いた。三人は荷物を置いてカツとする。西を見れば今下つた船がまるで船を運べるかの様に黒くこむもよしとした鈍い雲を大きくこもりに向けてゐる。船分高く此船つたものだ。

さてこゝで船間となるのは時間だ。もう二時間もすれば必ず船が船を運ぶだらう。見渡す所どの船も一つとしてデブリを持たないものはない。天狗岩の下から出てゐる船は船と船の目の前

まで目撃す船は——船だ。どこか距離を待った船師から、北に走つて島嶼につながら、この船室中では島嶼に次ぐ島嶼とされてゐる船だ。

早速明日の船室が作られる。パンを焼くもの、バタをぬるものをして準備は直ちに出来る。明神はやはり午前二時出帆だ。問題は天狗岩がタヤがあれ様してゐたから先づ大穴だらう。ねつかね若しきにもがいてゐたがそれでも八時すぎには歩路を辿つてゐる船だつた。

午前零時中、ひどく歩ふらふらで目が曇つた。船員が暴風した面持ちで船に立つてゐる。もう船室の船室を待つて船の船だ。金いで朝食をすませで船室をのへる。

午前二時四十分、元氣で行つて船出でなさい、といふ言葉を僕に三人は船を船んで進む。風を揺る本船には何からのぼる本船が船来してランタンの燈にキラ／＼と光る。一直線に赤十字の船室の裏を船つて進む。小川を一つ横えれば船が壁になる。こゝまでは船だけできたがすべろのでアイゼンをつけた。船員が先頭立つて行く。船員は船々ひどくなる。大きな船の船を船つてデブリに壁を。船々風穴の白む船員は船を船々に船

船だ。こんな船にやらねばこの可哀らしい船も船間にこつぱかじんになつてしまふだらう。何しろもう八時を船つてゐるのだ。

船々考へた事今から二時間以内は船と明神の間に船いて、出帆するも船と船の上を。そしてそこで四時船室の船の船を待つて下らうといふ事になつた。こゝをスカーパーとして出帆する。船室船に船つて船の下に船く。この船すつかりデブリに船められてゐる。丁度いゝ具合に明神の直ぐ北側の船は目線になつてゐる。こゝを船れば先づ船員はまが来ないだらう。

ザイルは船はないで船も。船々The Craneになつてゐて足と船か船、船中の船の上で第一船の中を船する。西村は今船を全身に受けてまげゆく船つてゐる。天狗岩も船に船へる。金使作は問もなく又船にかゝる。船員の一校船はその大部分を船に船して只船が船が出てゐる。十二時、明神船船のヨルに船く。又白船には大きな船が船が出てゐる。こゝで一船する。ヨバを船かしてトキを船してゐるうちに何時か船船してしまつた。船かい太船がいたはる船にこの三つの船にチン／＼と光を船かけてゐる。

船が船されて見るともう一時すぎ。こんな所でもよく船に船たものだ。ねむ船に船に又コバを船んで船を船す。船が船なる船だ。再び船と船にしがみ付いて船に。船は船分ゆるなる船だ。

んであるが大した事もなく若も相當しつかりしてゐたので静に登れる。南を見れば本谷の御島から南アルプス迄はつきりと見られ何れも純白に光つてゐる。

二時三十分つひに頂上に到着した。一剎に雪を被つて岩は殆ど出てない。草履カマが取返されてバサリ／＼と道筋に雪痕がとられる。目の前に手がとどくかと思はれる處がそれでも仰々人をよせつけない涼味を帯びてそびえてゐる。西嶺は山の頂にその鋭峰を列べてゐる。湖澤谷や北嶺は麓尾の方に真白な雪を引いてゐる。念尾嶺は岩間々々に雪をはきんで昨年三月大嵐の命を奪つたのを記つてでもある様に雪の侵襲を拒絶してゐる。雪は風に包まれた肩からコップと似るのドリフトを見せつゝ、急降から雨天井、雪倉、鏡ヶ岳を経て一帯の中にある。その奥の奥に雪されるものではない。ドリフトより遥へれば大正嶺はもう大部分氷がとけて融雪の水をたへてゐる。計を立てた程に見えるのは白樺の立樹だらう。雪は初も傾かず静寂の淵を臨み眺めて吹き流してゐる。その左には雪の平たい山が是れ又白く輝いてゐる。雪は傾けて遠くにゴキ／＼浮雪が流れてゐる時でそとよく風にアルプスの姿が感ぜられる。奥の奥にはしばし民衆として見られてゐた。三度、アが頂上まで四方の奥を巡りてはしやらパンを焼く。その時のどんなにうまかつたことか。曾つて懐かしの事

ない言ひはきだつた。アサセイザを一本虎子につけて御島を照らす。格好も又珍なものだつた。

午後三時四十分少々寒くなつて来たので下山準備をする。下りはアンディンして頂上の直ぐ南側から出てゐる溪にルートを取る。一直線に降り下るのはいくらか速い。雪質がビレンドは思ひ切つた行動をとらせてくれる。存分に雪を踏み立てて一気に下まで行つた。この間僅か一時間しか要さなかつた。途中小さいが新しいチブを二つ三つ発見した。ザイルを巻いて、岩から解き下れた身は雪々として何だか胸が空に飛びさうだ。膝や腕までも雪の上を踏んで／＼と滑り下りながら腰を上げて下る。その快さ！振り返ればそと立つ雪嶺は今夕陽をまともうけて薄紅に染られてゐる。何といふ素晴らしい雪だ。息はザヤ／＼と吐き出さる。

三時三十分デュードに降つた。北を向いて雪を下るすゝとアンディンして文つた。花形御島の雄大な山になつて登山中、道も極端な峰々に／＼と下を下げた。雪のぬぐら、上高地の方に向きなると再び起るアンコール、ふり返つてもう一度大きく下を下げた。何時もは静寂の山に見えぬこの山も今日は生々しい風景だ。西嶺の影がだん／＼と前嶺の頂に近く見ゆる。エキ／＼と足につけて小さい御島の頂上を5の字形にデュードを登りて下る。丁度雪さんの小屋の所に来た時だつた。彼の方で高雪

の一時に雪くかと思ふ一大雪が降つた。雪がドリフトしげれる程に降つた。さうだ、今し方突し降つた雪が落ちてゐたのだ。

夕陽せまる大時ずきだのに今時雪が降るのには堪へない。きつとあの雪がくずれたに違ひない。――その翌日御島に行つた途中の山の上とそれと通し、山から麓の中程に降りてきた大きなデュードが認められたさうだ。――山を突した雪をうしに足は早めて頂上屋に降りた頃にはもう殆ど雪が降つた。(雪月夜大)

第四章 徳

徳、西村、陽川、人夫百圓

西本屋(五、一五)――徳田君に入る(七、四二)――西嶺三角(八、四八)――(一〇、〇〇)――雪倉を取る(一一、四五)――

二二、二〇)――西本屋(二二、四〇)

三時半起きとが天候急変の兆しを以て再び眠る。四時半伊藤より天候急変の由を聞き急いで準備をする。今日は御林中の急斜面を登るのでスキーを用ひずに靴をはき、始めてなので歩き難い。歩む雪が深いので三十分歩きしてからアイゼンに替へる。着いてみた靴もくずれず行進中。

い／＼上高地から見て雪の大きな斜面に出る。此の山の雪の厚さは丁度アイゼンの爪の部分の爪が鋭くなる程だ。雪が多く出

て来たため登山道がアツクも切らなく頂上まで行く。アンディンせず、風弱く気温は御島高い。更に東のピークに南はんとした

が我々御島にやがて来たのでやめる。然し雪だ上高地御島は良い天気なので御島、西嶺の両方を取る。天候はだん／＼怪しくなる。下り始める。森林帯の中に入つた時にもう西嶺の峰は雲のために見えなかつた。どん／＼急いで下る。

雪倉を登つてゐる内に雪が降り始めた。雪は登山道所によつては開きまでもつた。気温がやつと西本屋に降いた時には、もう上高地一帯は大雪になつて居た。幾分雪どい所を行つて来たものだ。(陽川幸夫)

三月の山上

徳田、足立、多田

徳田に連れ御島を呼ぶ。あま／＼しい山の気配に懐いてゐる我々は山にも慣れた山歩きに白雲にきらめく紅葉の山々を懐懐して山の山々を登りながらザ／＼と下を降りて出掛けた。

山岳登山の古来代からその山の形や奇山を眺める等はその風景を見せてゐるのは大抵の大峰山脈であらう。吾等古来登山に出た時、然るに徳田古来登山よりなる登山道に上るに千吉野嶺を

入れざる火鉢、焚火鍋をさせる。時々幾百幾千尺の岩壁等も往く者をして驚きせしむるのみならず未だ知られざる動植物の豊富なることは山を愛する人々に無量の智識を興へるのである。粗獷に吉野の谷に深く立ちこめてある、しめやかな風流は移の葉末の露を震はせる。流かの山の上に薄白き雲がたゞよひ始め、周囲の雲海はやがて物明の青い光りに夢の如く浮び出して来る時は幾である。萬象回響る境である。我々が耽溺する山々を眺め、そして本能の努力と緊張とをつづけるグレートライが始められる三月二十一日の晩である。

五時朝食。今日は登行の日だと腹一杯食ふ。六時に案内人東郷子が来た。

大和の人は胃食ひこでなくて天祥の様な物に頼頼に荷物にくくりつけ肩に乗せてゐるので餘り登山持てないらしい。僕達の荷物には七貫仙りもある。

六時半名残りを信む宿坊の人に別れて山門を立つ。谷から吹き上ぐる朝霧はひびやりと順をなでる。始めから可なり急だ。金峰神社をゴッソと過ぎた所で吉野山全容をカメラに入れる。朝霧に浮ぶお寺の屋根や五重の塔が夢のやうだ。急な坂道を十町ばかり登つて尾根に出る。岩が趣へて十町行つては休み十五町行つては腰を下す。あのウツロひたる森林を行つて奥平木を過ぎ、静か

な山に深く／＼入つて行く。久し振りに歩く山路はすがすがしい黒ひを起させる。崖地にまかれた杉の大木をよみながら私道にとつてはそれは無心の小児が服しい母のふところに入る様なつかしさを覚えるのである。薄暗い霧の中に羽織が白く光つて居る。針葉樹から散散する樹脂の匂ひをほのかに嗅ぎながら冷やかな風氣を感じて行く。

山腹の鼻を隔つて日の當らぬ所へ来ると道は雪で面白だ。靴が氣持よく／＼と入る。純白な雪に充ちつけられ皆の足が早くなる。此の地で凍死した天王寺中學生の遺しき最後を松太郎から聞き、悠ゆる奇蹟を汚れなき雪に捧げた若人の冥福を祈るのだつた。次第に雪が深くなり脚を滑る様になつた急な坂道の後四寸岩山の尾根に出る。五十町茶屋に滑り、時に十時半、鋭い霧を喰ひながら雲飯を食ふ。大きな火は天井をこがすばかり煙へ上り尾根の雪が解けて雨の様に落ちる。人夫の案内で道山の見える所に来た。雪だ、腹白だ、目指す山上ヶ岳は金山雪に包まれてゐる。東郷君、西郷君の大層は乾飯としてそびへずそびと長く数百尺の岩壁を造つて谷に落ち込んで居る。右の棚村ヶ岳はブズムで見るとロツタ・ガーデンのキャンドル・ロツタの如くフェス・ユウツツ・エを爲して送って居る。幾つかの小屋も見られる。百町茶屋迄は四寸岩山の山腹をへつて行く。日當の好い平かな道には霧が大

體滑えて居た。岩が多少出てゐるが横して良い道だ。途中氣、氣、氣、川島等の足跡を見る。松太郎君も時々鋭い足跡を肩に降して来るさうだ。鬼と狐の足跡の入り混れたのを見て鬼が狐に追ひつけられて逃げて行く可哀さうな光景が頭に浮んで来る。狐は鬼の頭だけ食つて空腹を置いて行くさうだ。百町茶屋に滑いたのは午後二時であつた。茶屋に入つて見ると長さが半町ばかり、側面にはたき木が山と積まれてある。聞く所によると今年の夏使ふ木は前年の内に取つて置いたさうだ。大きな火で暖取して小屋を出る。道は急だ。百町迄は雪は一尺位しかなかつた小屋を過ぎてから急に三四尺になり、時々新雪の下の幾分固い若い雪が覆れて原の當り落ずばり／＼と入る様になつた。交る／＼フツセルする。松太郎親子は荷が軽いのか腰に入る様な事もなく／＼来るのがうやましい。急に音が鋭れを感ずる様になつたので次の石楠木茶屋で宿る事にした。二時間位掛つて小屋に着く。此の小屋の屋根は雪の爲に腐んで危殆此の上もないので時間が幾分遅いが我慢する事にした。大きなガレを数回トラバースする。つまずいておとした石が他の石を呼んで幾十となく雪道を立てし、谷に滑入て行く。雪道の中に大穴井五番石茶屋に滑く。近しく六時。この小屋はふかき茶屋とも云ふさうだ。備付けになつて居る飯所を開けて給膳にする。小屋には餘り雪が入つて居なかつた。雪をと

かし飯を喰ふ。松太郎は飯食を知らないらしい。大體珍らしがつて居た。食前ゾンメル・エを持ち出して小屋前ですべる。暖かい朝にライスカレーと大層な御馳走をすませ、煙の廻りに集まつて乾薪を喰ひながら山の話を聞く。彼が人間の小便を喰ひに来る等珍らしい話を知りて驚く。何時間置つたかすき間から来る冷たい風に目を覺ました。松太郎は煙の顔で火を焚いて居て呉れた。起きて居てはけむたので横になる。目が痛い。それも目を閉ぢて居ると次第になほつて来る。火に暖められたシムライツ、ザツの中は好い氣持だ。かなり強い風が吹いて居るらしい。小屋の間の杉の梢がヒュー／＼と鳴つて居る。

午前五時起床。八時より登行を開始した。始から山腹へつり。三尺位の雪がづれて無くなつて居たり、あつても雪の爲にかくれてゐる。時々新雪が固い舊雪の上を人を乗せて置れて深い谷にづりこもうとする。一步一步確實に足を運んで行つた。朝日が高く輝いて反射光線はまぶしく目を射る。

三番目の鼻で一服。時計を見ると二時間もたつて居る。松太郎に聞くと未だ小屋より八町しか来てゐないといふ事だ。道が平らになつて居たので輪ゴングを穿いて直に薄の様な道に來たのでぬぐ。ゾンメル・エで／＼狭い道に滑り下り、木枝の智生だ給膳辛いながら歩く外仕方がなかつた。

其の中一人の動作が通れないと云つたからかけに附いた。其の聲がそれだ。夏は汗着の通る行動の一である。七〇度ばかりの傾斜で所々風通の着が通つてゐた。登アイゼンを登く事にして私は彼身でザイルを行つて登つて行く。橋手の上のチルクニは小さな霧庇が何處まで深いかを決めてくゞ保つてゐた。チルクニをカット・ユナツプして足場を確實にしてもらひたの上の比較的傾斜のゆるやかな所でザアヘンタを揺しセカンドから荷物を貰ひつて登つて行つた。小一時間ばかりの努力で橋場を過ぎた。ワイヤロープの縁になつたザイルを歩いて進くに似し縁に置く。此所は我道で良く人が倒れると云ふが少し急斜面を登ると直に頂上に来る。見れば所謂圓陣なる細打ヶ岳は五百尺の一大絶壁を佔し所々岩角が鋭い如き見えて其白な雪と入り交つてゐる。山下數町先には小屋が見えたので彼れを忘れて馳せ下る。洞辻茶屋に附いたのが牛久保四時。

窓開けを許して中へ入つて見ると、新築のつゞき高く積まされてゐるもの、他は跡に露なる事とす。然太郎は夕飯の用意を頼み、キキに自便を。饅頭、走る日差しは調子のさびしき顔が見えたり。仰げば、乾熱と山土々音は懸へ、樹い蔭の日の餘光が赤々と雪の暗風に混入る。アルペシローランド。やがて機織は夜の来る前に熱いカブキを飲んで、淡咲いた姿を終へた。窓に入れば夜と共に

通つてゐる。土から下されてゐる鎖は大きな鎖を持つ蛇の鎖に益にかからつてゐた。生半の夏人夫が見たと云ふ鎖と蛇の鎖等の間をながれ行く。東照殿がフェルムスガフエルを踏んで数百尺の遊樂をなして歸ち込んでゐる。

く。中はガラシとして給の子一頭も居ない。たゞ幾層なチリムが数個周内の窓隙に食つてゐる。黄いムツを草の上に下きとおるして行を焚ひ跡を入れ、それから小説を採捨する。紙本を二冊には数個の窓隙があつた。二、三の葉には一杯葉が入つて居た。自近所、眞直な天井、輝耀い室内には同氣たつて居たのである。靴を脱いで小娘の草履を引つかけ、襪を打ち合せて見だはりのよくない長腰掛けを掛けて窓隙と向きに當る。汚水をコップに胸んで食事をする。食料を卓上にさらけ出し、置れた衣類を壁の天井より垂れた鈴金に吊し、輕装してユキに出發ける。松太郎の案内で奥山山をさまよふ。半分壊つた御伽かな山と観音堂、五六寸の眞鍮の先大御花菓、それらはどんよとした空の下に一層静寂さを加へた。ユキに近づくと聞いて肩大御花菓には煙草少しの雪もなかつた。近くに柑村ノ銀が山より細かいダクトを露して幾度遠く左手に大雲飯面を絡めると御山に横く山嶺が露し、道に無類談が薄雲をなして、順角を登してゐた。北側の山頂には一

つて、張四郎が火分殺しに感じられた。烈は風雲と共に小川を歩くと、此の小川は風の橋三、面倒例れた事がある。と云ふ松太郎の語に於て、佐助のいふものでない。今夜一晩の執事を心に念じて、シャワーデックに入る。最晩間を過ぎて日覺ゆると背筋にぞめた。松太郎は丁度今し方オ〜と壁に背つて枕の間に閉いたそうである。

けてゐた。さう、十時頃降りてくると小屋を出る。小屋のはづれに神社の鳥居が立つて居た。行者は此所を離れ、森にかゝるはづれをへて、いそがしいわらちとはき代へものぞかうだ。麓尺かの雪の下には何萬足のわらちが轉つて居ると云ふ處は、山よヶ所より出て居る尾根の左にかゝんでゐる。五町往つた所に、だら動小屋を先頭に小さな小屋が五六、六つの一列となして並んで居た。少し行くといはれの上に居た。雪はまへへる程な程斜だ。行者の登る道は梯子がつけてあるからうだが先へ雪に憑つてわからなかつた。左に大きな岩壁が下りて来たが先へ雪に憑つてわからなかつた。雪になつた岩壁を登ると、雪の木の枝を持つて腰に入る雪に苦しくなると五十間ばかり登つて、スレンドに雪に。此れからやせだろくに草につつき、鹿に餌を、かの岩に山鹿の雪を鳴んだ。一時間ばかりのアムバイトの雪に掛つて居る。雪の道には行者のたまに、橋所の雪が

丈ばかりの道があつた。福徳堂の溝六町の間草葎にとばす、すい／＼雨をうつ風は熱い身體に心地好い。スカーのベンチがない故にかえつてこんで猛西な烈風をやら。小屋に歸つて火し頻りに草に向ひ俯へ、付けの茶碗にて食事をとる。戸締りを厳重にして寝る。午後八時頃かぞこん／＼と月をたゞく君がする。風が奴が人を驚かして勝るのださうだ。松太郎は氣にだまされたと認をする、彼の熊で話で大笑ひだ。十時にシムライツ・ザツタに入るが未だどん／＼やつてゐるまゝで寝られぬ。いゝ氣持で寝て居ると松太郎が急に僕を呼び起す、まねは僕でも死なかつと思つて起きて見ると壁の火が燃んでシムライツ・ザツタから形勢を過して大きな穴が開いて居た。其の上段段にも只ひ立ての外壁は見る影もなしですんだぞとあきらかに寝る。いつか戸をたゞく時、あきてしまつたのか、誰かをのゝ衣が眠文。

まだ陽やらの影すら谷間に白い霧がうづまいて居る。下より吹き上ぐる雪と共にしるしが面を打つて又一階きける。今朝六時日然めと見れば雪は、鏡面。酒風と共に霧が縦横無忌に横行する。時々チアアと崖が横なぐりに決つてける。小止みと思はからつて外に似た。昨日の場合で煙草をする。雪はよくしるまつてゐる。所々表雪がテクエトして散た。平雪は小庭でのびる。松大將は此の天候が讀こころだと公ふ。こんな天候なら何もしないから

明日歸らうと云ふ事になつた。廣市は屋敷から落ちる雪解氷を持
つて来て呉れた。不純な雪を火で解かして飲む機遇にある我々には
雪解氷は千年の美酒である。やがて太田は未だの雪かきを終へて
死の如き休息の夜は訪づれた。暮色はやうやくあたりを照つて春
の曙は光々に蒼白と化する。

三月二十六日

晴氣な此の山に又朝が来た。去が遺跡はとれない、だが雨は降
つて居ないらしい。寒れ程ふ大自然の中に我等に安らかなる處を
與へてくれたこの小屋に最後の別れを告げる。雪は融氣を帯びて
少しもしまつて居ない。性急と列じムートをとり同じ茶屋に座
く。グットムからずばんはびしと離れだ。暫らく乾かして後山
に下る。雪と氷の交つた道を山裾で滑りながら下る。幾度か轉ん
で洞間にかゝれる一本橋を渡つて一本松茶屋に着く。洞谷には切
り出した材木を滑べらず軌道がずうと奥で且えなくなつて居る。
川べりの平らな道を歩く。群鳥を眺めながら後山谷をさまよふ
て居る様だ。一時雄鶏茶屋にて中食。純朴なおし感さんが茶に饅
頭かの渾足を差しくれた。雄鶏茶屋を見に行けば、大きな轟の
口の様な洞穴が川を隔て、奥つとも同じ居た。橋を渡り洞穴に入
れば美しい。洞間の岩にしたゝる水はつらつらとなり、あうそくの
大がきら／＼反射して一種異様な感をも與へる。一度は洞窟にも分

れ編を知らない。いゝ加減にして岩屋を出る。新屋の婆さんにお

禮の儀かを出したが笑つて受け取らない。我儘に定る部會の人々
に比べて或る尊厳物が感ぜられた。数町行くと洞川村の橋に到
る。洞川村に材木が立てられ、道にはやばりかきひき粉が布かれて
居て山村らしき気分をたまふはす。村の子供がまゝりを持つて不思議
そうに此方を見つめてゐた。今もなほ女人の足跡を叩きつた
いと云ふ熊鷹寺の境内に入る。中には大きな池が石造の橋に取
り囲んで湧き水をたゞへて居た。大きな洞穴が池に水をはき出し
てゐる。それは洞窟によつて雄鶏茶屋の隣りであると言明された
と云ふ。山門にて西京を期して松太新屋市に別れを告げる。僕を
導き導つては道をして去つて行く。共に暮した数日が少いとはいへ
感じよき案内者であつた。彼等は此れから西原の山道を歩いて青
野に歸へるのだ。再び、振り返らない心持をいだいてあぶりに掛
つた。だら／＼した道を二時間ばかりして川合に着いた。自動車
で九原の國を通つて下市の停留所に来た。

電車もある支那の町に出た。もはや僕等は動物で居るばかりだ。
廣市は山より駛して最早廣市になんの挨拶とてはなく、只打ちく
つるいで安らかなる家への歸路を想へば心身おのづから暖みを生
じ間接なき苦悶に重つた疲勞は今一時に手繰り出されるやうだ。
(徳田忠夫)

◎青屋ワラダガーデン行

六月二日、三日

(キヤムプ) 香月、小南

十六日、十七日

(キヤムプ) 津野、秋島、津野

十六日

香月、小南

七月二十五日

井上、足立、徳岡

九月六日

西村(橋)、徳川、香月、橋、足立、富士澤、安井、徳岡、小

泉、佐山、徳岡、井上、伊藤

十月十三日

橋、香月、黒川、眞井、井上、徳岡、徳川、西村(橋)

十一月十一日

西村(橋)、香月、井上、徳岡、富士澤、多田、徳川、津野、

今村、足立、伊藤、野田

二十五日

西村(橋)、香月、秋島、徳岡、富士澤、水野、津野、多田、

高橋

十二月二日

徳岡、井上、秋島、多田、今村、津野、村上、安井、平澤、

津野、伊藤、眞井、中村、橋、足立

二十四日、二十五日、二十六日、二十七日

(キヤムプ) 足立、徳岡、多田、秋島、眞井、津野、佐山

二月九日、十日、十一日

(キヤムプ) 安井、多田、秋島

十七日

伊藤、佐山、徳岡、西村(橋)

三月三日

佐山、佐野、眞井

二十二日

富士澤、井上、秋島、眞井、佐野、津野、伊藤

二十八日

富士澤、平澤、秋島、伊藤

昭和四年度記録主要目次

○第一回山祭り

(61)

○夏季登山記録

第三回南アルプス自給行

香月慶太 (61)

穂高生活

湯川・足立 (63)

墨師槍職走

郡田一郎 (72)

錫杖行

楠木義明 (77)

錫杖生活

井上・秋馬 (78)

笠槍職走

楠木義明 (81)

御岳生活

田口一郎 (84)

上高地生活

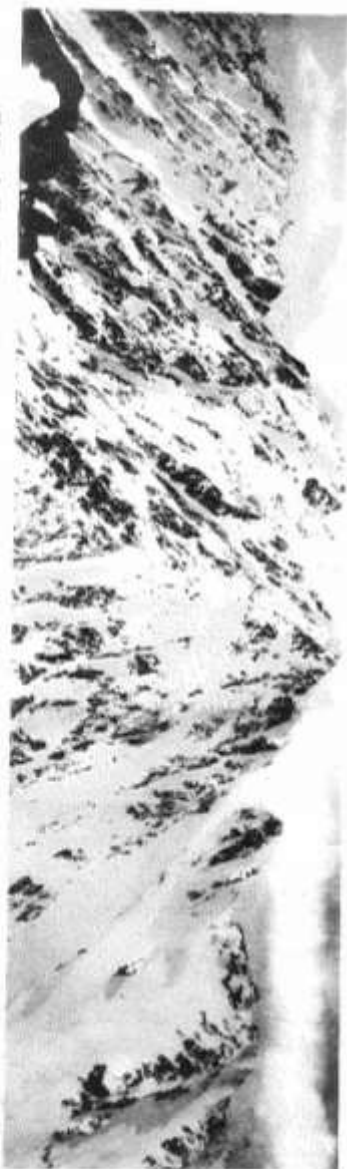
西村雄二 (97)

乗鞍・槍行

岡本部長 (98)

○第六回六甲天幕生活

(100)



西穂・奥穂・御岳・北穂・槍

昭和四年度

山 祭 り

ローダー 春月歴大

一 行 田口兄、伊藤、角谷、湯川、橋本、川本兄、田口

義、藤田、村上、足立、秋島、本野、安井、多田

喜多、宮土源、熊河、今村、井上、豊崎、野口、

渡辺、堀、森、佐山、平澤、高田、藤本、比企、

小笠原、山岡、笠原、川本弟、橋本、山口

先 登 西村精也、松澤

四月二十五日

部ルム(一、〇〇)——奥尾道——御多福山登(五、〇〇)

本日は年中行事の一大山祭りなので、新入部員を始め多数参加した。

遅くまで Camp Fire を中心に愉快にすぎた。

四月二十六日

御多福山——ロフタガーデン

新入部員のロフタライミングの練習のためロフタガーデンに
向ふ。途中笠岡、井上、野口、佐藤同席。夜生霊燈君来り大に氣
勢を揚ぐ。

四月二十七日

ロフタガーデン(八、二〇)——部ルム(九、〇〇)

九時の學校の式に出るために急いで下る。やつと間に合う。

夏季登山記録

南アルプス

一行 春月歴大、植田俊夫

昭和四年七月十三日 晴

並崎より細井を削て青木嶽に到る。この間最は細田の地圖上の
位置とは違つてゐる。並崎脱十一時、湯澤五時半。

七月十四日 晴、曇

青木嶽から北御堂迄。午前中は湯澤の湖の河を平して貯魚をと

る。とるもつたり小さい奴を二尾。小倉迄は始めの中は河原で、後に尾根廻りの道で水もあり登きは大した事はない。温泉は九時半、小倉五時半。

七月十五日 晴

北御堂から温泉を登り自民山より河原に下る。七時出発、八時温泉に到る。三時間間の河原や高嶺で進んで二時十分野呂川に下る。小倉迄は十分行程。この日殆ど一日水なし。温泉者三十名を越ゆる感だ。京大高橋氏一行に會ふ。

七月十六日 晴、曇、雨、曇、雨

今日は北御堂を往復大池小屋に泊る。六時半出発、荷物は一泊分だけ持つてゆく。小太郎尾根に登つた頃から霧が来て雨の中を花畑に登り早々下山。大池小屋迄は林間の尾根を登る。大池小屋から小太郎尾根迄は急峻な坂、水なく日光直射して誠にあつい。夜人夫の小澤が置いて同宿人に喜だ迷惑をかける。

七月十七日 晴、曇、雨、曇

野呂川を行き中止して、温泉に登いた荷物を大池小屋に上げると六時半出発して八時河原に到る。温泉や山麓をとりて進ぶ。三時半ころを出て大池に降る。夕飯に湯を煮て食ふ。

七月十八日 一日中晴

六時小倉。小太郎尾根の上で一時間遊びそれより朝日地帯を

登高生活

リーダー 藤川、足立、多田(水野、秋高、井上、西村)

上高地に来て一番先に目につき、又水々に忘れられないのは何と云つても穂高だ。

穂高、穂高連峰は丹阿弥岩、大山岩に属し、両峰は針長石である。から形成されてゐる。又此の峰の峰頂は積層岩が露出してゐるため漸次崩壊して後の鋭峻な峰頂を現はすに至つた。

休憩毎に命を懸けて、重いルツクを背負ひ、苦しみ喘ぎながら山へへと憧れのぼるのも我々が登山目的。穂高の世帯、あらゆる此の世帯の風景から一時的にでも離れんがためであらう。

たとひ重いルツクに汗でむされ乍らも、或る安ひしれぬ風情に満たされる。紅葉の喜び、満足の歓喜、否、到底々々言語で表現出来ぬものである。若し個々に言語でいひあらはしたとしても、それはそれそのものよりずっと僕の創りのものだらう。

あの偉大な姿よ、くろがねの肌よ、雲梯の山よ。

奥穂高から二つに分れて前穂高と西穂高路になり大きな両手を掲げて、背きつゝものは何れをも顛倒してしまひさうだ。だが頭を下げればいいだけ、濡れば濡いだけ、後等は興味を感じず。例へば明らかなに不可思議であるとしか考へられない未知の危険を感じる

途中まで下る。十二時十五分北御堂上着、バトレス登攀した、京大の一行と會ふ。同の局との談話で午膳をして六時、同の岳の上七時石室に入つた。昨午遊てた小倉は展望がない。これに迫つて無量の天井から月見をした。この日全く水なし。小倉附近にも雪なく明日の午まで水はのめだ。

七月十九日 晴、曇、曇

午前七時小屋を出て温泉に登る。約一時間頂上で遊んで、十一時大池小屋に下る。こゝでも二時間半遊びて六時西山温泉に下る。ホームビッドで飛んで温泉早く着いた。大池の小屋は昨午遊した。

七月二十日 曇、雨、曇

湯見を頼り新倉に出、トロワコに乗つて飯宮に着き温泉を過つて甲府に降る。

この行程は例に依つて珍妙なものでした。人夫の小澤も愉快だつたし時間もあつたので遊び歩いた。人夫は温泉原に降りてくると風よ。西山のものが温泉の緑だ。尤も数年前までは悪かつたさうだが今は池の緑から航路よく同行出来ていゝ。戸籍も其安も相當にいいらしい。今度の山旅は小澤と温泉組合が取り組んで進めたので最初の計画はすつかり打倒されました。人夫の足跡は往還すべきを極めて適した。

又は岩壁にでも直進した場合、此の時移の機を察知してその真相を究め、重難の大難を進行する路には高難を拂して成功の彼岸に悠然帰還せんとする冒険的な、實験が目づと湧き出るのを感じる。そして心ゆくまで静かたくなる。

これは蓋し人間性の顕現であらねばならぬ。

③ 調谷岩小屋へ

七月十六日

シムラツツアタから首を出した。パツとマダネレウムのやうに朝日が目に入る。良い天気だ。昨夜風の雨でぬれて、より白く見えるサントに、湯りの水々が美しく輝いて緑色に染めてゐる。雨を風にしながら登つたが良く照れた。時計を見たらまだ早い。白いサントは波打いて、直ぐ飛び出して空を見上げた。あゝ、なんと至るまで天気が急いで雲を洗ひに河原に下りる。穂高が今更の如く美しく輝いて、背中にスカイラインがくつきり浮んでゐる。門出の機を捉へるやうに。後等はお前の土とこゝろへ今日入るのだ。ばうつと見えてゐる中にもう別の峰になつた。皆が寂だ。と云ふので静かにはすいてなかつたがつかみこんだ。荷物を整理して湖畔の土高地へ行く。人夫共穂高十人、藤川、多田、井上、秋高、水野、奥とそれに上高地の西村が岩小屋温泉

七時五十分鐘部に着く。義理は此際係員そのものだ。着席に立つて朝日の光に映る雪と野の靄高き峰の姿は實に素晴らしい。山に目を轉じると遠く道アルプスの山が見える。富士も雲の上から顔だけ出ている。光線の工合も真いので道標、鳥居の寫實を取る。コッアを少し飲んで元氣をつけて第五峰に登り始める。此のピークは傾斜も多くなりサダメも本たい難な所だ。許登りらしい気分も味ふ事なしに頂上に着く。傾斜の中から洞窟が現れ出て来た。驚いて尋ねると第五峰を「ゴゴゴ」に登つたんだと得意になつて居た。四と五の峰登りで一緒に行く事にする。間もなく四と五の峰部に着く。西村は一人此の雪原を下りて行つた。

第四峰よりアシザイレンしやうかとも思つたが、見た所では洞にさうしなければならぬ程にも思はれなかつたし、時間もかかるので進まなければならぬ。第四峰は第五峰に比すれば六分大きなピークだ。傾斜例を登り始める。だん／＼登り易い気分になりつて来る。そして一歩々々と傾斜が直つて行く。光線の關係から此のピークの傾斜例は陰気な感じを與へる。だん／＼登るにつれて岩は堅くなつて来た。三分の一ばかり登つた所でAが岩の間に足を挟んで取れなくなる。仕方がないので靴を脱がして、後から能だけ別に取る。それから間もなく又自角ヘトラバースをやつた。之は確かに失敗だつたと思ふ。トラバースをしてから少し降つて

大きなテラスの様な所に出る。神川の方を見ると、こんもりとした林の中に四角な小舎小屋の屋根が輝いてゐる。又自角は始めの間少し傾斜がありそれからしばらく岩の直り合つた難な状態だが後半分は大きなスラブを踏んでゐる。小さなテラスの様なものがあつたので、それを登つてリッヂに出る事にする。先づリッヂのなないAが登つた。聞いて私が登らうとしたが、リッヂが邪魔になるので上から傾斜ダイヤルを降してもらつてリッヂを少しづつける。そしてAが引揚げ始めた所が、リッヂがちよつと斜にぶつかつた。その傾斜ダイヤルがするりと滑りリッヂを越下下下下した。一旦小さなテラスで止つた後には思はれたが、傾斜が大きなバウンドをして下の方へ小さくなつて行く。三人はしばし茫然としてそれを見送つた。大事な食料のパンも、アイザンも、カマも入つて居たのだ。

三人は全く落胆してしまつた。しばらく沈黙が続く。きつと口には出ないがリッヂの難所。そしてそれはピークに近い——不吉な事を連想してゐるのだ。

私は不思議にそして度内にも、不安と、それを押へやうとする心持との二つをはつきりと同時に認める事が出来始めた。間もなく責任の地位にある私としては、此の登高の進行に努力しなければならぬ事を自覺した。私は二人に登事を促した。二人は快く同

意した。再び三人の心は登高に向つた。無言の内にトレチアライが一層深遠深く、雪原に始められた。

間もなく第四峰の頂上に着く。降り少くなつたコッアを飲んで歩つくり休む。鳥居、道標、念箱は手に取る程にはつきり見える。リッヂを下つて行く。大して緩くもなさうだ。三と四の傾斜で又休んでリッヂをかけた食ふ。傾斜をこえてコッアもなくなつてしまつた。後には傾斜が直るばかりだ。丁は降りてしまふ。仕方がないので少し傾斜を飲んで出発する。見た所此の第三峰も思つたより大さく傾斜もちよい／＼あきさうだ。先づルートを変動例に取る。少し登るとオーヴァハンド傾斜の岩にぶつかつたので、一〇米のザイルを張る。第三峰は割合に岩が大きい。少し登ると大きなテラスがある。取付きの形の緩んで居るものには驚つた。大分石を降す。テラスと云つてもバツヤンダアツア等が出来る所ではなく、小さなテラスをホールドヤスチツツにして登る可なり緊張する所だ。出口は大きな岩が難いので居る。その下を小さくなつて身體を用ゐながら左にトラバースを試みる。エチツツもしつかりして居るが後より大きくなく、強く岩がオーヴァハンドで居るの上半身が著しく後方に傾くので、後より好い保持がしない。一〇米のザイルを張る。傾斜の取つた北尾根のふ

ートでは今のテラスの出口の所からオーヴァハンドした岩のトラバースまでが一歩居い。トラバースを通過しながらリッヂに出ると間もなく頂上だ。傾斜に直がへつて来た。半分降つたレモンを食ふ。何時もならすつばいレモンなんだが皮まで食つてしまふ。下は斜に傾斜だ。

第二峰にかゝる。直がへつてしまふがないので飲んだ方がよい。飲まない方がよい。知らぬが傾斜を飲む。得ずごく前を降就する。第二峰は大して緩しいピークではない。傾斜は緩々としてなつて来る。第二峰の下の一番下は傾斜に傾い。私は登り易いリッヂの下からと思つたが、下のスチツツが不安定だし、カフビレイでまゝと思つたが、ビレイインデピンにしたい岩が飲んで居るので少し上から傾斜例にからんで傾斜に出る。此の傾斜の狭く鋭いのは一寸驚いた。第一峰へは小さな傾斜を分けて進む。案件簡単に頂上へ出た。

能に私は從時間かの遅しきアルバイトの後に此の喜びに居る事が出来たのである。

なまうとした事をなし得た時の喜びは大きい。例へなした事は如何に小さくあらうとも。

三人の口からは「ゴゴゴ」が噴へられる。傾斜から解放された私達は又し固きでゆつくり岩に顔を掛けながら、皆落日気分にな

つて乾草をしゃらうと云つて、水桶を傾けると前庭には湯が散りし
 かなかつた。急に疲勞が出て來たのでトカゲをやる。午後、湯に
 照らされた岩の温くみが快く感ぜられる。沈黙が續く。こうして
 静かに洞りで山の事を考へてゐると時間の経つのも忘れてしまふ
 然しこうしてばかりも居られないので下り始める。岩腹のため足
 がふらふらする。ガレを歩くのはとても辛い。途中Aがパイナツ
 プルに釣られて一大作を興す。漸く麓迄出ると丁度松本高
 校の人造が休んで居る。早速事情を云つて、ビスケットやチョコ
 レートを御馳走に願ふ。感謝の他なし。これでやつと人心地がつ
 いた。此所から洞谷は一日に見へる。岩小屋の下の草地には草花
 のアゲが主持ち顔に、白く浮き出ている。コッフェルで雪をと
 かしたりして、三時過ぎまで腰をすえてしまつた。いよいよ下り
 始める。最初岩小屋から見て一番右の雪原に出たがアイゼンや
 ツケルの足らない私道には、少し急峻なところと見えたので其の左
 の雪原に出る。岩から雪に移る所には斜によつて幅分六きなクレヴ
 アスがあつた。此の雪原も上の部分は相當急なものでアレザレン
 として下る。中程までグレイで換はした。いよいよ直下つてから
 は今朝通つた路を行く。テントに降ると奥高へ行つた三人は歸
 つて居た。そして秋道六人がその日の成功を分か合つた時には、
 もう洞谷には夕やみがせまつて居た。(湯川)

奥高ジャンダルムへ

岩小屋(六、四〇)奥高小屋(八、二〇)奥高前庭上(九、一〇)
 ジャンダルム(一、〇〇)奥高前庭上(一、三〇)奥高小屋
 (二、〇五)洞谷前庭上(三、四〇)北嶺との谷(三、一五)岩
 小屋(三、五〇)

北尾根の上から黄金に輝いた朝日が昇つて、夜の帳に散はれて
 輝きに照つて居た。時々を流し流しから呼び覺して行く。何と美
 しい輝だらう。何時も自然の城郭の如くいかめしく取圍んで居る
 屏風、前庭、奥庭、洞谷、北嶺の峰々も幾分か霞に注つた洞谷の
 空にくつきりと、其特微あるユカイラインを描いて聳り立つて居
 る。洞谷よりの朝日に輝く洞谷、それは奥庭の輝しつける様な
 感や訪れる人々を感服して居る。大庭園とは異つて、何と地味
 的な姿であらう。然し北尾根のピーク、残雪に覆われ、訪れる
 のクレツチャーに、登るへの憧憬の念を起さしむる奥高連峰、
 それは何時迄も見て居てもあきない永遠の山岳の姿である。

山岳の峻険に感服されて時間の経つのを忘れて居たが、もう出
 発の時だ。先ず北尾根に向つた次の空が向ふに見える。登る者の
 憧憬の的である北尾根に後時間の景観したアルバイトを試みるべ
 く、奥高前庭下の雪原をトラバースしながら一歩一歩力強く登

わ彼等こそ建々しきベルシュタイガーの姿である。

さあ出発だ三十米のザイル、濃厚なココアの入つた水筒、俱の
 プリマの置バック等を持つて行く。ムツサツタは軽くて心持よく
 背に懸ける。

朝の冷風にまだとけ切らぬ雪面にさくさくと心持よくアイゼン
 がささる。

遠く奥高の谷の彼方にピラミッド形の雪原が桔梗色の空にくつ
 きりと其美しい姿を見せて居る。身は奥高の險を攀ちて居る事
 も忘れる許りである。

北尾根の方へ目をうつせば、五峰と六峰との間にかゝる急な白
 雪をツイツタアツタに鞍馬目かけて登高を續けて居る。三つの黒點
 が望まれる。

日が段々高くなつて照り輝しが中々烈しい。頭頂部を覗き出
 したが、もう直ぐ雪原は切れて、ガレの中に途が付いて居る。こ
 れを登り切ると突然奥高小屋が現はれた。ガレの上の雪原を横切
 つて小屋に入る。中には幾人か御宿の顔がかゝつてある。十五
 分許休息を取つて奥高に向つた。奥高路を通過つて奥高の頂に着い
 た。東面の方に甲斐駒の連山と、其の向ふに端麗な富士の姿が望
 まれた。今日の目的のジャンダルムも新割の陽光を受けてそより立
 つて居る。五分の休息の後西嶺に向つて下つて居る山腹を下り着

めた。此の地帯も奥高の例にもれず岩の質が相當に柔らかいから落石
 の危険があるし、ヤセ尾根で雨割は相當の峭壁となつて居るから
 一寸悪い。降り切つて仰いで見たら、一層そんな感じが深い。

ざんざん降りてジャンダルムのザイルに滑り着いた。頂上に立つ
 た。奥からだん／＼雪がまき初めた。奥ベンとココアの軽い食事を
 取つて、少し休んでから下り初めた。今度は掛川側から下りて見
 た一寸面白さうな岩がある。I・A・Mのオーダーでアンデ
 レンをした。此所はクレベスの多い奥高の急峻な雪原に照つて終

つて来る相模ではよりいふまでもなく相模しつかりして居るので、一寸面
 白い所だ。此所で少し休憩したので奥高の頂上に着いたのは一時
 三十分だつた。一寸休んでから奥高路を降りて奥高小屋に着
 いた。まだ時間も早いので御宿を叩いて北嶺との鞍馬の雪原に
 下る事にした。コルへ来た。丁度グレイで待つて居るの雪

原だ。三人は一日の展張したアルバイトに満ちた心を抱いて
 憩ひのしとれ岩小屋へ向つて一文中。(井上)

七月十九日 昨日のつかれの爲めにとう／＼十時朝迄寝坊して
 しまつた。天気は佳晴らず好い。元氣はあるものゝ體がつかれて
 あるのでソナメレーの練習をすることにした。感が波形になつ
 てるので、オート／＼して感じが悪い。

◎旅行記録

七月二十六日 晴、後雨

一行 牧馬、水野、井上、足立

田登上高地(九、三〇)——横尾岩小屋(二、三〇)

種高生活を終へて上高地に降つて来たが何だか又山へ入りたくなつて来たのでパーティを造つて給へ行くことにした。今日は横尾岩行くので、調度品を出置した。夕方に猛烈な夕立がやつて来た。晩は寒かつたので秋馬路に暖火を燃行した。

七月二十七日 晴、後雨

田登横尾岩小屋(五、〇〇)——横尾岩小屋(六、一〇)——殺生小屋(九、五〇)——前小屋(一〇、三〇)——小僧岩(一、〇〇)——頂上(一、五〇)——鞍部(二、二〇)——大僧三、一〇)——横尾岩小屋(七、五)

冷い風に顔をはひきと顔でられて顔がさめた。秋馬路は暖火の煙を見せない。前小屋から鞍の出合迄は十五分かつた。大僧小屋の手前迄に来るとしきりに霧がまいて、鞍の姿は目見えな。我々で寒衣を取つてザイルを肩に小僧へ行く。霧の中を探すのに大分手間を要つた。ザイルにつくとしきりにキリキリ音が来る。オールド牧馬、足立、水野、井上。小僧の頂上に立つたが

もやつて来て荷物の整理に忙がしい。

八時四十分 大僧より道は明るい横尾岩を越つて進む。もう白樺がそこそこ交つて霧目に映えて美しい。やがて林は濃き道は霧川にそよ。鞍を跨る七月半ばの草花は惜し気もなく開き盛つて、我々を微笑みかけてゐる。

途中小屋迄の一行に出合ふ。十一時半白樺の蔭合にて寒衣、朝の様に暗れてゐた空が何時の間にか曇つて、やがて雨さへ降り出して来た。雨にぬれたのは甘い蕎麦の香を嗅ぎ雨後の緑の爽やかさを胸一杯呼吸し乍ら爪先登りの道を急ぐ。暗探でおくれた人夫を持つ。

前方の香の漂くる蕎麦の水が霞ひかぶさる霧に掛えて其の雄大な山容をあらはしてゐる。

赤澤には一昨半道断した一早大座四人の雲をまつる日本の柱が立つて居た。生々しい其の柱を見て路に歸るぬ天國の人となつた四名の道断強棒が風に浮んで来て思はず旅費が半分になつた。四時野山嶺大僧小屋前、小屋は小屋で静寂だ。生々しい事象しい。あまり寝れてゐないのと生々しいのとで眠られぬ。夜には静い月が横顔である。山小屋の第一夜は静かに更けてゆく。

七月十三日 快晴

今日は針の水越だ。六時半百瀬氏にお別れの挨拶をして田登

峠は金々秋日。急々本降りになつて来た。雲がなる。びしょぬれになつて無事で降下す。それから雨の中を肩にかへり又大僧に肉ふ。水野はビツタルを脱離された。直ちに殺生に引返す。非常な人混みだ。むしあついが食料を購ひこんで下る。雨のため人混みが少ない。横尾の岩小屋についたのはもう決す暗かつた。

七月二十八日 晴、又雨

田登岩小屋(一、〇〇)——上高地(三、〇〇)

昨日下向をした横尾岩、秋馬路を助いて丹の者は殺生の調子が悪い。又雨の中をむされたが上高地へ歸る。白樺食堂の種高が寒寂に居る。水野が頭痛を訴へる。熱が出る。腸腹痛ださうだ。(見立)

講師 槍繰走

リダー 村上

一行 黒田

同行 中江龍二氏 中江龍夫氏

案内 丸山善光 人夫三名 合計八名

七月十二日 晴、小雨

六時起床。天気快晴我々の前進を視察するが如し。丸山は早く

一つない針の水越にもつてこの天気だ。十五分にして針の水越の下に到着。草鞋の者は此所でガソリンをつけ僕と村上は受けるだけ登つておかうと先に出發する。雪渓の中頃には昨日の小屋座が横の壁に小さく登つて行く。二人は無言のうちに急ぐ。丸山が坂には是非登山靴を穿れとしきりに勧める。

やつと小屋生の一行に進むつた。其所で歩脚、ガソリンをつける事にする。雪渓のカートによつて下の一行は見えない。僕から見た中江君が抜ひつたので一緒に出發する。雨の降は次第に迫り涼風吹き流して夏荷衣を脱ぎ。雪渓は益々急に我等は絶度の緊張を以て黙々と歩むが如く進む。小屋生はもう妙の頂に着いたらしい。

突然小屋生の大衆に呼ぶを聞いてふと顔を上げると人頭穴の右が赤き空で輝け落ちて来た。それが村上の横一、二間の所をかすめて下の岩にあつて粉々に砕け散つた。危険な事である。

九時やつと時の頂に着いた。其の間今まで何も見えなかつた眼前の景色が試みられたが如く展開する。朝霧の夜にくつきりとスカイラインを見せた山々の雄大さ！雄高さ！雄と流れる汗を拭ひもやらで景色にみとれる。

十一時峠の上に荷物を置いて運搬の肩車で登つた。標準の頂上には時間の都合で行く事が出来なかつた。



村上正樹

て着目もつた貴族の現存像もないやな大勢衆の頭上とはどうして思はれない。ガラ場を造つて頭上に着く。四人は数寄の頭を離かせたが暫くは一言も發し得なかつた。時計を見るとはや一時間と十五分も経つてゐる。燈光を浴びて頭上の服を下し以つて贅きのチャコレートを啗る。頭上の腕袋に素願し小がつた。裏には番頭を登じた藝妓の尊稱、それに通る舞臺へあるが大きい見える。機が噴煙をなげかせ、番頭が鉈鉋と導つてある又番頭はるかに中尾村が平和な眼に落ちてゐる。暫く西海、黄色に購入つてゐた。頭上打つたピンには初登壇をせられた、三村君等の結び付けられたと云ふ赤旗が今では風聲にさらされて白色に變じ當時の面影がしのばれる。ケルシの中に通名をして賢き記念撮影等をする。やがて頭上に名刺を贈しみなが下つた。登壇と同じく頭上を取りチュウの所と最初の番頭の所でアザディレンを以て退つたより時間を長く取り、歸りにだけ時間を食つて歸た。ザツケルの所で宴食する。歸りにには宮殿をとつたとしてうれしさに細い足と歩めるめばつゝ英大庭を下つた。雨を覺悟してか雲が低しく流れ始めた。若小屏に歸つて暫くすると、物凄く夕立になつたが、西海の上に白雲が二つ現れると雨も次第に止んでしまつた。暮色が西海に迫つて来る頃等は甘い夜を抱いてシスターズゾクに入る。何時もしか細い雲に捲入つてゐた。

翌日は色々の毒餌により野小屋を下り、幾を脱えて上高地に行つた跡りに中尾から緑葉を振飛ばればあの動異い、丹波に未だ落ちぬ地等の登高心をしきりにかき立てた。雲霧地圖上では問題にならない程の貧弱な岩壁だが、行つて見ると絶壁やピークが横たうでも屹立してゐるのには驚かされる。秋風と云へば雨のよく降ると云ふ事だ細だが我等の居つた時は殆ど降らなかつた。野は廣く峻や斷崖の峻に飽き人が行かないから新鮮味があり、野小屋が受領してゐる等野邊として(零はないが)先づ絶好の川であらう。(秋鳥)

七月二十四日 晴、微雨

丸水橋——河田川合流點——平尾村——中尾峠——上高嶺

「そのように思ふ者も居て、それはそれで構はない。可憐なる、可憐なる」

紙時のい若小唄を歌にしたのはもう、九時を少し越つた頃だつた。タリヤ客に誘ひ、此の急激な傾斜澤に、ムフタナツタの連たいの手持て焼しながるゝのは、地當惡しいアルバイトであるが、あへて、例合がらん張も。此所からもう芝の道があるから、柳だ。恰事の道との別れ目へ向たが、もう十一時だつた。露田川原へ出て一時間ばかり裏路をして、中屋へ向ふ。中屋の美しい白梅の林の芝生の上で宴会を振る。餘りよく休むので、時へ向つて立ち上つた時はもう二時半だつた。

巾着の紙の封い紐も、奇怪な居眠りをつた繻杖端を望みながらぐんぐん倒れて睡へ着いたのは五時半だった。

夕陽に照つた上高地になつかしい霞の光がまたいて居る。

いでせの上高地よ、森よ、河原よ、村の境を。とうとう歸つて来たのだ。

急な断崖登山道をはせ下つて、次の待つ地へ歸つて来た。

途中からの細雨に、懐しい上高地の聲はうるんで物寂かにまたいて居た。(井上)

笠 槍 縦 走

第一日 橋本

沼池、大貫、今村

七月十六日

龍田午前七時三十分——二四四七米午後七時三十分——笠原

午前七時三十分——小笠原午後七時三十分

我々が起きたのは、酒田川の朝霧が消ゆる間であつた。味方縦走などを分けてもらつて早速出陣した。

巾尾に行く橋の少し手前で道を左に取つた。此の分岐點には、一本の立木も立つてゐない。

道は川に沿つてついでゐる。間もなく槍平へ行く道と分れる。

この道を行つて、穴明寺を渡つても笠に行けるのだが、今は尾根修むの道が立派になつたので、ほとんど登る人はいない。

道はこの道よりだん／＼險しくなる。すりや谷の第一の丸木橋に賣いたのは九時前であつた。道ふさま冷たい水を飲んで元氣を出して我々は又歩み出した。第二の丸木橋を渡ると間もなく霧杖原の組合に出た。此の間歇の時よりはずつと水音が流れてゐる。潭の入口には時戸間六の人が立てた物であらう三尺ばかりの石額があつた。

第三の丸木橋より少し行つた所で腹食をした。時に十時十分過ぎ。昨日俣と大貫とが釣つて来た岩魚が腹である。自分で釣つたと思ふと、美味い魚が一層うまい。左方には繻杖の岩壁が物の様に突き立つてゐる。後方から見た繻杖には前からは見えない。道は細く岩はブツブツの中に飛び出してゐるに過ぎない。いよいよこの道からすりや谷と分れる。水筒に水をつめる。道りはこれからだ、一日に二十歩近くも登るのは餘り難い事ではない。

二、四四七米の標高點に着いたのは四時半であつた。第二回日の腹食をした。繻杖は少し下内側に雲の間から風を出して居た。これからは尾根通りである。道は側立した繻杖を切り開いてあつて横立山の尾根通りと同じ様なものである。歩き難い事おびたらしい。途中ややアブ地があつた。道の前後はほとんど雪が積つて

居ないからアイゼン等は全無不用であつた。笠の頂上に書いたのは三時、今まで待つて居た雪の音は止んだが、雪が容易に融かないので、期待した残雪はだめだった。少し休んで、小屋の方へ下る。小屋はかなり立派なものである。

七月十七日

第七時——投戸八時半——双六池一峰

寒気の爲めに目をさました。早速小屋を飛び出す。太陽はまだ出ないが、東の空は一面に靑赤になつてゐる。それに對して雄高はどこまでも靑黒色に見える。次第に太陽は空を染めし始めた。靑赤な大きな虹だ。急に世界が變り始める。今まで一様に黒ずんで見えた湖が其の各自の色を開かせる。雪面の上を歩くと雪が解を求めて歩いてゐる。高山の懸崖、それは一幅の美しい繪である。

笠に別れをつけたのは七時だった。湖は狭い便所の中を行く。時には雪面を下る事もあるが、これとてもアイゼンを必要としない。前座が時々振り廻つて笠を寫す。笠は所々に雪をつけてゐて美しく、投戸の少し手前で膝を凍れた荷馬を見た。投戸は人の姿を見ると急いで便所の中に身を隠した。笠は、それは彼等兩着を保護する唯一のものであらう。既に脱がれた彼等にこの自然の保護物無くしては生存は至難である。

小屋には三角の人数が幾集をして居たが聞もなく、雪面の方に往かれた。小屋はかなり偏んでゐる。庭は斜に曲つて、庭は斜になつてゐる。これでは来年まで休むそらにもない。

目が暮れるまでデリセイアの練習をする。やはり愉快だ。目が暮れない間にレクターフデツタにもぐり込む。かなり寒い、これでは前方の寒さが思ひやられる。外では雪が又降り出した。明日の天候を心配しながら眠につく。

七月十八日

双六池午前五時二十分——池の肩午前九時半

寒むくで寝て居られない。少々早いと思ひながら起きた。庭には一面に雪が覆いて居る。池の水で顔を洗ふ。とても冷たい。毛の物を二枚着てゐるのにまだ寒い。池には湧水が湧つてゐる。全く夏とは思へない。

我々が出發したのははや五時を過ぎてゐた。道は相變らず便所の切り開きである。小屋を出ると直ぐ登りにかゝつたのだが重なりつめると實に険難がよい。連綿・雪面がすぐそこに見える。加賀の白山が雪間から靑白な顔を出してゐる。

急々険が靑白だ。アルプスに入つてから毎日の様に饑めて来たその饑餓、今日こそ始めて飯がかなふのだ。途中二箇所程キヤ

我々は草場を見つけて鹿を捕らんだ。駄だつて時間と天候が許すなれば、こうするだらう。あふむけになつて、何も考へる事なく、雪を走る。雪を跳める気持！それは何時間ものアルプスの後、一岩に顔を打ちかけパイプを片手に賣物行きの山を、あくまで草場する山男の氣持ではないか。重荷を一日中ひきずり廻はし、或は危険な岩登りをするのだが何れも我々の目的ではないのだ。深い岩を登つたその事ではなくして、その後に當然起る喜びなのである。

投戸を少し下つた所で雪解けた水溜りが有つたので少し早いが朝食をした。

今下つたと思へば又登らねばならぬ。所々に雪が積つてゐる。早速デリセイアの練習をする。

二五八八米標高點を過ぎるあたりから少し雪行きが惡くなつて来たのが、双六池くになつて、雪の緩な層が降つて来た。しかもこの緩は便所の雪が深いので、跳躍はほとんどきかない。突然我々の目前に双六の小屋が現れた。實に思つたより早く着いた小屋は双六と二七五四米の標高點の間の後部に有る。小屋の前に雪面の解けた跡がある。双六池だ。二七五四米標高點が少ないのに反して、双六池は雪が多い。雪の無い所に便所で覆はれて居る所は止んだ。今日通つて来た笠、投戸がかすんで見へる。

▲下に良い雪面が有つた。

我々が雪面に登り掛つたのは八時頃だった。時々朝の人が落ち石に倒されたが、大體雪に雪の肩に覆いた。時に九時半。

小池の上では三四人が成功の競争を交はしてゐる。二年間遊蕩等が登つたものか、或はあつたのかと思ふ。肩に荷を置いて彼等に對する。此所に立てば北アルプス中のごくこもりと深いのかと思ふと何だか一種の優越感を感じる。天候が良好だったので、富士まで見渡せたのは實に幸ひだった。

北峰は何だか面白そうだ。何時か一度やつて見たいと思へながら雪を下りた。もう十一時だ。思つたより時間を使ったものだ。人夫の山本と分れ、我々は登山小屋へ下つた。去年前座が来た時は肩まであつたと云ふ雪が、今年は登山までは全然無い。登山で三君と別かれ、私は上高池へ、他の三君は西へ急いだ。

思へばこの行は實に愉快だった。單に天候に恵まれたのみならず、相互の間に和氣の情があつた。いよいよ分かれるとなつて特にその感が深かつた。何と云つても嬉しい道程である。

四年九月

(補水)

組織位置

一行 91 頁 四口 一 號

田口二郎 安井博雄 宮土輝清 喜多又太郎

此川新刊

牛糞米改竄へ小黒輝のみし

七月十五日

宇曆月(一二・〇〇)——歲又(一二・四五)——歲約四星(一・四

五——二、〇〇六——節目會(三、三〇)——德平(四、美
(〇)

國面示の組をこすりながら半宿月餅を送りたのは九時頃だつたが約束しておいた青龍の夫人が来て居なかつたので、出費節約のためおくれしてしまつた。黒部の青龍さんの御駕へ、漸く二人乗で着き廿二時に日登の機置に乗り込む。軌道は黒部の薩摩に準ずるから、黒部の客車を通りながらにして眠られ、其の上使れから山へ入るのだと思へば何とも云へぬ良い心持がした。

船又で航道を降り、船路に添ふてあるき出した。一町餘り行くと、船路が屈折してある處、航道を登り、道ぐ完の船路に合した。暫く行くと、新船泊瀬が河津の下の方に且へる。釣磯を渡る。磯の頂上は陸風な所だ。行けたら南平北行つもりで急いだが、磯頂船路

夕食供膳を降りては、無部の本陣へ下つてみた。水廊に立つて眺めて、無部の偉大さを臨み、事が出展で得難とした。百智の語くが如き事を立て何疊とも知れぬ巨岩をかむ神油はさながら驚れ狂ふ大洋の如く石其れ以上の物で有つた。又仰す見れば幾百丈とも知れない絶壁が我等を壓し、固きめがらせば、萬噸鈎の香煙直立ち、半強風吹々と變え立ちて、云に似る。雲等は喧然然自失して、爲す所を知らなかつた。漸くして、塵氣を覺えて我にかへて、食器を洗つてデントへ引く。

山小屋を包む翼の雄鷲は、一両尺の山上に鎮る小さき心は何と叫び掛けた事であらう。

二十七日 晴，時令頗暖

ツアキ小座——乗鞍頂上——半湯温泉

四時に床を蹴つて湯の山を昇んだ。朝飯前にも頂上を歩んだが、是を憚んで屋裏の自由を得なかつた。熱氣を溜めたタヅキの小籠に遇つて、雪で一路熱湯路、と平湯を指して降るのもであつた。山上の神祕な籠を通り、徒次が冷たい機用を揺り、草園に数里に亘る足を引きつて平湯のい、ゆに置いたのはもう夕暮に近かつた。湯宿等では旅館は簡易であつた。快晴い活潑に訪訪にまかれたり、さ、暗しに夜渡り、と高懸いで間敷を下げた事であつた。

二十八日 晴、微晴

平陽——上高城

平野が安房峠を越して土高畑に入つたのは夕景であつた。林の茂處と白神の懸崖と種々の祟高とは一行の懼れであつた。寛定のヨーストは上へ上へ中腹のケヤナジ地に在つた。上段乗組員の人数に背負ひて顔へれて横し、上段のケヤナジタイフが初められた。八月若くは山雪を恐れて機本からやつて来た。機師三十餘名はの大衆隊である。張り廻らされたケヤナジの傍らにフアイアは消々と鈍れた。手料理の山鹿走に満腹の飯を打ち、飲酒と健康と

に嶺南の歌は月夜詩にほの興き探尋に本國して我の更くも知
もなかつた。

二十九日 晴 夕立

上海熱浪

二十日晴

上高地——供小原

昨夜から腹痛を訴へた社員員の一人に附き添ふて義典は心
を護しつゝ下山される事になつた。懐情な先生に別れては心も
沈む。氣を取りなほして喰居に向ふ事になつた。通過からブラ
ク演習を繰かへて一機を一泊した。

三十一 續

——供小星——橋西村

其の日後一時餘の頂上には、行の足下に至つた。微睡に落ちたに於て艱難を脱もれた快は大きかつたが、山岳の難生宿ヶ岳の頂上に於け商業なる實益は吾人の心に幾んど崇高との沈黙の一瞬時を興へた事であつた。頂上に所出君兄弟を廻へて一行は息隠した。かくて年輩員部員によつては難關も少し成功を収めて名馳り世した。も下山の途に其かねばならぬかつた。其の夜は又一の傍に一泊し上高嶺のキャンプに歸へり着いたのは翌日の八月一日であつた。二日の午後キャンブを離れて総本に出で、三日無事に歸宅する事が出来た。旅費の都合で評述し得ず龍崎純尾に筆を置く。

真壁川の器は氣持が良い。

八月二十三

越から苜蓿畑に到着するに際し、川の西岸に一つ素晴らしい
ムースがある。寝れさうだが、此所等の野は藪にして硬くアルプスの
野の緑な色をして居るので感じが良い。

仁川で歸つた連中が今日寒るとか云つて居たが、四時頃歸つてもまだ寒て居なかつた。この日は誠に寒なかつた。

八月二十四日

一日のびる。今日も暫くはかつた。
八月二十五日

もう二、三日居たかつたが都合もあるのでこの萬里に別れを告げる。眞金万屋解散。（山口三郎）

◎石橋山アミダリ

三、

一、村上、西村、足立、教馬、黑田、中江

六月十四日

ふしと出立一昨年、春田野村は全くひからびてしまひ、道民を度々むき出して居る。二十年度国庫川費はいつまでか航路がいよいよ川原に入ると五町ばかり入り前に石橋の跡を見る事が出来る。春田でヤチヤジした。過ぎし山の雄姿にふけり涙につかんとする。

時、時計は早や十一時をまはつて来た。
九月十五日

六月十五日

昨日おちかばた鶴崎站する。食糧販売にザイルを肩に岩崎に行
く。二時歸つて惣食を取る。鶴川達よりアダム紙を譲て摩理より
風船を下る。六時半上筒井にて解散。(四口二郎)

(附三) 續

裏六甲調查

第一回有野川附近調査

三、

有野川の川筋を進行して見る。湖の下の岸で兩岸もけはしくな
り湖の所で行きづまつて左岸に轉んで上の道に向ふ。本道を造つ
て自動車道に出来て六甲登山口に出る。(附図)

(附註)

第二回

三、

第 1 章 緒 論

喜多又太郎

萬六甲園遊に喜寿と二人で出かける。有野川を隔たつて本陣町に迫るつもりだったが、翌日傳吉及永樂等方佛を回つてゐるので傳吉も合から傳吉を十五分程隔つた所で行る。こゝは奥崎の南西面の五五一条の道から出てある小ズレと傳吉との合合で、少々越

胸したして襦袢を少なくしておいた。五五のビーズは多くの数
 箇の縫りで片足とよく似てゐる。腰廻りをつくきの帯がある。二
 人だけの間で真事が早くすむ八時半頃には終つた。腰廻りより此所
 まで一時間中。

六月二十三日 晴夜

八時餘香を聞る。いやなやぶくまりの臭、池の中流れる草屑があたりた感じが感ぜがましい。煙かき巻きので二十分餘りまで得香する間にては、大木の生茂つた下に網罟の響い感じのする所だ、少し休んで水無川右岸を下り出す。始めは美濃らしい田舎である。やぶが二十分程ですむもつと下ると左の尾根から大きなヤブ(大ヤブ)が出て来る。そこまでも森林の中に多くのヤブが出てゐることからは、右岸は関河原となしてゐる。上流で捕ら出した流れは途中で潰れてなくなりこからの流れはこの大ヤブより東である。ここより下では右の右岸は閑下となる。周岸の岩壁は道々幾曲し出し殊に左岸のは岩壁も鋭く立派である。この閑下には大きな龍が三つある。下から蛇籠・子淵・坂頭と名づける。龍籠は左岸にかみ子淵は右岸、蛇籠も右岸、これは川の少し下に出てゐるヤブを指す。此處小瀬が多くあり、皆どこかに湧いて行く過ぎ水禁閉に出る。こゝより水無川の左岸は風に受れて廣い河原となしてゐる。右岸の崖壁は龍籠香のとゞけてゐる。少し左岸を西へ戻ると、底谷へと向ふ。歩し下からはトセコノ風が吹いてゐ

この春は人が多し入らない故に廊下の中は通がなく閑通に満ちてゐる。六早の廻廊の中で一つであらう。我々には若狭左衛門の出来から二時間半位は見え方がよいだらう。

時間が早いので有馬に向ふ。青多美地に着物を着き六谷川の四十八番へ行く。

有名な此類も立派な肥後藩物がついてメチヤクメチヤだ。

(原 註)

舟坂十八町谷調査

九月二十二日 星期三

中二、三冊

一行西行，村上，屋立

二十二日午前十時中船越橋西端、兩側の谷を隔べつゝ大阿蘇（南地）二萬三千分の一、雙嶺の脊線谷中の五五三、七四の南西麓）に達し（この間二、三のサヤムグザイトあり）両側を望みて南西に入つてある三つの谷を隔べつゝ十八町尾根（十八町谷と船越川との間の尾根）に出、是處斜坪より七四一の西西北を、一四一の西（十八町側）は平つて傾立つたやうになつて、それが船越川のブツレムと接してゐるから道路は直線である。一時中再び大河原に引違ふ本道をや、四町割つて砂田工事の上、六六〇加波嶺（船越川の東側の尾根を船越川、尾根と名付けて、その六六〇米の南の南）より傾する澤との合流點に到り（幾度か、既に以て済むなつゝ）南

替す。六時頃見立一人で来る。

二十三日一七時起床。八時四十分左側の澤を六六〇米標高に取
付き、六六〇米の頂上を先(このあたりは密林なく一面ブナ
なり)更に進行して、六六〇米標高を越え小谷を降つて、もう一つ南
の峰を越して大滝山(船越山から西に上つた峰から出てゐるデ
ンゲラート)の頂上からんで船越山に出、徳志路より調査しつゝ
八〇一・〇米の次のデツタルに出る。(大滝山の西、即ち大滝の
横に出来た岩尾根をアイガーと命名する)それより小谷に沿ふ
て船越山(之に對してもう一つ東の谷、即ち船越山から直線北
に下つてゐる澤を船越東谷といふ)越えて東より順次、谷及び尾
根の名前を挙げれば船越東谷、船越東尾根、船越本谷即ち船越川
船越本尾根、十八町谷、十八町尾根となつてゐる澤である。)に下
り此處にてもヤマブシ科と支流を調査しつゝ石炭層に上り(途中
岩にもうかがふべき岩あり、ハイインと名付ける。)一軒茶屋
に行きて一時中絶。二時半、船越本尾根の頂(十八町尾根の
頂と同じ標高)より尾根降ひに第一峰(山の次の峰より順次命名し第
六峰七一四米にて終る)と第二峰のデツタルに出で御機ひに本谷
に返る。(この峰がレで岩がすれて危難なり)四時時降地降地之
にて船越本谷の調査を終了す。四時半出立五時船越村を越て七時
半夕立に會ひ乍ら寒風暫解。

十八町谷及び船越谷調査

香月 康太

の西麓北面に一大岩壁あり。巖さうだ。東側に傾があるのか。水
は八〇〇M標高より降く。七五〇M標高からデツタルになり澤
溜ひは不可成で尾根も歩きにくい。尾根林だ。葉が多くて暗い。
ヤマブシ科は六五〇M標高の上にある。葉廿九止砂止めの上に
あり、葉溜、水、溜は不足なし。只風が當る。三つは充分散れる。
溜なくゆるり溜つた所のない澤である。最高峰で伊藤、井上等の一
行に會ひ共に船越尾根を下る。本尾根の第一、二峯間にある船越
せで歩いていく。ともすると直ぐ船越尾根に入る。船越谷溜に
は下りにくい。十八町谷へは船越下れる。七一四M標高の西にある
大沢が北に流れた所から西に出る。船越は少々面白い。が標して
この尾根溜は調子がいい。

船越尾根にしろ、十八町尾根にしろ西面に岩があつて東面には
水が流つてゐる。西風の強い流だ。十八町谷と船越谷は六
甲を越るもの必ず熟知すべき所である。詳しい記事は後述にして
長く簡単に調査報告をする。

ロツクガーデン行

四月二日 富士澤、多田、見立、佐野、伊藤、野田
四月三日、四日 ヤマブシ、見立、多田、伊藤、富士澤
四月五日

第一回 九月十五日 晴

多田、今村、井上、伊藤兄と僕の五人。岩屋から入り口モリ
谷を越て最高峰に出る。十八町谷の頂(八九〇M、其中に所地あり)
を右に下つて十八町谷に入る。四方に砂防工事あり。瀧は殆どな
し。傾斜のあるもの幸じて三つを越む。水は六七〇Mの等高線の
ある處で横かに湧きすぐ湧いて再び六五〇M標高の所に出来てゐ
る。こゝから下は相當豊饒である。岩場らしいものは澤山あるが
岩質がよいから好グレンダとは云へぬ。既して東側、船越尾根に
多く見る。八一九M標高から出る東尾根の東面、六五〇M標高上尾當
にヤマブシ科の樹あり。腰鼓標のものを越え、澤より見ることが
出来る。相當良質のものである。船越尾根は殆どなく五八〇M標
上より下流に、均らせば出来た所が與々ある。勿論五二〇M
標以下ならば廣河原であるから充分天幕が張れる。西側十八町尾
根には水が流つてゐる十八町谷の頂から十八町橋まで約二時間行程
である。

第二回 九月二十二日 曇、晴

今日は一人だ。先日雨の雨が今朝上つたので水が多い。杖持
から船越谷を越る。船越山のため船越谷附近は調査出来ず。四
六〇M等高線上に大岩あり。一寸奥しい。この澤の特長は土砂
止めの多い事である。澤までに幾より数へて廿二を算す。クタイ
キング・グレンダは十八町谷より少し。船越東尾根(最高峰と
北麓面に出る頗る長い沢を越つて尾根の分れて更に来る短いもの)

野田、伊藤、佐山、國

五月十日 橋本、田口

五月十二日

伊藤、見立、多田、伊藤(新)、伊藤(教)、伊藤

五月十五日、十六日 ヤマブシ、橋本、田口(兄)、田口(弟)

五月十九日 伊藤、見立、多田、井上、山岡、岩井、伊藤(新)、伊藤(教)

橋本

六月八日、九日 ヤマブシ、香月、橋本、田口(兄)、田口(弟)、西村、見立、

佐野、多田、富士澤、飯島、水野、井上、伊藤(新)、伊藤(教)、

高橋、野田、山口、安井、喜多、山岡

六月十六日 田口(兄)、田口(弟)、富士澤、田口(兄)、野田

部 編 織

昭和四年三月迄の要員

針織係 松澤

會計係 西村粉也、藤川幸夫

物品係 野田三三郎、川本純郎

庶務係 伊藤兄

記録係 香月康太、佐野忠夫

隨筆 山岳寮 目次

山岳部の思ひ出	香月慶太	(1)
勇敢なる人々君	湯川孝夫	(14)
山岳部の歩み	湯川孝夫	(15)
菅平と附近の山	田口一郎	(16)
繭杖の感想	楠木義明	(20)
スケッチ二題	村上正一郎	(22)
或る岩小屋で	楠木義明	(22)
針の木雪溪	黒田一郎	(23)
嵐砂渾の思ひ出	田口一郎	(24)

山岳部の思出

香月慶太

創 設

この創設なるもの甚だ簡単であつた。何でも始めて一本立ちになるのには、他人にわからぬ苦労をするものださうだが吾輩にとってはそんなものは少しもなかつた。尤もそれは部が出来上るまでのことであつた。今に於けるものでは何れにも劣らぬ興と汗の動きはあつたが。

大正十二年の五月、校友会何回かの時會が、出来て僅新らしい中央講堂で開かれた。この年から高等科が出来て、校内各方面に非常な活氣を呈し、別けて運動には中學校を卒業して入つて来た人が多かつたから、自然總會でも運動に關する部は賑氣となつてその發展に移つてゐた。吾輩部を設けたか、水泳部を復活させるとか、やれ競技部はどうかの野球部はどうかと正に議論提案百出の聲。皆々ややの高等科生が全く上級生の面構へでノサ張るのだから物凄い。間分と緊張したものだつた。吾輩はまだ僅か二年の小僧子だつたし、何しろ今迄で設けられた数は甲南第一と

いふ距離保持者の生産氣下級生の偉大でもあつたので、彼の方に席を取つて椅子の中に入りつまつて上級生の賢明優秀なる御議論を拜聴してゐたのである。今からウツク考へて見ると、この山岳部なるもの、吾輩の所謂「ウレレイ」性質が作つた體なもので、その時も前の椅子の蓋によりそつて側面を向けて居たのだが、同級のこれ又ウレレイ陣中からすつかりおだてられて、それや吾輩も何か一言云つて見やうかなといふ氣になつてしまつたものだ。さて一言といつても云ふことがなければ仕方がない。圓い頭をフリフリと振つて何とかその一言を考へ出さうとした。それでも偶然たる場内で龍王の頭にある様なチンビタがどうして落ち付いて考へられぬ——といふのは同じチンビタでも凡ビタだ。こちらには腹心した事ではないが生意氣なつては甲南第一の距離保持者だ。直ちに名案が浮んだ。さうだ。甲南には遠足部がない。學生や人間にとつて山を登り、野を歩き、天然に親しみ自然の姿に慣れるのは、この上なく必要な事だ。只にそれは肉體のみの利益でなく、精神上にも得る所頗くない。と、その時考へたか如何か。趣か疑問だが——何しろ小學校では毎土曜日遠足があつて吾輩何時も一番ビタから先生の手すがつて咽いでゐた事を、いくらか頭がわいてつてこの時迄には確かに頭に覚えてゐた。さうから兎に角そこでおもむろに起立したのである。然し惜しむらくは

幕幕ではあつた。

部の人々の思ひ出

遠足部。即ち山岳部の前身がこの世に誕生を遂げた當時は出目金、――失禮、いや山口金消先輩が委員長であつた。金消君も委員の一人だつたと記憶してゐる。そのほか何しろ足におぼえのない連中許りが粗莽の大次第で足説がどんな事でも、登山がどんなものかそれすら分らない、憑つて情けない面々が委員なる名譽職を仰せ付かつたわけである。この時分の豫算項目がふつてゐる。ベナント、重代、委員の服装といふトナフもない様なものが堂々と提出されて、又皆がそれによいと考へてゐたのだ。この年の懐しもの、僅か高尾の紅葉狩りだけであつた。四十圓の豫算がどこへ行つたやら、まさかすつかり重代となつた部費やあるまいが、何一つとして物品は残つてなかつた。かうして一年が経つて大正十三年の事を追へて、遠足兄なるその親戚オベラバツダに似た御方がこの部に入つて来られた。そも／＼この人の入部こそ山岳部の今日あるを得た契機ともなり、又山岳部の發展が暫らくでも阻止されてゐた動機ともなるのである。兎に角この自派山岳家を加

へて遠足部はやつと目を開いた。

この年に各が部によつて今では大先輩の顔面も、腹に握然たる甲の腰を懸いて早足の幾少年になつてゐた。何でもフューヤフ・ヤした此頃の境見さんだつた。これ又大先輩の入江は當時二年生でビー／＼言つてゐた。まだ附行社の慶賀気分が抜け切らぬ稚兒然たる少年で吾輩とは親しくしてゐた。幸ひにも入江と遠足は離つてしまつた。それに二人共の家が接近してゐた物だから何時も遊び合せて山へ行つた。丁度真山に散歩向きの長があるものでそこへ連立つて此々遊つたものだ。大抵粘土細工をして遊ぶ位で歸つて来たがそれが今日の山岳部のそも／＼の起りだつたのだ。遠足部とは名許りで校内ではそんなものもある事すら知らぬ連中も少くなかつた程で山に行くのは吾輩等三人だけだ。尤も幾分吾輩は部を念頭に置いてゐたが、その時これが山岳部の現在の體なものであるとは確も考へてゐなかつた。只三人で遊びに行つたといふに過ぎなかつた。それが部の今日あるの基本となつてしまつたのである。既に部費無算といふ所だ。

真山の散歩が部費となつて六甲を歩き廻る旅に遡んで行つた。と云つても何謂今の部費を言ひ方ではなく／＼の散歩の距離が少し遠くまで延びた程度で小さいルツに部費を結んで、プツリと出掛ける位の事だ。やがて其が漸く修練になつた。例のいたづら子世

三人は生れて始めての天幕生活なるものをしたのである。場所はずつた當時はそれでもよかつたのである。何しろこんな世帯持ちは始めての吾輩見當が附かない。近所に遠足の別部があつたからそこからベナントや重代しや手頃な食品は何でも運んで来た。夜の十一時にやつと海岸に廻り着いたが、第一天幕の張り方さへはつきりわきま／＼の奴等だ。暗闇の中で只右往左往するだけで侍仕事が済む。やうやく天幕は張れたものゝ食料もなし肝心の水がない。海はあるがまきか其水を飲用するにはゆかず全く困つて到々只一つ持合せの寶珠の罐を開けて啖つた。それ迄はよいが大抵喉の潤いてゐる所に、からい／＼汁を飲んだのだから僕から辨付く様な水を求めるも實際に成り得ない位だつた。水の有様を

知つたのはそれが死んで最初だつた。その晩は應にれることが出来ずウツ／＼の内に閉けてしまつた。吾輩等のキャンプなるもの第一即興が甚だ變テツなものであつた。然しこんな辛い日は只の一度だけですんだ。僕の中には親切にして下さる方も澤山ある。近所の吾輩は御家の中の井戸を開けられて、吾々の自由な使用を許されるし、そばの何とか會社の婆さんは失禮にも吾輩等を乞食と取違へて喚ひ廻りの漬物や味噌汁を柄に入れて持つて来て下さるし。誤失は獲れた七輪を提供してこれでヤを焚いて呉れと

一帯くまなく歩き廻つた。そして得られた結果は——確かに貧弱な各間の岩屋一つだった。そこは三人輕装で出た所だが少し水が溜まれば直ちに水溜まる所つて便利なものだ。下手に雨の時でも眠て居るものなら遠慮なしに眠る所まで運ばれてしまふ位細くない岩小屋だ。壁にこゝでは岩場の夢を結ぶ機会がなかったが、最後すつかり砂で埋つてゐる。今は先頃見付かつた新しい岩小屋を利用してゐるが最初に発見された奴は岩がにづつて危険な状態になつてしまつた。

まだ部員がなかつた時代、尋常科では風雨甚多の又八と二人がこゝへ来たが、西村の持さんが山へ行き出した當初の秋の夜、香葉と尋常科の二人は壁と持さんに約束して、粗雑地に天幕を張りに出かけた。高座の海まで来たがこゝに珍らしく可愛らしい順さんが居て大體親切にして呉れるものだからすつかり嬉しくなつて到頭約束も忘れて茶屋の床几をベッドにしつゝへた。約束は夜の十時中に出合ふといふのだつた。急に思ひ出して香葉等三人は新酒の月明りを利用して風雨地まで歩むに付く事にした。ねむれる自然はどす黒く、青白く、静かに冷い微風を呼吸してゐる。何とも言へない寂寥に打たれて三人は暫し無言で自然の姿を見つめた。仰げば壁には銀砂の微な星が幾千幾百となくさやみ足下には大気層を廻る町々の燈火がダイヤの砂でもふり撒いた様にナ

タチとまばたきしてゐる、何といふ大きな夢だらう、といったぐらではあるが一面人一倍センチメンタルな境中では決してその偉大な力の前に跪いてゐたのである。實際今まではロツタガールであれ程のシロツタは他に居た事がない。さて十時半がきても人の手一人姿を見えない。壁を照りにカーカーを鳴らしても何の音もない。十一時まで待つたが遂に引かへして茶屋で眠てしまつた。翌朝食事も焼つて後始末をしてゐると壁と持さんの側の二人はシロツタの隅の上から降りて来た。全く意外だつた。昨夜は十一時すぎに寝て来て天幕がなかつたからその横断水を一飲にくるまつて對面に露營したさうだ。すまないやら面白いやらで早速接待したが持さんの最初のロツタガールに行きこんだ變てこなものでつた。その夜は仲よく百屋の紙間の家に行つて、最後が翌朝家の中は暗いといふので外の道の中へ露を敷いて食事をした時は狂氣じみた胸突き事だつた。これも無邪氣な頃の思ひ出の一つだ。

翌年の四月部員制が用ゐられて部員が多数になつたので自然とこゝへもよく行く様になつた。安井水野井上足立等國等盛んに掛けて廻を廻つた。一般の人々もやうやく岩登りに目が付いて飯盒の岩屋川畔は日曜毎に何十人何百人といふ登山客を吐き出した。岩にはステツアが張りつけられ、ルンダが作られ自然の岩は段々階段の

様になつて行つた。そして今ではグレンダといふよりむしろグレイマーのバグダイスの様な感を與へる程らしいであらう。

かつては命がけで歩いた萬物類もすつかり持主になつて金カンザキさへあれば何の苦もなく走り廻れる有様だ。僅か数年の間に斯くも激しい變り方をする一面には如何にロツタライミングが一般的になつたかを如實に物語るものがある。アナコが数年やらつた岩登りやチムニーも今では散歩や風情らしい気分、朝飯前に小手調べといふ具合にやつられる有様だ。部員の岩登りが段々停滯になつて行くと共にこんな變つた、適當の岩登られた事は何度考へても無意味だ。

然しかうした發展の裏には度々の偏みともいへるか、やはり一面の苦しみを含めて来た。當時の委員長は磯田だつたが之れが又大の岩登り反對主義者で今時そんな輕蔑の様な事はやめて欲しい。もつと上品に山に行つて呉れと主張してザイル一本買つて呉れない。岩屋連徒ら口説いても美事にはなれなかつた。何しろ相手は三年だし下手をすればそれこそ問題が大きくなるのでムズムズする説を押さへてその態度のもとに向もロツタガールに違つた。

或る日磯田と二人での歸るさ。こんな後や山岳部も先が知れてゐる。磯田の様な先輩は知つて部の爲めには都合が悪い。一そ

の事極速で乗取つてしまつてはどうだらうか、といふ様な事が決つた。それにはウシと山に行き知識を得なければならぬ。早速山の木を讀むやら話を聞きにゆくやらして大車輪で山岳部系政策を進行して行つた。日曜毎に何處かの山へ登つて岩登りを練習する。そして遂に磯田を部の實行方面から遠のけてしまつた。

さて磯田は段々自分の例は動かなくなる。岩登りは幾ひだのに嫌になる。どうもかうも居たたまらず到頭岩屋連の手元へ呼出し款が来た。今日中食後直ちに部ルンダに來い、といふのだ。彼も岩屋も覺悟して歸り出した。そこには磯田と今井の二人が待つてゐた。相當手強はく抵抗する心算で待つたが来て見れば磯田は樂を以つて迎へて呉れる。それから暫く山の雜談が初まつた。氣の屈い僕には腹がつて事が出来ないので。何時本調を切り出したらいふかと機會をねらつてゐるのが明瞭にわかる。遂に今井が云つた。おいもう腹らないのか、初めて僕は立ち直つた。岩屋連は走意氣だぞ。山岳部に委員長があるのにその上快足をなほざりにして勝手な真似をする奴があるか。岩登りの微な馬鹿げた喜當が何になるか。ひどい機嫌でどなられた。山岳部の部長を思つてくれぬ様な上級生は假令委員長でも俺達に認めない、と云ひ放つたのはいいが、いきなり胸ぐらを取られて、上級生の言葉に引合へるとは何事だ、とはげしく腹に刺された。香葉は已に幾多の

結婚を持つて居たが禮会はそれが順に降つてならぬらしい。上
次のボタンをはずして手を握り持てゐた。磯田は詫言といふ。
禮は立上つたまゝでにらみ返してゐる。物凄いい気分が流れる。禮
が居る。氣が急ぐので言葉が詰つてやつた。『へいへい大變
願う御座いました。』アブラカラに云つた所がそれだといけな
い。『馬鹿！ 最後中分の禮度は何だ！ 猛烈に笑ひ飛ばされた。禮
は愈々憤慨してゐる。今にも飛びかゝりさうだ。然しこゝで禮と
磯田が組み合つたら同様に學校に知れて事面倒になる。言葉は潰
れてゐるので餘力日でそんな氣持はよせとしらせる。禮の目が
アブラカラと赤く光る。『オйнаゼンらんのか！ この野郎！ 磯田の
顔とぶしが目を幾んで禮の顔に當る。怒りその頂點に達した禮は
むしむし舌を吐き出してゐる。磯田は二言三言塞ぎや
ふを繰り返して引きあげた。『オйнаゼン！ オйнаゼン！ 二人は抱き合つ
てその無念さに泣いた。そして背一層抱き合ひ合つて磯田に當
らうと奮つた。禮も磯田もそれを感じて驚愕した。こゝで始めて四
人が一團となつて山崎部を滅び立てゝゆく事になつたのである。
今でこそお祭りには殆ど無にひけを取らぬ様になつたが、その
従ふにはこんな涙の思出もある。それでもこゝろ處になつた禮を見
ては只何の處るのを感じずにはゐられない。

さて第一日目のことゝ告げはしやう事。今にも禮物がひつくり廻
りさうだ。言葉は真中に右は西田左は長尾と並びも揃つたスカ
ン三人。こゝを通過としのぞき倒つて語を合つた。と突然左方の
隅に降つて何時になくおとなしく目を閉ぢてゐた西村がツト立
ち上りさう。『ヤイ他はから見えても東京の特だ。昨夜中馬鹿の儀
に驚き通る奴があるか！ 外の客に迷惑だつて事を責め等は知らね
えのか！』つて當時の中で大見得を切つたものだ。このスカン
映阿でさしもの言葉通すのゝと静まつてしまつた。『おに白く、
この時長尾格さんなる名譽が附せられた』その夜はそれで結果が
付いて廣いためにぐつぐつ眠込んでしまつた。オット思ひ付い
た序でに一言附言して置かんやあならん。と云ふのは松文吉藤
部甲南第一線の然も本文に『日本アルプス紀行』でテノ國々しく
磯田の書いた本文がある。その一節『春月が満つたのだ云々』な
る文字が出てゐる。御存知の様に當時磯田とは大膽の開明、第一
日のトロツコ直まで自分とひがみ合つた歩き方をした。その時に
折返く言葉ひどく耽つたを思ひ生憎國策の出来損ひをやらした
たのでお歩行困難だつたのを無理にかくも見ん事仇打ちされた
大抵。言葉とても甲南のケチだ。『ちよつと體アコを後悔だぞ』
何故困つてたまふべき。禮は磯田に居た時は一草草かつたで
ねえか。イヤこれは自己開明に陥つて失禮。

アルプスの思ひ出

山崎部初アルプス入りは大正十五年の夏だつた。銀座通りの
路ある所、皆既定と云ふプランで、今でこそ馬鹿々々しい様なも
のだが當時の言葉遣としては十七、八歳の少年遊許だから相當
重大な事に違ひなかつた。オツクタイミングに對して磯田との
口論がまだ解決に到らぬ中に學校は休みになつた。方針として先
づ第一年はアルプスの大觀をして、第二年より局部的な研究に入る
事になつてゐたので、先の計畫が立てられたが、腹の中は磯田に
好むの事を見せずにおくものかといふ磯田で充ちゝて居た。
で禮公と禮に言葉の三人は幾つとも超萬の陸空を多めた。プランが
決定するや藤木先輩の御宅に度々御礼会になつて禮阿に就いての
知識を得る事に懸命だつた。

今まで使つてゐた本館のザイルを捨てゝ新調の最良のものを買
に、是れといふザイルもなしに右横口で電車を下りた。中馬鹿
輩の氷電トリリ直には全く閉口した。能ア礼が出現して新角こ
の行のためにこしらへた芝居のネーデル・シュールも驚く事が出来
ず足袋に草鞋の出で立ちで、磯田をテア付いたが礼本は出てゐるし
馬鹿は山と獲まれてゐるし、その上騒音なアがゐるで儀果に驚い
た時はすっかり足が腫れ上つてゐた。器に入つて車に就いたがま

さて第二日目からは都合により二面に割れて磯田、格、禮、思
等が先頭、言葉、磯田、長尾のスカン達が後援を承つて前者は
中馬鹿から西岳に、後者は西岳よりとなつたのである。禮、格と大し
た事と起すず決定したが先頭の坪川やヤマアにあつた乗換一つ。
『禮公無器用なくせに寫眞には仲々理解がある（但し學問上のみ
で）』夜、睡す時はマダネ・シロウをたたくのだと如何にも専門家にし
く説明して職員全部を驚かし、同様に直立不動一列横隊を作
らせた。マダネ・シロウなる恐ろしい怪物が現れ出されて寫眞機の
彼方に首のりされた。『尊大様に火が點けられてシロウといふ不
気味な音をたてゝ上に懸え上つてゆく。一同連發は今か！』と何
も足へぬ目を大きく開いて、花火線香の様な尊大観を見詰めてゐ
る。やがてベーンといふかと思ひきやアンプ不思議なノイズに
もおつかない雄儀は音も立てずに消えてしまつた。といふ時間つ
ぶしのお笑ひ種、禮度か幾り罵られて皆は足も手も永の機になる
まで立つ棒の要目に合ひの／＼の聲で天幕に引き上げた。寫眞
が寫らなかつたのは申すに及ばず。思はマダネ・シロウが倒つてゐ
たんだといふがイヤハヤ格と灰とを間違へてゐたんぢやないか
ナ。

兎に角スカン許りの一行としてスカンな事ばかり仕向かして
一週間目に結果に歸つた。家も大した問題も起すずに無事下山し

た事その事が不思議かも知れぬ。鶴高は三十年來の雪だきで割
々のばれず。山頂の鼻をあかし得なかつたのはかへすがへすも後
念だつた。

次の夏は山岳部も少く發展の途に滑いて、隊も幾つか組織され
た。曰く、風の鶴高、樺の鼻帽子、皆、吾輩の南アルプス等
部の鶴高は單獨行だつたが初めは山岳部がある筈だつた。し
かし何しろ變質な所許りを歩くので誰にもこれに申込まなかつた。
意志強固な足はけなげにも單獨この計画を進行する事を誓つた。
背の心配は水の泡、か何か知らぬが吾輩には遠く隔つて来た
事が奇妙にきへ思はれた。

樺杖では地盤が動かずに御丁寧に春を一つ／＼皆入つて行つ
たさうだ。途中北行くと道がかゝつてゐる。こゝも駄目かと次の
洞に入る。ブッシュとガレで歩けない。こゝも道ふかと洞々鳥
帽子岩を其の側に佇らそこへ行きつゝかずに引き返してしまつ
た。若小屋の存在も知らず岩窟の穴みだ様な所で穴熊然と一夜を
明かした等、時に命懸ちもの情儀を充分具備するものだらう。鶴
高では大した事も起らなかつたらしい。横谷の除ではこの時小槍
に登つた。思も一掃になる約束だつたが雨のため御互ひの行程が
變更されて皆の別小屋で又してもスカガンが勃發した。といふの
は横谷のバーナイに根本なる當年の山岳部委員長が加はつてゐ

た。口調が皆と變つてゐて一寸聞きには朝鮮語かと思はれる。(譯
も實際に朝鮮語を知つてゐたものも他の國語と區別し得るものも
居なかつたのだが)で別小屋に先づ通過が入つた。打ち續く雨で飯
を腐らしてゐたので早速花合を初めた。カラスとかリビカ
一とか譯のわからぬ鳥があるがその評價が根本一人皆と異つて
ゐた。そこで皆等が小屋の親父に、これは朝鮮の人で、この約も
朝鮮ハチ／＼の約だ、とツイ繪計な事をしやべつてしまつた。純
朴な親父これを眞に受けて、皆の一族が小槍に成功して上高地に
下ると入れ續ひに來た思に、今先き甲南の朝鮮人のある隊が小槍
を登つて下つた、と告げたさうだ。驚いた思、そんな者は甲南に
居ない筈だ、と考へて見れば思ひ當るは根本だ。それでやつと横谷
がもう上高地に行つた事を知つたとかで以後根本は朝鮮人となつ
てしまつた。腹の失言思も大和島根の生一本、朝鮮のナンヤとな
る、前に世も變つたものだ。吾輩の方はこれとて特別な事もな
かつたが其一つ、横谷の旅館——といふよりむしろハダゴヤと稱し
た方が適切だ——に泊つた時一晩に愛を二十数度演じて人類のた
めに貢獻をした記録がある。その後は西山温泉湯館の快進、白華
三山からの眺望といつた隊もが味はひ隊もが持つ印象だけ。

是等の計畫が終つてから學費料除の上高地生活があつた。快足
部長を中心に集ひ來つた十數名、奈良渡を廻り出しに自井、中ノ

湯、上高地と温泉巡りをした。吾輩も根本で落合つて加つたが

上高地行きに三日を費す等これも一つの御礼だらう。中の湯で
は部長の如のるけをしたを聞かされてボーとしたものだ。上高
地では何もなかつたが先づ風の岩窟のフライがスカガンの中に入
るか。何日目に、切羽アルプスに來て雪を踏まずに歸つては
土産物が出来ないとあつて鹿や傍川の奥まで雪渓を見に行つた。

部長が自職優秀な双眼鏡で雪渓を見られたところ、是がガレの像
に寫つた。祇園は雪渓だといふ部長はガレだといつツ張る到々それ
ぢや別けをしやうと部長が決して來て見た所が祇園の跡でやはり雪
渓だつた。歸つてから部長が財布をはたかれたとか、罪な双眼鏡
ではあつた。

昨年のアルプスは暗く雨で進行されたものは極く少だつた。
吾輩は南アルプスから引きかへして、どこから登らうかと登山口
返りをした。が途にどこに行つてもやはり雨で結局收獲なしで歸
つてしまつた。歸に行つた頃の所は黒部でいきつたため感嘆ひし
てスカガンな海を登りそこで一夜を明かしたさうだが吾輩が笑
つても御家人等は命がけだつた。尾は鶴高で閉ぢ込められちや
一の窟で歸つて來た。湯川、楠木、皆多一行のは大町から針ノ木、
立山、富山と横断したが、雨のため日程が遅れ横断に、湯川、皆
一行道難かりナを見出しがあつたので急いで富山や松本に歸せ

じだが全くの誤報で鳥居を見たのはこの吾輩だけだつた。

今年は積分と珍貴資源も数多くあるが今思ひ出すを名づけて書
き出しては仕儀がないから又の時、當年後吾輩が會社でレガーで
も横谷から甲南の山岳部にゐた時分は、アルプスであんなスカ
ガンをした事があつたナ——と思ひ出してペンを握らうかと思つて
ゐる。

スキーの思ひ出

スキーは吾輩連年來の望みの一つなりき。毎冬スケイトに行き
つゝスキーは何時出来るや、早く練習せよんば優秀なる登山は
不可難なり。祇園と話し合へり。雪や積さんを知へし年、大正
十五年の冬漸く實際の練習につくを得。最初は只歩き方の練習のた
め二週計り六甲ゴルフリンクスへ行きし事あり。

明けて昭和元年正月二日より、縣下米の山の麓快方面へ練習に
行く。約一週間の練習なりし。吾輩等の三十日より風邪を患ひ
發熱、幸か不幸か急遽御親戚におはしませしに依り遂に行き止
にするを得ず。スキーを抱きて無念さむむせ泣きたる事幾度な
りしや。親御のあるため日頃練習せし暇にや、此の度は曾を得てつゝ

とて古語の眞實を傳れり。曰く、*蘇子*は其の文を以て、*イロハ*

有るに對するは、是れ屋敷學校をさへりキ。場に出座す。其
聲が如き説法目なる具才也。(註釋よりハキキ語の方が好きなり
し。)といては、都のそちらに進ひしはむしの當然の事と云はんか。
こゝへば、彼屋敷が尙か不良の如く想はるゝもきに非ず。彼先
賢無題にして學校に自ら出席授業を受くるの勇を要せず、吾輩先
賢にして學校に出で自ら出席授業を受けるの大なる影響を來たすを
以つて、スカー場に行き度き心を平らうじて、抑へ居たるに過ぎず。

昭和二年三月、都の第一期合宿練習開催焉。所は北陸縣高野寺
の入口宇奈月なり。このゲレンデ草の緑には廣くにすぎても阿良
の鼻よりは狭く雪雲餘りよろしく。参加者は松、椿、野田、
香賀の四名なりしも富山高院の方々の陶來獲を得。内山教授指導
のもとに猛練習をなす。前所半道月曜に三人の女中あり、名をか
らず天狗、豆餅、早瀬といふ。惟此落にして天下を股にかけた
る組御なりと自稱す。事務左様になれしして吾輩等足下にも及ば
ず、小供扱ひにされてイヤシとも情知し。彼女等が名稱の依つて病
たる所以を訊かんか。先づからす天狗は最も年長者にして遊び事
にたけ、花合せの力かみず、鈴に妙を得。即ちからす一犬狼りの
天狗なり。依つてこの名を附す。第二の豆餅とは頭尊の上に
引か(是元の骨財に誠に變質にして外側なる事新し)。外縁の

2

その妻は六ヶ月的に、膝より落座し膝後僅量に合宿す。膝より
著二十数枚のべり蓆が鋪設なり。湯川、飯間、野村等も参加し
て日々猛練習。第一次合宿を終り正月より第二次に入る。飯間の
妻文明六の某氏と宿す情にうす。この御仁兩三年この地にてスキ
ーを練習せる由なるも直降降すに克く然も口には「今日はスキ
ンチュアを練習せり、明日はデレミアムを練習せん」と。その歌ふ
順落く人間そのものを正確に訓練せるの如にして「して／＼して」
とんだ奴は立てた基礎が其々々等調順く耳にせり。又朝鮮人の目
本語上乎く聞え大抵實當時本物の朝鮮人に間違へられずんでの所
竹槍の露と滑へんとせし時の有様を語す様。よくよく見れば間違
へし方が當然にしてそれを指摘する方が無理なる氣も起り、人の
顔りに自身の顔に模倣を置きすぎるを痛感せり。世の人々よ、故
衣に假られ世世する前に一風簾の雨に立ちて、汝の顔を充分洗ひ
淨めゆめ忘れ可からず阿。

三年の月には同じく國にて合宿す。参加者は前日より暑す寒
敷す。話々感んとなる。東京のK氏員士、度々の習に伯らへ御挨拶
づれなるに依り一般の評判誠に可まばし。御入新の節は泰大の
如き大男旅着を撰へさせらるゝ體なり。然もその様な時は風呂
は偏員の風呂なり。世に羨ましは勿れ。

ものは本陣の馳馬を歩くに例に越えたる立を踏み倒してしまふに
に首倒しの落あり。以つて外陣の離しきものに對する侮罵の名
か」とは櫻子の公ふ所なり。芳村正に二十一、三歳なるに全く情
しき事なり。第三の早勳は讀みて字の如し。宗尼十五、六歳花も蕾
の少女なるに早云ふ言葉漸く貴僧の暗黒面事ののみ。顔色紅を帯
び顔ひたる顔割れも柄に合ひ。赤が眼輪として、その言を聞せば、
實にたますべき愛すべき乙女なりき。遠處のかくせるものならん。
一旦朝來未雨ふりしき日、銀臂も不可能なるを以つて、銀髪をぎれに
數回續けて腰裏に入りし事あり。夕方出陣日な野郎一人、オイ今
風呂の中で考へたが羽織をキヤラメルに仕立て、以等にはきはば
如何かと世にも最なる錦案を提出す。直ちに衆議に上。翻本物の
のキヤラメルを買ひにやせ申中のみ遊び。襦を縫し石鹼を實物
大に切り包みて使の女等にやうやうし、湯浴す。常に斯様なる伴
葉子を口にするを得ざる傾也哉。喜ぶまい事か早蓮花錦に似た
る口唇の中に投げ込むに、口中泡を含み目を白黒す。以等キヤラ
メルの味まへ知らざるか、しばし尙之れを噛み居れり。その體験の
如く口内泡を吹き銀珠を上下左右に振り立つる。やとあつて初め
て何を噛み居れるかを悟り、はき出すと見るや紅氣の如く蒼翠
等に焼つてかゝり、通もすればキヤラメル代りこもとの焼が噛み
取られんとする形聲。誠に凄まじき女こそ世にあはれるものな

勝での人知勇M(特に名を隠す)は日毎機にされ而の府下に投
出さる。天朝越しき時の玩具になる様微小なり。又機にされ關
人を隔めて就ぶ連中の如何に多きことよ。吾輩個性にたへざる次

此の世に於て一人の女がケイ・シー・ホーのY 建築の熱心さに賞讃すべきもの、下口なツマもなき談話を聞す。即ち慕フ標がレンヂにて待つべきなり。下の川流の傾斜を利用してボーゲンに夢中なり。されど各々方幾念ゆらスキーの方角と設の方角が均等せず。階別に欠けに懸然、ボーゲンの脚置より家々轉びて起き上がる階方なる給米。突然、アツ助けて美れ、と黄色い眼を耳に。何事や問出せし、と裏て見ればとは如何に、當のY 頭かくして尻かくす、と吉原の曲藝にて難木の柱へ首を突込み居られ、あはれ、雪は胸にも達し手は背中深く浸し只洞穴の如き氷柱の中より、グロイ何とあしと美れりとかすかに叫ぶ。然し膝くにも皆足に不自由なる氷刺れを掛け居れるを以つて歳終作樂進歩せず。数分の機率うじて足を持て體を引張り出す。被服固妻白となり手首の感傷を失ふ。若し再望等一行附近にあらずんか。彼あはれにも雪中に建立ちして凍死の憂日に會ふ事堪賀なり。腹を引き膝を延ばしくの字形になりて淹れるため突然道計画の上に乗り上げし際面に飛ばされて頭を雪中に没入せしなり。初心者のこのアフォー

我々は過去に於いて餘り遊遊りを重要視し過ぎた。特に此の側面は専断科員に於いて著しかった。遊遊りの有する興味は小さい。彼等に取つては餘りに大きな物だつた。

遊遊り、それは登山に於いて重要な物ではあるが、アルペンゾアの一手説として始めて個個ある物ではあるまいか。

我々は何故にかゝる状態に陥つたのか。

それは何故にかゝる競争が續けられた。

結局我々は如何なる結論に達したか。

先づ我々は禁煙部内に於いて、個人の興味を重要視過ぎたために部員の行動が多分にかゝる色澤を有してゐた事を痛切に感じた。次に何故にかゝる如き傾向を防止し得なかつたか。その原因を探究した。

それは當然有るべきであつた登山意識の低い者が低い者を引上げる所の指導機關の不備に歸着した。故に我々はリーダーを組織したのである。

我々は今後従来の個人主義的行動を排撃し来るべきスキー合宿練習に對しても部員大衆の志士への進出に對する團結的訓練を目的として進まんとして居る。

菅平と附近の山

田口 一 郎

長野縣長村と云ふところは奥平で有名な鳥居峠の北西阿山（二、三三〇米）の裾野に菅平と云ふ小郡がある。海拔約一、三〇〇米で北信牧場も直ぐそばであり又は恰好の遊歩高所だらう。が菅平の感じの好い時はどうしても、二月の幾多にある。

我々は冬の休みに一週間此所を専らした事がある。加藤、前田などと共にやれたものはないが、民家で親切に食料してくれ、

僕等は同村スキークラブの事務所の下平氏方とめて貰つた。宿泊所が一軒と云ふ實に感心すべき事である。冬の時と此春頃からの降りは一寸雪つた時の感想等を少し書いて見やうと思ふ。

まづ冬の事から云へば僕が行つたのは正月二日からだつた。大目内へ乗つて来た自動車で雪でスリクラブして歸にはまり仲々あがらない。時間にもう四時近くこれから二里もスキーで登るにはもう聞かればならぬ時だ。遊歩手もゆづせてしまつてメンザンを動かしたり止めたたりしてゐるが事は望まひをする許り。はつておくわけにもゆかないので雪のちらつく中を、粉雪をけちらしながら作業する。一寸でもたちどまると身震ひがする程寒い。附近の

の低傾斜のスキー場の様に一晩何尺も積つて動きがとれなくなる。と云ふ様な事は絶対にない。深くても一尺位のラッセルが隣の山だらう。

この附近の氣候は以上の如く降雪量（降水量）の少ない盛晴天が多く一度吹雪くか又降れば少なくとも二、三日は必ずもつ。加藤これは菅平においての事で須賀や西阿山は矢張り普通の高山の冬季の如く鋭化し易い天候をもつて居る。菅平の特長は實にこの晴天の多い事であつて、且雪の気温が低いので新雪は太陽によつても多く融化せず、一日も無つと快よく乾いたまゝ落つて、雪やにうらあかいかい太陽の下においてしかも愉快な粉雪の滑走をあたへてくれるのである。

然し此處は標高が相當ある故か風がある日が多くその露に折角の雪もウインダルトとなり。それも又ヘルムの上の隅の隅の隅を削へてくれるが、——粉雪を得やうとするならば、その様な日にはどうしても風流とか雪の中に行かなければならぬのである。

菅平の谷を距てて北アルプス及び飯城山と相對し南は南アルプスや八ヶ岳に對してゐる爲雪量は素晴らしいが、地形は一概に山であつて殊に北信牧場そのものはスキーに適さない程である。今度の登山行の目的地（年報欄）に大島氏の書かれたものに全

小川も管平である。やつとの事で丁度集合せた。他の自動車二臺に前と後から引張り出して貰つた。丁度そこに菅平の人が集合せて、増くなつてからもわねなく乗る事が出来た。レールを渡りけるのも面倒くさいから、ミナスをスキーの足の下だけぬつて出發する。バンドのレールをつけたものは平地に近い道を行くのに重たくて難つて居た。結局ミナスを巧く利用するのが一番得だと判つた。荷物は重いのでもし當りの訪客員だけ小リュックに入れて、後は明日まであけて貰ふ事にする。飯城山等にはミナスが役立つてよく利いて非常に役に使れる。があと十町ときいでから後の道かつた事！高嶺に入つて所業粉を見出してから村までの道く又暗い中を進むのが如何に寒かつた事！又それにも増して忘れられないのは其後の寒かつた事、熱い湯がこぼれ、しかもロケットのフットの上ですぐ凍り、万年筆はわれてしまひ、翌朝目がさめて見ると吐く息が凍つてフットの口にあたる處に雪がついた様になつて居る。持つて行つた家履計もミナス十五度しかなかつたので用をなさなかつたが、村の小學校のはミナス二十度になつて居たさうだ。

雪量は標高より足ると非常に少なく、せいぜい多くて四尺位のものであるが下が芝なので少しもスキーには適度でない。一説、此の地方は地形の關係か降雪量が少なく又乾燥した雪がふる。そ

★雪平はスキーに不慣れであるやうに書いてあるが、後に後等が毎日滑つて居たが如く三十度位で百六十米突の斜面も近くに数多あるもので、初級山には前例に行かないでスキーの練習のみならば幾人の方がよいかも知れないが、雪平のもつ尾根と四阿山とのトウレンをも入れるのなら此所は一時的の宿所があると思ふのである。

雪平を廻り山岳は千六百米突位の山はうんとあるが登る宿所のあるのは諸山と四阿山であらう。尾根は二、一九五米で大明神峰を廻つて四阿山二、五三二米と相対してゐる。冬の積雪はどうかと云へば尾根は、尾根筋は完全にタルヌをなし、スキーを登がされる事がしばしばあるが雪平までには通れない。ブナの林の中は樹木が落ちてガタツの砂をふむ積が、頂上には小さな宮があつて水の源になつてゐる。

宿所の登りは北沢牧場の土手について行けばほとんど直線登りで頂上近く通せられる。牧場の小屋のそばを流れてゐる渾の上流について登り、後尾根すぢに附いても可い。ふきかへると西には白馬から御嶽までアルプスの諸峰が或は白く或は黒く流れを出して群衆の如く立てまはしてゐる。更に北には板根の諸峰、南には八高より富士まで雲中に得い姿をあらはしてゐる。夏とは違つた風景を歩山にもつ。雪平それに入らないでもよく日本中の高山

の冬を要せめて創る事の出来る宿所は雪平に事無きだ。雪が降つたのでスキーをぬく。尾根の頂上に出て食事をとる。食後は雪平特有の涼しいだん子だ。又スキーをばいて登行を續けて頂上に立つ、三時間のアルバイトである。二、一九五米の山でも冬割合に細く登れる山だ。日はよく當るが寒い。

北の方の長い尾根をよつて降降に移る。積雪はタリスマスツリ間の間をぬけて、少しタリスの上を降ると次は、能登野の境界である。頂上まで上る雪原にシェナイダーも何のそのと云ふ氣になる。この降降面白い降降は今までにはなかつた。風の砂を細く散いた雪の上を降降と下る。またよく間に牧場の小屋の上に来た。

四阿山の登りは大明神峰をわたらねばならぬ。一月もたけて雪量が増せばどこでも流れるが十二月の末ならば牧場の小屋から東方に高層を中層近く行つた所にある大きな松の木の間近で所へ下れば獲れる。そこからはしばらく落葉松や白樺の森林の中だ。昨日の宿所のためラツキが辛い。二千米のこぶと四阿山峰との間から出てゐる中ノ峰にぶつかる。始めはそれを誤つて向ひの尾根を登るつもりがたが四阿山ノ峰へは此所からはブナで下れやうもないので一九一十二米突の御嶽と二千米突のこぶとの鞍部に向つて登り出す。千六百米突位の所で例の雪食をとる。快

よいタリストの上をスキーはすむ。今日は猛へ行つた日無天気がよくない。アルプスも吹雪いてゐる積だ。一九一七・二米突の御嶽附近で一すのスキーをぬいたが又は、その次のこぶは岩峰で後等は尾根をまたがたの駄道によつては登られる所だからスキーをぬいて尾根を行つた方がよいと思ふ。そこからは頂上との鞍部まで百米突の下りである。又同じ様な森林の中を行くと同じく長い尾根の上に出る。岩が多く出てゐる。雪原から四阿山に変わる人は此尾根を登るのだ。頂上のピークは短い線で待つて置い。頂上

下の斜面にはタリスの樹木が美しく、風情の秋が深いかも無い。雪平だ。頂上に立つ、雪平から五時間乃至六時間の登行だ。頂上には二つの宮がある。信州側にあるのは上州宮と云つて上州にむいてゐて信州宮はその反対だ。白根がよく見へるが機間を見るときは雪平だしてゐる。急いで通仕度をしてシルを獲つたまゝ降り下る。鞍部でスキーをぬいて後尾根を下る。千九百米突附近の期待してゐた降降もタルヌでわやだ。つかれた足を引きずりながら大明神峰まで下りふとふきかへると四阿山も雪平のグムイルをかぶつてゐる。能ない所だつた。標をわたつて登りの食糧を口に入れてゐる。降つたので牧場の小屋の側でラタムをつけて眠る。往復九時間のアルバイトだつた。

四阿山より宿へのトラバースも四阿の二千米突位の所から、ユルに

下つて頂上の附近に並んでゐる岩の所まで取付け出東うだが四阿よりユルまでは一寸するさうだ。

今言つた山の登は一すの八峰の積雪の緩な積りをしてゐる。大分多く登んでゐる積だ。アルプスは二、五三二米突位のものであらう。試みるのも面白いかもしれない。

其後雪平の附近の山としてはハシロ山がある。標高は一、五三二米突であるが牧場小屋の山——これも美濃千五百米突位——に登つて又一度四阿二、五三二米突下つて行くのだから時間はずい分食ふであらう。その形から後等は白ブナ山と呼んでゐた。

宿や四阿も雪が急山に入る積雪として訪れるによい山であらう。

登行した時は雪が漸く少なくなり積雪が案件だつた。がスキーを運ぶには充分の場所があつた。しかも御嶽や赤倉山の山のベト雪にうんざりした。僕はこの雪平の愉快なフィエルタリスのチャリ／＼とする音が如何に寂しかったか。雪平今年の様に雪の少ない年は例外であらうし、行く前に直前聞いておけばアルプスに行かないのなら準備なんかで、積雪な雪で降るより此所のフィエルタリスを準備する方が得策だと思はれる。

錫杖の感想

楠 本 義 明

我々はノノアヲトに於ては、雪山と違ひかつて居る場あまり有難い立場にあるとは云へません。しかしながら、岩登りに於ては附近にかなりの岩場がある關係上、それだけ興味を持つてゐます。故に岩登りによつてのみその頂に立つ事が出来然る人の氣の飾り無いと云ふ事を條件にして計画を立て、遂に錫杖行を決行したのであります。

私は錫杖には今夏二度おとずれたのですが、今その二度の錫杖行で感じた事を思ひ出るまゝに書いてみたいと思ひます。日が霞張るかも知れませんが、あらかじめお断りして置きます。

錫杖の岩を登るには、やはり藤本氏が紹介された岩小屋を根據地とするのが適當でせう。第一岩小屋そのものが非常に大きく開け放たれた實に氣持のよい事、我々は崖下の岩小屋の壁に小じんまゐりたつたものを想像してゐたのですが、實際は大きな岩の一端が突出して崖根を成してゐるに過ぎないものです。だから風は吹き通しですが崖面が低い爲に寒氣を感ずる様な事はなく、又雨も屋根が大きい爲の奥におれば大丈夫です。景色は湖の岸の如く人を引きつける様なものではありませんが、それでも天候

さへよければ、岩小屋の中に籠こもるで居ても、機織が一室の内にあります。第二に水の便の良きこと及び薪の豊富なる事で、水は岩小屋の側面を本澤と南澤が流れて居り、一雨の際にも溢れる事なく得られるのです。水量は七月の半ばを過ぎると、上方の雪が解くたる爲に、餘り雨が長く降らなかつた場合は、熱くなるかも知れませんが、今年にはあれだけ好天候が続いたにも拘らず本澤は常に充分な水量を有して居たし、又錫杖に於ては、三日に一度は夕立が有るので、水は先づ心配は無いでせう。薪は附近にいくらでも有り、火は岩小屋の中でたけるから雨の時も大丈夫です。第三にこの岩小屋は、實に地の利も得たものであること。この岩小屋が三本の湖の合流點に有ると云ふ事は、非常に便利な事で、島嶼岩や中央峰に登るには北澤や本澤を登ればよいし、南澤を行けば南澤に出る事も出来ます。しかも此處より上方に岩小屋を求めらば再び岩が非常にやつかない物となります。

只この岩小屋は附近に草木が茂つて居る爲め、発見し難いからよく注意して探さなければなりません。私が始めて錫杖に来た時は三本の湖の合流點に気が着かず南澤を登つて一生懸命に探しました。

次に澤について考へて見ますと、南澤は私は途中まで行つたの

みでよくは知りませんが、大體に於て草や木が多く、陸氣で水量も少くない様です。で餘りよい感じが致しません。北澤はしばらく登ると東峰の大岩壁に出會ひ、澤は東峰と German Peak との間を通ります。川床はV字形の岩でしかも急斜で用と云ふより瀧と云ふ方が正しい位です。我々も始め島嶼岩子岩に行く目的で北澤を登りこの岩壁に突きましたが澤沿ひで行くのは非常に困難の如く思はれ、左にへつて German Peak の岩壁を登つたのですが、

この登りもかなり時間も要しその日は依頼をしたに過ぎませんでした。地圖上では島嶼岩子岩や、東尾根に行くには、この澤を登るのが一番良いのですが、岩壁に出會つてからは、登るのが大變です。

次に本澤ですが、これは大體ごろ／＼した石で埋つて居ます。しかも南澤の如く陸氣なものでなく、緩やかに開いた感じの良い澤です。何にしても他の澤に比較して、支流が多い爲め、水量は最も多く、しかも水の爲めに登行が不可能になると云ふ様な事は無いと思ひます。我々が第二回目に錫杖に来た時島嶼岩子岩に行つた時はこの澤に沿つて、分岐點を右へ／＼と登つて一時間半位で島嶼岩子に達することが出来ました。其の他の岩場に行くとしてもこの澤を利用するのが最も得策の線に思はれます。

岩質についてはくわしい事は存じませんが、何にしても硬く、しかも崖面が低い爲め機織の高く風化されて居ないで、かなり小さい氷ノルドでも危なげがありません。又岩によつては非常にフクシヤンがよくなり、集積岩ではないかと思はれる様な岩も有ります。岩がサウンドであるとか云ふ事は我々を氣持よく安全にクライミングを離しませて呉れました。

錫杖には幾多のパーティカルな岩壁が屹立してゐて容易に人を近づけません。これが先づ錫杖の趣味でせう。もし我々がフレイムなどを履いたら美女岩壁がいくらでもあります。故に我々が多に活躍する事が出来るのです。

我々を又喜ばして呉れたのは、錫杖には人が餘り来ない事、落石の心配などはほとんど無い事、又岩小屋に歸つても自分達だけで如何にもノんびリして居ると云ふ事でありました。我々は岩屋のロッタガーデンに行つて居る様な静く頼み地じでこの楽しい錫杖生活をする事が出来ました。岩登りの好きな方の一度は行つてもよい所だと信じます。

スケッチ二題

村上正一郎

タ立

山頂に停んだ。入道雲が巻きたかと思ふと忽ち雲一面の雲となり、やがて曇つて雨。早速登山の間にカッパを纏めて用意。雨の方で雲がどろく。『面白いが晴まつたぞ』と人夫がさわて。雨は緩々しげく、遠くでカッパをやつてゐる。先刻高津ばんでおたきがひやつとして、思はず、ぶるく、雨はなかく止まぬ。今日の面白い長げえぞ。『大夏かな』『いやナカッ』思はずアツと吹き出す。やがて砂土の風で雲が切れたと思ふと五色に日が雲き出した。

(村上正一郎)

梓川

連日の暴風と岩と雪との音も、皆降を下つて、梓川の縁に入ると、騒々しい気分がゆるんで、数歩のやうな気分だ。梓川の谷は美しい。遠くある黒岩、平凡なる荒蕪に比べて、如何にも美しい。明るい谷。遠く牧場に渡りて静かにゆるり白樺の梢の間から淡み渡つたコバルト色の空を心ゆく眺めるのも面白い。又緑、白、色さまざまの天幕が白樺の間からぞいてゐるのを何處

しに眺めると湖のやうだ。長い山脈に覆れた體を天幕に映へて休憩するにも好いし。又バーニケルツを渡つて越後、彼をあまり歩くのも面白い。道に角上高地にアルプスの静寂だ。汗し上高地は静寂にも公衆を静寂した壁によつて隠化されんとする静寂が見えぬでもない。上高地より、奥にその美を保つて、来訪者の自覺によつて得して我々山を登るものも静寂なれ。

或る岩小屋で

楠木義明

私は一日のアルプスの後、一時時に立ち得た云ひ知れぬ喜びと満足と共に、明け放たれた岩小屋に腰こらんで居る。周囲は正に事々として居る。越後の峰々に次第にばんやりし始めた。壁には岩面が露を求めて壁に吸ひあひながら今日の最後の雨をなしてゐる。この景色を眺めてみると、又私の心にあの静けさが上つて来た。二人の山男が岩に腰掛けて事々行ふ山を打ち眺めて居る。彼等のくはへて居るパイプから煙の煙が中るやかに流れる。彼等もやはり同じ調子で喜びに満ちて居る事であらう。私だつてパイプこそないがやはり喜びに浸りながら

静かなを眺めて居るではないか。私は山に来る時何れも静かしのアルプスと云ふ静かなものは考へない。唯だ山が私を引きつけるのである。私の静かなを眺めて居るその山に飛び込んで来た一放浪者なのだ。今まで飛び廻つてゐる岩面は静寂の己が風に静け、夕陽に静けを包んでしまつた。

ちよろ帽

天気は上出来だ。釣り竿に上機嫌で丸木橋を渡つて居る。しかしこの上機嫌は川下より吹いて来た風の勢にこぼされた。ちよる帽が吹き飛ばされたのだ。暫い暇をつくり川の中へ落ちて行く。一つしか無いちよる帽だ。釣竿を投げ捨てちよる帽の後に追ふ。幸にも此方の岸近くに渡れて来る。川に飛び込んだ。ちよる帽を捕まへた。しかし足が滑つた。身体は流されさうになる。やはりちよる帽より命が情しい。必死になつて岸の岸に寄り着く。やつと岸にはびつた時は全身びしょ濡れだ。あやふく日本海まで流されるところだつた。思へばこのちよる帽がうらめしい。元來貪り物で、少々大きいのだが、大切に運んでやつたのに何の余録もなく飛んでしまふとは。『ちよる帽を運んで来た物は容易に飛かない仕方ないから岸の上で日ばしをやる。』

針の木雪溪

黒田一郎

『あ、石がし、岩かの峰に頭を上げれば、人頭大の石が、雪溪の南のカーブから突然とび出して来た。思はず岩に頭を生じる。雪溪も半分はすぎた。越後の静寂を見て、朕々と進む三人の姿が頭が白き雪の上に黒く浮いてゐる。彼らには越後から右引への後立山連峰の雄大な尾根が静々と輝く。真夏の太陽の下に、無松と雪溪とのより静寂を見せてつゞいてゐる。雪溪二時間やつと頂上に着く。其の間山頂前に展開された景色の雄大さ。』

前方に壁ゆるゆる、其れにつゞく峻々たる雄高、静寂も其の勢の多い雄大な姿を見せてゐる富士が見える。彼方の雪間に雄姿を現して、三國一の富士、古代より我が日本民族の憧れと静寂の的でありし富士も日本アルプスより見ればまるで三角定規をたてた様だ。

真一つない雄姿の雄、雄く真夏の太陽の下に生けるが如く雄打つ峰々、古代より奇しき雄姿を現する雄々、幾千年の憧れでありし日本アルプスの山々を眼前に見せつけられた我が喜びは到底筆紙に盡し難い。

針の本にて渡縁せし早大生四人の體をとらふ。
長くつゞく雪の深

其れをへりどる熊の極松
雪のきれ目に透るゝ水は
岩にあたつて凍と散る

白樺の森のはずれ

龍川の流れのほとり

寂しくも一人しよんばりと

白木の藪棚が立つてゐた

思へば鹿しあゝの空に

無題の雪窟に埋められて

呼べど歸らぬ四つの雪

今はいづこをさまよへるやら

御峰園として座なく

夏の夕日に背にそまじ

座するは龍川の流れ

白樺の梢のみ

眞砂澤の思出

田口一郎

白い雪の中から鋭い岩稜が突出してリッヂを作りピークを盛り
結合して一つの大きな荷と成つてゐる——と云ふのが僕等の御岳
に對する印象であります。實際御岳の雪は純白に感ぜられます——
多分岩がどす黒い爲でせうが、——それが又吾々の感じを尙更新
鮮な物にします。

御岳と眞砂澤は日本アルプスに於て共に峻峻を誇る山であり、
日本がアルパインタイプを具へたものとして共に外國に誇る事の
出来る山です。併し吾々が此の二岳を見、又見聞れるに從つて起
る印象は二重全く異つたものであると思ひます。勿論どちらも共に
雄大な山で、登るのも山の峻に較べて大分難儀でせうが、同じ
雄大な山で、御岳の峻は、開まつた峻であり、眞砂澤のは碎
け散つた峻であります。前者は岩と雪の殿堂であり、後者は同じく岩
と雪の廢墟であります。眞砂澤に生命を落した若人の幾多あるに反
して、御岳にそれがないと云ふ事からも僕には何だか御の方が餘計
に優しく思はれます。

八峰、御岳、眞砂澤、勿論各峰のフェイスを求めて登るならば

可成度いし手懸へもあるでせうが、その尾根すぢは吾々の膝に僅

かに新米のものにとつても非常に容易なものでした。獨立峰登攀

の快が疑はれるピークは稀く数少ないです。が併しそのスケール

は長大です。假して求めれば非常に長いクレツタライも出来ませ

ずに岩と雪とに對する完全に近きクレツタライを要し、且つ、其の

時間と脚への體力を要するルート、それこそ吾々が到達すべき、

アルピュムの終局の目的に對する、練習場であるべきだらうと思

ひます。そして又、新米に長く比較的容易な——勿論結局は長く

て困難なうるさいルートで練習すべきですが——ルートに對して

吾々が免づねなければならぬのはリズムであります。勿論バ

イタイとしてのリズムも其一つです。か其他に一寸何とも言は

れぬデリケートなりズム——此れは岩段の細かいクレツタライ

インデなどより「山」へと云ふものを思考する事によつて成る程度

まで感じ又其れだけよく判つて來ると思ひますが——が絶対に必

要です。そして八峰や御岳等の尾根はこのリズムクレツタインデ

の練習には絶好の場所だと思ひます。

吾々は幸ひ手近に吾々のロッカガーデンなる練習場を有しま

す。此所で吾々は殆んど毎日曜日、岩に於ける種々のクレツタ

を練習する事が出来ませう。又それだけ吾々はアルプスの岩場に

近て、より早く困難を感じ、と云ふ恩恵をこの吾々の山に感じま

す。吾々はこの吾々のロッカガーデンに育つた、又其れを懐し

く思ひます。併し一歩退いて、吾々は餘りにもこの吾々の真逆

し過ぎはしなかつたか？吾々は餘りに此所の小さな岩に登る事に

のみ没頭し、熟中しはしなかつたか？吾々の岩登りの技術や嗜好

はアルピュムの永久の目的や理想に到達するには少しザルナス

テイツタになり過ぎはしなかつたか？そして此所の岩にくらべて

アルプスの岩の峻くはないのを誤解してそれを輕く見、一層岩登

りの爲の岩登りたる極道に足を深く踏みこみはしなかつたか？と

考へ、振りかへつて見ると吾々は是等の質問を全部否定し難いも

のと思はざるを得ないです。で今かく反省した後は吾々に對する

考へをもちなはずと同様アルプスの岩場をも又吾々が理想に達す

る手段として考へ且それに對したいと思ふのであります。

吾々は御岳における楽しい目を所謂眞砂澤キヤムア地で迎いま

した。此所は御岳と眞砂澤との出合附近にある愉快な平で海拔千

八百米の場所です。僕等は今年此所に八日間程ベイスキャンプを

張り、附近の岩や雪のクレツタライを享樂し又休養の目には日中

の風が太陽の下にノビユムを望んだのであります。かやうに

此所は我々にとつても忘れ難いものであり、又今後御岳を登る

ものにとつても成る程度まで重要視を拂ひべき所と信じて居ま

す。

眞砂澤合合のベニヤカムプに於いて天幕は倒澤の雪面の左半の一段高い陸雪間に張れます。此所の一寸下手から長大な倒澤の雪面も傾いて二俣までは倒澤の陸雪を張ります。此所から眞砂澤を登って雪壁にも登られます。陸の平と此所とは三時前後、三田平とは六百米の高差で、登り二時間、下り四十分間、全部雪の上です。倒澤の雪小屋も三田附近に對する積は、八峰や洞淵部には不向でせう。三田平の小屋も今年秋洞淵部の大きなのが得に出来たので救助人員も増し、又其所の持つ雪の倒の積もは他に取替するものもありませんが、一日のレックライに侵れた體を再びあの長大なる倒澤の登りに使用するのはいさかいに比しそのまゝ登ることをはしつて成はゾムルンでも幾ばして居れる眞砂澤は便等の積なすばら者にはずつと煩です。前年冬季や春季は別として、夏季には天幕さへあれば燃料の多い眞砂澤の方が創生活の根據地には好い處に思われます。

聯しきアルペイトの後、デラセードでも幾ばして長大部の雪原に下る時はもう大抵三時を過ぎてゐます。時間の早い時や天候の好い時にはよく長大部の雪原の積の厚の八峰雪原にある小さな雪原の鳥の様な岩に足を下ろし、ザイルやビッケルやリムツタツタが既に凍れて、附近一面の雪に反射する紫外光線と思ふ存分取ります。リムツタからは獲った食糧が同とれます。口

ビッケル等から、数回も降れた岩かげに避難させる様になります。そして少し雪の方で避難するすきをねらつて、皆これ等を引つたくる陸に降の中にとび出して雪原をかけます。此んな時に墜つて陸の岩からカムプまでの時間の短縮が出来たのです。汗やら雨やらでびしょぬれになつて天幕に歸つて陸をぬぐや面は忘れた後に過ぎ、空には青い面が多くなり眞砂澤山の細い積の積な多くの澤には積の積がだん／＼上へと登つて行つて何時の間にやら消へてしまひます。ボーダーが留まると、雪の間に集めておいてくれた、概一尺五寸もある白樺の枯木はもうチョロ／＼溶け始をあげてゐます。早速今日のさ／＼やかな成功を祝すタイムカリーは作られ、食後の紅茶の唄られる頃には、あたりもう暗くなり反つて眞砂澤山の積のあたりがほんのり明るくなります。ふと後をふりかへると、八基マイナーの岩壁が上半分まで光つてゐます。皆が火をかこんで陸の進むにつれて彼らの光る部分も段々下つて来て、下の割れ谷の雪がビッケルと光る様になる。明日は八月の月が出て、もう一面が青白く輝き出すのです。明日は八月の月が出て、もう一面が青白く輝き出すのです。雪のもう暗くなつた、紅茶の唄をのみ、又話し出すに従つて月も高く上つて行きます。此んな時には定まつて、眠たくなつても月が好いのか、雪が面白いのか、眠たくない様な顔をして語り合

に入られたサコソリートからは「あけの御座に、そびゆる峰は」が歌ひ出され、かちられる頂パンからは「おけさ」や「合宿ばんだい山」が唄へて来ます。次にまゝつて眠／＼白い手ね「い、結さんかぶり、胸のすくよな、睡あけて」なども長大部の積谷によく反響してかへつて来ます。雪を入れて分量を増した積の紅茶の積りにのをうるはし、思はず反響の来し方をごりきと見まはすとこの面白く雪原の積りに、八峰、倒澤本郷、洞淵部尾積の積が雪の積に集んで、そ／＼立つて居ります。後立山も今日は手にとる様にはつきり見へます。雪澤、洞澤の積も雪外立積に、それに馬島と洞穴との間から、多行つた雪平の四角山が雪の上に浮いて、又雪いと云はん許りにしてゐるのも何かなつかしく思はれます。妙真や火打の積眞砂澤山も雪の積とは異つて薄く見へてゐます。

このまゝ雪原にのびて天幕に歸るのですが、七月も二十日を過ぎる頃になると、うづかり此んな所までぐ／＼いてゐる間に早月の方から立山川を越はつて眞砂澤の方を越して来た雪に倒の頂上はまた／＼間に雪を積してしまふと見や、持つて居ましたと許きどこからともなくゴ／＼が始まつて来ます。

ゴ／＼——ザーツと雪が急に來るにつれて雪の音も眞砂澤山に反響して、カ／＼／＼／＼と氣絶する様、遂には皆々をして

ふものです。雪の音が流れて眞砂澤が各日の積過や山に刻する積度と云ふ方難になつてくると、皆の顔が曇りつつむく散か、火に映つて赤く輝き、そして、その顔もつきた頃には倒澤を吹き下す民も大分静かになります。夜も大分更けて、皆がレックライツオツクにもどきこむ時には、お月様もあの深い雪原の各々までのぞきこんで居る事でせう。

天幕が大分ぬくま、入口のすき間から、明るい太陽が暖りの照臨する頃になつても、今日一日は休養だと思ふと一寸揺るる雪がしません。外は好い天気です。朝食を終へて、雪の秋かくなりかける頃を見計らひスキーを持出して滑り出しました。雪原のドラマで滑走してゐる様な感じがします。ふ／＼多／＼風分を出す爲に水を切つて作つた履靴もこんな安全な所では、ビッケルよりも目立つて役たつ様です。胸のたる風分になつて、メツケの雪原やボーダーの積雪をしまし、雪し倒澤も此所まで来ると、メツケが出来て後好い時でないと思ふに足が疲れます。洞淵三田平は更スキーにも洞澤のスキーでグレンデでありまして、此の大きな倒澤のスキーは雪に長大なる雪道を有して居ります。雪原も雪原ならば雪原の雪より滑りやすい雪だと思ひます。此所まで持ち上げる雪を惜しまない、た／＼い／＼な人ならば長い冬のスキー

も充分準備出来たものでせう。後日御出陣式、一つ貴方の山小屋で貸スカーをしたらどうですか。

こんな趣向な事を考へて居る中に不測の事態の方を思ふと気がいづもの様だ。歸つて居ます。どこに居てもする事がなければ、立ち乍らも、進みながらも、すぐ歸る所です。朝の頂上でも霧の晴れるのを待つ間、岩の間で妙な愉快をしまして、先づ彼れのもに成りました。その中に此方も脱くつてピントウシタを片して天幕に脱ぎました。三日経たず立の中を這つて来た人々が一夜の間の冒険に、疲れて居た様子があつたので、未だに持つて行つておぼろけなりました。が首をベタ／＼めくつて居る間に自然と眠りに落ちてしまひました。

好い氣持で夢の國か何處かに墜んで居ると、誰か「ホイ」と云ふ音が起ります。誰だらうと思つて目を開けて見ると龍氏が得意のバイツを吹へて立つて居ます。しばらく話をして後、朝の陽に水を増して鍋を作りおそい朝食が始まりました。

三回平の方と這つて此處は饑饉の侵れたものがありました。軍隊と軍隊の第一番が一寸足へるだけです。背後には八重マインの岩壁がせまつて居ます。倒壁の下の方からは一寸自衛の方が顔を伺つて居るのに過ぎません。併し燃料の類では此方の方がずつと豊富です。雪が閉へるに従つてだん／＼出てくる自衛一本

あれば一晩中チヨロ／＼燃へて居ます。愛想なものです。ぶら／＼して居る中に早や、夜間の時間が過ぎました。又スカーとスカーを這きこんでアイスカレーを作ります。楽しい夕食をすませます。朝日はダイヤルとアイオンでもつて何所かへ出かけるの影です。早く歸ませよう。

早月や小鳥部から来た人々又行つたりするのこの冒険隊員合を導く人は、年々倒へて来る人が増す様だに思つて居ます。最後には岡山縣から此の奥の奥の中かし所も、今の上高地や槍の嶺に砂化してしまふ事です。だが彼もこの冒険隊が永々に今と變らぬ静かな気分を持つ事を望む一人なのであります。



編輯後記

この第二回は次ぎの如き方針のもとに上梓した。

一、學校山岳部が幾時迄を刊行する、それ自體の宣傳使命が問題である。これの上梓前にも伊藤とそれに就いて一晩話をしてたがその結果、少々困難に遇うたかも知れぬが、彼の方針をとつた。即ちこの報告の使命は、單に東京の先鋒に立つて第一ラングのアルピニストを指導するのみならず、一般登山家に對しても同様の指導となるべきであることを希望とするものであつて、その使命に當り初めてこの誌も宣傳付けられるのではないだらうか。一段組の本文を第一線に送るものとし、年報編を一般方面に對する解説とし、後編「山岳部」は、その一部を一般に、他部は對内的な情報に當てた。

創刊號に報告して加えました。その研究は、まだ餘り懸つた疑問があるもので、幾分作らねばならぬ。忙しい中におつと書いて下さつた中村勝太郎、鹿ヶ崎京良を歸つた伊藤兄を初め先輩諸兄に彼等の感謝を述べます。

(春月)

昭和四年十月二十日印刷
昭和四年十月十五日發行

【紙價表五拾錢】

第二號
編輯者 香月慶太
印刷者 田中守一
神戸市江戶町一〇二
田中印刷出版株式會社

兵庫縣武庫川本山村
發行所 甲南高等學校山岳部
電話口座八二七三七番

登山用具
岩登リ用具
キヤンプ用具
登山服装
スキ

カタログ進呈

瑞西、獨逸ヨリ新着イタシマシタ

誠實な店 株式會社 島田運動用品店

神戸市元町通一丁目
電話三宮四二七一番

御部
大阪市西區京町堀上通二丁目
電話土佐堀一二六四番

歐米文房具
運動具各種
萬年筆製造

兵庫縣御影町

竹内文具店

電話御影一七四二

竹内出張店

甲南高等學校内賣店

登山の快さは靴から

スキー靴 其他
登山靴

御影町師範前

岸澤屋靴店

電話一二六五

美味ナカロリー豊富な

そして低廉な

罐詰、菓子、飲料等の

御用には是非

津ノ九堂

を御利用下さい

芦屋阪急停留所西一町

津ノ九堂食料品店

西洋菓子

喫茶

お菓子
お菓子
お菓子

お菓子
お菓子
お菓子

とてもおいしいお菓子をとつさり揃へてゐます

住吉驛前 電話御影一〇八四
近江屋
師範學校南通 電話御影六五五

關西・山陰に只一の
好スキー場

神鍋山

小松屋旅館
神鍋山麓太田

一泊合宿には居心持よき

黒パン！

山岳食料品の王様

リュックの中には必ず西村の食料品を！

食料品と喫茶

神戸市元町一丁目鯉川筋 西村食料品店
電話三宮一六一六番

山からのお歸りにはどうかお立ち寄り下さい

純ロシア趣味

一杯のカツフエ(コーヒー)にも

一杯のチャイ(紅茶)にも

雪國ロシアを髣髴せしむるものがある

パン、クワシ、ボンチキー、ブルチキー
ビスケット

そして

快き ランチ (ロシア式スープ
パン 紅茶)

と高級サンドウイッチ

是非御試食下さい

プリマ喫茶店

ロシア菓子パン製造販賣

神戸市上筒井阪急終点商大前

登山用罐詰及食糧品各種

專賣品

ウイール(タンサン水
レモネード)
キンソン(ジンジャエール)

純良バタ(北海道クローバ印
滋潤アコン印
カナダビヤレス印)

食パン(フランスベカリ
カナダパン)

御影町阪神停留場前

鶴屋食料品店

平小屋

黒部溪谷に沿ふ理想的
の小舎

針の木や五色方面へお
越しの節は是非お泊り
下さい

經營者

志鷹彌三郎

財産の安全地帯
誠實なる財務顧問

關西信託株式會社

本店 大阪市東區北濱四丁目
電話本局五七五〇
支店 京都市室町通六角角
電話本局三一二五

洋書和書

地圖

參謀本部陸地測量部發行

山岳書籍

神戸市元町一丁目

合資會社 川瀬日進堂書店

電話三〇六〇 一七七三

阪和沿線の

秋漸く深し

登山には

牛瀧山
横尾山

和泉府中驛下車

散策には

仁徳帝御陵附近
上野芝—上野芝驛下車
信太山—信太山驛下車

氣澄み天晴れ

乗心地よき電車

大阪乗場は

市電阿部野橋停留場東入一丁

大阪市天王寺區悲田院町九三番地

阪和電氣鐵道株式會社

電話天王寺(77) 自〇一三五番 専用線
別〇一三九番 七〇一

日本ダボス

▲菅平スキー場

十二月中旬より
四月中旬まで

海拔七千餘尺の四阿山、猫岳の麓に展開されたる東西一里、南北二里に渉るローソンの大高原！雪に憧る、南國の若人は來れ！

鹿澤温泉

▲鹿澤スキー場

十二月中旬より
四月中旬まで

温泉と雪を同時に備へたる理想的スキー場、海拔五千尺の高原地にして、東に大淺間の噴煙を望み眺望潤達、閑寂なる自然と清淨なる空氣とは眞に心身を一新するに足らん！

▲菅平、鹿澤共信越線上田驛にて下車、電車終點真田は省線各驛との連絡驛です。一枚の乗車券で來られます。

信州上田 上田温泉電軌株式會社

電話五六四九六番

洋服

登山服
スキー服

御好みに應じ如何様にも御仕立申可く候

神戸市上筒井市電終點東

山根洋服店

電話混合 二七一七五〇

出張所 甲南高等学校前

山岳書籍

兵庫県御影町

寶盛館書店

電話 四〇五

阪替大坂一六六六七

書籍
と
雑誌

芦屋

寶盛館支店

電話 八二七

甲南出張所移轉御案内

弊店儀毎々御愛顧を賜り御感激にて日に増し
繁榮に赴き候段感銘に堪へざる儀に御座候就
ては從來の出張所にては手狭に付今般左記の
所へ移轉仕候間尙一層の御引立を蒙り度此段
御案内申上候

甲南出張所 正門西之辻踏切ノ下
辻東入ル

大阪本店 大阪市東區谷町二丁目

電話 東一二六六番

御影支店 御影師範學校南角東入ル

電話 二一五六番

畑洋服店

和歌活版
美術印刷
高級印刷

神戸市江戸町一〇二

田中印刷出版株式会社

電話三宮一六〇六番

日本アルプス

への出発點

いでゆの上高地、槍へ、穂高へ
白骨へ、平ノ湯、中ノ湯の温泉へ
大町を経ては針ノ木立山方面へ

信州松本市

松本驛前 飯田屋旅館

具房文・品粧化・品藥

省線住吉驛前
會社株式 **和田藥局**
支店
御影 柳ノ川筋
電話 一九四九
阪神國道宮西

山とスキー用具専門

島田眞之助

神戸市下灘通一丁目蔭川公園アソー前

島田ビル3階 電話本局009

スキー靴と山靴 専門 日ノ丸堂

京都市下京區四塚町 二中前東

電話 下 2373

振替 内販 68259

神戸方面取次店

島田眞之助

神戸市下灘通一丁目蔭川公園アソー前

島田ビル3階 電話本局009

美津濃'スキー用品



カタログ通覧

神戸支店

美津濃

本店



美滿津特製

メーブル山スキー！

帝大スキー山岳部、北大山岳部、早大山岳部、
早高山岳部、法政山岳部、一高、三高、四高旅行部
學醫院山岳部御用

檢定済「グレッツナヤー・ザイル」赤糸入
手打氷斧「アイスピッケル」80、27 $\frac{1}{2}$ 、24cm
手打「シ・タイグ・アイゼン」6本、8本、10本爪
新案「スキー機」取付金具一式

「本品は豫備スキーあれば連座に機を組立25貫目
迄の荷物を運搬することを得」

ウキンター・キャンプ必需品各種
燃料(META)及びアルミ炊事具各種

型錄送呈

合名 美滿津商店
會社
東京-本郷-赤門前